

# 東北大学埋蔵文化財調査年報4・5



東北大学埋蔵文化財調査委員会  
1992

# 東北大学埋蔵文化財調査年報4・5

東北大学埋蔵文化財調査委員会  
1992



## 序

埋蔵文化財調査年報も4号を重ねるに至った。第1号以来7年になる。その主要報告内容は、宵葉城二の丸跡の発掘調査であるが、明治末期以前と考えられるビール瓶に対する検討なども述べられており、考古学も大変に巾を拡げたものと大いに考え方を改める必要を感じる。考古学は、その出土物自体とその状況の両方から当時を推定する学問だということを今更ながら覚る思いである。

数十年前には遠見塚の道傍に石棺が放置され、子供達が棺の本体を支点として掛け渡した蓋の両端に乗って傾斜を変えて遊んでいたのを思い出し何とも云えない気持すら持つ。

高感度測定器の開発が進み、考古学は著しく、その程度を高めることになった。そしてまたその範囲も急速に拡大し、考古学は考過去学とも云うべき状態になって来た。

他方、石器時代など全くないと云われていた東北地方に旧石器時代まであったとされるようになって来た。15万年、20万年前の東北地方の人類文化までが論ぜられるようになった。

このようなことが可能になって來た最大の理由は、科学的手法の導入によって、確実さを著しく増すことが出来るようになったことや、その測定対象もまた急速に開発され新しい量の測定を行うことによって事実を推定する手法が格段を超え革命的と云える程進展をとげたと云うことである。

本調査年報が、新しい手法展開のいくつかの引き金としての役割をも果して呉れる日を心から待望している。學問で、新しい事実のみでなく、新しい手法の展開こそ、最も評価されるべき点であると考えるからである。

東北大学埋蔵文化財調査委員会委員長

東北大学長 西澤潤一

## 例　　言

1. 本年報は、東北大学構内において、東北大学埋蔵文化財調査委員会が1986年度および1987年度に行った遺跡調査、ならびに研究成果をまとめたものである。両年度の調査量がさほど多くないため、利用の便を考慮し、年報4と年報5を、合冊として一つにまとめたものである。

2. 報告される遺跡と略号、発掘調査期間は以下の通りである。

年報4（1986年度調査遺跡）

仙台城二の丸跡第7次調査地点（NM7） 1986年3月26日～4月16日

仙台城二の丸跡第8次調査地点（NM8） 1986年6月2日～8月9日

年報5（1987年度調査遺跡）

仙台城二の丸跡第4次調査地点（NM4） 1985年1月9日～2月6日

1987年7月15日～9月4日

3. 調査・整理作業は、東北大学埋蔵文化財調査委員会の委嘱を受け、埋蔵文化財調査班（1988年より調査室）が行った。

4. 本年報の編集は、須藤隆の指導のもとに、佐久間光平（'90）・山田しょう・藤沢敦（'91～）が担当した。

5. 本文は、佐久間光平・山田しょう・藤沢敦が分担執筆した。

また陶磁器については本田泰貴氏（東北陶磁文化館）に原稿をいただいた。

執筆者名は文末に（ ）で記載した。

6. 次の方々に各種の遺物について御教示をいただいた（敬称略）。

陶磁器：本田泰貴（東北陶磁文化館）

木簡：田中秀和（東北大学文学部）

骨角製品：富岡直人（東北大学考古学研究室）

石筆石材：蟹沢聰史（東北大学教養部）

皮製品：吉田行雄（ロダン・シューズ）

7. さらに以下の方々から御指導・御協力を賜った。記して感謝申し上げる。

宮城県教育委員会、宮城県図書館、東北歴史資料館、斎藤報恩会、仙台市教育委員会、仙台市博物館、仙台市歴史民俗博物館、東北大学考古学研究室

8. 出土遺物は、東北大学埋蔵文化財調査委員会が保管・管理している。

## 凡　　例

1. 遺物の実測図及び写真の縮尺は、各々明記した。
2. 方位は、真北に統一してある。
3. 川内地区の仙台城二の丸跡にあたる地域の地形測量図は、仙台市教育委員会の作成による「仙台城跡地形図」(縮尺500分の1)を使用した。
4. 引用・参考文献は、巻末に一括した。
5. 遺物観察表の残存率は、P=100%、L=99%~60%、M=59%~30%、S=29%~20%、SS=19%以下を示す。

## 1986年度調査遺跡（年報4）の概要

仙台城二の丸跡第7次調査地点（NM7）

江戸時代：掘立柱建物・溝・ビット

陶磁器・瓦・金属製品・石製品

縄文時代？：石器

仙台城二の丸跡第8次調査地点（NM8）

江戸時代：堀・井戸・ビット

陶磁器・瓦

明治時代：堀・道路・ビット・木闌

陶磁器・瓦・ガラス製品・石製品・骨角製品

## 1987年度調査遺跡（年報5）の概要

仙台城二の丸跡第4次調査地点（NM4）

江戸時代：溝（17世紀初頭）・掘立柱列・ビット

陶磁器・瓦・木筒・木製品・金属製品・骨角製品

縄文時代？：上器・石器

整理作業参加者

大内美紀 太田はるよ 小川徳子 庄司一夫 高橋健寿 冨中京美 崔熙柱 中村裕  
朴栄淑 長谷川チエ子 本多昭子 松川弘子 八重座のり子 渡辺清子

発掘調査参加者

浅野幸治 阿部志う 阿部友衛 石堂幸子 板橋憲一 伊藤千穂 伊藤道子 歌川喜恵子  
梅沢みえ 相川美子 及川慶治 及川茂 太田すゑ子 太田はるよ 小出正幸 小山さき子  
菅野春枝 菊地スミ子 国安まほ子 小林文夫 小山八郎 佐々木寅男 佐久間光平  
佐藤広史 高橋理 高橋健寿 高橋富勝 千田祐美恵 東矢高明 富塙信彦 新沼よしえ  
新野一浩 長谷川チエ子 長谷川範明 菱沼孝志 榎野一子 本田泰貴 前沢聰央  
松川弘子 丸山伝 宮本約 森嶋秀一 森まさい 山田富士子 湯川亮 横山東市 李蓮  
陣太進 朱漢英

# 東北大学埋蔵文化財調査委員会規程

改正 昭和63年1月19日

## (設置)

第一条 東北大学に、東北大学の施設の整備にともなう埋蔵文化財の発掘調査に関する重要な事項を調査審議するため、東北大学埋蔵文化財調査委員会（以下「委員会」という。）を置く。  
(組織)

第二条 委員会は、委員長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- 一 東北大学施設整備委員会地図協議会委員長
- 二 発掘調査に関連のある専門分野の教授又は助教授 若干人
- 三 発掘調査地に関連のある部局の長で、その都度委員長が指名するもの
- 四 事務局長

## (委員長)

第三条 委員長は、学長をもって充てる。

## (調査室)

第四条 委員会に、委員会が定める基本方針に基づき、発掘調査に関する実施計画、実施の細目及び調査報告書に係る事項を処理させるため、調査室を置く。

2 調査室に、室長及び調査員を置く。

3 室長は、調査室の業務を掌理し、調査員は、調査室の業務に従事する。

## (委嘱等)

第五条 第二条第二号に掲げる委員及び調査員は、学長が委嘱する。

2 室長は、委員のうちから委員長が指名する。

## (調査員の出席)

第六条 委員長は、調査員を委員会に出席させ、議案について、必要な説明をさせ、又は意見を述べさせることができる。

## (幹事)

第七条 委員会に幹事を置き、庶務部長、經理部長及び施設部長をもって充てる。

## (庶務)

第八条 委員会の庶務は、事務局施設部において行う。

## (雑則)

第九条 この規定に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

## 附則

この規定は、昭和六三年一月十九日から施行する。

# 東北大学埋蔵文化財調査委員会規程

(昭和58年11月15日施行)

## (設置)

第一条 東北大学に、東北大学の施設の整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する重要事項を調査審議するため、東北大学埋蔵文化財調査委員会（以下「委員会」という。）を置く。

## (組織)

第二条 委員会は、委員長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- 一 東北大学施設整備委員会地区協議会委員長
- 二 発掘調査に関連のある専門分野の教授又は助教授 若干人。
- 三 発掘調査地に隣接のある部局の長で、その都度委員長が指名するもの。

## (委員長)

第三条 委員長は、学長をもって充てる。

## (調査員)

第四条 委員会に、委員会が定める基本方針に基づき、発掘調査に関する実施計画、実施の細目及び調査報告書に係る事項を処理させるため、調査員を置く。

## (委嘱)

第五条 第二条第二号に掲げる委員及び調査員は、学長が委嘱する。

## (調査員の出席)

第六条 委員長は、調査員を委員会に出席させ、議案について、必要な説明をさせ、又は意見を述べさせることができる。

## (幹事)

第七条 委員会に幹事を置き、施設部長をもって充てる。

## (庶務)

第八条 委員会の庶務は、事務局施設部において行う。

## (雑則)

第九条 この規程に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

## 附則

この規程は、昭和五八年十一月十五日から施行する。

## 埋蔵文化財調査室運営方針

東北大学埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という）の運営は、東北大学埋蔵文化財調査委員会規程によるもののはか、次の運営方針に基づき行うものとする。

- 1 調査室の運営及び発掘調査の実施方針等に関して審議するため、運営会議を置く。
- 2 運営会議は、次に掲げる委員をもって組織する。
  - (1) 調査室長及び調査員
  - (2) 業務課長、主計課長及び企画課長
  - (3) 発掘調査地を所管する部局の事務長
  - (4) 専門委員若干名
- 3 調査室は、東北大学構内遺跡の調査及び保護にあたる。
- 4 調査室は、発掘調査による出土文化財の整理と調査報告書の作成にあたり、公開、活用をはかる。
- 5 調査室は、出土文化財・資料（図面、写真等）の保存、管理にあたる。
- 6 調査室は、文化庁長官、教育委員会等への発掘調査に関わる届け出業務（発掘届けを除く）を担当する。

## 東北大学埋蔵文化財調査委員会（1986年度）

委員長	学長	石田 名香雄
委員	川内地区協議会委員長	（文学部長）
	青葉山地区協議会委員長	（工学部長）
	星陵地区協議会委員長	（医学部長）
	片平地区協議会委員長	（金研所長）
文学部	教授	渡辺 信夫
文学部	助教授	須藤 隆
理学部	助教授	中川 久夫
工学部	教授	坂田 泉
附属図書館	長	塙 本哲人
調査員	文学部 助手	梶原 洋
	文学部 助手	佐久間 光平
幹事	施設部長	中野 勝弘

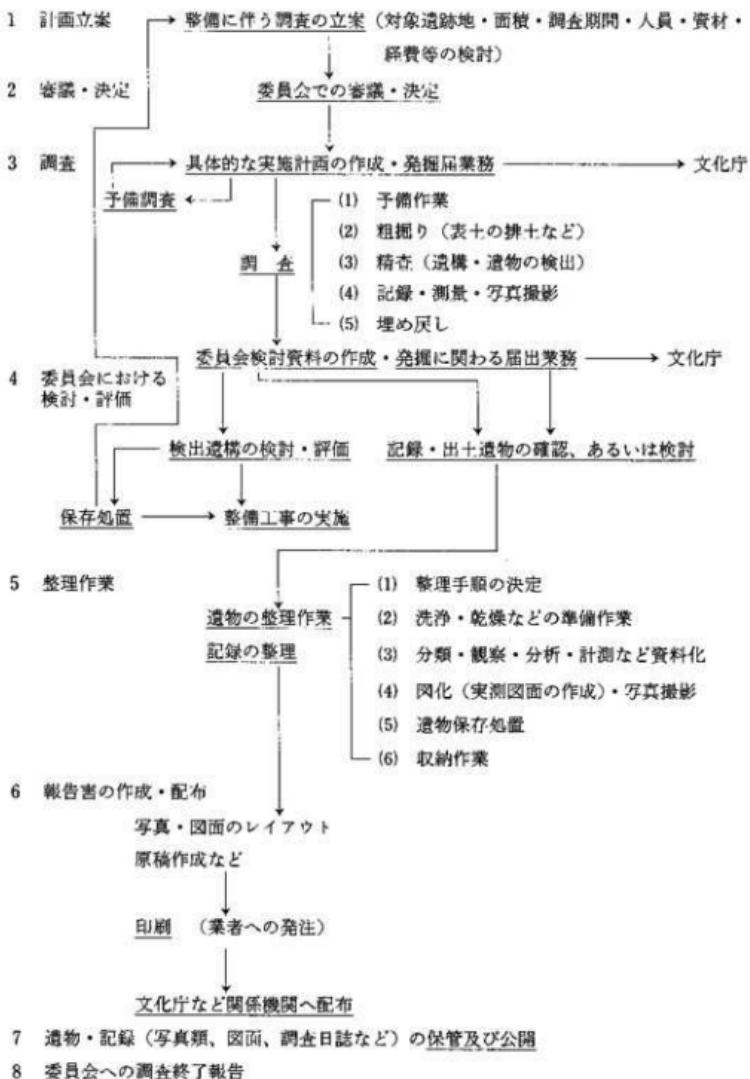
## 東北大学埋蔵文化財調査委員会（1987年度）

委員長	学 長		石 田 名香雄
委員	川内地区協議会委員長	(教養部長)	細 谷 昂
	青葉山地区協議会委員長	(工学部長)	大 谷 茂 盛
	星陵地区協議会委員長	(医学部長)	山 本 敏 行
	片平地区協議会委員長	(遺研所長)	大 森 康 男
	文 学 部 教 授	(調査室室長)	渡 辺 信 夫
	文 学 部 教 授		羽 下 徳 彦
	文 学 部 助 教授		須 藤 隆 夫
	文 学 部 助 教授		今 泉 隆 夫
	理 学 部 教 授		中 川 久 夫
	工 学 部 教 授		坂 田 泉
	附 属 図 書 館 長		塚 本 哲 人
	理 学 部 長		小 西 和 彦
	事 務 局 長		石 田 正一郎
調査員	文 学 部 助 手		梶 原 洋
	文 学 部 助 手		佐 久 間 光 平
幹事	施 設 部 長		中 野 勝 弘
	庶 務 部 長		坂 本 好 夫
	經 理 部 長		滝 本 良 雄

## 東北大学埋蔵文化財調査委員会（1992年1月現在）

委員長	学 長		西 沢 潤 一
委員	川内地区協議会委員長	(文学部長)	渡 辺 信 夫
	青葉山地区協議会委員長	(理学部長)	桜 井 英 樹
	星陵地区協議会委員長	(医学部長)	平 則 夫
	片平地区協議会委員長	(遺伝生態研究センター長)	菅 洋
	文学部 教授		羽 下 徳 彦
	文学部 教授	(調査室室長)	須 藤 隆 降
	文学部 助教授		今 泉 隆 雄
	工 学 部 助教授		飯 渊 康 一
	事 務 局 長		藤 村 和 男
調査員	文学部 助 手		山 田 し ょ う
	文学部 助 手		藤 沢 敦
幹事	施 設 部 長		山 本 努
	庶 務 部 長		堀 道 博
	經 理 部 長		山 田 清

## 埋蔵文化財発掘調査及び委員会審議の手順



## 目 次

序

例言・凡例

東北大学埋蔵文化財調査委員会規約

東北大学埋蔵文化財調査委員会組織

東北大学埋蔵文化財調査室運営方針

埋蔵文化財発掘調査及び委員会審議の手順

目次

図目次

表目次

図版目次

## 東北大学埋蔵文化財調査年報 4

第Ⅰ章	1986年度調査の概要	1
1.	はじめに	1
2.	発掘調査の概要	1
(1)	川内地区の調査	1
(2)	青葉山地区的調査	1
3.	このほかの調査班の活動	3
第Ⅱ章	川内地区（仙台城二の丸跡）の調査	4
1.	川内地区の立地と歴史および1985年度までの調査	4
2.	二の丸跡第7次調査地点（NM7）の調査	8
(1)	調査地点の位置	8
(2)	調査にいたる経緯	8
(3)	調査方法と調査経過	8
(4)	層序	8
(5)	遺構と遺物	12
①	遺構	12
②	遺物	19
A.	陶磁器	19
B.	瓦	24

C. 金属製品	50
D. その他の遺物	50
3. 二の丸跡第8次調査地点(NM8)の調査	55
(1) 調査地点の位置	55
(2) 調査にいたる経緯	55
(3) 調査方法と調査経過	55
(4) 層序	59
(5) 遺構と遺物	59
① 遺構	59
② 遺物	64
A. 陶磁器	64
B. 瓦	82
C. 煉瓦	85
D. ガラス製品	85
E. 金属製品	89
F. 石製品	89
G. 木製品	89
H. 骨製品・骨	90
I. 皮製品	90
第III章 考察	90
1. 第7次調査地点の調査	90
2. 第8次調査地点の調査	91
(1) 江戸時代	91
(2) 明治(第二師団)以降	93

## 東北大学埋蔵文化財調査年報5

第I章 1987年度調査の概要	95
1. はじめに	95
2. 発掘調査の概要	95
(1) 川内地区の調査	95
(2) 青葉山地区の調査	96
(3) 川波地区の調査	96

(4) その他の調査室の活動	96
<b>第II章 川内地区（仙台城二の丸跡）の調査</b>	96
1. 1986年度までの調査	96
2. 二の丸跡第4次調査地点（NM4）の調査	96
(1) 調査地点の位置	96
(2) 調査にいたる経緯	97
(3) 調査方法と経過	97
(4) 層序	100
(5) 発見された遺構と遺物	100
① 遺構	100
A. I区	103
B. II区北半部	104
C. II区南半部	110
② 遺物	115
A. 陶磁器	115
B. 瓦	120
C. 木製品	129
D. ガラス製品	130
E. 骨角器	130
F. その他の遺物	130
<b>第III章 考察</b>	133
引用・参考文献	
英文Summary	
図版	

## 図 目 次

図1 東北大學と周辺の遺跡	2	図31 第7地点出土熨斗瓦(2)	44
図2 仙台城と二の丸の位置	4	図32 第7地点出土輪違い(1)	45
図3 仙台城二の丸・武家屋敷跡調査地点	5	図33 第7地点出土輪違い(2)	46
図4 二の丸第7調査地点調査区の位置	9	図34 第7地点出土輪違い(3)	47
図5 第7地点調査区全体図	10	図35 第7地点出土面戸瓦(1)	48
図6 第7地点土層柱状模式図	11	図36 第7地点出土面戸瓦(2)	49
図7 第7地点6~8区検山掘建柱建物跡	13	図37 第7地点出土伏間瓦・道具瓦	51
図8 第7地点1区・2区平面図・断面図	14	図38 第7地点出土残瓦・装飾瓦	
図9 第7地点3区・4区平面図・断面図	15	その他の遺物	52
図10 第7地点5区・6区平面図・断面図	16	図39 瓦の計測値	53
図11 第7地点7区・8区平面図・断面図	17	図40 二の丸第8調査地点調査区の位置	56
図12 第7地点9区・10区平面図・断面図	18	図41 第8地点土層断面図	57
図13 第7地点11区平面図・断面図	19	図42 第8地点平面図(8層上面)	60
図14 第7地点出土磁器	22	図43 第8地点平面図(5層上面)	62
図15 第7地点出土陶器	23	図44 第8地点平面図(3層上面)	63
図16 瓦分類の手順	26	図45 第8地点出土磁器(1)	67
図17 瓦の計測部位	26	図46 第8地点出土磁器(2)	68
図18 丸瓦復元模式図	27	図47 第8地点出土磁器(3)	69
図19 第7地点出土軒丸瓦(1)	29	図48 第8地点出土磁器(4)	70
図20 第7地点出土軒丸瓦(2)	30	図49 第8地点出土磁器(5)	71
図21 第7地点出土軒丸瓦(3)	31	図50 第8地点出土磁器(6)	72
図22 第7地点出土軒丸瓦(4)・軒平瓦(1)	32	図51 第8地点出土磁器(7)	73
図23 第7地点出土軒平瓦(2)	34	図52 第8地点出土磁器(8)	74
図24 第7地点出土丸瓦(1)	37	図53 第8地点出土磁器(9)	75
図25 第7地点出土丸瓦(2)	38	図54 第8地点出土磁器(10)	76
図26 第7地点出土丸瓦(3)	39	図55 第8地点出土陶器(1)	77
図27 第7地点出土丸瓦(4)	40	図56 第8地点出土陶器(2)	78
図28 第7地点出土平瓦(1)	41	図57 第8地点出土陶器(3)	79
図29 第7地点出土平瓦(2)	42	図58 第8地点出土瓦(1)	83
図30 第7地点出土平瓦(3)・熨斗瓦(1)	43	図59 第8地点出土瓦(2)	84

図60 第8地点出土ガラス製品	86	図72 第4地点出土陶磁器(2)	119
図61 第8地点出土その他の遺物	87	図73 第4地点出土軒平瓦・丸瓦	123
図62 石斧のX線回析分析	89	図74 第4地点出土平瓦・棟瓦(1)	124
図63 絵図による第8地点付近の変遷	92	図75 第4地点出土棟瓦(2)	125
図64 二の丸第4調査地点調査区の位置	98	図76 第4地点出土棟瓦(3)	126
図65 第4地点全体図	101	図77 第4地点出土棟瓦(4)・道具瓦	127
図66 第4地点I区平面図・断面図(1)	105	図78 第4地点出土その他の瓦	128
図67 第4地点I区平面図・断面図(2)	107	図79 瓦屋根復元模式図	129
図68 第4地点II区平面図・断面図(1)	109	図80 第4地点出土木簡・木製品	131
図69 第4地点II区平面図・断面図(2)	111	図81 第4地点出土その他の遺物	132
図70 第4地点II区平面図・断面図(3)	113	図82 絵図による第4地点付近の変遷	134
図71 第4地点出土陶磁器(1)	118	図83 旧地表面と整地層の関係	136

## 表 目 次

表1 1986年度調査概要表	1	表13 第8地点出土陶磁器集計表	64
表2 第7地点出土陶磁器集計表	21	表14 第8地点出土陶磁器観察表(1)	80
表3 第7地点出土陶磁器観察表	23	表15 第8地点出土陶磁器観察表(2)	81
表4 第7地点出土瓦集計表	25	表16 第8地点出土瓦集計表	82
表5 第7地点出土軒丸瓦観察表	33	表17 第8地点出土その他の遺物集計表	85
表6 第7地点出土軒平瓦観察表	33	表18 第8地点出土その他の遺物観察表	88
表7 第7地点出土丸瓦観察表	35	表19 1987年度調査概要表	95
表8 第7地点出土平瓦観察表	36	表20 第4地点基本層土層注記表	99
表9 第7地点出土駁斗瓦観察表	36	表21 第4地点出土陶磁器集計表	116
表10 第7地点出土輪廻観察表	49	表22 第4地点出土陶磁器観察表	117
表11 第7地点出土面戸瓦観察表	49	表23 第4地点出土瓦集計表	121
表12 第7地点出土その他の遺物集計表	54	表24 第4地点出土その他の遺物集計表	131

## 図 版 目 次

図版1 第7地点全景	145	図版5 第7地点発掘区(8・9・10区)	149
図版2 第7地点発掘区(1・2・3区)	146	図版6 第7地点出土陶磁器	150
図版3 第7地点発掘区(4・5・6区)	147	図版7 第7地点出土軒丸瓦(1)	151
図版4 第7地点発掘区(7・8区)	148	図版8 第7地点出土軒丸瓦(2)・軒平瓦(1)	

.....	152	図版25 第8地点出土磁器(3) .....	169
図版9 第7地点出土軒平瓦(2)・丸瓦(1)	153	図版26 第8地点出土磁器(4) .....	170
図版10 第7地点出土丸瓦(2)・平瓦(1)	154	図版27 第8地点出土陶器(1) .....	171
図版11 第7地点出土平瓦(2)	155	図版28 第8地点出土陶器(2)・瓦(1)	172
図版12 第7地点出土平瓦(3)	156	図版29 第8地点出土瓦(2) .....	173
図版13 第7地点出土平瓦(4)	157	図版30 第8地点出土その他の遺物	174
図版14 第7地点出土平瓦(5)・熨斗瓦	158	図版31 第4地点全景・I区遺構(1)	175
図版15 第7地点出土輪廻い	159	図版32 第4地点 I区遺構(2) .....	176
図版16 第7地点出土面戸瓦	160	図版33 第4地点II区遺構(1) .....	177
図版17 第7地点山上伏間瓦・道具瓦・ 棟瓦	161	図版34 第4地点II区遺構(2) .....	178
		図版35 第4地点出土陶磁器(1) .....	179
図版18 第7地点出土棟瓦・その他の遺物・ 瓦器面調整	162	図版36 第4地点出土陶磁器(2)・軒平瓦・ 丸瓦・平瓦(1) .....	180
図版19 第8地点全景・3層上面検出遺構	163	図版37 第4地点出土平瓦(2)・棟瓦(1)	181
		図版38 第4地点出土棟瓦(2) .....	182
図版20 第8地点5層上面検出遺構	164	図版39 第4地点出土棟瓦(3)・その他の瓦	183
図版21 第8地点8層上面検出遺構	165		
図版22 第8地点8層上面検出遺構・ 深掘区断面	166	図版40 第4地点出土その他の遺物	184
図版23 第8地点出土磁器(1)	167	図版41 仙台城絵図・模型	185
図版24 第8地点出土磁器(2)	168	図版42 仙台城絵図	186

# 東北大学埋蔵文化財調査年報 4



# 第Ⅰ章 1986年度調査の概要

## 1. はじめに

1983年度、学内に埋蔵文化財調査委員会が設置されて以降、東北大学では大学構内の遺跡の調査・保護を組織的に行ってきました。特に、近世の仙台城二の丸・武家屋敷跡である川内地区、旧石器時代～弥生時代の遺跡がある青葉山地区の継続的な調査では多くの成果があげられており（東北大学埋蔵文化財調査委員会1985・1987・1990）、構内遺跡の重要性があらためて認識されるに至っている。

1986年度においても、仙台城二の丸跡の調査を中心として調査が行われ、新たな資料を提供することになった。本報告書は、これらの調査成果についてまとめたものである。

## 2. 発掘調査の概要

1986年度は、本調査2件、試掘調査1件、立会調査1件、計4件の調査を実施した。これらの調査の内訳は、川内地区（仙台城二の丸跡）においては本調査2件、立会調査1件、青葉山地区（旧石器一縦文）では、試掘調査1件である（表1）。

### （1）川内地区（仙台城二の丸跡）の調査

1986年3月26日～4月16日には、記念講堂前で植樹に伴う事前調査を実施した。当地区は、二の丸に隣接した「勘定方」の区域にあたる。調査の結果、掘立柱建物跡や溝などを確認した（第2章-2）。

1986年6月2日～8月9日には教養部文科系教官棟の新設に先立ち調査を行った。調査区は、二の丸北端を画する堀にあたる場所と考えられたが、推定を裏付けるように堀の北辺が検出された。この結果から、二の丸北辺部分について現地形と占緯図の対比がより正確にできるようになった（第2章-3）。

これらの本調査のほかに、文学部心理学動物実験・飼育室（プレハブ）の設置にあたり立会調査を実施した。工事による振り下げは30～60cmで、大学・米軍による盛土内にとどまるため、本調査は行わなかった。

表1 1986年度調査概要表

Tab.1 Excavations on the campus in the fiscal year 1986

調査の種類	調査地点	原因	調査期間	面積	時期
本 調 査	仙台城二の丸跡第7地点（NM7）	記念講堂前庭植樹	3/26～4/16	56 m <sup>2</sup>	近世
	仙台城二の丸跡第8地点（NM8）	教養部文科系教官棟新築	6/2～8/9	355 m <sup>2</sup>	近世
試 掘 調 査	青葉山地区工学部情報工学科	工学部情報工学科実験研究棟	10/3～11/12	87 m <sup>2</sup>	—
立 会 調 査	仙台城二の丸跡心理学動物実験室地点	文学部心理学動物実験飼育室	3/9	10.5m <sup>2</sup>	—



図1 東北大學と周辺の遺跡

Fig. 1 Archaeological sites and Tohoku University

## (2) 青葉山地区の調査

当地区では、工学部情報工学科実験研究棟新館に伴う試掘調査のみである。1986年10月3日～11月12日の約1ヶ月間、87m<sup>3</sup>について調査を行った。一部は礫層まで掘り下がたが（深さ約2.5m）、結局、遺構や遺物は検出されなかった。しかし、調査区は削平を受けていたものの愛島軽石層（約6～8万年前）より下位の堆積状態は良好で、青葉山B地点で検出された前期旧石器の包含層も確認された。青葉山地区では今後もこうした試掘調査を継続していく計画である。なお、当地点では、建設予定の全域を対象とした本調査は実施していない。

## 3. この他の調査班の活動

1986年度調査の第7地点・第8地点の調査は、いずれも限定された範囲内での調査であったこともあり、現地説明会などは行っていない。そのため、第8地点の調査成果を中心に、『東北大學學報』第1182号に「仙台城二の丸跡の調査（その4）」を寄稿し、調査の成果を広く学内の方々に知っていただくように努めた。

（佐久間光平）

## 第II章 川内地区（仙台城二の丸跡）の調査

### 1. 川内地区の立地と歴史および1985年度までの調査

東北大学文系4学部、記念講堂、教養部などが置かれている現在の川内地区は、藩政時代の仙台城二の丸跡、周辺の武家屋敷跡などに相当する。

仙台城は、仙台市街地の西方、広瀬川を渡った、通称青葉山の東端に位置している（図1）。本丸は、三方（北・東・南）を広瀬川と竜の口渓谷に囲まれた海拔115～140mの急崖上に立地しており、また、北側の二の丸、北東の三の丸もそれぞれ海拔61～78m、40mの段階状の河岸段丘面上にあり、自然地形を巧みに利用した配置となっている（奥津1967）。この中で東北大学

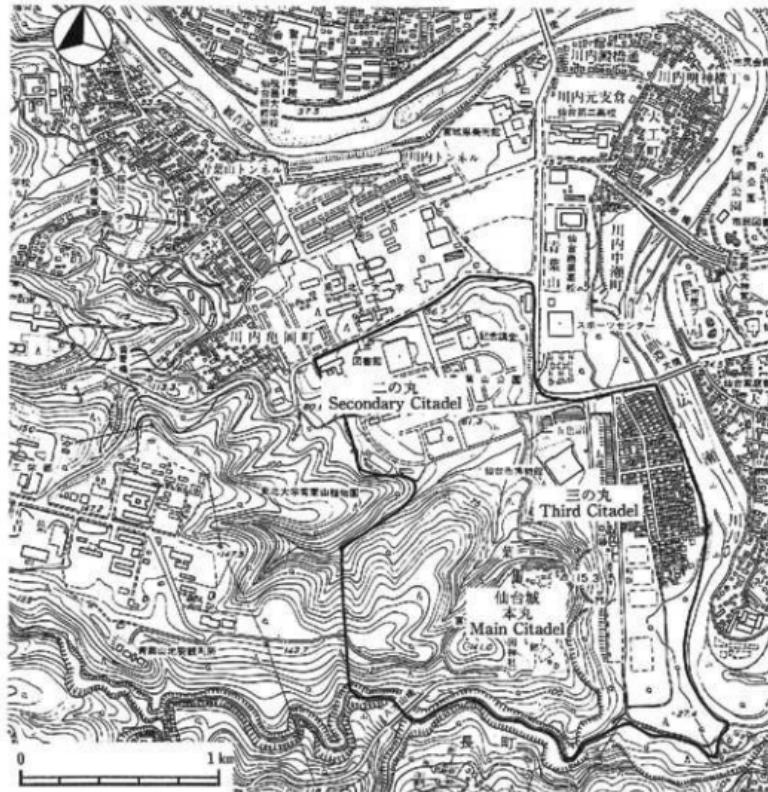


図2 仙台城と二の丸の位置  
Fig. 2 Distribution of Sendai Castle



図3 仙台城二の丸・武家屋敷跡調査地点

Fig. 3 Location of excavations until 1987 at *Ninomaru* (NM i.e. Secondary Citadel) and *samurai* residence (BK)

構内の二の丸は、東方を蛇行する広瀬川に向かって緩やかに傾斜する上町段丘上（武蔵野面相当）に位置する（図2）。

仙台城は、17世紀初め伊達政宗によって築城が始まり本丸部分が完成されるが、幕藩体制の安定とともにその山城的な立地は何かと不便になり、2代藩主忠宗は、寛永15年（1638年）、その麓（川内：現東北大学構内）において二の丸の造営を始める。これ以前、当地には政宗四男宗泰（のちの岩出山領主）の屋敷、その北隣には長女五郎八姫の居住する「西屋敷」が置かれていたことが知られている。この地に二の丸が完成して後、仙台藩の政治・諸儀式の中心はここに移され、さらに2代藩主以降その居館ともなる。その後、二の丸は配置・構造上にいくつかの変遷を経ながらも、事实上幕末まで仙台城の中核として機能していく（仙台市教育委員会1967）。

版籍奉還の明治2年（1869年）には勤政庁が置かれ、明治4年（1871年）の廃藩置県後は、仙台城が明治政府・兵部省の管轄下に移るとともに東北鎮台（後に仙台鎮台と改む）が置かれる。この頃、本丸の建物群は取り壊されるが、二の丸の建物群は依然として残っている。しかし、この二の丸建物も明治15年（1882年）の火災によってことごとく焼失してしまう。その後、当地には陸軍第二師団が置かれ、戦後は米軍の駐留地となる。そして、昭和32年（1957年）、米軍より返還されてのち東北大学がこの川内地区に移転してくるのである。

仙台城二の丸・武家屋敷跡である川内地区の発掘調査は、仙台市教育委員会、東北大学考古学研究室によって小規模の面積が行われたことがあるが、組織的・継続的に行われるのは、東北大学に埋蔵文化財調査委員会がおかれる1983年度以降のことである。委員会による川内地区のこれまでの発掘調査は6地点を数える。この中で特に、二の丸中心の小広間の近くを調査した第2地点では、礎石建物跡が発見され、良好な保存状況と遺構の重要性から調査後は保存されることになった。また、その後、二の丸の南外郭（第3地点）、北東部外郭（第4地点）、西外郭（第6地点）にかかる遺構が検出されており、現在の地形上で二の丸の範囲がほぼ推定できるようになった。さらに第5地点の試掘調査では、中奥の一隅にあたる遺構群を確認している。

## 2. 二の丸跡第7次調査地点（NM7）の調査

### (1) 調査地点の位置

第7地点は、川内記念講堂前庭のはば中央部に位置し、芝地として整備されていた場所である（図4）。

この地点は、厳密には二の丸の範囲外で、二の丸の東側に隣接する区域になる。具体的には、二の丸の表玄関たる「詰の門」の前面に位置する「藏屋敷」、のちの「勘定方」の屋敷が置かれた区域である。現在推定される詰の門の位置から考えれば、藏屋敷（勘定方）のなかでも最西端にあたり、享和二年（1802年）御作御絵図（1802年）にみられる南北に展開する「七十間御兵具蔵」の付近と推定される。この長大な蔵は元禄年間の絵図にも描かれている。さらに時代を遡って、二の丸造営間もない頃の様相を伝える正保二・三年（1645・46年）では、この近辺には藏屋敷の西端を画する堀が認められる。つまり、第7地点は、二の丸時代には一貫して藏屋敷「勘定方」の西端にあたり、堀あるいは蔵が置かれていた区域とみることができる。

### (2) 調査にいたる経緯

川内記念講堂前庭（南側）の整備に伴い植樹を行うことになった。事前に当地点の江戸時代の遺構面までの深さを確認したところ、浅いところは20cm～30cm程度であった。植樹の際の工事深度、盛土などの対応が協議されたが、遺構面の深さ以上の工事を行う植樹は、ケヤキ12本分であった。そのため、この植樹の区域のみを対象として調査を実施することになった。

### (3) 調査方法と経過

植樹は、南北方向に約7m間隔で12地点で行われる計画だったので、この地点にあわせて2m×2mのグリッドを12ヶ所設定した（図5）。南から北へ1区～12区とグリッド名を付した。遺構が確認された場合には、面積を拡張したグリッドもある。調査深度は、各グリッドによって異なり、40cm～110cmである。深さ30～40cm程度で地山面になるグリッドもあったが、層の堆積状態を把握するため1区のみはさらに掘り下げ、砾層まで調査を行った。1m以上掘り下げても盛土・整地層が続くグリッドもある。これらは途中で調査を終了した。なお、12区は、1m以上の深さまで擾乱が及んでいることが判明したので、それ以下の調査は行わなかった。

### (4) 層序

各グリッドによって層序が異なる。整地層、盛土層、遺構埋土が複雑に分布しているためであるが、概ね図6のような対応関係になるとみられる。1区～7区の3層、8区～10区のIV～V層、11区のIV～V層が、江戸期～明治初頭頃の整地層と推定される。1区・5区では、整地層下に江戸期の造成工事以前の旧地表土と考えられる黒褐色土も確認された。

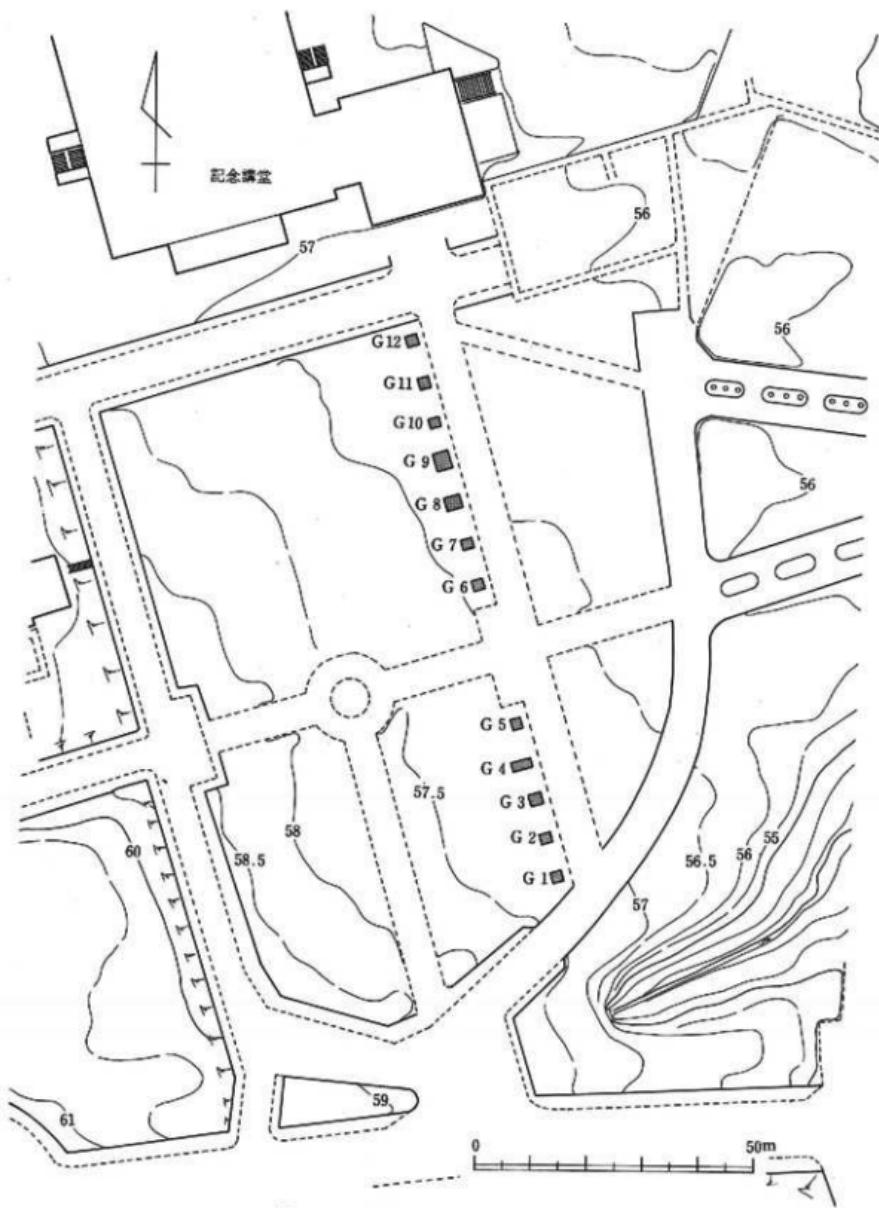


図4 二の丸第7調査地点調査区の位置  
 Fig. 4 Location of NM 7  
 NM 7 i.e. Location 7 of *Ninomaru* (Secondary Citadel)

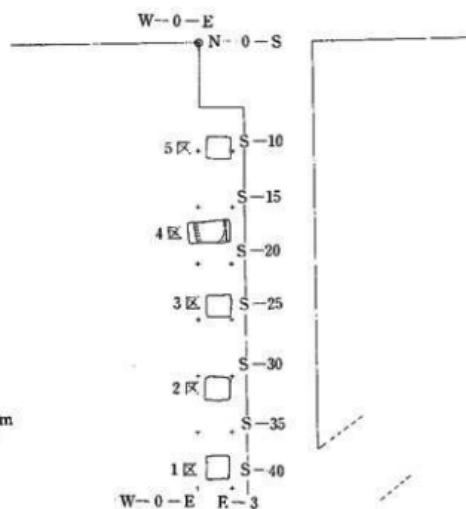
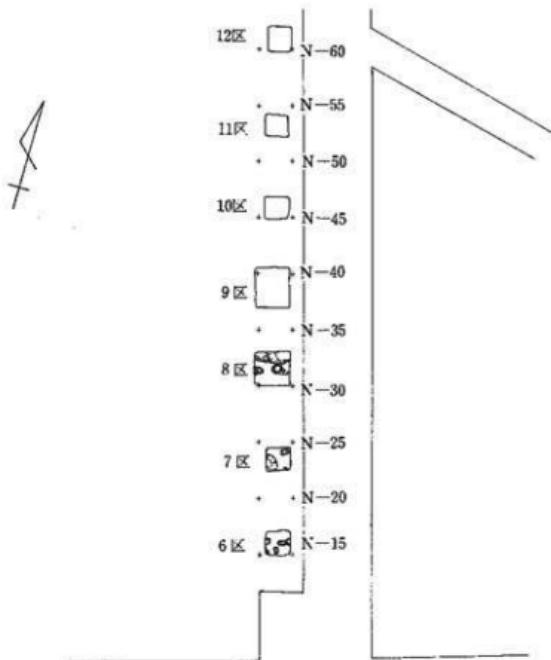
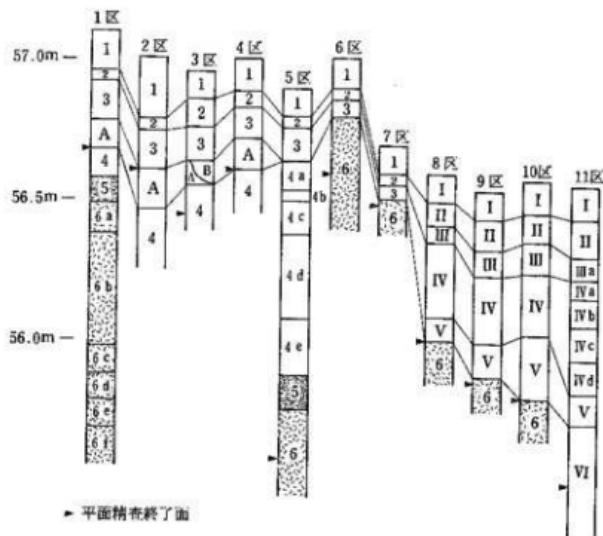


図5 第7地点調査区全体図  
Fig. 5 Distribution of excavations



1層 水表面およびそれに伴う變遷層	柱状図	10YR 5/4 黄褐色 シルト	11層 10YR 5/4 に近い黄褐色 腐葉	腐多量含む
1a 10YR 5/4 黄褐色 シルト	柱状図	10YR 5/2 黄褐色 シルト	柱状図	被多量含む
1b 10YR 5/6 黄褐色 粘石		10YR 5/2 黄褐色 シルト		
2層 10YR 5/2 黄褐色 粘質シルト 少量少含む	柱状図	10YR 5/4 黄褐色 シルト	柱状図	被多量含む
3層 10YR 4/3 に近い黄褐色 粘質シルト 少量含む	柱状図	10YR 5/6 黄褐色 シルト	柱状図	被多量含む
4a 10YR 5/4 に近い黄褐色 粘土 少量少含む	柱状図	10YR 5/4 黄褐色 粘質シルト	柱状図	被多量含む
4b 10YR 5/6 黄褐色 粘土	柱状図	10YR 5/6 黄褐色 粘質シルト	柱状図	被多量含む
5層 10YR 4/1 黄色 粘質シルト 分散性多量に内包型地帯	柱状図	10YR 5/4 黄褐色 粘質シルト	柱状図	被化多量含む、発達
5a 10YR 4/1 黄色 ～黄褐色 粘質シルト 分散性多量に含む	柱状図	10YR 5/4 黄褐色 粘質シルト	柱状図	被化多量含む、発達
5b 10YR 4/1 黄色 ～黄褐色 粘質シルト	柱状図	10YR 5/4 黄褐色 粘質シルト	柱状図	被化多量含む、発達
6a 10YR 5/4 に近い黄褐色 シルト 基盤上 少量含む	柱状図	10YR 5/4 黄褐色 粘質シルト	柱状図	被化多量含む、発達
6b 10YR 4/6 黄色 粘質シルト	柱状図	10YR 5/6 黄褐色 粘質シルト	柱状図	被化多量含む、発達
6c 10YR 5/6 黄褐色 粘質シルト	柱状図	10YR 5/6 黄褐色 粘質シルト	柱状図	被化多量含む、発達
6d 10YR 5/6 黄褐色 粘質シルト	柱状図	10YR 5/6 黄褐色 粘質シルト	柱状図	被化多量含む、発達
6e 10YR 5/4 に近い黄褐色 基土	柱状図	10YR 5/4 に近い黄褐色 基土	柱状図	被化多量含む、発達
6f 10YR 5/6 黄褐色 シルト	柱状図	10YR 5/6 黄褐色 シルト	柱状図	被化多量含む、発達
7層 黄色～黄褐色の基盤の自然地盤層 (柱状は既に付しておらずできない)				
7a 10YR 4/6 黄色 粘質シルト				
7b 10YR 5/6 黄褐色 粘質シルト				
7c 10YR 5/6 黄褐色 シルト		10YR 5/6 黄褐色 シルト	柱状図	1Xまでの 固分量
7d 10YR 5/4 に近い黄褐色 シルト		10YR 5/6 黄褐色 シルト	柱状図	1Xまでの 固分量
7e 10YR 5/4 に近い黄褐色 基土		10YR 5/6 黄褐色 基土	柱状図	1Xまでの 固分量
7f 10YR 5/6 黄褐色 シルト		10YR 5/6 黄褐色 シルト	柱状図	1Xまでの 固分量
8層 黄褐色～黄褐色の基盤の自然地盤層 (柱状は既に付しておらずできない)				
8a 10YR 4/6 黄色 粘質シルト				
8b 10YR 5/6 黄褐色 粘質シルト				
8c 10YR 5/6 黄褐色 シルト				
8d 10YR 4/6 黄色 粘質シルト				
8e 10YR 5/6 黄褐色 粘質シルト				

図 6 第7地点土層柱状模式図  
Fig. 6 Schematized profiles of NM 7

## (5) 遺構と遺物

### ① 遺構

溝、柱穴などが検出されている。しかし、調査区がそれぞれ狭く離れているため、検出された遺構の性格・構造はつかみきれない。

#### 溝

4区では3層下で南北方向の1号溝が検出された(図9)。幅2.7m、深さ0.6mをはかる。南の3区、北の5区ではこの溝の続きは検出されていないので、1号溝は鉤型に屈曲するのであろうか。

8区の北側に2号溝の肩の一部が検出された(図11)。地山面確認。ピット5に切られる。深さは約60~70cmである。9区・10区のVI層以下、11区のIX層以下の整地層はこの溝の埋土の可能性がある。この場合には、ちょうど8区付近で鉤型にまがる南北方向の溝か、あるいは幅の広い東西方向の溝とみることができる。

#### 掘立柱建物跡

6区~8区の地山面で掘立柱建物が確認された(図7)。桁行きが8間以上の南北棟になるだろう。1間は6尺3寸(約190cm)、柱穴は確認できなかった。2号溝との時間的な関係は不明である。

#### その他

8区のピット1は、瓦溜めともいえる、瓦が多量に含まれる深さ50~60cmの橢円形のピットである(図11)。また、3層、IV層の整地層を中心として瓦の出土が多かった。特に、2区、3区、9区、10区では、人頭大の砾とともに瓦が集積していた(図8・9・12)。

(佐久間光平)

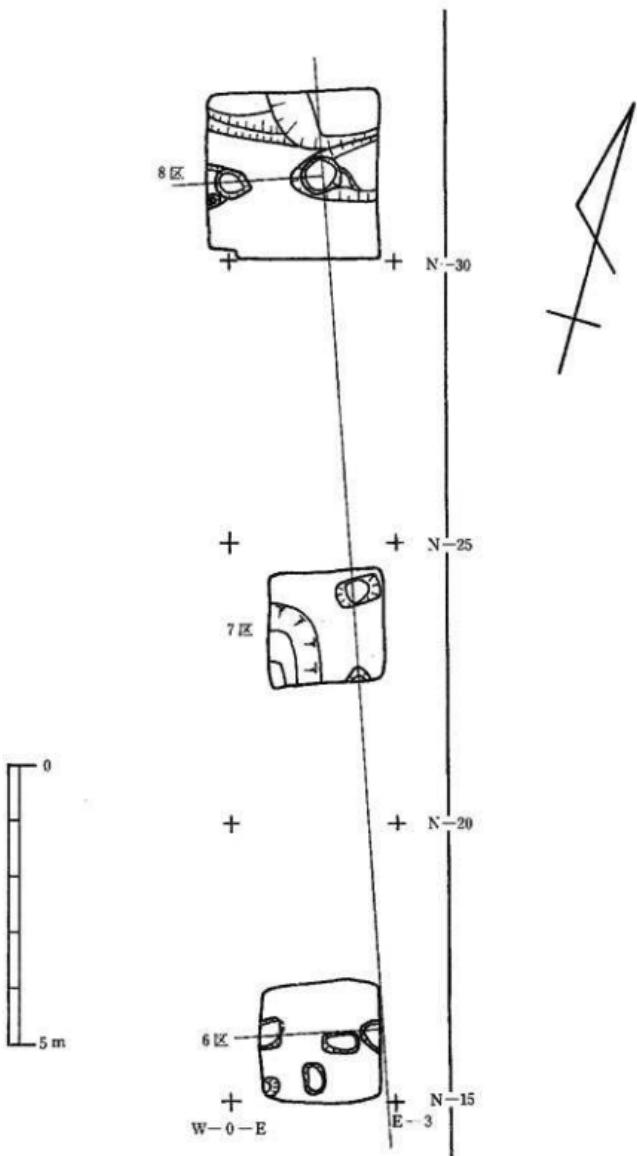


図7 第7地点 6～8区掘建柱建物跡

Fig. 7 Post holes of building at Grid 6,7 and 8, NM 7

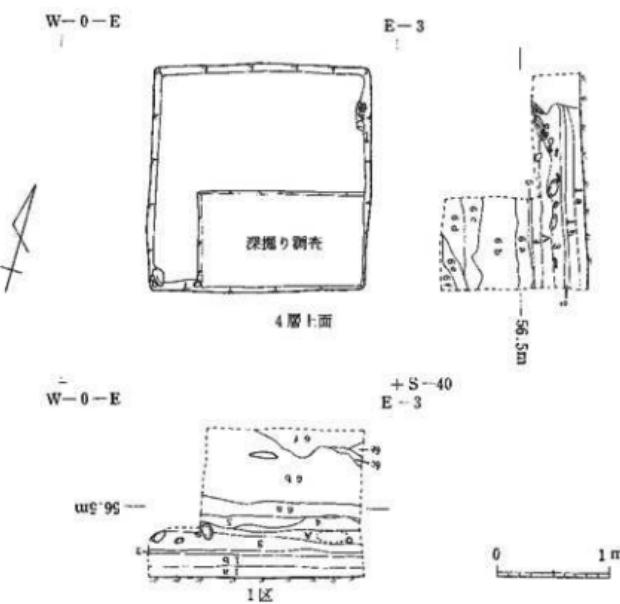
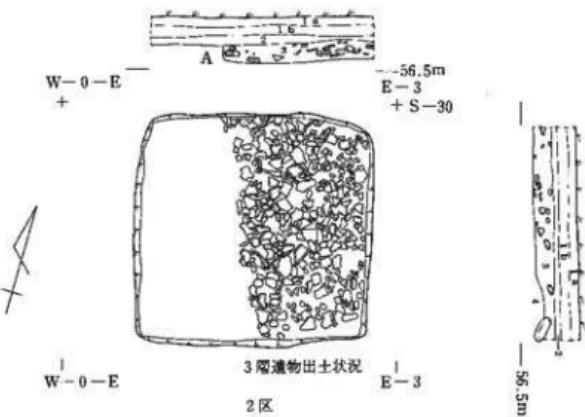


図 8 第7地点 1区・2区平面図・断面図  
Fig. 8 Plans and cross sections of Grid 1 and 2 at NM 7

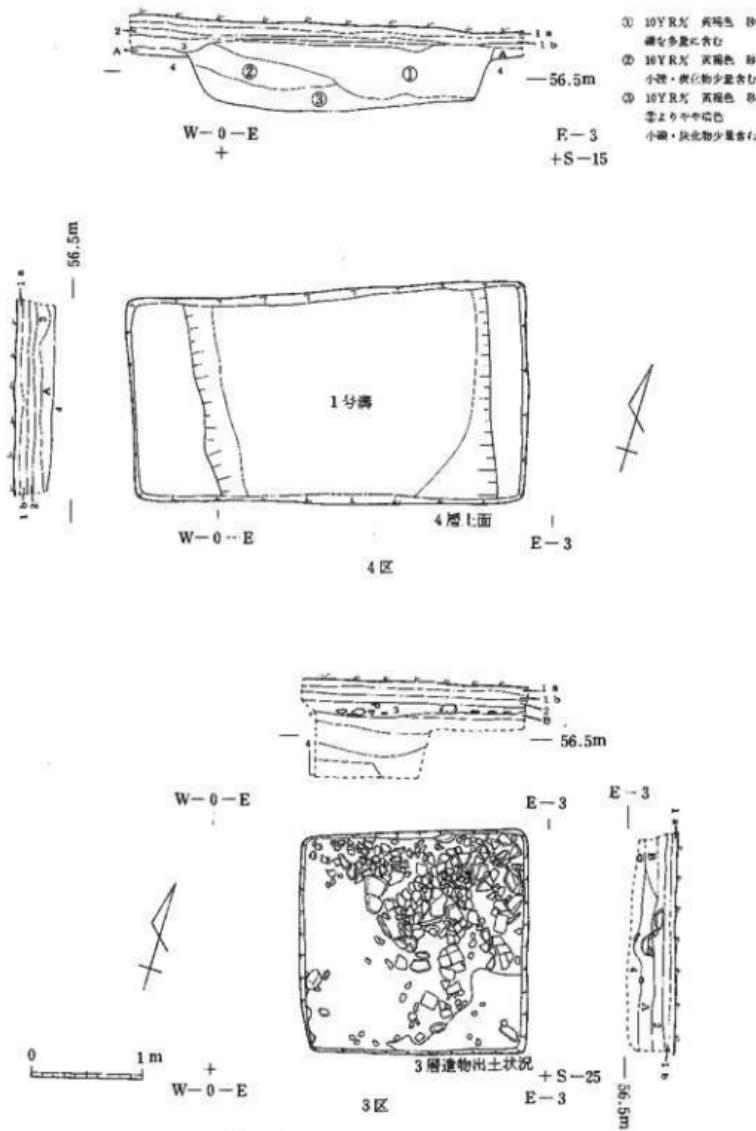


図9 第7地点3区・4区平面図・断面図  
Fig. 9 Plans and cross sections of Grid 3 and 4 at NM 7

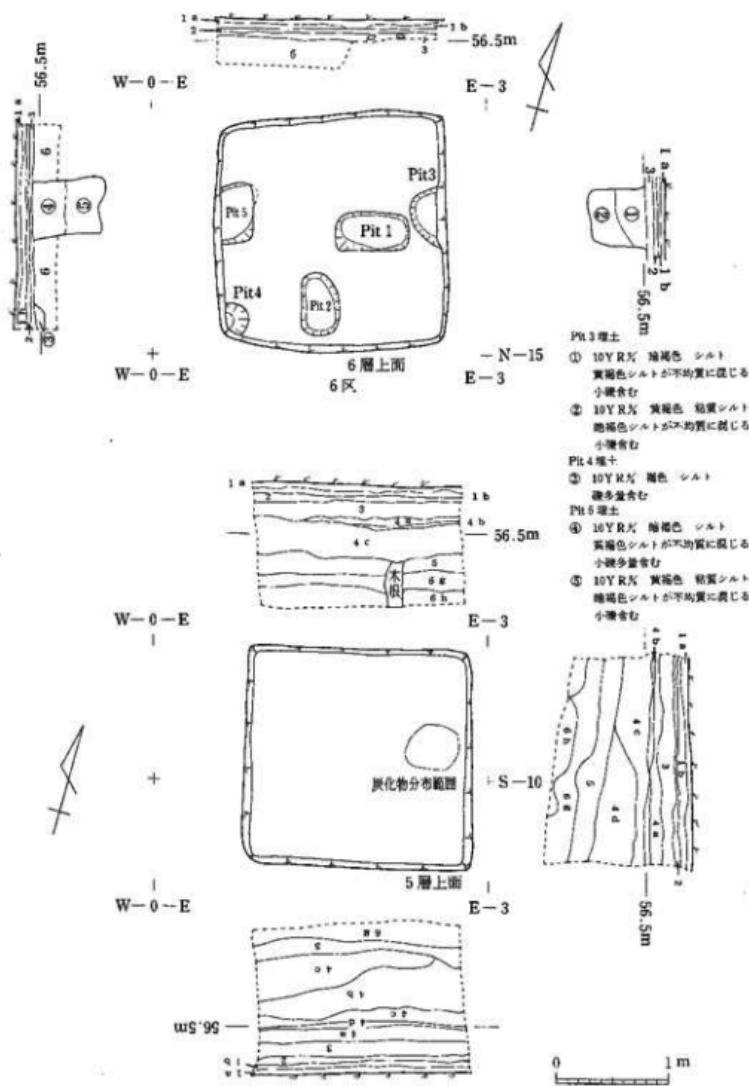


図10 第7地点5区・6区平面図・断面図

Fig. 10 Plans and cross sections of Grid 5 and 6 at NM 7

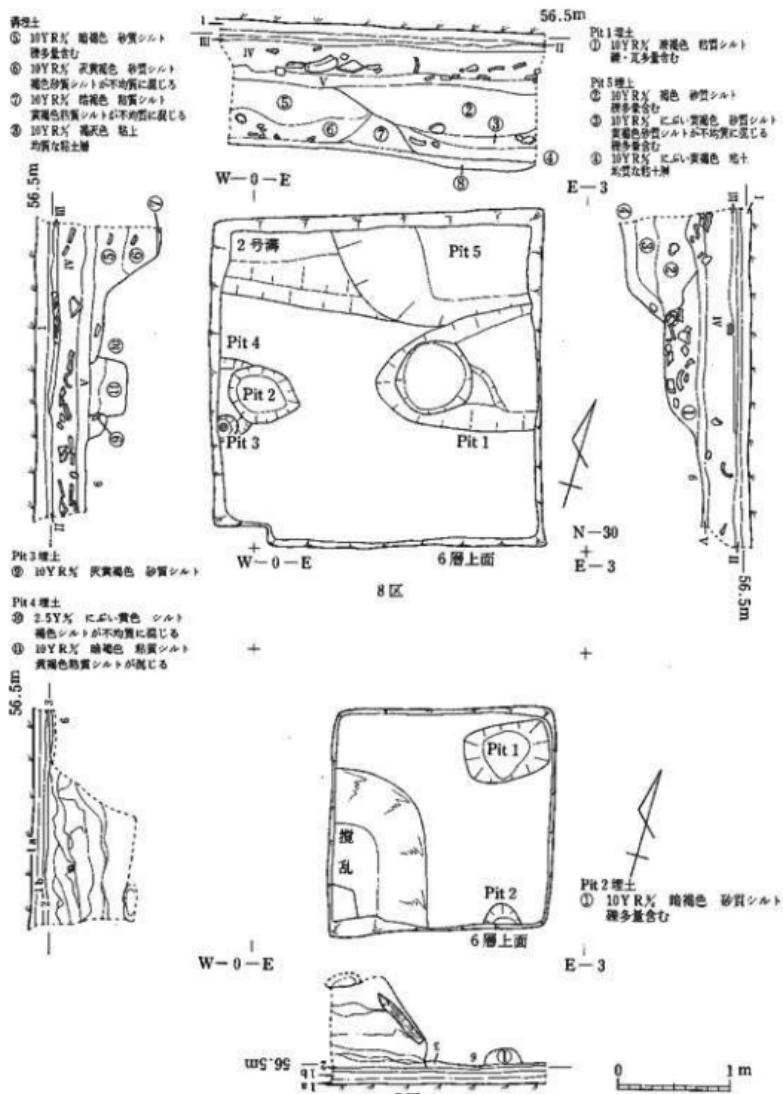


図11 第7地点7区・8区平面図・断面図

Fig. 11 Plans and cross sections of Grid 7 and 8 at NM 7

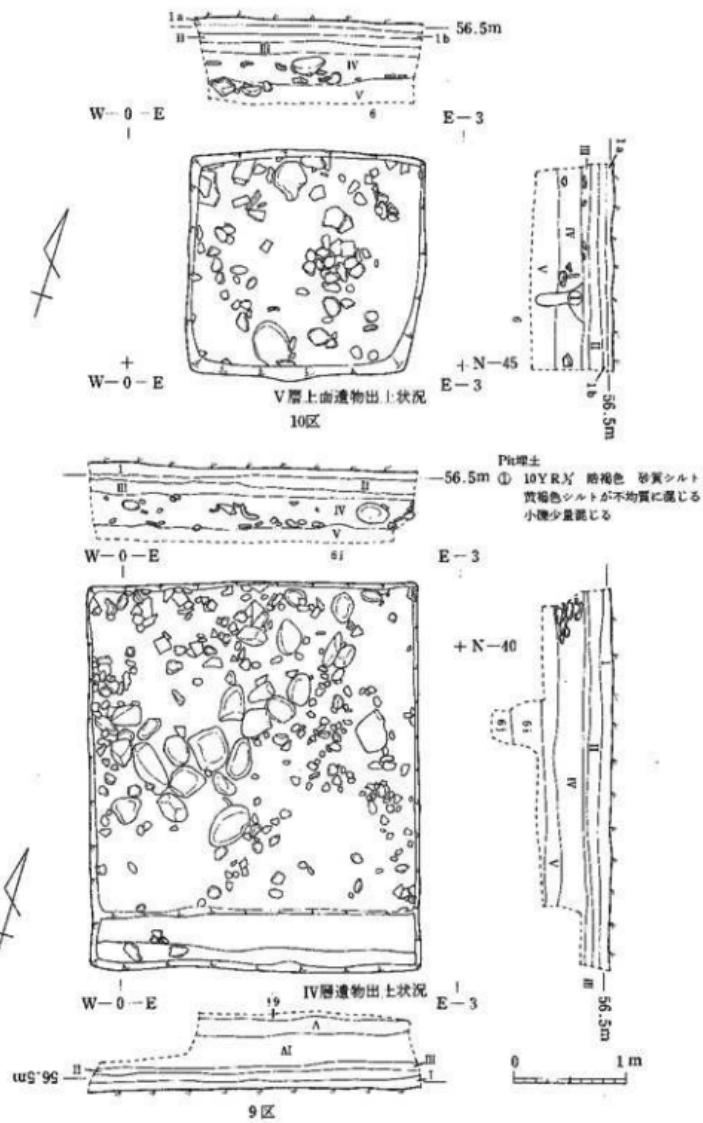


図12 第7地点9区・10区平面図・断面図  
Fig. 12 Plans and cross sections of Grid 9 and 10 at NM 7

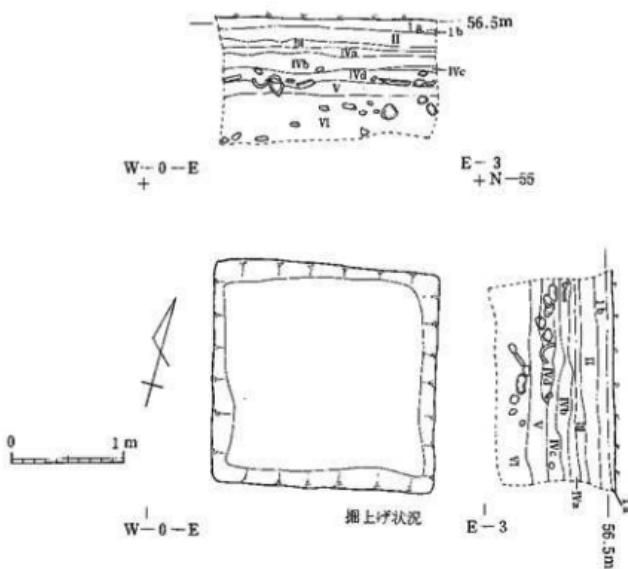


図13 第7地点11区平面図・断面図  
Fig. 13 Plan and cross sections of Grid 11 at NM 7

## ② 遺物

当地点出土の遺物の種類・数量は、表2・4・12に示した。全般に、1区～7区の3層、8区～10区のIV・V層の整地層を中心に遺物が出土している。特に、瓦がこれらの整地層に多く含まれる。これは、付近の建造物が施設され、整地されるとともに瓦がまとめて捨てられたことを示唆するのであろう。陶磁器もおもにこれらの整地層から出土している。瓦・陶磁器以外は目だった遺物はない。

(佐久間光平)

### A. 陶磁器

接合作業後の総破片数は、1577点を数えるが、資料のはほとんどは細片であり、全体形を把握できるものはわずかである。破片も含めて観察すると、時期的には、江戸期から昭和初めまでのものがみられるが、多くは幕末前後である。出土状況は、8～10区のII～V層に集中して出土している。層位別に見ると、II・III層の資料では、磁器は頬戸や平清水等の東北産と思われるものが、肥前産よりやや多くなる。陶器は、そのほとんどが大堀相馬・堺などの東北産で占

められる。また、第二師団で使用されたと思われるものも多く、染付はコバルトによるものが多い。一方、IV・V層では、磁器は瀬戸・東北産と思われるものより肥前産の占める割合が高くなる。染付は呉須によるものがほとんどで、コバルトによるものは少ない。陶器は、II・III層と同じく東北産で占められる。V層以下では、江戸期の肥前・大堀相馬産などで占められるが、出土数はきわめて少ない。各層を通じて、全体的な器種構成の大きな変化は認められない。用途別では、碗・皿・土瓶類などの食器類が大半を占め、擂鉢・焰焰などの台所製品の数はない。それ以外の火入・香炉・灯明皿などや、水滴などもわずかであった。ここでは比較的特徴の明かな資料について示す。

#### 磁器（図14）

1～4は、コバルトによるやや盛り上がった濃い染付がなされる。これらは、胎土の光沢が強く、肥前以外の産地が考えられる。5は幕末前後の平清水の隅切小皿で、型抜きで円崩文が施される。6は18世紀後半以降の肥前産の皿で、山水文が施される。7は肥前産の飯茶碗で、見込みに鷺文がある。8は角形の水滴で型押しで菊花文が施される。9は山に武田菱文の飯茶碗で平清水産。この山に武田菱文の飯茶碗は、二の丸跡第2地点で同様のものが出土している（東北大學埋蔵文化財調査委員会 1985）。また第2地点では、同じく山に武田菱文を施した皿も多く出土しており、二の丸跡出土陶磁器の特徴の一つであるが、今のところ産地を含め他の遺跡では出土例を見ない。10は徳利の胴部で、19世紀の肥前産で、器厚が薄い。11はよろけ縞文の飯茶碗で平清水産。12は見込みに菊花文のある二重縞目文の飯茶碗で、18世紀の肥前産。高台裏に変形した渦巻文が施される。13は若松文の半筒型の猪口（小碗）で18世紀の肥前製品。

#### 陶器（図15）

14は灰釉の土瓶で、胴部二面に銅線釉を流掛ける。胎土は薄い黄白色の緻密なもので、明治以降の大堀相馬の製品である。15は大堀相馬の灰釉の飯茶碗で、口縁部の内外に鉄釉が横方向に流掛けられる。16は緑灰色のやや厚い灰釉が掛けられた提梁の火入である。焼締は良く、底部は無釉糸切りで粘土粒の三足が付く。見込みには火を受けた跡が残る。

#### 炻器（図15）

17は炻器の鉢で、明治以降のもので、第二師団が使用していたものであろう。

#### 土師質・瓦質土器（図15）

18・19は土師質の皿である。土師質土器は各区より多量に出土しているが、大部分が細片で、全体の特徴が判明するものは、この2個体しかない。20は、提梁の植木鉢と思われるもので、焼成最終段階で炭素を付着させてある。

（本田泰貴）

表2 第7地点出土陶磁器集計表

Tab. 2 Distribution of ceramics at NM7

地区 出土地点	出土遺物										信 仰	符 號	瓦 片	土 器	合 計
	縫 縫	瓦 瓦	圓 盤	帶 帶	そ そ	柄 柄	筒 筒	圓 圓	鉢 鉢	壺 壺					
1層	1	3					1			3					8
2層			1										不明2		3
地表	1														1
2層	2														2
2層	3						1		2		錫類2				8
地表中			1												1
3層	2	3						2	1	錫類2					13
3層上部	1						1			1					3
3層								5							5
4層															1
3層上部		1													1
溝1号上1層	1										否B2		錫2		18
溝1号下2層	1												不明2		6
内側壁上							1	2			火入1				16
5層	1										錫類1				1
2層	1														2
6層	5		2				3		1		錫類1				11
ピット5													不明3		3
7層	11				不明1				8	不明1 油墨L1	錫類2				24
2層上部	6	1		急須手1					1						9
ピット	2							2	1						5
8日場上部	5								6						11
日場	11								2						13
III層	92	1	1	1	人頭1 耳1 猪口2	5	28	6	154	1	錫類13 蓋物? 2	絵3	絵且類14 不明7		250
IV層	22			1	蓋1 荷口1	4	3	24	2		不明2	絵且類4	4	66	
V層	36	1	5	1	水滴1	1	2	4	1	12 仙花器1 三葉2	不明4	絵且類8 不明23		145	
ピット1	1											絵且類1			2
ピット5												絵且類1			1
溝2号上1層	1		1			1						絵且類1			4
溝2号下2層												絵且類4			5
不明								1							1
9Ⅰ層							1	1	1	1	袋物5	錫類1			19
日場											小明6	不明1			7
田場	64		3		水滴1	19			36	蓋? 1 土鍋1	錫類6		絵且類4 不明21		156
IV層	62					9	3	1	50	1	火入1	不明1	不明4	132	
V層	4	2		2	水滴1	4			17	1		深1	絵且類5	37	
1号溝VI層	1														1
地表	6								7			不明1			14
16Ⅰ層	19	2	3			2	1	1	2	19	錫類11	不明1	絵且類2		63
II層	132		7	7	錫類9	13	1	3	17	不明4	錫類1	絵且類11 不明14		245	
IV層	7	1											絵且類2	10	
V層	12				水滴1	8	2	9	1	1		錫1 不明3	絵且類8 不明14	60	
VI層									2				絵且類5	5	
11Ⅰ層	1		2								錫類4				7
田場	6								2		錫類5		絵且類1	14	
IV層	23				錫1	3	2	21			A-錫1		絵且類2	53	
V層	1					1						火入2	絵且類8	12	
VI層			3	2	錫口1	11		1	3			不明4	絵且類24	37	
II層			2						1	1			絵且類18 不明23	45	
12Ⅰ層					レシダ1						錫類5			1	
地表	3								1	1			絵且類3	13	
合計	547	1	2	9	27	13	3	9	24	23	44	47	18	18	552

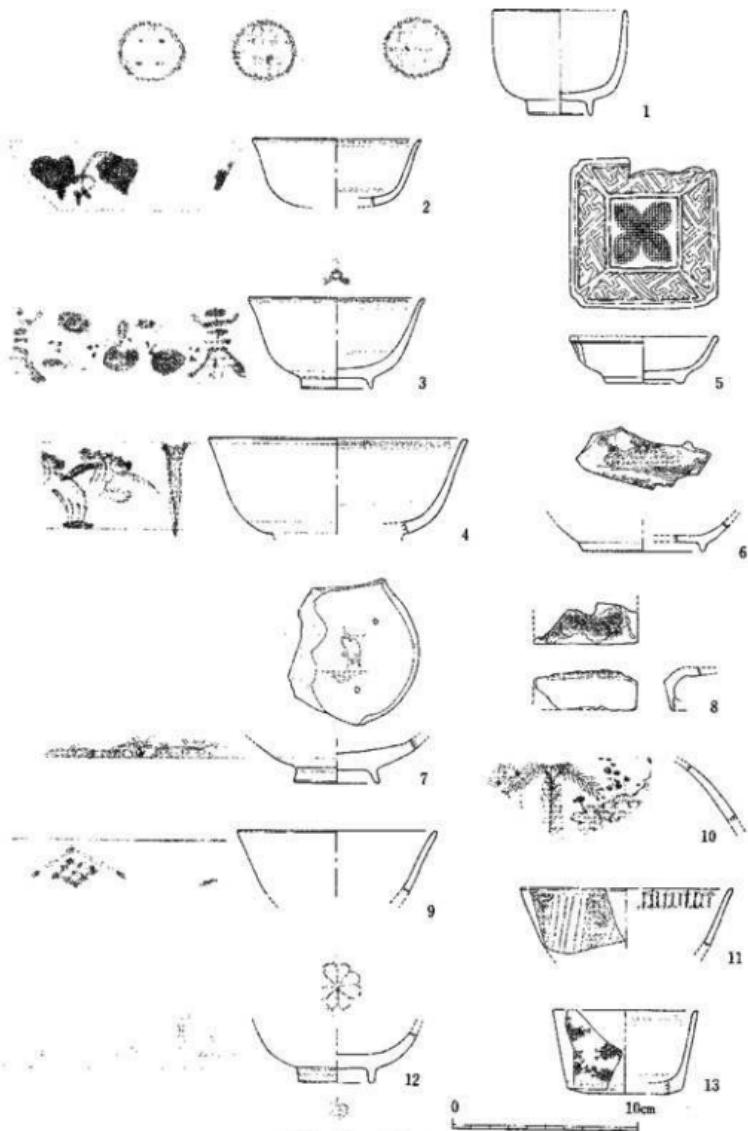


图14 第7地点出土磁器

Fig. 14 Porcelains from NM7

19c. (12-13 18c.)

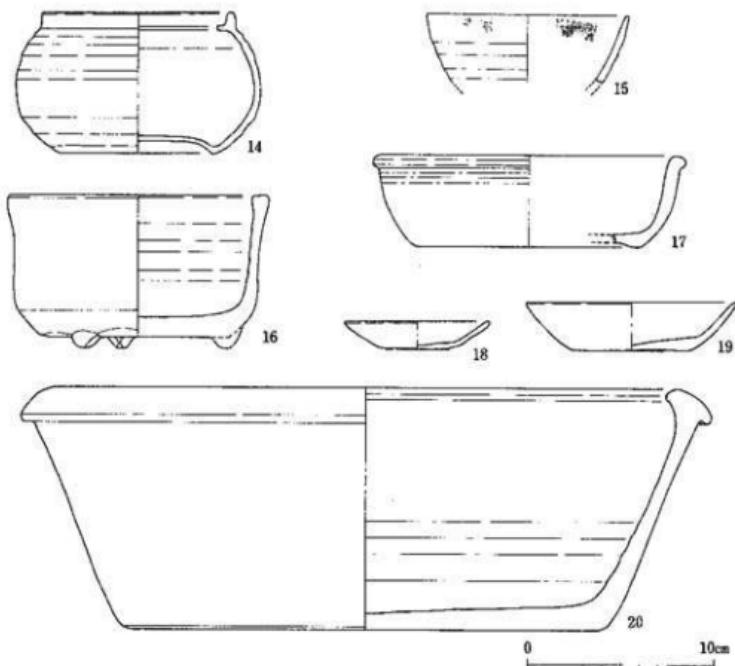


图15 第7地点出土陶器

Fig. 15 Ceramics from NM7

19c.

表3 第7地点出土陶磁器觀察表  
Tab. 3 Notes on ceramics at NM7

名 号	器 形	出 土 場 所	規 格 寸 寸 徑 高 厚 度	文 様 等	相 關 物 類	地 質	形 成 度	產 地	時 期	考 證 圖 版	
										標 本 號	入 手 者
1	施竹花瓶	8区V層	瓶 L 73 33 56.5	施竹田文久、コバルト	石灰 X 中中密 瓷	小湖	明治			6-3	
2	小罐碗	8区V層	瓶 S 91 -	施竹花文?	石灰 X 中中密 不明		19C			6-2	
3	瓶系碗	8区V層	瓶 M 95 36 49	施竹特殊文字文,コバルト	石灰 X 中中密 中中密 不明		19C			6-4	
4	瓶系碗	8区V層	瓶 S 139 -	施竹萬葉文?、コバルト	石灰 X 中中密 中中密 平滑水		19C			6-5	
5	残切小罐	8区V層	瓶 L 80 42 25	空缺特殊文	石灰 X 中中密 中中密 平滑水		19C			6-1	
6	小瓶	9区W層	瓶 S - 66 -	施竹特殊山水文、試酒	石灰 X 中中密 中中密 肥前		18C後半~19C			6-8	
7	茶碗	9区W層	碗 S -- 46 -	施竹山水文、試酒文、茶器、日輪文	石灰 X 中中密 中中密 肥前		18C後半~19C			6-6	
8	水波	9区V層	瓶 S - - -	施竹特殊花文、吳須?	石灰 X 密 密 植物?		19C			6-7	
9	瓶系碗	9区V層	瓶 S 106 -	施竹山川武田豪文、吳須	石灰 X 密 瓷 平滑水	嘉永御鏡				6-9	
10	施刊	10区II層	瓶 SS - - -	施竹花松梅文、吳須	石灰 X 中中密 肥前		19C			6-12	
11	施系瓶	10区II層	瓶 SS 114 -	施竹よろけ瓶文、吳須	石灰 X 中中密 中中密 平滑水		喜永前後			6-11	
12	施系瓶	10区II層	瓶 S - 49 -	施竹二重圓文、試酒、落合藤之助款	石灰 X 密 中中密 施前		18C			6-10	
13	罐口?	11区W層	瓶 S 78 45 62	施竹方松文、風雨	石灰 X 密 中中密 肥前		18C			6-13	
14	十瓶	7区II層上	瓶 M 104 85 75.5	無款施點斑	石灰 X 密 密 大坂相馬	明治				6-16	
15	施花瓶	11区V層	瓶 SS 109 -	施點斑	○ 瓶 中中密 大坂相馬		19C			6-14	
16	火入	9区IV層	瓶 M 140 96 82	施文、日輪 3ヶ所	石灰 X 中中密 中中密		19C			6-17	
17	瓶	11区I層	瓶 S 168 120 49	無文	石灰 X 中中密 中中密 植物?	漁人頭				6-15	
18	瓶	8区V層	瓶 M 78 32 15	無文	- - -	中中密				6-18	
19	瓶	11区V層	瓶 S 112 64 26	無文	- - -	中中密				6-19	
20	袖大鉢	4区I層	碗 M 372 252 130	無文	炭灰 - - -	中中密	19C			6-20	

## B. 瓦

### a : 分布

発掘区全体の層序は概ね対応づけられるが(図6)、各調査区間の距離がかなりあり、廃棄の単位が異なる可能性が強いので、地区・層ごとに集計をした(表4)。これらの資料のうち、特に量が多く、出土状況から一括性が強いのは、8区IV層、同V層同ビット、4区溝出土の各資料である。ただし、第7地点の瓦は全体として8区V層出土の「山に武田菱」文の茶碗、III・IV層から出土する洋釘から、いずれも明治初期に廃棄されたものと考えられる。分析してみると、層・地区によって瓦の組成に若干の違いがあるが、いずれも平瓦と丸瓦が主体であり、以下では全体を一括して扱う。

### b : 分析方法

瓦は一般に出土量が多く、その大半が平瓦の破片(近世では棟瓦の場合も)であることから、報告書作成上の時間などの制約もあり、軒丸瓦、軒平瓦など、特徴的なものだけを抽出して記述するにとどまる場合が多い。また、発掘時に採集資料の選択がなされる場合もある。目的や現実的問題から資料と分析方法の選択がなされるのは当然としても、できるだけまず発掘資料全体の何等かの記述をし、それと分析のために抽出した資料の関係がわかるのが望ましい。

近世の瓦は種類が多く、それぞれの種類について、時代、地域、個々の建築によって形態的にかなりの変異があることが予想される。實際これまで仙台城二の丸跡の調査では、地点ごとに瓦の種類にかなり違いがあり、これは、ある程度近隣にあった建物の瓦の違いを反映していると考えられる。

遺跡出土の瓦の量を種類ごとに記述する場合に問題なのは、資料の大半が破片であり、破片の特徴から種類を同定しなければならない点である。そのためには、各種類の完形品が基準資料として把握されてなければならない。しかし、仙台城二の丸では、どのような種類の瓦が用いられていたかを、これから調べなければならない段階にあり、最初から破片の特徴で細かい種類まで同定し、資料全体を記述することはできない。調査地点ごとに、異なる建物の近隣を発掘するわけだから、こうした状態は少なくとも当分続くと考えられる。また、存在し得る瓦の種類がリスト・アップされていたとしても、破片からはひとつの種類を特定できない場合がある。たとえば、軒丸瓦の瓦当部が失われた破片は、丸瓦の破片と識別困難である。

以上の点を踏まえて、作業員を使って、統一した基準でかつ迅速に資料全体を記述するために、図16のような整理の基準を用いた。まず、資料全体を破片の特徴から簡単に識別し得るいくつかの種類に大別する。この段階で大別した種類ごとの数量を記述する。次に、可能な物については平瓦、丸瓦等の種類のレベルに細別を進めるが、大量にあるものについては(今回の場合、平瓦類と丸瓦類)、基準を設けてある程度以上の大きさのものを抽出して観察し、細別を

表4 第7地点出土瓦集計表  
Tab. 6 Distribution of roof tiles at NM 7

[枚数・重量(単位kg)の順に表示]

地区	層	種類	平瓦				筒瓦				その他の				不規瓦				
			丸瓦	北瓦	粗平瓦	粗大瓦	強瓦	筒造瓦	円筒瓦	その他	小計								
1区	1層		3	0.4							2	2	0.2	10	0.3				
	2層		22	2.9	26	2.9	2	6.3			2	2	0.07	72	2.6				
	3層		1	0.2	2	0.1								5	0.2				
2区	1層		3	0.5										9	0.2				
	2層		7	1.0	13	1.1	1	0.03		1	0.2			149	4.5				
	瓦筒中		22	3.9	23	4.5		2	0.7					103	2.3				
	3層		502	82.6	296	26.6	4	1.1	4	0.5		4	10	14	1.2	516	17.6		
3区	1層		2	0.2	4	0.1			1	0.04		1	1	0.05	49	1.1			
	2層		402	72.5	335	45.7			13	4.6		1	5	6	1.0	527	25.5		
	3層		3	1.0															
	瓦筒外		46	9.3	23	4.8		1	0.07			2	2	0.5	58	2.4			
4区	1・2層		63	10.0	47	8.4						1	1	0.05	79	4.2			
	3層		49	7.6	42	4.8	1	0.4	3	0.6					166	7.9			
	2柄筒中		43	7.7	33	3.6			2	0.2					84	4.0			
	筒造土1層		156	29.5	132	26.2	2	0.2	7	0.5	1	0.04			144	6.7			
	筒造土2層		6	1.0	18	3.4		1	0.4	1	0.3		1	1	0.1	17	0.7		
	筒造土3層		2	0.3	1	0.07									6	0.3			
5区	1層		2	0.5	1	0.04			3	0.2					21	0.9			
	2層		189	41.2	160	18.8	3	0.4	4	1.0					233	15.2			
	3層		113	24.7	56	12.2	2	1.7	13	4.0		1	1	2	0.4	48	2.6		
6区	1層		3	0.5	10	0.9									29	1.2			
	pH 1				1	0.8													
	pH 2端上				1	1.2													
7区	1層		5	0.9	3	0.1						1	1	0.2	4	0.1			
	2層上		2	0.2	1	0.1									29	1.1			
	3層		11	1.6	9	0.4									5	0.1			
8区	1層		13	5.2	5	0.1			2	0.2					2	0.5	26	1.3	
	田端		24	5.7	45	3.4	1	0.05	1	0.1					14	2.0	117	4.2	
	IV層		721	257.2	219	56.6	6	1.9	14	11.4	89	16	32	117	36.0	489	24.9		
	V層		88	39.8	31	16.6			13	9.4	8		4	12	9.3	47	2.6		
	田端		19	2.4	3	0.2									6	0.3			
	pH 1端上1		134	31.6	60	18.8	1	0.1	2	3.6	1		1	2	0.7	122	6.1		
	pH 2端+1		1	0.2					2	0.6					2	0.1			
	筒造土1層		16	3.7	17	2.5									15	0.9			
	筒造土2層		1	0.2	4	0.4									4	0.2			
	II層1号筒瓦pH 5		28	5.7	13	2.2	1	0.02	1	0.07	1	1	1	3	0.7	31	1.8		
9区	1層		3	0.8	4	0.6									19	0.2			
	田端		11	1.8	5	0.3									32	1.5			
	田端		6	1.0	12	0.7									38	1.8			
	IV層		158	37.6	348	24.2	1	0.9	6	1.9	2	0.4	12	31	16.3	230	12.8		
	V層		5	2.6	8	2.6									18	0.5			
	IV層1号筒瓦上		2	0.4	2	0.04									3	0.2			
	筒造土		1	0.2											1	0.02			
	筒造		2	0.2	2	0.4									2	0.1			
	その他の瓦		2	0.5	5	0.6									6	0.2			
10区	1層		12	2.3	16	0.9									26	1.0			
	田端		5	0.7	4	0.3									25	0.7			
	田端		59	19.2	43	8.1	3	1.6				4	1	2	0.6	66	2.4		
	IV層		20	5.0	21	1.8			1	0.05	1		1	2	0.3	52	2.3		
	V層		39	10.2	41	8.6			1	0.05			1	1	0.6	34	1.7		
	田端		10	3.5	17	2.2			2	0.2					26	1.4			
11区	1層		4	0.6	9	1.7									11	0.9			
	田端		2	0.3	1	0.2									3	0.2			
	IV層		20	4.4	15	3.2	2	0.4			1		1	2	0.2	36	2.2		
	V層		54	11.4	65	10.1	1	0.8	3	1.51	1	0.5	1	1	0.07	34	4.9		
	田端		36	10.0	25	6.7	2	1.1	1	0.08	1	0.5	1	1	2	0.6	44	3.1	
	IV層		76	18.3	37	7.0	1	0.05	3	0.2			1	1	1	0.2	56	3.0	
12区	1層		9	1.9	5	1.2	1	0.2							4	0.2			
	田端		3	0.4	1	0.04									5	0.2			
	小形		36	10.6	23	3.4						19	1	12	3.2	19	1.6		
	小形と瓦板				3	5.0	1	2.0	2	2.1		1			1	0.6			
	二重瓦・平瓦兼用		3369	832.9	1,980	363.0	36	13.2	106	44.6	7	19	104	34	120	258	66.0	4,131	189.72

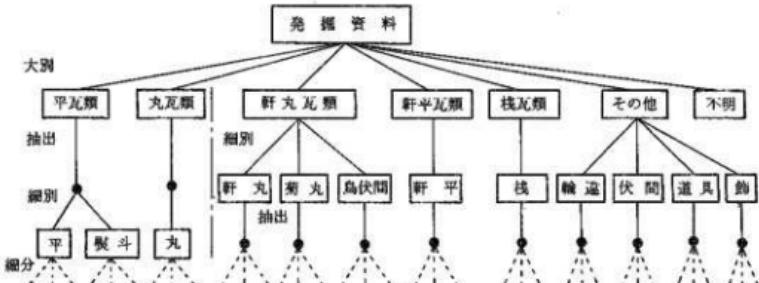


図16 瓦分類の手順

Fig. 16 Operation flow of roof tile analysis

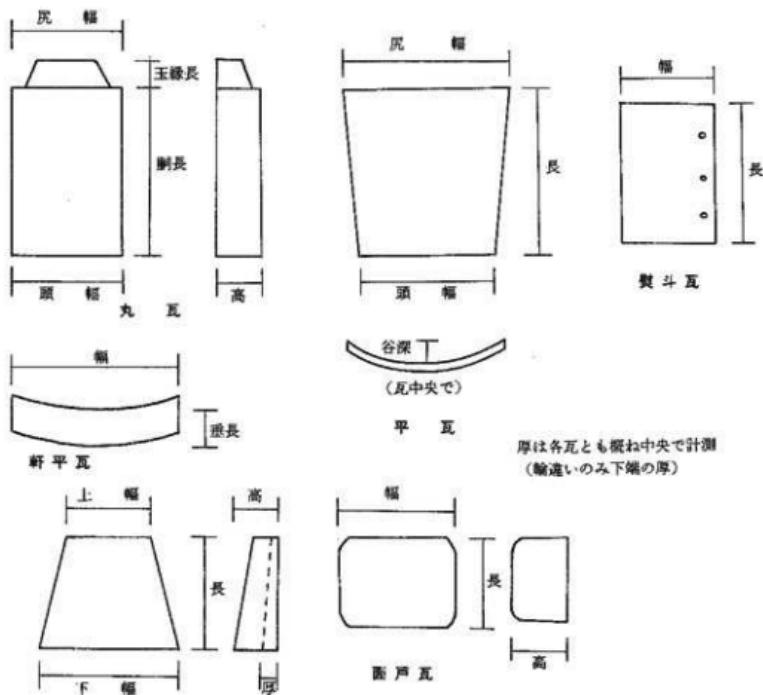


図17 瓦の計測部位

Fig. 17 Points of measurements on roof tiles

行う。細別は、各種類の固有な特徴および大別時の経験にもとづいた基準で分類する。もちろん最初から細分できれば、それに越したことはないが、細別不能な破片も多く、複雑な基準は作業員の間で混乱や不統一を生じるので、実際的な方法を採用した。

次に細別した資料の中から、ある程度以上の大きさの資料を抽出し、各種類内での大きさの変異の把握、および製作法上での分類が可能かどうかを見るため計測や細部の観察を行う（細別以前に抽出を行ったものは、それをそのまま計測・観察の対象とする）。瓦の場合、形態に部分的な変異が多いので、実際に細片まで細かく観察してみても、瓦全体の他の部分の特徴との組合せが揃めないので、まず、ある程度以上の大きさの資料を使って、分類の基準を作らなければならない。しかし、今回の第7地点のように結果として抽出できた資料、すなわちある程度以上の大きさの資料が少ないと、量的保証がないため、種類内での大きさや製作技法上の細かいグループ分けができない。結局、接合しない瓦の細かい破片は、あまり分析に使えないことになる。

#### c : 瓦の大別

次に、上述した分析方法における大別の基準を述べる。今回の分析の分類・名称は、軒巴瓦を考古学で一般的な軒丸瓦にした以外は、概ね坪井弘1976『日本の瓦屋根』に準拠する（図18）。

#### 軒丸瓦類

丸い瓦当部を持つ瓦の総称。鳥伏間、掛瓦、菊丸など、棟に使うものの破片も含む。直径90mm程度のものは軒棧瓦の瓦当なので、棧瓦類に分類する。

#### 軒平瓦類

四角い瓦頭部を持つ瓦の総称。棟に使う掛唐草や、軒棧瓦の丸い瓦当部が失われたものも含まれ得る。

#### 丸瓦類

丸瓦と同じく、内面に布痕を伴う湾曲度の強い胴部や玉縁を持つもの。軒丸瓦類の瓦当の失われたもの、掛瓦、輪違いなどの細片が含まれ得る。

数量が多いので、長さ・頭部幅・尻部幅のいずれかが残っているものを抽出した上で、種類ごとに細分する。今回は「丸瓦」のみ抽出された。

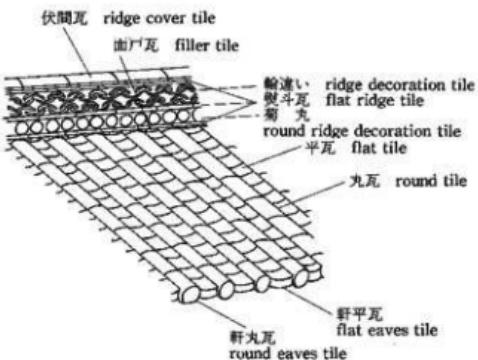


図18 瓦屋根復元模式図

Pl. 18 Restored illustration of a roof at NM 7  
(坪井 1976 図28より作製)

## 平瓦類

板状の部分を持つ瓦の破片の総称。平瓦、棟瓦類、熨斗瓦、軒平瓦類の瓦当部から外れた部分、装飾瓦の装飾から外れた部分などが含まれ得る。50mm未満の破片で他の項目に分類できる特徴のないものは、「平瓦類」に含まれる可能性が高いが、厳密を期して「不明」として扱う。

数量が多いので、長・幅いずれかの完全に残っているものを抽出した上で、形態的特徴から細分した。当地点では平瓦と熨斗瓦の一種が区分できた。

## 棟瓦類

棟部分が識別できるもの。棟瓦葺きに使われる全体がS字状に波うつタイプと、御棟瓦、棟瓦など板状の棟の部分を張り付ける棟瓦含む。

## その他

熨斗瓦、輪迫い、面戸瓦、道具瓦類、装飾瓦類などで最初から細分できる特徴を備えたもの。

以上の大別作業の途中で、形態的特徴の他に、釘穴、刻印、桟目、水切り溝の有無も確認した。次に、種類ごとに細分した上で、計測や細部の観察を行い、それぞれの種類の中での変異を分析する。胎土による分類も考えられるが、これには充分な基礎研究に基づく有効な観察基準をもって観察しなければ意味がないので、今回は行わなかった。

### d：各種類の特徴

#### 軒丸瓦（図19～22）

丸瓦部の完形品は3点のみなので、実際には菊丸と鳥伏間を除く軒丸瓦類を含むことになる。瓦当部の周が4分の1以上残存しているものを抽出し、計測観察の対象とした。

紋様：九曜紋が最も多く、次いで三引両紋、巴紋となる。8区では、三引両紋はおもにIV層以上で、九曜紋はV層以下で出土する。他に4区の溝より桟紋が1点出ている。それぞれの紋様についていくつかの範があるようだが、同範の認定は難しい。

形態：瓦当部の直径は概ね165mm～175mmで、5.5寸の瓦と考えられる。5寸と考えられる一回り小さい瓦当も2点みられる。文様ごとに直径に差は無い。周縁の幅は、三引両がやや狭い傾向がある。

#### 菊丸（図21・22）

直径約120mmの瓦当で、大きさから菊丸と推定されるものが、2区3層と5区3層に各2点みられる（図21・22—17～20）。瓦当部を欠いているが、大きさから菊丸の丸瓦部と推定されるものが8区IV層より3点出土している（図22—23）。同じく組棟に使われる輪迫いと比べると量が非常に少ないので、輪迫いと同じ屋根には使われなかつた可能性もある。

#### 鳥伏間（図22—22）

表採品が1点確認されている。

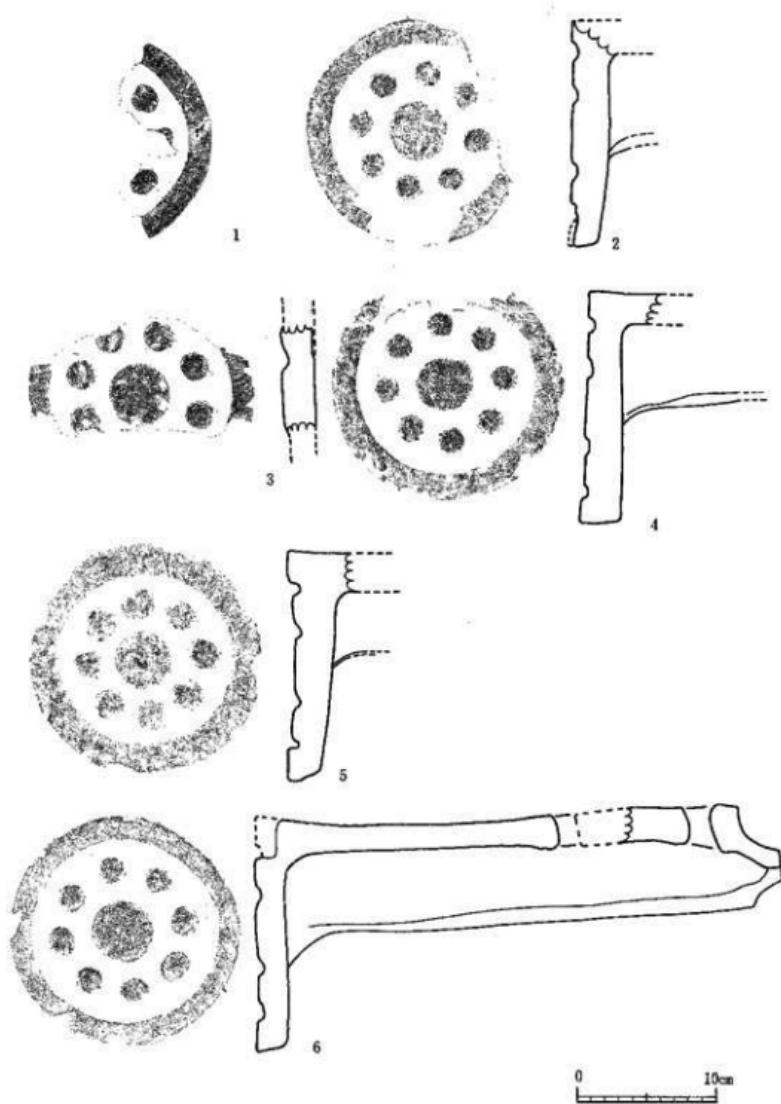
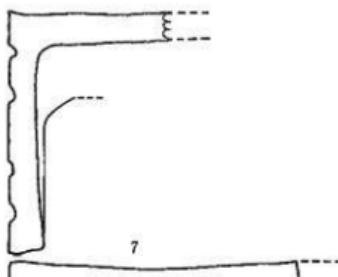
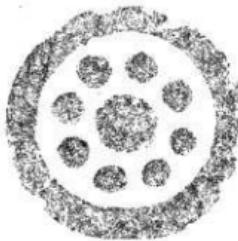
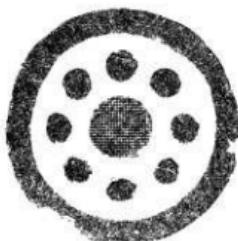
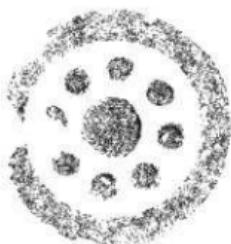
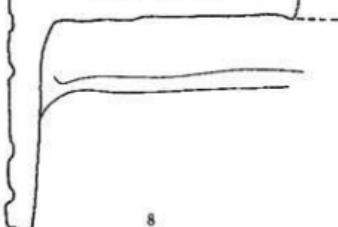


图19 第7地点出土軒丸瓦(1)  
Fig. 19 Round eaves tiles from NM 7 (1)

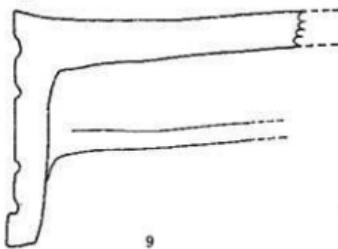
Mid. of 19c.



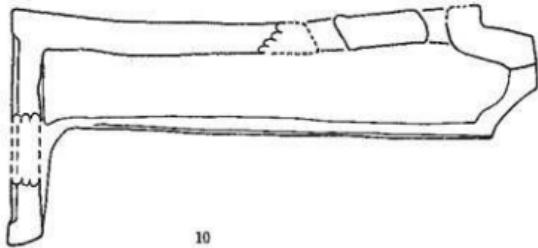
7



8



9



10



图20 第7地点出土軒丸瓦(2)

Fig. 20 Round eaves tiles from NM 7 (2)

Mid. of 19c.

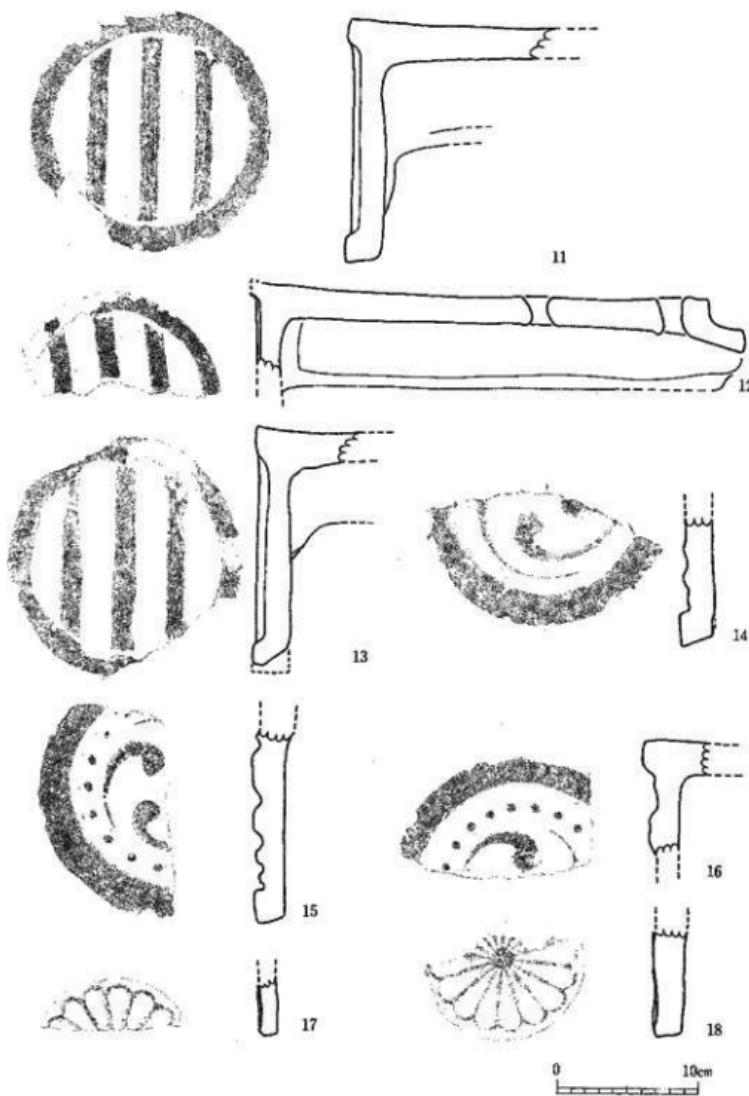


图21 第7地点出土軒丸瓦(3)  
Fig. 21 Round eaves tiles from NM 7 (3)

Mid. of 19c.

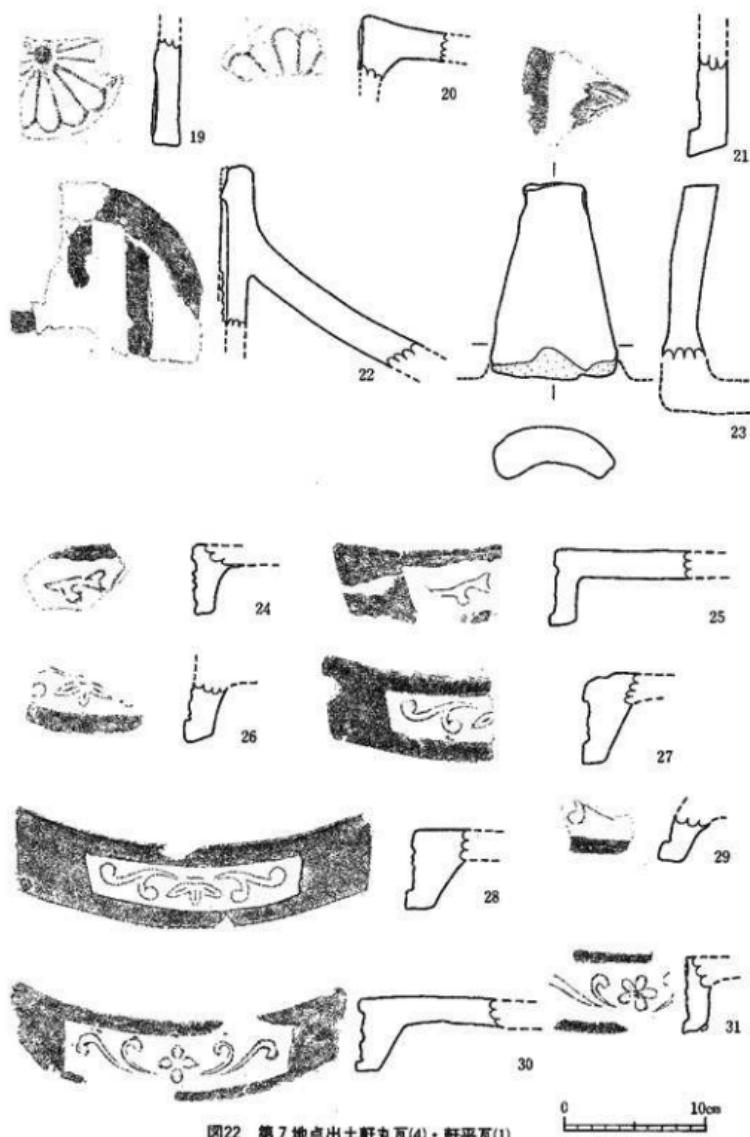


图22 第7地点出土軒丸瓦(4)・軒平瓦(1)

Fig. 22 Round eaves tiles and flat eaves tiles from NM 7

Mid. of 19c.

### 軒平瓦（図22・23）

瓦当部の模様から次の9種類が識別できた。

I 唐草+三枚筈：破片だが、唐草の形が、三枚筈を組合せた表採品の軒平瓦（図38-98）、仙台城三の丸出土の軒平瓦の文様と共通し、かつ箇文の一部が確認できる（図22-24・25）。

II 唐草+雪持筈（図22-26~29）。

III 唐草+四弁花（図22-30、図23-32）。

IV 唐草+梅（図22-31、図23-33・34・36）。

V~VII 細片のため、模様の全体形不明（図23-35・37・38・39）。

IX 菊+？：形態が他の軒平と異なる。2点右り、同范である（図23-40・41）。

資料数が少なく、瓦が最も多い8区でも軒平瓦は9点のみである。したがって文様・形態と出土地点・層との関係は論じられない。

表5 第7地点出土軒丸瓦観察表

Tab. 5 Notes on round eaves tiles at NM 7

単位mm( )は復元値、平均値等は復元値を含む

回	文様	地区	層	造形	径	周縁
1	丸	5区	2層	(148)	17	
2	*	*	3層	160	20	
3	*	*	"	161	17	
4	*	8区	IV層	167	16	
5	*	*	*	166	22	
6	*	*	V層	166	20	
7	*	*	*	171	22	
8	*	*	*	170	18	
9	*	*	pit 1, 層1	170	22	
10	二引	*	IV層	(168)	16	
11	*	*	*	175	18	
12	*	*	*	(147)	11	
13	*	11区	2層	172	16	
14	巴	2区	3層	(172)	23	
15	巴+連珠	8区	IV層	(171)	25	
16	*	*	V層	(174)	20	
17	菊丸・菊	2区	3層	(114)	—	
18	*	*	*	(119)	—	
19	*	3区	*	(121)	—	
20	*	*	*	(122)	—	
21	桐	4区	溝埋1	(174)	19	
22	鳥伏頭・二引	4区	溝埋土	(172)	23	
23	—	8区	IV層	—	—	

九摩・二引・巴の 軒丸瓦のみ	n m a x. m i n. x s	30 176 147 166.4 7.1
-------------------	---------------------------------	----------------------------------

表6 第7地点出土軒平瓦観察表

Tab. 6 Notes on flat eaves tiles at NM 7

単位mm

回	文様	型	地区	層	造形	径	周縁
24	I	5区	2層	52	—		
25	*	8区	IV層	53	—		
26	II	3区	3層	—	—		
27	*	4区	*	62	—		
28	*	10区	田埋	58	254		
29	VII	3区	3層	—	—		
30	III	9区	IV層	53	239		
31	IV	5区	2層	52	—		
32	III	11区	VII層	54	—		
33	IV	5区	2層	54	—		
34	*	*	3層	52	—		
35	V	8区	IV層	48	—		
36	IV	11区	VII層	54	—		
37	VII	4区	溝1層+1層	—	—		
38	V	1区	2層	—	—		
39	VII	8区	IV層	53	—		
40	IX	2区	3層	—	—		
41	*	*	*	—	—		

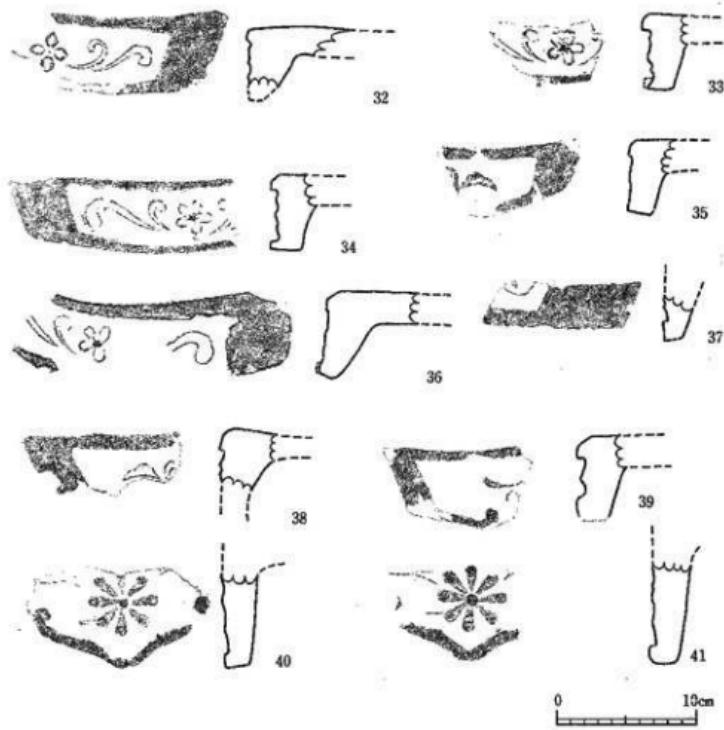


図23 第7地点出土軒平瓦(2)  
Fig. 23 Flat eaves tiles from NM 7 (2)

Mid. of 19c.

### 丸瓦(図24~27)

形態：胴部長は、おおよそ255mmから280mmまで分布し、平瓦よりやや短いのがわかる。他の部位の計測値及び相瓦の関係を比較しても、さらに細かいタイプは見いだせない。

製作・調整痕：全ての瓦に基本的に共通した特徴がみられる。すなわち、表面胴部は縦方向のヘラナデ、胴部両端と玉縁部はヨコナデである。内面は横方向のコビキ（粘土板の切り離し痕）に、型起こしの際についた布痕が重なる（図版18—5～8）。これに加えて内面に型から離す際についたと推定される紐痕と棒痕が見られるものがある。

### 平瓦（図28～30）

形態：幅が分かる資料が少ないので、長さで比較してみると、おおよそ265mmから300mm（9寸から1尺）まで連続して分布している。1点のみ237mm（8寸相当）のものがある。長幅比に強い規格性は見られない。59・60は谷に使う瓦だろうか。形態と出土地点・層との関係は特に見い出せない。

製作・調整痕：表面は主に横方向のナデで、側辺近くは縦方向のナデとなる。裏面は無調整が多いが、軽いナデがある場合もある（図版18-9）。

### 熨斗瓦（図30・31）

「平瓦類」の中から前述した基準で抽出したものの中に15点確認した。いずれも8区出土である。

形態：湾曲が無く、1辺に釘穴が並ぶことから、熨斗瓦の一種と考えた。釘穴の間隔と配置に2タイプあるようである。釘が残存する例もある。

製作・調整痕：表面は方向が一定しないが、縦もしくは横方向のナデで、裏面は無調整（図版18-10）。

### 棟瓦

4区より、板状の貼り付け棟の破片1点が出ている。また水切り溝の付いた破片が8・9・10区のIV層、10区のI層より各1点出土している。第6地点の例（東北大学埋蔵文化財調査委員会 1990 pp. 30-36）からすると、辦线条瓦の可能性がある。

表7 第7地点出土丸瓦観察表  
Tab. 7 Notes on round roof tiles at NM7

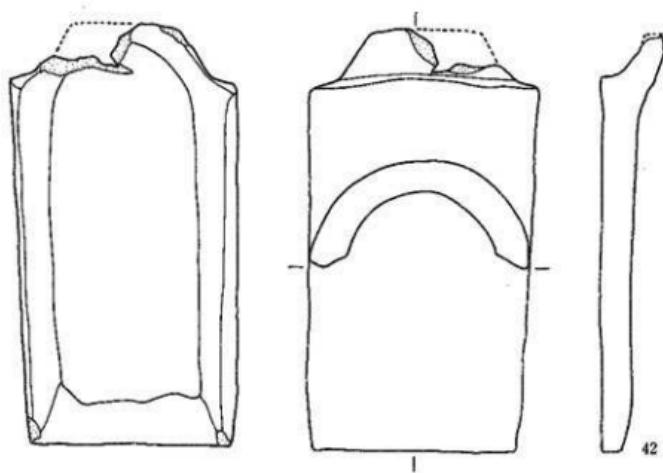
No.	地区	層	断面	斜 長	工 槌	縦 幅	横 幅	厚 増	高 底	厚 さ	重 量	単位:mm・kg	
												左	右
42	8区	IV層		263	34	144	161	76	22				
43	+	+		269	32	149	153	74	19				
44	+	+		272	33	--	150	62	19				
45	+	+		259	23	--	151	70	25				
46	+	V層		259	21	--	151	75	22				
47	+	Pt. 1		48	--	167	79	22					
48	+	IV層		288	34	--	180	78	25				
49	+	V層		269	39	166	165	77	24				
				n	24	38	10	30	26	49	2		
				max.	288	48	166	167	83	28	2.30		
				min.	255	21	140	140	62	17	2.20		
				x	265.5	32.7	149.4	155.2	73.3	22.1	2.25		
				s	8.1	6.4	7.8	7.2	5.8	2.6			

表8 第7地点出土平瓦觀察表  
Tab. 8 Notes on flat roof tiles at NM7

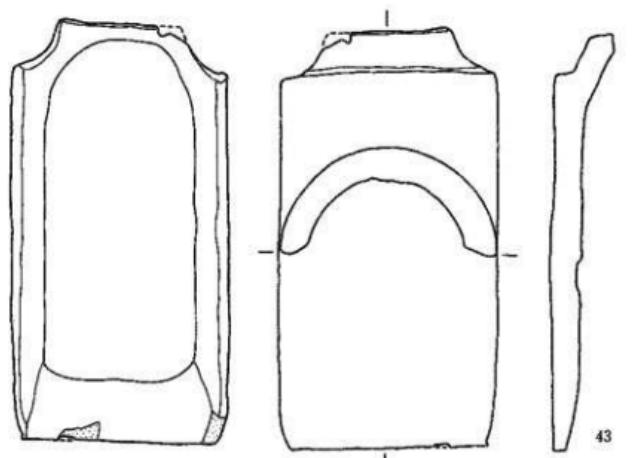
番	地区	剖面図	測定値					
			長	幅	厚	谷深	厚	重
50	8区	Pit 1 壁1	286	248	270	42	26	3.10
51	"	Pit 1	276	226	(230)	—	22	—
52	"	"	281	243	—	—	23	—
53	"	IV層	285	(235)	(234)	—	19	—
54	"	"	302	—	—	—	21	—
55	"	V層	237	299	(212)	26	18	1.67
56	"	"	(297)	(229)	(258)	35	17	—
57	"	"	277	(222)	242	27	20	—
58	"	"	266	(236)	261	—	24	—
59	"	IV層	—	—	—	—	21	—
60	"	"	—	—	—	—	22	—
n			28	8	9	4	33	2
max.			302	248	279	42	26	3.10
min.			237	299	(212)	26	15	1.67
平均			280.0	228.6	245.4	32.5	20.6	2.4
s			14.1	13.5	18.2	7.5	2.2	—

表9 第7地点出土贋斗瓦觀察表  
Tab. 9 Notes on ridge tiles at NM7

番	地区	測定値	単位:mm						
			長	幅	厚	軒先タイプ	長	幅	厚
61	8区	II層	—	160	20	1	—	—	—
62	"	IV層	242	160	20	1	—	—	—
63	"	"	244	167	19	1	—	—	—
64	"	"	243	157	20	1	—	—	—
65	10区	III層	—	156	21	1	—	—	—
66	8区	Pit 1	258	177	20	1	—	—	—
67	小湊	不規	—	155	20	2	—	—	—
n			4	13	15	—	—	—	—
max.			258	176	26	—	—	—	—
min.			242	153	19	—	—	—	—
平均			246.8	162.5	21.0	—	—	—	—
s			7.5	7.0	1.4	—	—	—	—



42

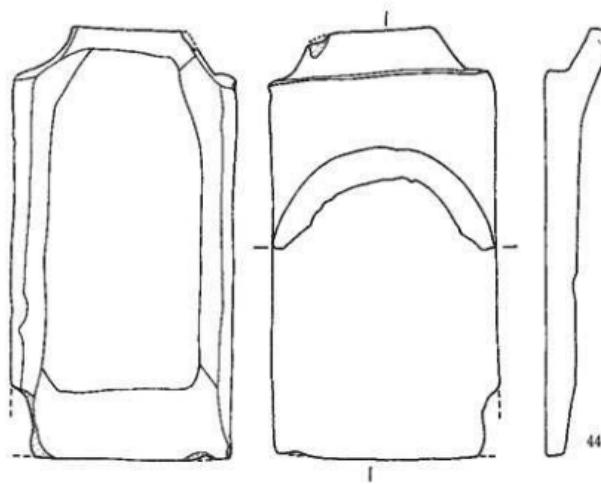


43

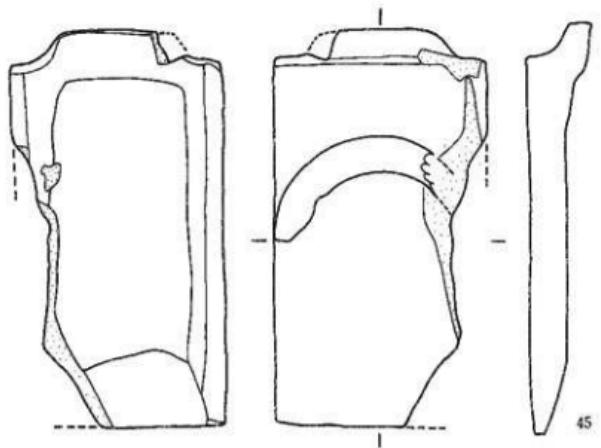


图24 第7地点出土瓦(1)  
Fig. 24 Round roof tiles from NM 7 (1)

Mid. of 19c.



44



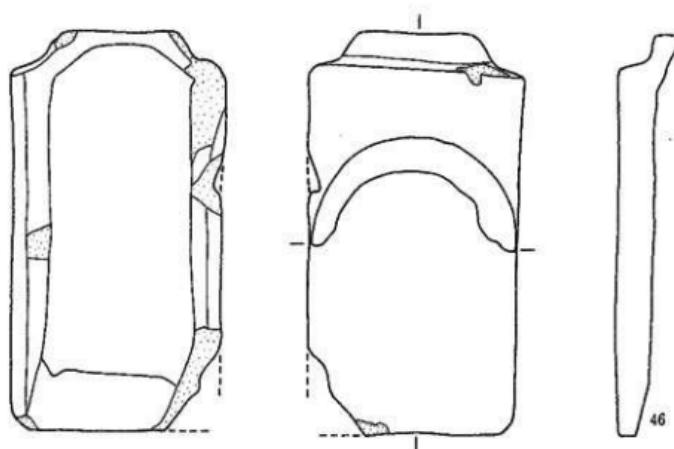
45

0 10cm

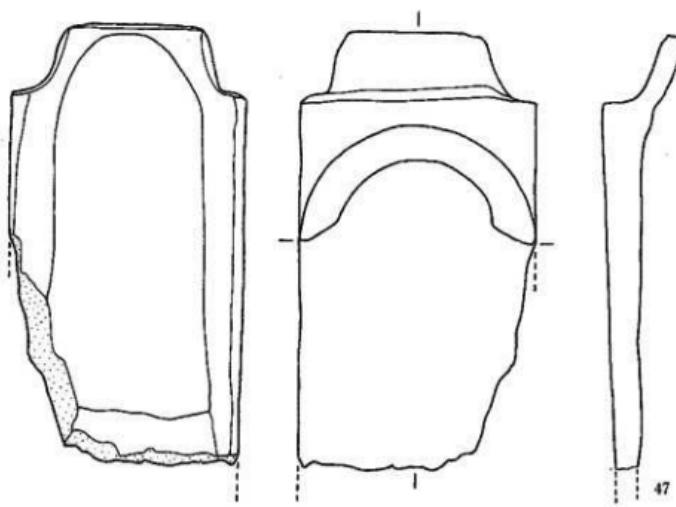
图25 第7地点出土丸瓦(2)

Fig. 25 Round roof tiles from NM 7 (2)

Mid. of 19c.



46



47



圖26 第7地點出土丸瓦(3)  
Fig. 26 Round roof tiles from NM 7 (3)

Mid. of 19c.

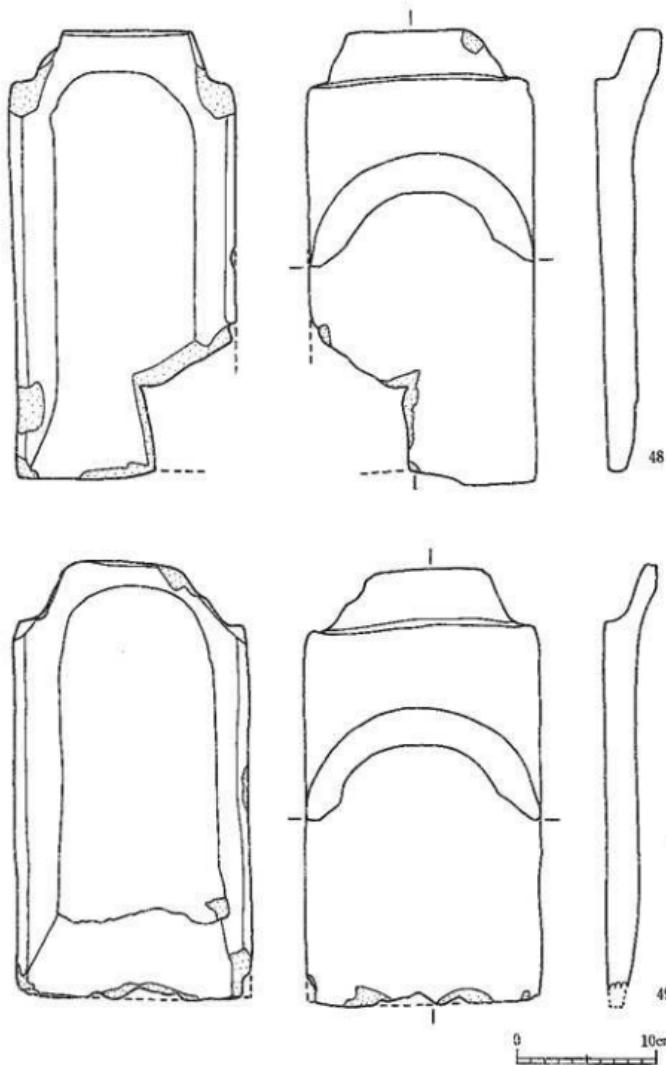


图27 第7地点出土丸瓦(4)  
Fig. 27 Round roof tiles from NM 7 (4)

Mid. of 19c.

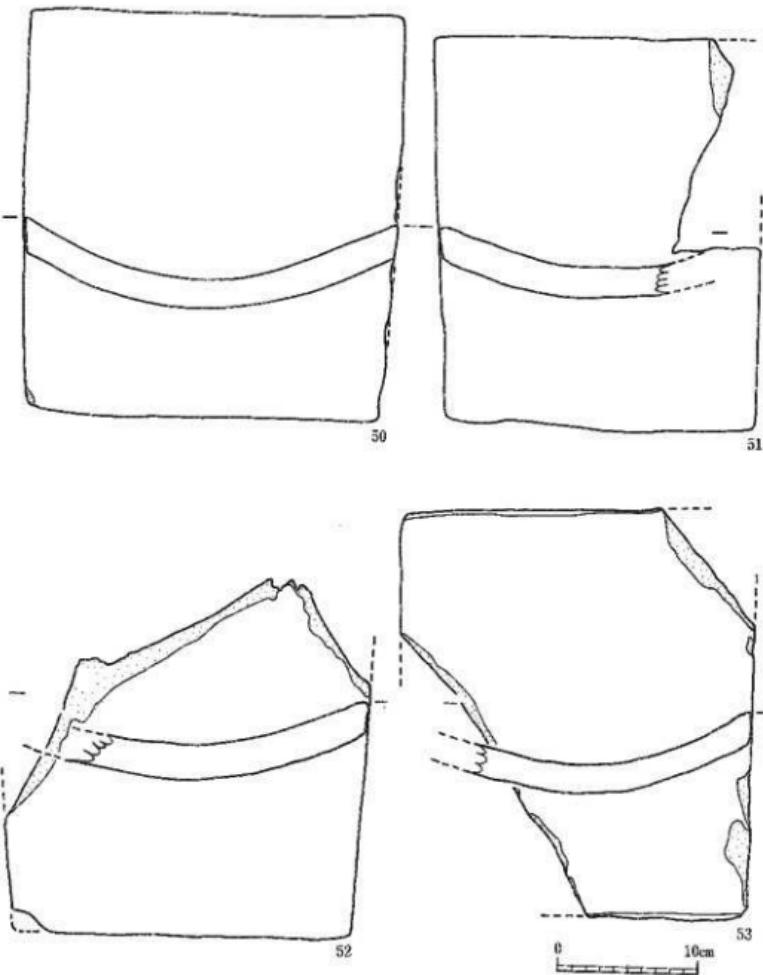


图28 第7地点出土平瓦(1)  
Fig. 28 Flat roof tiles from NM 7 (1)

Mid. of 19c.

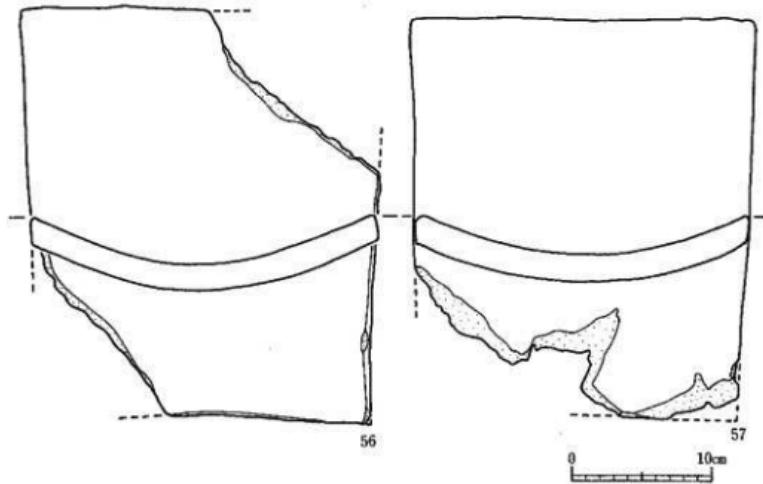
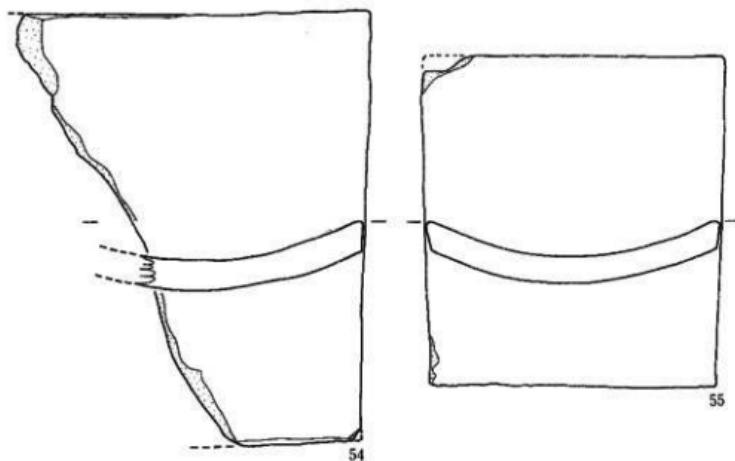


図29 第7地点出土平瓦(2)  
Fig. 29 Flat roof tiles from NM 7 (2)

Mid. of 19c.

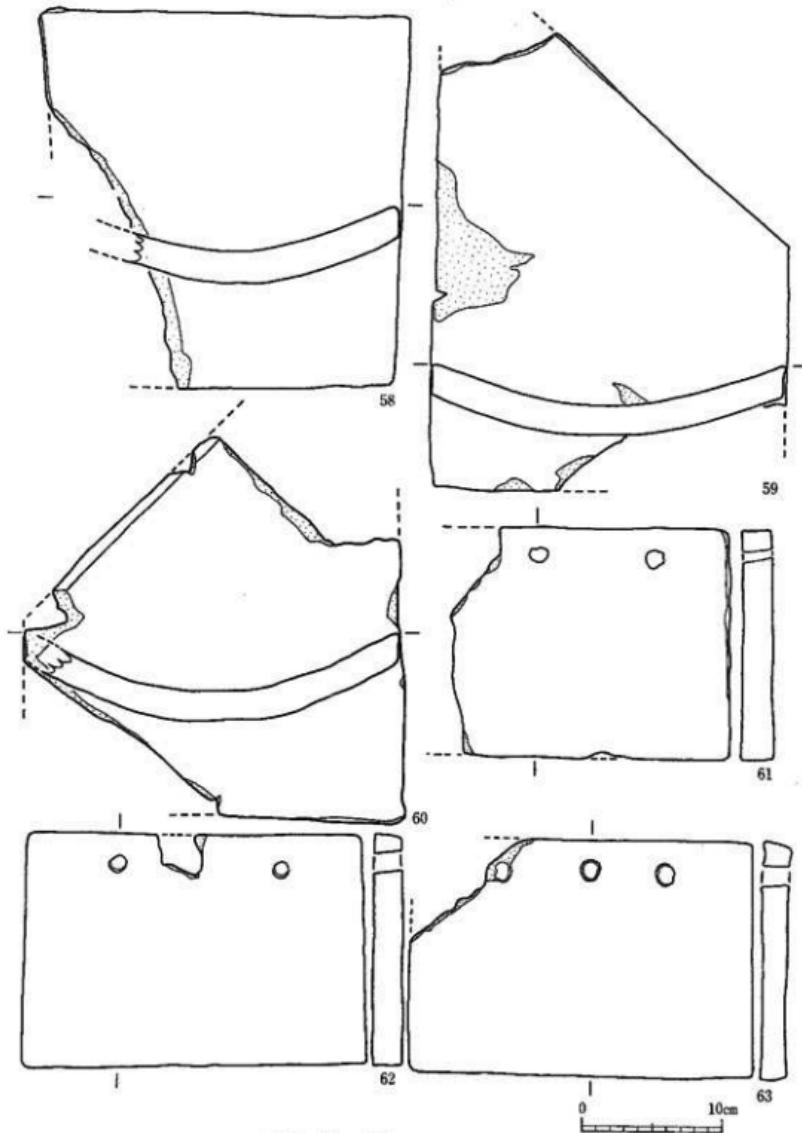


图30 第7地点出土平瓦(3)· 筋斗瓦(1)  
Fig. 30 Flat roof tiles and ridge tiles from NM 7

Mid. of 19c.

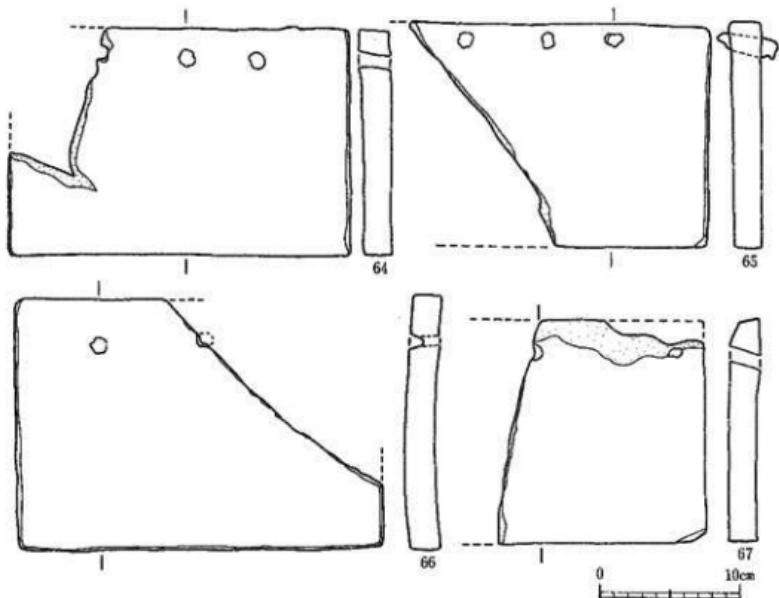


図31 第7地点出土製瓦(2)  
Fig. 31 Ridge tiles from NM 7 (2)

Mid. of 19c.

#### 輪違い (図32~34)

組棟に使う装飾瓦で、特に8区より多く出土。長さの測定可能なものを抽出資料とした。

形態：大きさの平均は長さ128mm、上幅95mm、下幅128mmで、全く同じ大きさ・形態の物は無い。側辺が内湾するものが少數ある。

製作・調整痕：表面はヘラナデ・ナデなどの痕跡があるが、丸瓦に比べ、方向が一定せず、雜である。内面は丸瓦同様にコビキ痕に布痕が重なる。内面の側辺と上辺の接する部分に面を作りだしているものとないものがある（図版18-11~13）。

#### 面戸瓦 (図35・36)

形態：平瓦を葺いた筋と大棟下部の隙間を埋める瓦である。丸瓦を輪切りにした形で、中央で二つに折れているものが多く、幅が計測可能な物は4点のみである。幅は丸瓦の幅にはほぼ合っている。長さはまちまちで、全く同じ形態のものはない。

製作・調整痕：内面は丸瓦同様、横方向のコビキに型の布痕が重なる（図版18-14）。外面は丸瓦同様の縦のヘラナデが主体だが、横のナデになっているものもある。

0 10cm

Mid of 18c.

圖 32 第 7 漢點出土輪遺(1)  
Fig. 32 Ridge decoration tiles from NM 7 (1)

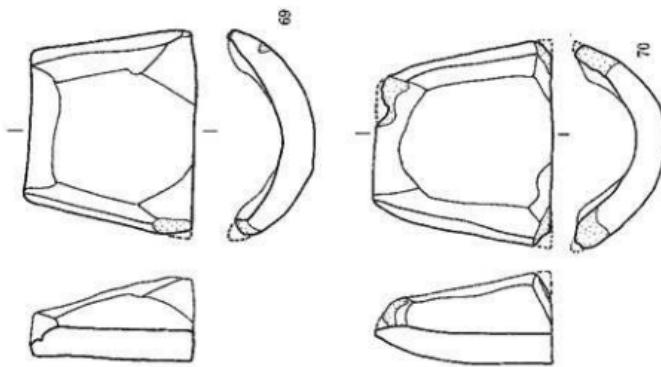
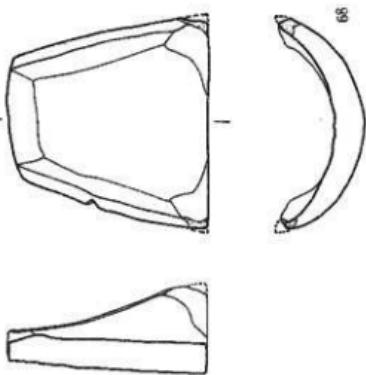


図33 第7地点出土輪遺い(2)  
Fig. 33 Ridge decoration tiles from NM 7 (2)

Mid of 19c.

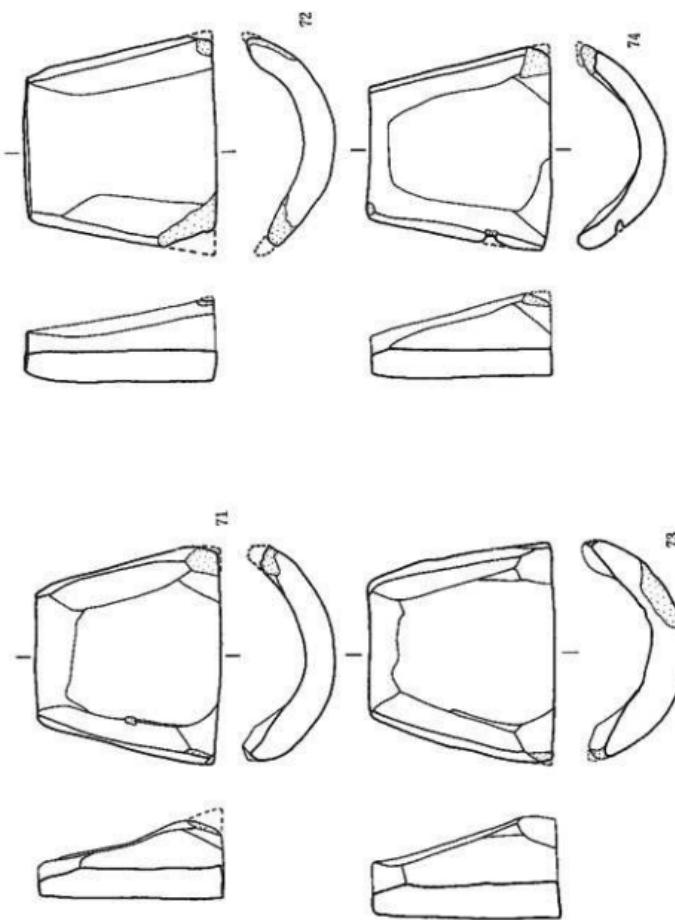
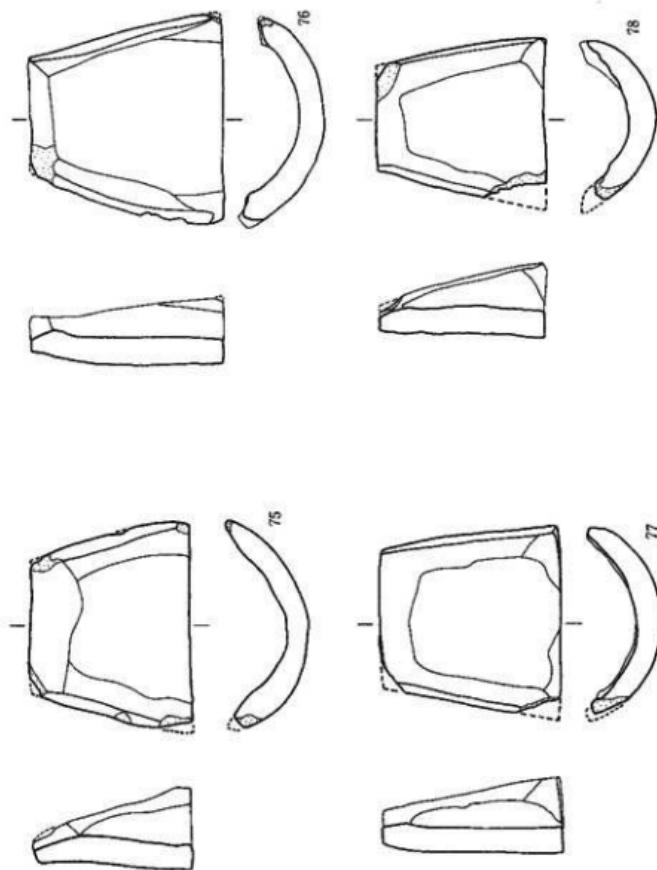
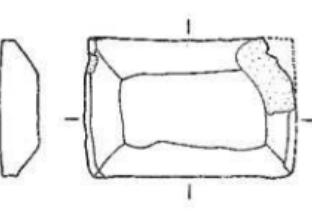
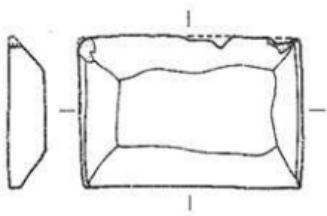
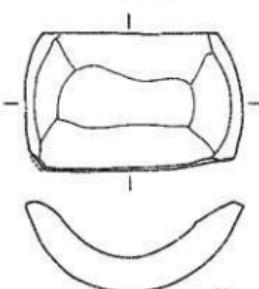
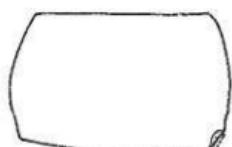
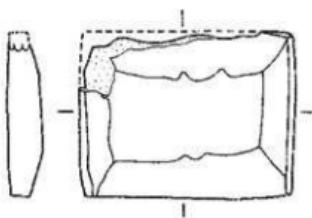
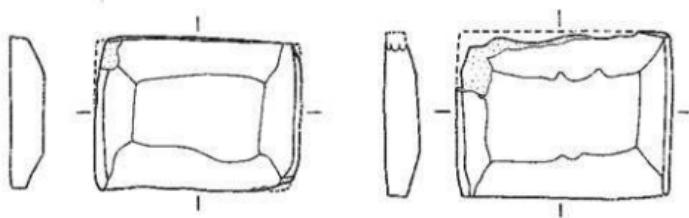


圖34 第7地點出土輪窯(3)  
Fig. 34 Ridge decoration tiles from NM 7 (3)  
Mid of 19c.





0 10cm

图35 第7地点出土面芦瓦(1)  
Fig. 35 Filler tiles from NM 7 (1)

Mid of 19c.

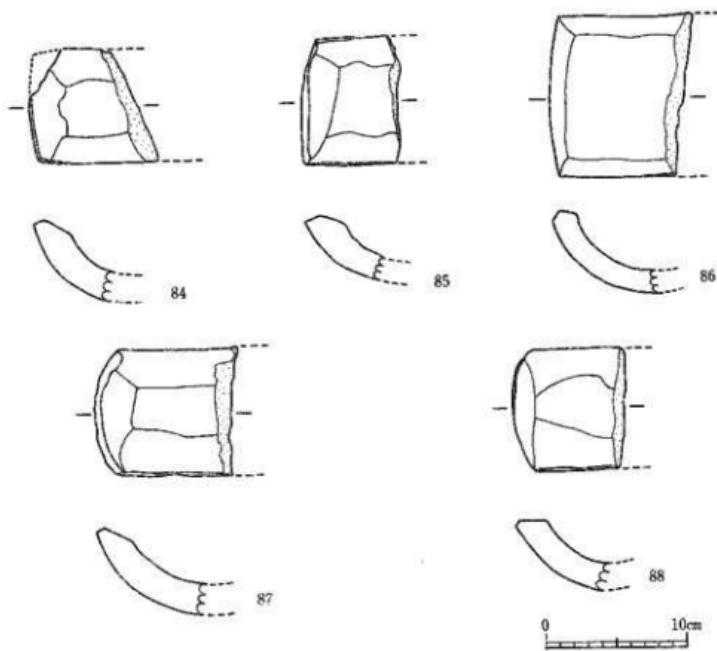


図36 第7地点出土面戸瓦(2)  
Fig. 36 Filler tiles from NM 7 (2)

Mid of 19c.

表10 第7地点出土輪塗い観察表  
Tab. 10 Notes on ridge decoration tiles at NM7

品番	出土地点	形	上	下	側	側	裏	厚
68	8.1c IV型	137	85	151	—	77		
69	+	139	108	147	—	23		
70	+	179	—	146	—	23		
71	+	V型	177	95	156	56	23	
72	+	123	103	158	—	22		
73	9.1c V型	131	—	159	—	25		
74	8.1c H型	126	96	146	—	20		
75	+	IV型	132	—	154	—	17	
76	+	+	140	—	145	48	19	
77	+	+	127	—	140	—	17	
78	+	+	119	—	114	—	19	
n		84	19	22	17	43		
max.		149	105	160	70	26		
min.		101	80	114	(51)	10		
x		128.4	96.2	149.0	56.2	20.9		
s		8.4	8.2	9.3	7.0	2.8		

表11 第7地点出土面戸瓦観察表  
Tab. 11 Notes on filler tiles at NM7

品番	出土地点	形	上	下	側	裏	厚
79	8.1c IV型	106	148	53	24	0.59	
80	+	—	115	129	61	23	
81	+	1.5型	91	122	31	25	0.56
82	+	IV型	106	161	71	26	0.73
83	10.1c V型	96	132	56	28		
84	8.1c IV型	79	—	—	18		
85	+	—	90	—	—	26	
86	2.2c 2型	118	—	—	18		
87	8.1c IV型	89	—	—	22		
88	4.1c 深V型	86	—	—	20		
n		12	3	5	23	3	
max.		118	161	71	28	0.73	
min.		79	148	93	16	0.56	
x		99.3	154.0	56.4	22.2	0.62	
s		11.6	5.1	8.0	2.7	0.1	

### 伏間瓦（冠瓦）（図37-89～93）

棟の上に乗せる瓦である。完形品が無いので、破片から全体を推定する。類例は元興寺（1982、図版21）に見られる。

形態：尻部（89、90）に玉縁形の小さな突起状の接続部と頭部（91、92）にそれを受ける浅い凹みを持つ。胴部は丸瓦状に湾曲するが、湾曲度が小さく、内面に丸瓦のような布痕が無い。そのため胴部破片は平瓦類に分類されがちだが、凸面側が丁寧に調整され、側端の切り方が、より鋭角になっていることにより、平瓦と区別される。胴部中央の稜線上に釘穴を持つ破片もある。

製作・調整痕：胴部表面は丸瓦同様、尻頭両端が横方向のナデの他は縦方向のナデである。裏面は突起部とそれを受けた凹みにナデが付る外は、顕著な調整は見られない。

この形の瓦は二の丸初出で、かつすべて細片のため、最初の大別時には完全に識別できず、「その他」の項目にかかったものを基に、同じ地区から出土した「平瓦類」と「不明瓦類」を再検討し、4区溝埋土1層より27点、2区3層より7点の破片を検出した。この瓦は表4においては分けられていない。

### その他の道具瓦（図37-94・95）

使用法は不明。仙台城では二の丸第6地点で1点（東北大学埋蔵文化財調査委員会 1990 p. 37）、三の丸で4点（結城 1985 pp. 177、315）出土している。

### 飾瓦（図38-96・97）

中空の球状の瓦で10区III層、11区VII層より各1個体破片が出土。全体の形は不明だが、推定直径は122mmと134mm。留蓋にしては径が小さい。

### その他（図38-99）

滑り止めの筋目をつけた瓦で、平瓦もしくは棟瓦と見られる。第4・第8地点でも確認されているが、細片のためいずれか不明である。

## C. 金属製品

種類が判別できるものは、釘、かすがい、ボタン、キセルが主である（表12）。ほとんどが細片もしくは腐食の著しい物で、計測・図示できない。釘については、8・9区でIV層までは西洋釘が確実に含まれている。ボタンは、第2地点に類例がある（東北大学埋蔵文化財調査委員会 1985 p. 99）。表面と裏面をつなぎ合わせた真鍮製の中空のもので、陸軍の軍服のものであろう（図38-101）。

## D. その他の遺物

硯の破片2点が出土している。そのうち1点は側面を印に転用したらしい。彫られた字は「羽田印」だろうか。表にも彫りかけて失敗した字が残っている（図38-100）。また、江戸時代～明治時代の整地・客土層から縄文時代以前と考えられる石器3点（メノウ製ビエス・エスキュー、

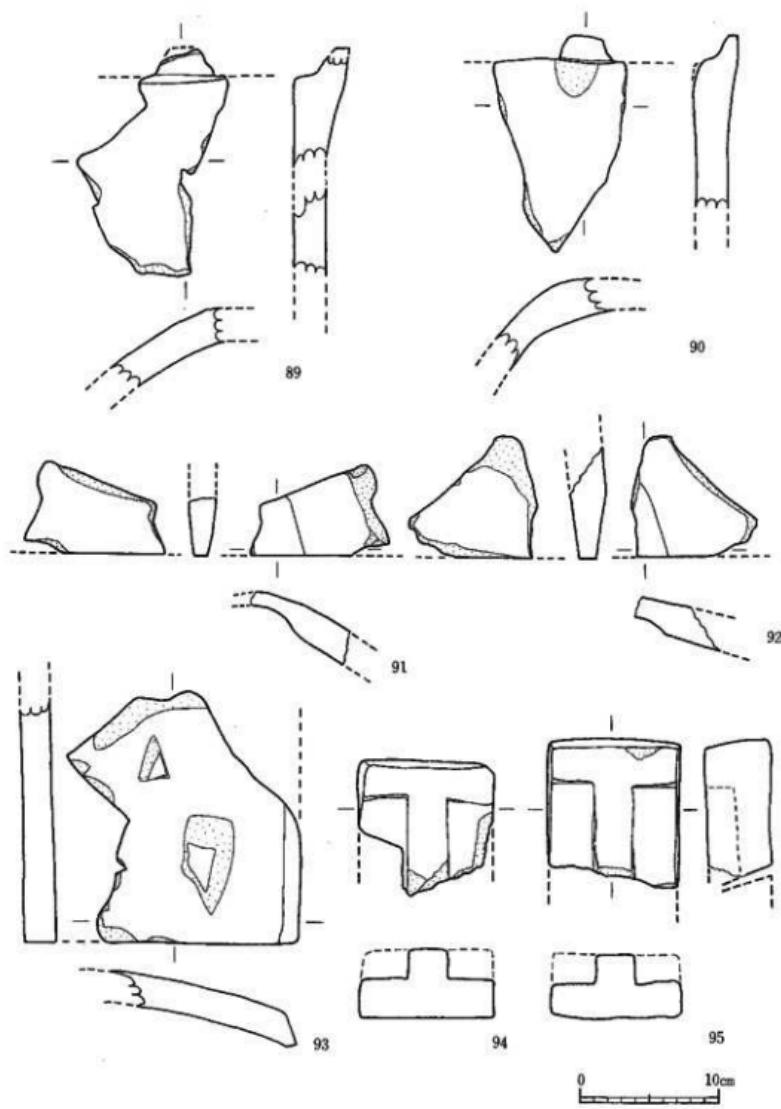


图37 第7地点出土伏筒瓦·道具瓦  
Fig. 37 Various roof tiles from NM 7

Mid of 19c.

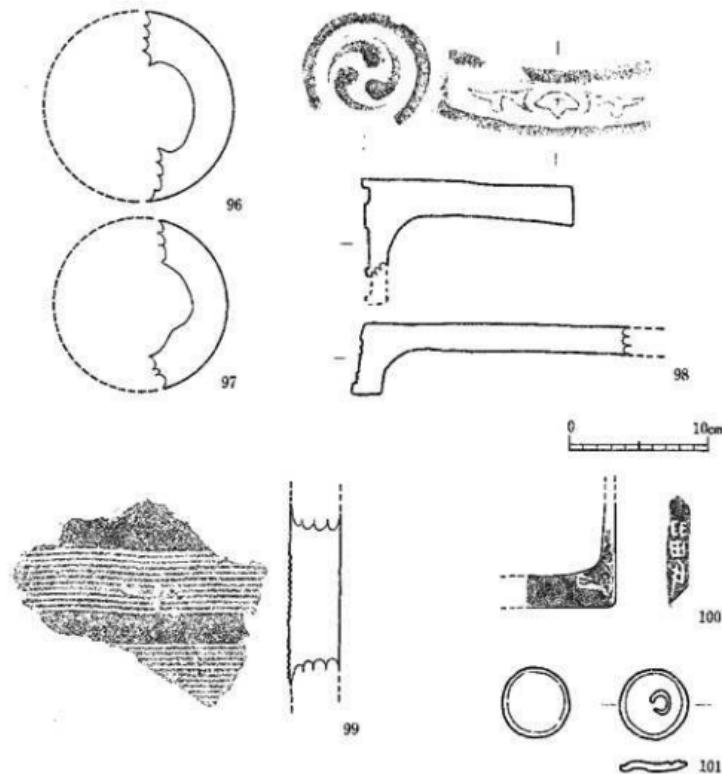


図38 第7地点出土棟瓦・装飾瓦・その他の遺物  
Fig. 38 Various roof tiles and other implements from NM 7  
Mid. of 19c.

チャート製微細割離痕ある剥片、チャート製碎片各1点)が出土している。

(山田しょう)

図	種類	地区	層・遺構	図	種類	地区	層・遺構
89	伏聞瓦	G 4	第1埋1	96	装飾瓦	G 10	III 層
90	〃	〃	〃	97	〃	G 11	IV 層
91	〃	〃	〃	98	軒棟瓦	不明	不明
92	〃	〃	〃	99	筋目付瓦	G 11	III 層
93	〃	〃	〃	100	印	G 8	V 層
94	道具瓦	G 10	II 層	101	銅製ボタン	G 11	IV 層
95	〃	G	不明				

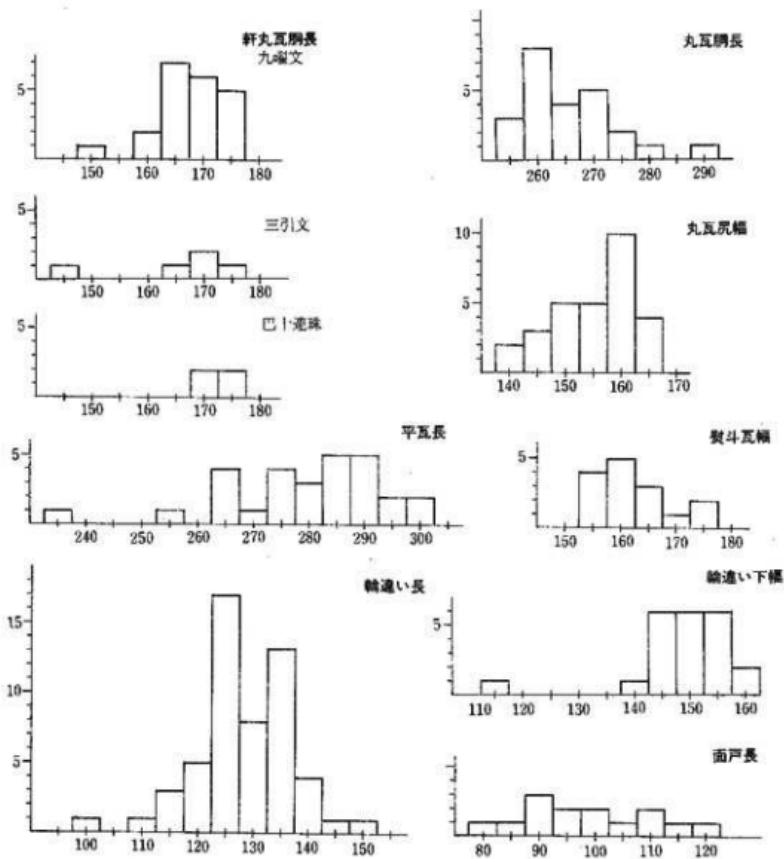


図39 瓦の計測値  
Fig. 39 Histograms of roof tile sizes from NM 7

単位 mm

表12 第7地点出土その他の遺物集計表

Tab. 12 Distribution of various implements at NM 7

地 次	層・造構	ガラス		金 属			不明	現		
		板	容器	鉄釘						
				洋	和	不明				
1区	I 層		1				兩種支え 1			
*	2 層							1		
2区	2 層	1	2							
*	3 層						キセル 1			
3区	1 层	2	1		3					
4区	1 层				3					
5区	1 层			1						
6区	1 层				1					
7区	1 层	4	24		10			3		
*	2 层		3			1				
*	3 层		1	14	10			2		
*	pit		1	1						
8区	III 层	39	3	8	18	鍵 1		8		
*	IV 层			8	1	28	中空ボタン(銅) 2	4		
*	V 层		1		2	15	キセル(銅) 1	5		
*	VI 层						弾丸(銅) 1			
*	溝埋土II				1					
*	2層上溝埋土	3	1	4	2					
*	不 明							1		
9区	I 层		3	6	13			2		
*	III 层		2	11	1	3		3		
*	IV 层		1		4	2		1		
*	カタラン				3					
10区	I 层					木製品のフタ(鉛) 1				
*	II 层		1		2	中空ボタン(銅) 1		2		
*	III 层							1		
*	IV 层	1	1		1	4	兩種支え 1 中空ボタン 1			
*	V 层				1	7				
11区	I 层		9					1		
*	III 层				5					
*	IV 层				1	中空ボタン(鉛) 1		1		
*	VII 层				1			1		
*	IX 层				1					
12区	I 层	1						1		
F	I 层							1		
不明	不 明		1		11	3				

### 3. 二の丸跡第8次調査地点（NM8）の調査

#### (1) 調査地点の位置

第8地点は、川内から青葉山地区へと至る現在の扇坂の緩く上る坂の途中にあり、教養部構内の南側に位置する。扇坂面からは2~3m、石垣によって囲まれた一段高い位置にある。

この地点は、江戸初期には、五郎八姫の「西屋敷」北端の「ため池」から侍屋敷付近にあたる。のちに西屋敷が南隣の二の丸に取り込まれて以降も、やはり二の丸北端の、堀・池がおかれていた場所から北側の侍屋敷にかけての付近にあたるとみられる。現地形を見ると、もともとは西側の青葉山から東へ下る自然の沢が流れしており、藩政時代には、この地形を利用して外郭の堀や池を造成したようである。この名残である沢が今でも扇坂のすぐ南側を流れている。

#### (2) 調査にいたる経緯

教養部文系教育棟の西側の3m程石垣で高く区画された平坦面に、教養部教育棟新設の計画が出された。当区域は地形からみてかなり厚く盛土がなされている可能性があり、遺構の遺存も良好であろうと考えられたため、当初から建設予定の全域を対象とした本調査を行うことにした。江戸時代以前の遺構・遺物の存在も予想されたので、約2ヶ月間の調査期間を設定し、6月から調査に着手した。

#### (3) 調査方法と調査経過

建物予定区域にそれぞれ余掘り2mずつを加えて、計355m<sup>2</sup>の調査を行った。

調査区の東側には、機能中の高温水配管が南北方向に通っていたため、この区域はとりあえず調査からは除外した。建物の軸に合わせ、調査区を設定した。グリッドは4m×4mである。西から東へA~F区、北から南へ1~6区と区分し、グリッドは、A-1区、B-1区などと呼称した。

大学、米軍時代の盛土は重機によって排除し、その後、明治以降の築城時代と推定された面から精査を始めた。調査区の南側には堀、北側には道路面が検出されたが、この時代にも50~60cmの砂礫の盛土を行っていることが判明したので、これ以下の掘り下げは限定して進め、下層の状況に応じて調査面積を拡張することにした。

調査が進むにつれ、堀からの湧水が激しく、限られた範囲での調査にならざるをえなかった。8月5日には、豪雨に見舞われ、一部区域が崩れてしまい、地層断面図の作成ができなくなってしまった区域もある。

一部区域は地山面まで掘り下げ、さらに2m×3mの範囲を疊層まで掘り下げて、より下層の堆積状況を把握した。調査期間は、6月2日~8月9日の約2ヶ月間である。

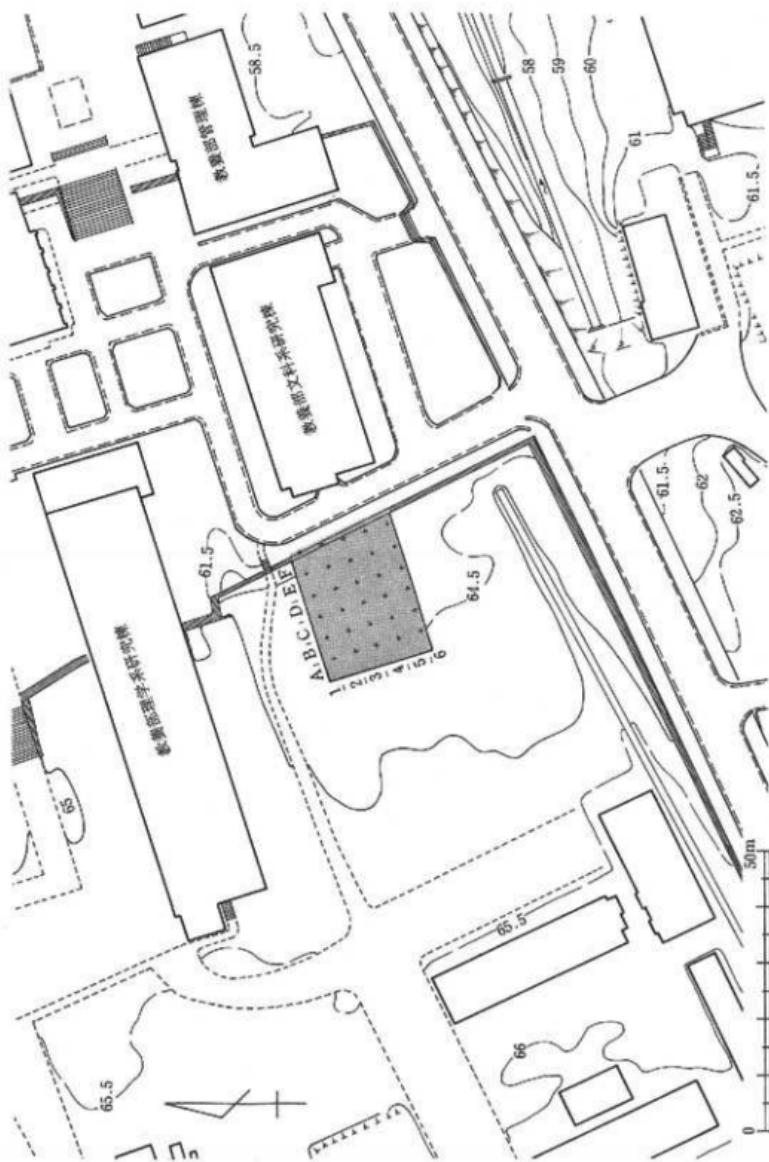


図40 ニの丸第8調査地点調査区の位置  
 Fig. 40 Location of excavation at NM 8  
 NM8 i.e. Location 8 of Ninomaru (Secondary Citadel)

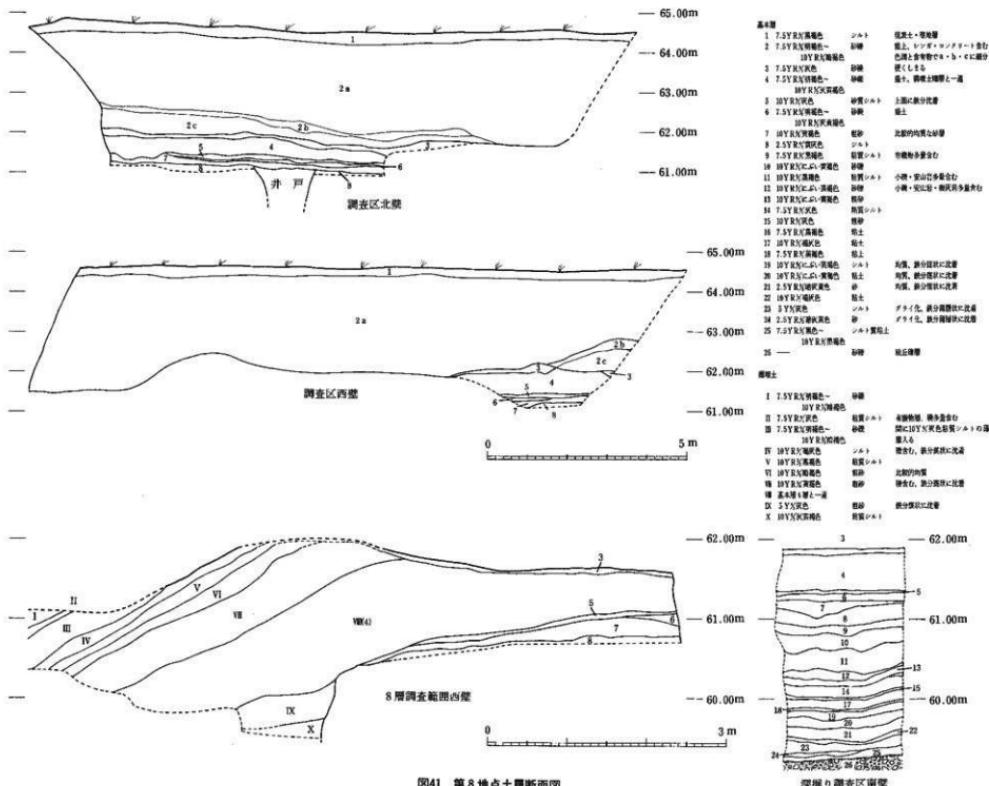


図41 第8地点土層断面図  
Fig.41 Cross sections at NM 8

#### (4) 層序

基本層序は、図41に示したようになる。1～2層は現代～戦後の米軍時代、3層・5層が明治以降～戦前の第二節団時代、8層が江戸時代の生活面と推定される。9層以下は自然堆積層で、砂やシルト～粘土の水性堆積物から構成される。26層が礫層である。

#### (5) 遺構と遺物

##### ① 遺構

###### A. 江戸時代（8層面検出遺構）

8層面まで掘り下げたのは部分的であったが、調査区の南側では東西方向の堀、北側では南北方向の溝、井戸、ピットを確認した。

###### 堀

B-4区で部分的に堀の肩を検出した。他区ではこの堀の続きを確認していないが、3層・5層などの上層では、3列と4列の境付近で東西方向の堀の肩を確認しているので、8層検出の堀も3列と4列を境にした東西方向の堀とみてまちがいないだろう。堀は、湧水が激しく、砂礫盛土の崩壊も頻繁に生じたため、埋土の掘り下げは、堀際約70cmの深さでストップした。埋土IX層の一部～X層が、8層生活面時の堆積層と推定される。これらは砂～粘質シルト水性堆積層で、顕著な有機物層は確認されなかった。なお、この堀には、石垣あるいは塀などによる護岸施設は認められなかった。

###### 溝

調査区東側のE・F-2・3区で南北方向の溝が1条検出されている。幅約100cm、深さが約20～30cmである。おそらく、南側の堀へ続いているものと推定される。細砂～シルトの埋土からは、遺物の出土はない。

###### 井戸

調査区北側の壁際で検出された。計約180cmの円形の素掘り井戸である。南側に梢円形の浅いピットが附属する。周囲には他にピットなどの遺構は確認されていない。井戸は、120cm程掘り下げてストップした。遺物は、出土していない。

###### ピット

B-3区の堀際及び井戸の南側に梢円形のものが計4基確認されている。ピット1と3は、形態的に類似し、間尺も約180cmなので、堀際の柱柱跡の可能性がある。ただし、これらのピットの深さは約20cmで、柱痕跡は確認されていない。

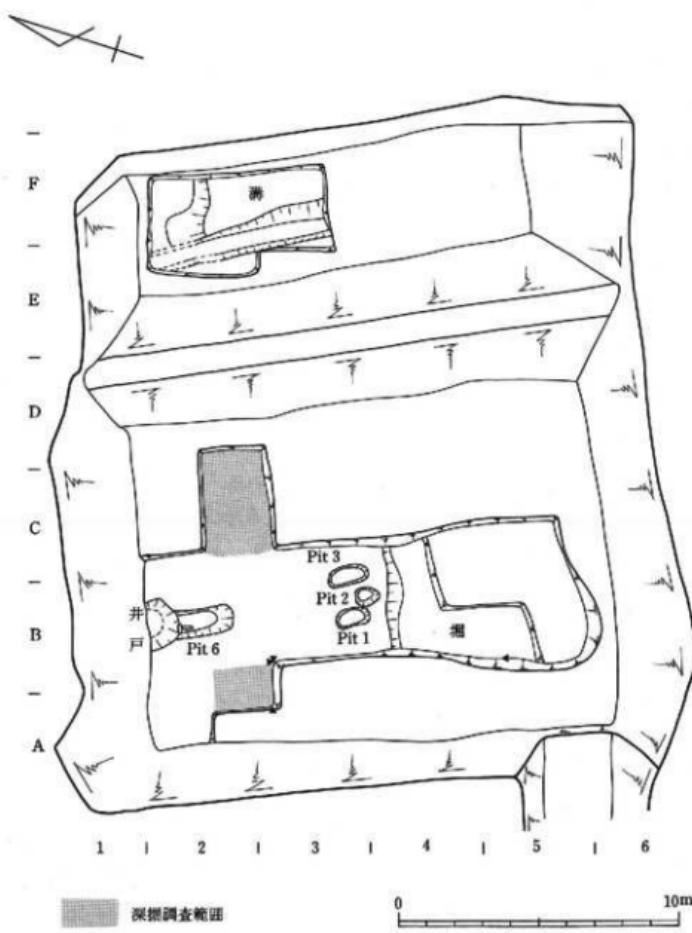


図42 第8地点平面図（8層上面）

Fig. 42 Plan of NM 8 (on stratum 8)

Edo period

## B. 明治（第二師団）以降

### a : 5層検出遺構

5層は、7層の砂シルトの水性堆積層および6層の砂礫盛土層の上部が起源になっているようである。上面は比較的硬く締まっており、上層の4層砂礫盛土とは明確に区別され、一時的に生活面であったことを伺わせる。この5層面も部分的な掘り下げであったが、南側では堀、北側の平坦面では性格不明の落ち込み1基、木棟を検出している。

#### 堀

8層の堀に対応してやはり堀が検出されている。堀の肩のラインは、ほぼ8層検出の堀と変化がないと思われる。埋土はIX層の一部が対応するであろう。

#### 木棟

調査区北東部の5層面がやや北側に傾斜するE・F-2区で検出された。幅約30cm、深さは約12cmである。底部板と側板の接合部には丸釘を使用している。脆弱で土圧によって変形していた。

#### ピット

C-2・3区に計約4m程の円形状の浅い落ち込みがある。当初、8層面で確認したが、その後堆積層の検討から5層面に帰属する遺構であることが判明した。

深さは約20cm程で、埋め土は非常に軟質のグライ化した砂質シルト層である。遺物の出土はない。

### b : 3層検出遺構

この面で確認された遺構は、南側の堀と北側の道路とみられる硬く締まった砂礫層の面のみである。3層面は、5層上面に約50~130cmの厚さの砂礫の盛土をして形成された生活面である。

#### 堀

8層、5層の堀に対応する。堀の傾斜面のC・D-5区には、木の根の抜根跡とみられる計5m程のピットがある。3層面に対応する溝埋土V層は、水性植物の繁茂していた様子をとどめ、有機物を多量に含んだ堆積層であった。B-4区の堀の斜面では、陶磁器が一括して投棄されていた。また、魚骨、種子なども多く含まれていた。

#### 道路跡

堀の北側は、堀と平行して、砂利層が硬く締まった平坦面であった。堀とこの平坦面の境は、小高く盛り上がっていた。平坦面からは他に遺構は検出されていない。こうした状況から、この平坦面は道路跡と推定した。

(佐久間光平)

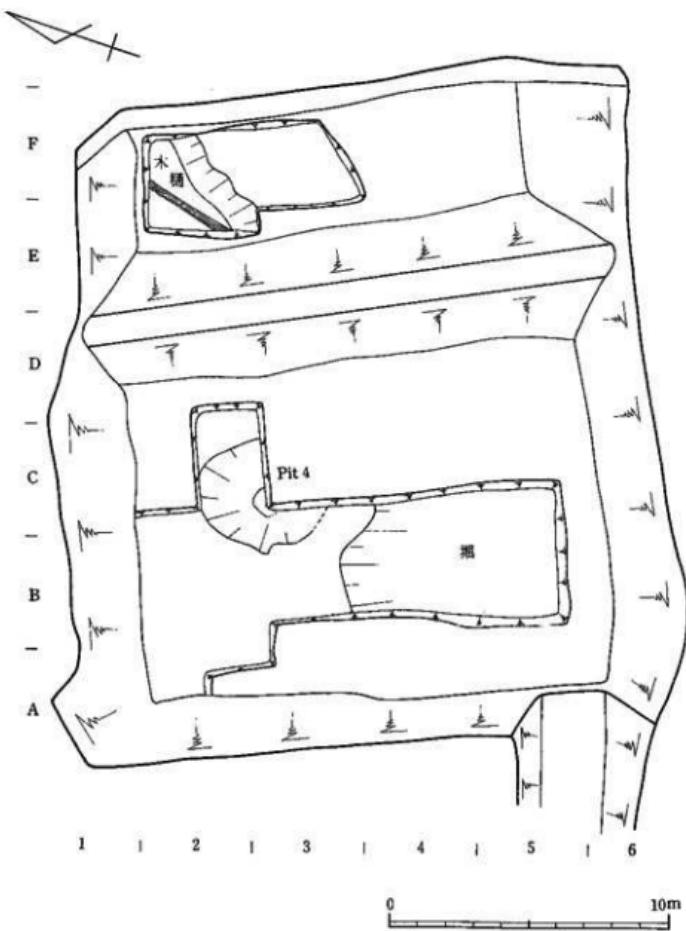


図43 第8地点平面図（5層上面）

Fig. 43 Plan of NM 8 (on stratum 5)

*Meiji period*

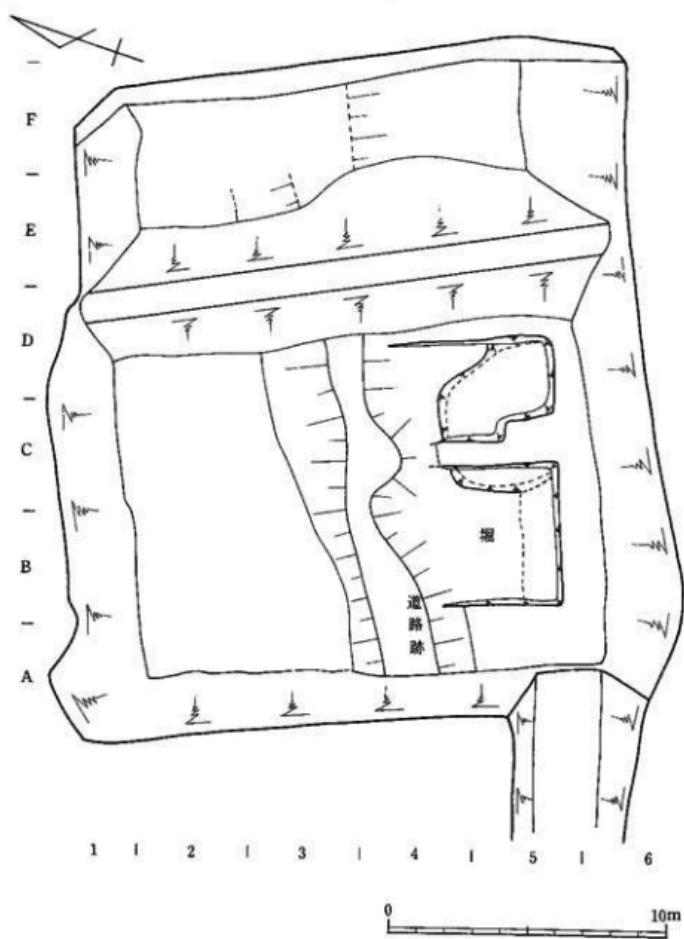


図44 第8地点平面図（3層上面）  
Fig. 44 Plan of NM 8 (on stratum 3)

Meiji period

## ② 遺物

当地点出土遺物の種類・数量は表13・16・17に示した。陶磁器を中心に、瓦・ガラス製品・石製品など、多様な遺物が出土しているが、それらのはほとんどは3層・5層面の明治以降のもので、江戸時代の遺物はきわめて少ない。

### A. 陶磁器

接合作業後の総破片数は2137点を数える。特徴の不明な細片も多く、また磁器の碗・皿には、同じ形態・文様のものが多く含まれる。磁器、陶器の他、堤産と思われる瓦器なども出土しているが數は少ない。出土状況は、B 3・4・5層に集中し、3・4・5層及び堀埋土IV・V層

表13 第8地点出土陶磁器集計表  
Tab. 13 Distribution of ceramics at NM 8

出土地点	出土遺物	層										層										近 縁	瓦 質	土 器 質	合計		
		底			腹			側				底			腹			側									
		底 成 形	底 瓦 質	底 焼 成	腹 底 成 形	腹 瓦 質	腹 焼 成	側 底 成 形	側 瓦 質	側 焼 成	底 成 形	底 瓦 質	底 焼 成	腹 底 成 形	腹 瓦 質	腹 焼 成	側 底 成 形	側 瓦 質	側 焼 成								
1層																									9		
2層	3																								5		
2・3層	1																								2		
3層	10	3	1	2	1	直3 灰吹1 火入3 不規10	8	1	2	1	2	3	3	火入1 4-4切3	花瓶2 火入6 油鉢25	近縁1 △明1	瓦質1 △明3	泥質1 △明3	229								
4層	2			1		算1 不規10					2		1		近縁1		鉢質1 △明1	瓦質1 △明1	23								
5層	22	2	35	1	△明11	4		2	1	1							△明1	瓦質16 △明16	96								
6層	13	15						2		2														18			
7層				2		△明6	1	3	1		1													15			
8層								2																2			
堀埋土I層	19					算1	1	3		1	1			大3,1		近縁3 △明2	瓦質2 △明2	23									
堀埋土II層						2		1	1	2														6			
堀埋土III層	1					小3			2					△明9		鉢質1									16		
堀埋土IV層	26	1	42	6	直1 △明61	1	1	6	2	2	1	1	1		油鉢10 △明1	鉢質3 △明2	瓦質3 △明2	271									
堀埋土IV・V層					6	△明34										大3,2									42		
堀埋土V層	348	5	663	8	22	4 底1 △明309	1	5			161	1	1	近縁1 △明23	一張1 △明11	近縁2 △明7	瓦質2 △明7	1370									
馬蹄+錐形								2																	3		
馬蹄+錐形									3																4		
馬蹄+錐形	1	1		3		1			1																8		
馬蹄上不規								1	1																2		
大錐形+										1															1		
ビーム+4層上1層									3																1		
4層	1		1	6		火入1 △明2	1					1		豆皿1	鉢質6 △明6	瓦質1	瓦質1	94									
合計	436	10	4	9545	16	31	15	653	20	13	16	21	3	6	9	168	2	5	49	67	11	46	2137				

から多く出土している。特に堀埋土V層に集中する。時期的には、幕末から明治以降のものが大半で、東北産磁器や大堀柏馬製品が多く含まれる。堀埋土V・VI・IX層では陶器・磁器とともに出土量は少なく、肥前・美濃瀬戸産が多い。大きく見ると、基本層8層と堀埋土IX層から下層では、江戸期のものに限定され、それより上層では、明治以降の資料が大半を占める。基本層3層面（堀埋土V層）と基本層5層面の資料では、平清水産の飯茶碗や型打の皿など共通するものが多く見られ、しかもこれらの資料が、いずれでも主体を占めている。但し、摺絵および銅版印刷のものは、5層では見られず、3層（堀埋土V層）以上で出土する。摺絵や銅版印刷のものは、堀埋土IV層から上の層に多く含まれてくる。

#### 磁器

1～44は、堀埋土出土のものである。1はコバルト染付による小型碗。2は口縁内部に繫葉文が施される飯茶碗。3は外面青磁釉の飯茶碗で、18世紀の肥前産。

4～10はIV層出土で、銅版印刷など明治後期からの物が多くみられる。4は窓絵の草花文が銅版印刷で施される、明治後期以降のものである。5は面取りされた飯茶碗の蓋で、高台裏に「玉風亭稻山製」の銘が入る。6は銅版印刷で菊花文が施される小型の火入。7は圓印文を施した小型の碗。8～10はいずれも摺絵が施された型打ちの輪花皿で、蛇の目高台を持つ。産地は特定できないが、胎土がかなり粗いものもあり東北産の可能性があるものも含まれる。

11～42は堀埋土V層出土で、明治期を中心とする製品である。11は型抜きの水滴で、菊花文の周囲にコバルトで染付がなされている。12は詩文が施された面取りの盃で平清水産。13は詩文が施された面取りの小型碗。14は銅版印刷の菊桐文に、白泥で縁どりを施す鉢。15は単純化された松竹梅をコバルトで見込みに施した小鉢。16は見込みに朝顔が描かれた輪花皿で平清水産か。17～19は青磁釉に上絵付がなされるもので、明治期に平清水で類似品が生産されているが、同産のものとは断定できない。17は緑・茶・白・赤の上絵付で牡丹と藤文が描かれ、白と赤は盛り上がった状態になっている。18は黒・茶の上絵付で花鳥文が施されている。19は緑・黒で雁と草花文が摺絵で施され、白と赤で彩色されている。20はコバルトで草花に鳥文が施される。21は見込みに円状の荒巻文が刻文され、その上から濃いコバルトによって染付がなされる。22はコバルトによる染付で、高台径の小さい蛇の目高台を持つ。今回の調査では、同種のものが最も多くまとめて出土している。23～25は類似した蓋付の飯茶碗で、24・25はセットとなると思われる。細かい筆描きで雀、昆虫文が描かれており、瀬戸製品かと思われる。26・27はコバルトの摺絵による飯茶碗。28・29はコバルトによる線描きの飯茶碗で、口縁内部に文様番がはいる。30・31は濃いコバルトで縦縞の中にそれぞれ繫葉文、雲葉文を描く。32～41はコバルトによる染付で、文様の崩れたものが多く、明治の平清水産。42は紅入れで、口縁無釉部に紅が付着して残る。

43・44は堀埋土IX層出土のもの。43は型打ちの皿で、17世紀後半の肥前産。44は18世紀の肥前産のくらわんか碗である。

45～62は、基本層出土のものである。

46～53は、3層出土。46は土瓶か急須の蓋で、同様のものが明治の会津本郷で大量に作られている。47は桐文の灰吹で、呉須はかなり渦ったものが使われている。48の小型碗は、濃い盛り上がったコバルトで染付がなされている。49は青海波文に肩が染付された肥前産。50はコバルト染付によるもので、堀埋土V層出土の平清水産と同様のものである。51は糀東に雀文のやや人振りの飯茶碗である。52は銅版印刷で唐草文が施された飯茶碗。53は3層出土の連弁口縁の鉢で、17世紀後半から18世紀の肥前産。

55～61は、5層出土のものである。55は竹網を施したような胴部を持つ駒肌釉の湯呑で、明治期の会津本郷で同様の釉薬のものが多く作られている。56は堀埋土V層で出土した皿（図48-21）と同類のもの。57は端反が強い、唐草文の飯茶碗である。58～62はコバルトによる染付で、明治期の平清水産と思われるもの。これらは、堀埋土V層と基本層の3層出土の平清水産の飯茶碗と同類のものである。そのうち、62はコバルトによる染付に加えて、緑釉で松葉文が描かれる。

#### 陶器

63～79は、堀埋土出土のものである。

63～66は堀埋土I層出土。63は鉄釉が施された秉燭で、19世紀の大堀相馬産。64・65は三島手、66は刷毛目の唐津産である。

67～69は堀埋土II層出土。67は緑釉に雲龍文の貼付が施された瓶掛。68は豆甕で、胴部まで鉄釉が施されている。69は糠白釉の鉢で、口縁部が波状にされている。

70～74は堀埋土IV層出土。70は胴筒形の徳利で、灰釉を施した上に、首部から肩部にかけて鉄釉が浸掛られている。71は縁折れの灰釉小皿で、16世紀後半の瀬戸・美濃産。72の豆甕は、底面に墨書がみられる。73は土瓶の山蓋で、糠白釉が施される。摘みの装饰、穴は見られない。74は青釉の皿で見込みに蛇ノ目釉剥ぎが見られる。

75・76は堀埋土V層出土。75は鉄釉の灯明皿で大堀相馬産。76は灰釉が施された安心形土瓶と呼ばれるものである。

77は堀埋土V層出土で、IV層出土の青釉の皿と同様のものである。78は堀埋土V層出土の焼締めの擂鉢。79はIX層出土の鉄絵の鉢で唐草文が施される。

80～88は、基本層出土のものである。80は大堀相馬の大皿で糠白釉が施される。

81・82は3層出土。81は灰釉の小型碗で大堀相馬産。82は白化粧され、コバルトで繪絵が施された火入。明治から大正の平清水製品。

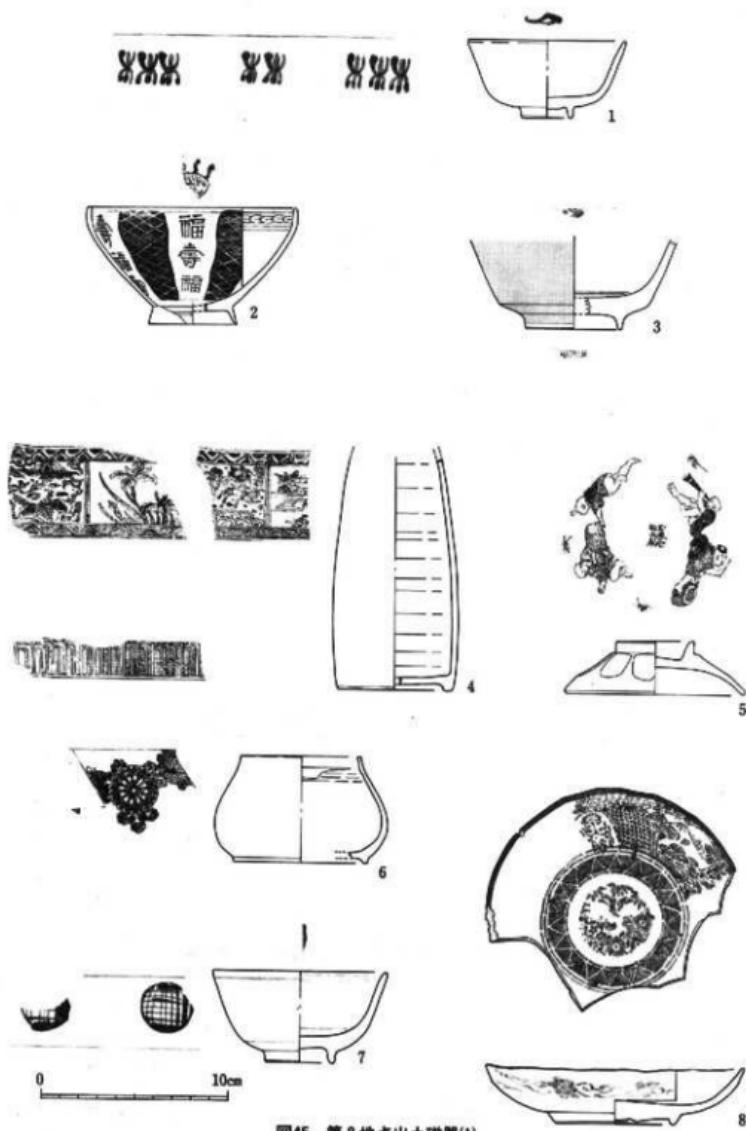


图45 第8地点出土磁器(1)  
Fig. 45 Porcelains from NM 8 (1)

Meiji period (2-3 18c.)

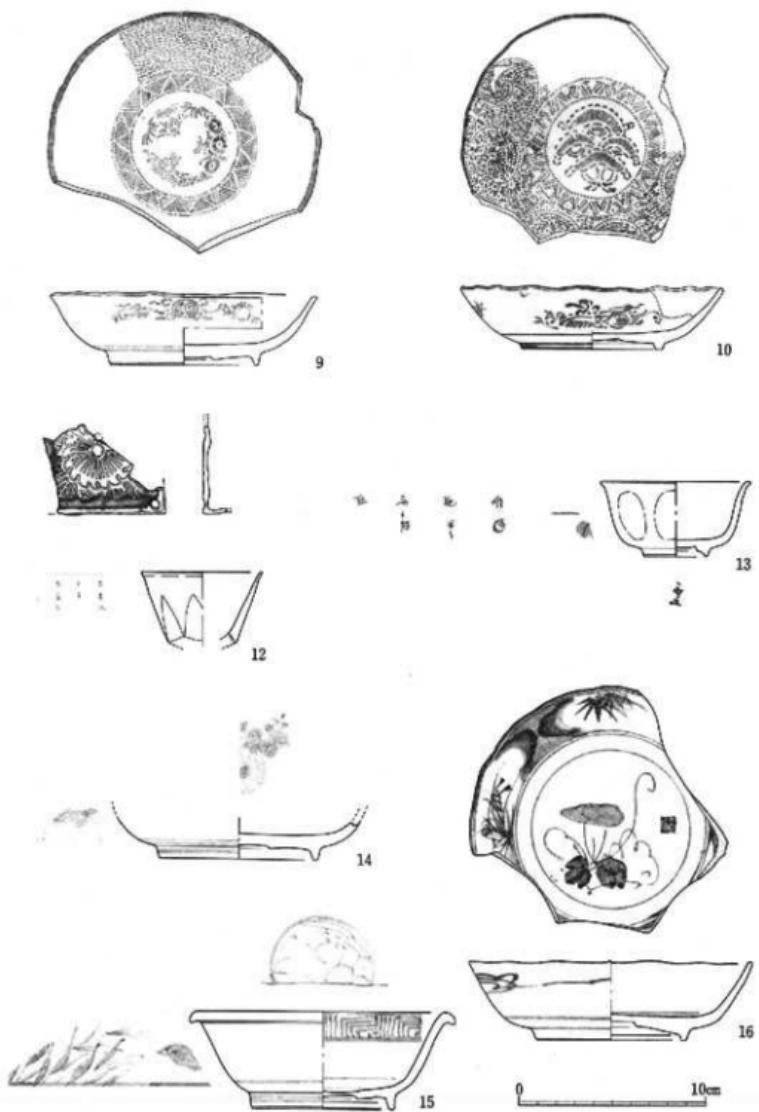
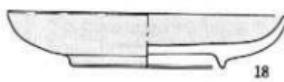
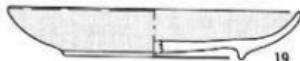
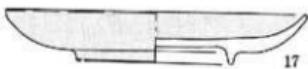


圖46 第8地點出土磁器(2)  
Fig. 46 Porcelains from NM 8 (2)

*Meiji* period



住 人 宿

0 10cm

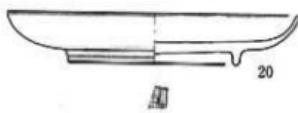


圖47 第8地點出土磁器(3)  
Fig. 47 Porcelains from NM 8 (3)

*Meiji* period

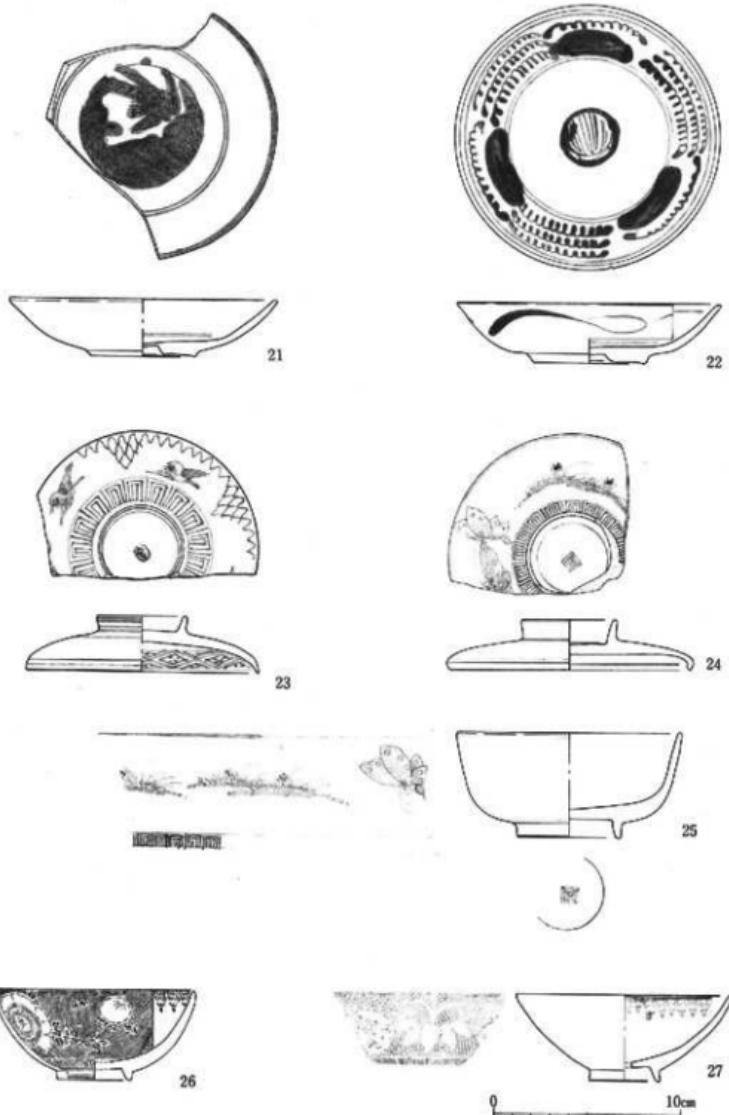


图48 第8地点出土磁器(4)  
Fig. 48 Porcelains from NM 8 (4)

*Meiji period*

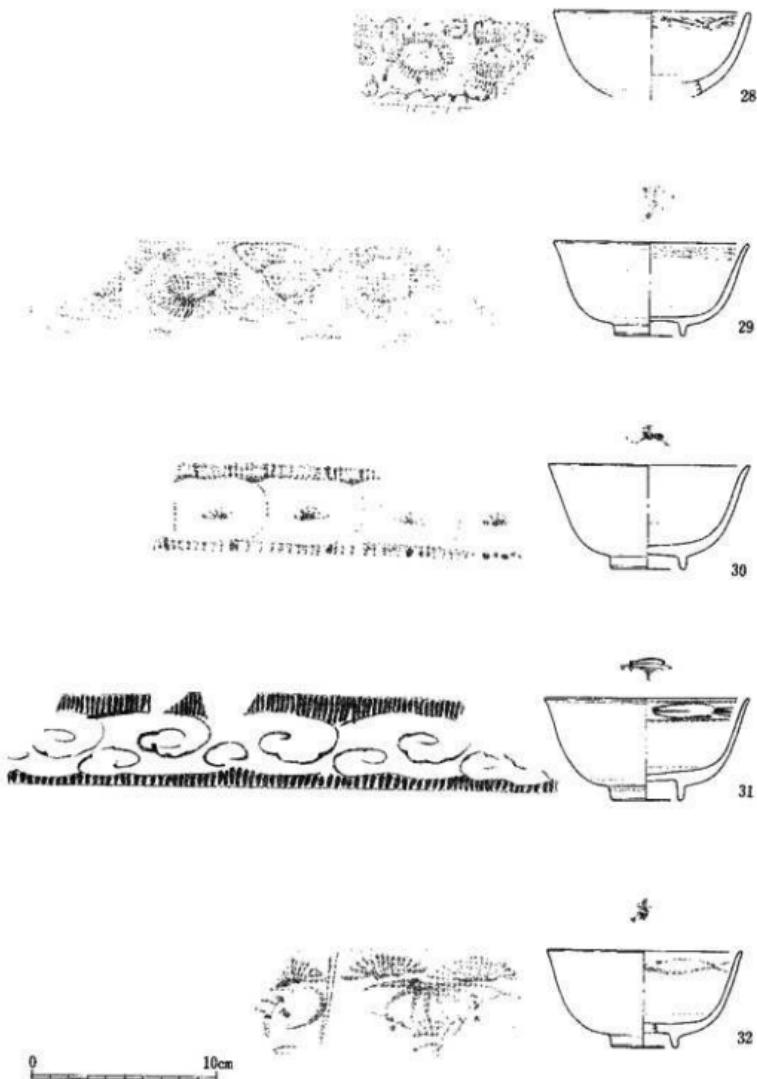


图49 第8地点出土磁器(5)  
Fig. 49 Porcelains from NM 8 (5)

Meiji period

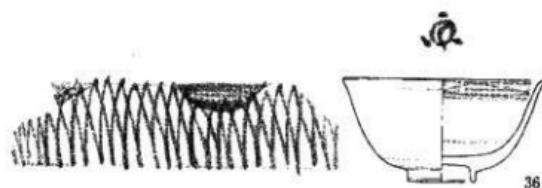
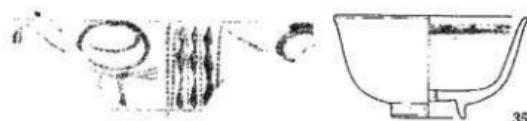
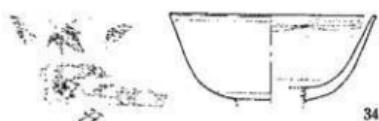
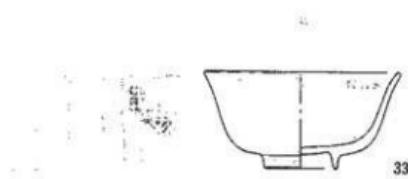


图50 第8地点出土磁器(6)  
Fig. 50 Porcelains from NM 8 (6)

*Meiji period*

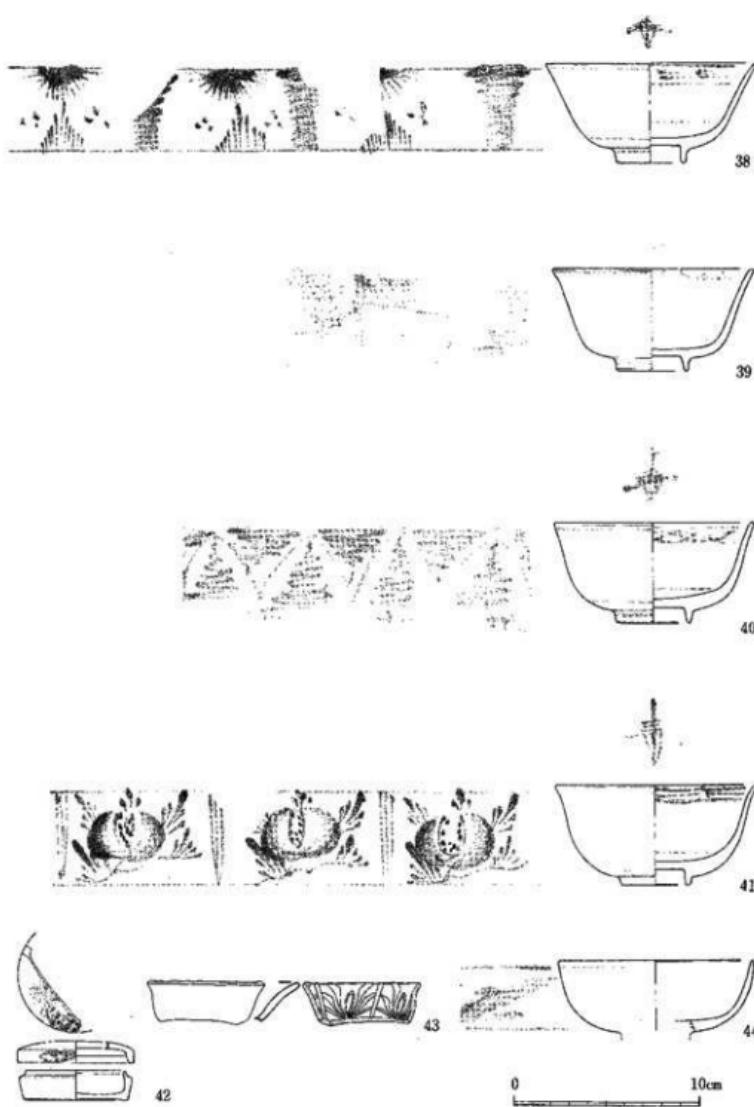


图51 第8地点出土磁器(7)  
Fig. 51 Porcelains from NM 8 (7) Meiji period (43~44 18c.)



圖52 第8地點出土磁器(8)

Fig. 52 Porcelains from NM 8 (8) Meiji period (47+49+51 18c.)



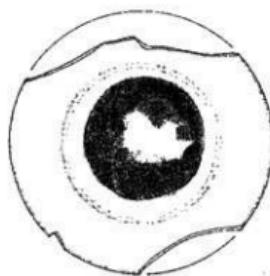
52



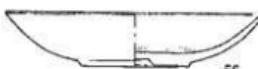
53



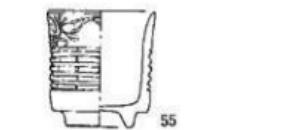
54



55



56



57

0 10cm

图53 第8地点出土磁器(9)

Fig. 53 Porcelains from NM 8 (9)

*Meiji* period  
(53 Late of 17c.-18c.)

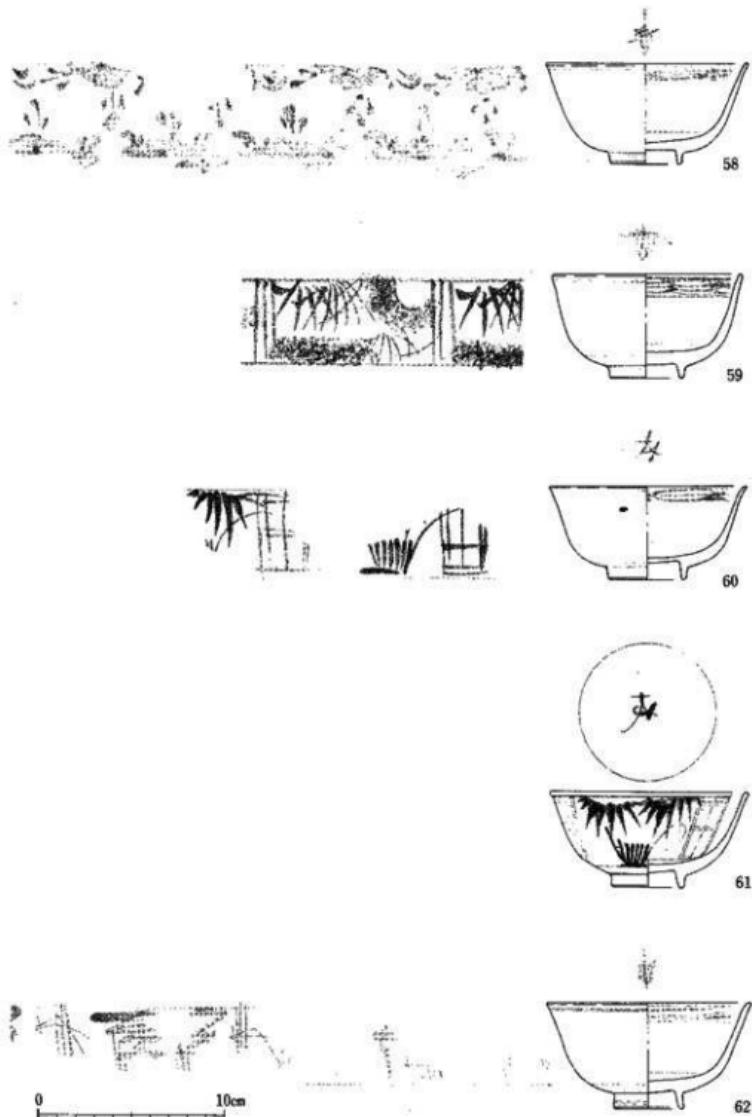
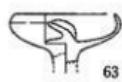


図54 第8地点出土磁器(10)  
Fig. 54 Porcelains from NM 8 (10)

*Meiji* period



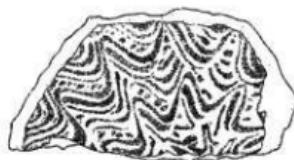
63



64



65



66



67

A scale bar indicating a length of 10 cm, with a mark at 0 and a horizontal line extending to 10.

图55 第8地点出土陶器(1)  
Fig. 55 Ceramics from NM 8 (1)

18c. (64 17c.)

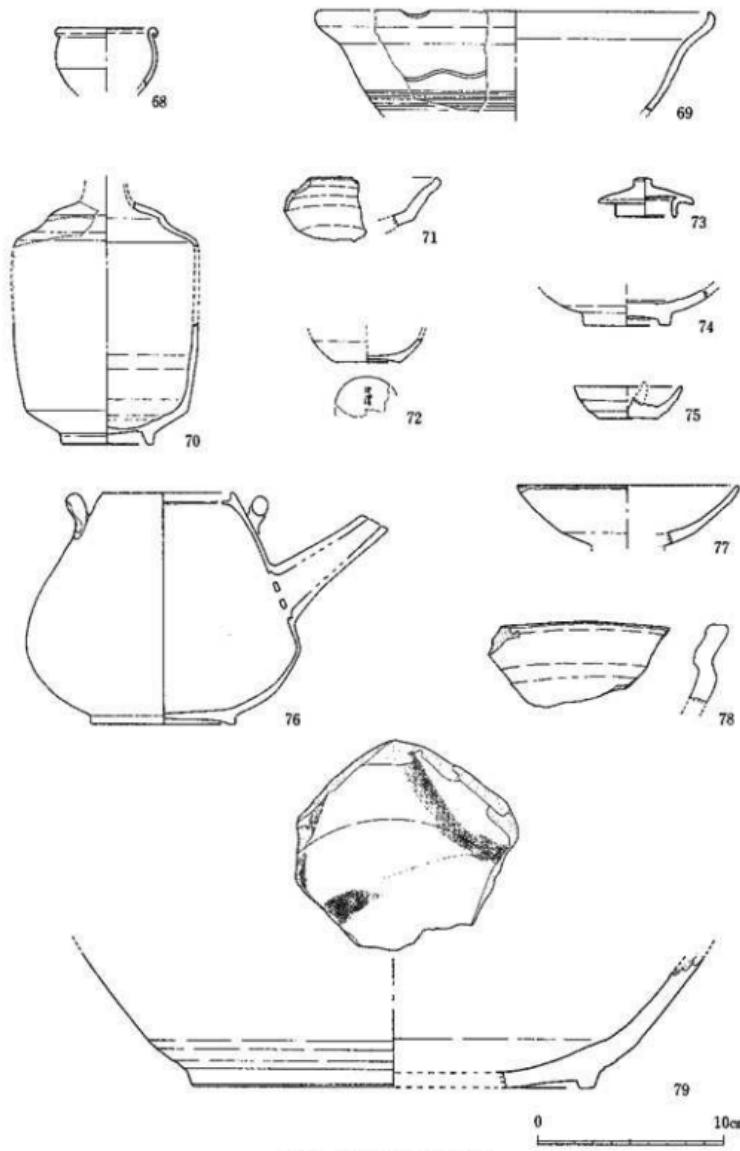


图56 第8地点出土陶器(2)

Fig. 56 Ceramics from NM 8 (2)

18-19c. (71-79 17c.)

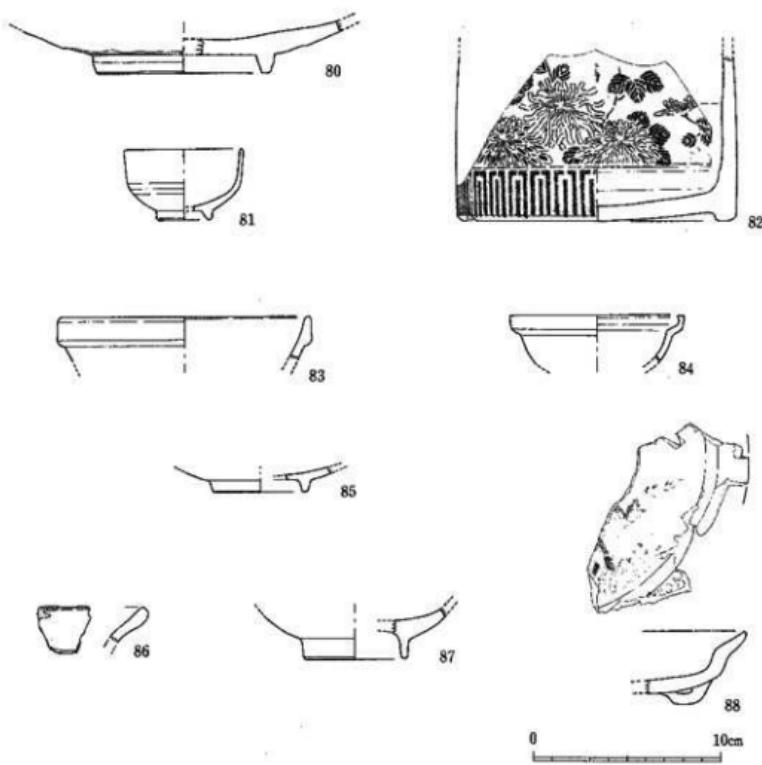


図57 第8地点出土陶器(3)

Fig. 57 Ceramics from NM 8 (3)

18-19c.  
(86-88 Late of 16c.-17c.)

83・84は5層出土の鉄釉製品。83は擂鉢、84は薄手の小鍋か。85は6層出土の皿で外面は鉄釉、内面に糠白釉が施される。

86～88は7層出土。86は灰色に発色する鉄釉が施された角口縁の皿で唐津産。87は淡黄色の鉄釉が施された碗で、器厚が厚い。88は志野の向付で、折縁口縁で厚い志野釉の下に鉄釉で垣根に草花文が描かれている。

(本田泰貴)

表14 第8地点出土陶磁器觀察表(1)  
Tab. 14 Notes on ceramics at NM8 (1)

卷	册	形	出土地所	地	考	出		種	類	考	考	考	考
						時代	類						
1	小型	H 4 帽形土	新	L 81	26	42	高輪鉢文。コハント	石灰	×	昔	鶴岡	乃室	同文鏡片記に3点
2	曲頭系	H 4 帽形土IV	新	M 113	47	63	變形乳丁文。乳丁	石灰	×	昔	鶴岡	18C	23-2
3	弧底系	H 4 帽形土IV	新	S 1	-	52	井筒乳頭。丸足立底鉢。乳頭	石灰	×	中古	鶴岡	18C	23-3
4	直腰系	C 4 帽形土IV	新	L	-	62	乳頭。無文。	石灰	×	中古	中古	鶴岡	23-4
5	垂耳系	C 4 帽形土IV	新	M 94	46	72	垂耳。高足。土嘴子。凹輪脚	石灰	×	中古	中古	不詳	23-5
6	大口?	C 5 帽形土IV	新	M 64	72	57	圓腹。高足。	石灰	×	中古	鶴岡	鶴岡後期	23-6
7	直腰系	D 4 帽形土IV	新	S 94	37	60	乳頭。凹輪脚。	石灰	×	中古	中古	鶴岡後期	23-7
8	且	D 5 帽形土IV	新	L 139	62	51	短柄。乳頭有小孔。コハント	石灰	×	中古	中古	鶴岡	23-8
9	直腰系	D 5 帽形土IV	新	L 144	78	57	短柄。小孔。コハント	石灰	×	中古	中古	鶴岡	同文鏡片記に2点
10	直腰系	D 5 帽形土IV	新	L 151	75	54	短柄。一粒。コハント	石灰	×	中古	中古	青森	同文鏡片記に4点
11	小底	B 4 帽形土V	新	M	-	51	束縛。乳頭有乳突。コハント	石灰	×	中古	中古	鶴岡	24-1
12	平	B 5 帽形土V	新	S 45	-	51	乳頭。凹輪脚。	石灰	×	中古	中古	青森	24-2
13	小腰號	B 4 帽形土-V	新	L 81	33	49	短柄。	石灰	×	中古	中古	鶴岡	24-3
14	且	C 4 帽形土V	新	S 43	-	43	短柄。乳頭有乳突。コハント	新灰	×	中古	中古	鶴岡	24-4
15	新底跡	B 4 帽形土-V	新	M 134	75	52	乳頭有乳突。コハント	石灰	×	中古	中古	鶴岡	24-5
16	且	B 5 帽形土-V	新	M 152	92	42	乳頭。凹輪脚。	石灰	×	中古	中古	青森	同文鏡片記に2点
17	且	C 4 帽形土-V	新	P	-	52	乳頭有乳突。凹輪脚。	青灰	×	中古	中古	青森	24-7
18	且	B 4 帽形土-V	新	M 151	83	59	乳頭有乳突。凹輪脚。	青灰	×	中古	中古	青森	24-8
19	且	C 4 帽形土-V	新	M 156	96	26	絆乳頭有乳突。花鳥文。梗紋。骨突	青灰	×	中古	中古	鶴岡	24-9
20	且	B 4 帽形土-V	新	M 156	89	27	短柄。乳頭有乳突。コハント	石灰	×	中古	中古	鶴岡	24-10
21	且	B 5 帽形土-V	新	M 144	56	31	短柄。乳頭有乳突。コハント	石灰	×	中古	中古	鶴岡	25-1
22	且	B 4 帽形土-V	新	P 142	60	32	乳頭有乳突。コハント	石灰	×	中古	中古	鶴岡	25-2
23	新底迹	B 1 深腹土	新	M 125	-	30	短柄。花口。コハント	石灰	×	中古	中古	鶴岡	25-3
24	短柄直	B 4 帽形土-V	新	L 133	-	27	短柄有乳突。コハント	石灰	×	中古	中古	鶴岡	25-4
25	新底跡	B 5 深腹土-V	新	M 120	54	56	短柄有乳突。コハント	石灰	×	中古	中古	鶴岡	25-5
26	新底跡	C 4 帽形土-V	新	M 109	46	48	短柄有乳突。コハント	石灰	×	中古	中古	鶴岡	25-6
27	新底跡	C 4 帽形土-V	新	S 136	26	46	短柄有乳突。コハント	石灰	×	中古	中古	鶴岡	25-7
28	新底跡	S 5 帽形土-V	新	S 191	-	—	豪華有乳突。粗張	石灰	×	中古	中古	鶴岡	25-8
29	戴頭	B 4 帽形土-V	新	M 104	35	50	短柄有乳突。コハント	石灰	×	中古	中古	鶴岡	同文鏡片記に12点
30	戴頭	B 4 帽形土-V	新	M 107	38	56	短柄有乳突。粗張	石灰	×	中古	中古	鶴岡	同文鏡片記に8点
31	戴頭	B 4 帽形土-V	新	L 101	39	55	短柄有乳突。粗張。	石灰	×	中古	中古	鶴岡	同文鏡片記に25点
32	戴頭	B 5 帽形土-V	新	M 104	35	52	短柄有乳突。コハント	石灰	×	中古	中古	鶴岡	同文鏡片記に3点
33	戴頭	B 5 帽形土-V	新	M 106	52	58	短柄有乳突。粗張。コハント	石灰	×	中古	中古	鶴岡	同文鏡片記に11点
34	戴頭	B 4 帽形土-V	新	S 110	-	—	短柄有乳突。粗張。コハント	石灰	×	中古	中古	鶴岡	25-14
35	戴頭	B 5 帽形土-V	新	M 104	39	55	短柄有乳突。コハント	石灰	×	中古	中古	鶴岡	同文鏡片記に3点
36	戴頭	B 4 帽形土-V	新	L 108	25	52	短柄。粗張。コハント	石灰	×	中古	中古	鶴岡	25-15
37	戴頭	B 5 帽形土-V	新	M 104	39	55	短柄有乳突。粗張。コハント	石灰	×	中古	中古	鶴岡	25-16
38	戴頭	B 5 帽形土-V	新	L 112	26	55	短柄有乳突。粗張。コハント	石灰	×	中古	中古	鶴岡	25-17
39	新底跡	B 4 帽形土-V	新	L 101	36	56	短柄有乳突。コハント	石灰	×	中古	中古	鶴岡	26-3
40	戴頭	B 4 帽形土-V	新	L 106	38	51	豪華有乳突。粗張。	石灰	×	中古	中古	鶴岡	同文鏡片記に21点
41	戴頭	B 5 帽形土-V	新	L 108	39	53	豪華有乳突。粗張。	石灰	×	中古	中古	鶴岡	同文鏡片記に32点
42	紅人	B 4 帽形土-V	新	L 102	42	56	豪華有乳突。粗張。	石灰	×	中古	中古	鶴岡	26-5
43	且	B 4 帽形土-VIX	新	S	-	—	豪華有乳突。	石灰	×	中古	中古	鶴岡	26-6
44	小空縫	B 4 帽形土IX	新	M 104	-	—	空縫。乳突。粗張。	石灰	○	中古	甘	肥前	26-8
45	戴頭	不詳	新	L 110	38	56	豪華有乳突。粗張。	石灰	×	中古	中古	鶴岡	26-9
46	上腰繩	P 3 腰	新	M 89	-	—	空縫。粗張。	石灰	×	中古	中古	鶴岡	26-10
47	次底	小底	新	S 58	-	—	豪華有乳突。粗張。	石灰	×	中古	中古	鶴岡	26-11
48	小腰縫	不詳	新	M 84	34	53	豪華有乳突。粗張。	石灰	×	中古	中古	鶴岡	26-12

表15 第8地点出土陶器觀察表(2)  
Tab. 15 Notes on ceramics at NM8 (2)

番号	基 形	目上場所	種類	出 収	文様等	和 菓		施 期	考	参考
						後 横	直人			
49	印 EF 3脚	印 M	一	64	變形凸線文、魚紋	印橫 ×	やや粗	やや昔	18C	26-12
50	盤形碗 不規 3層	印 M	110	36	變形凸線文。△八角	印橫 ×	卷	平滑水	明治	同文板記載に3点
51	曲深碗 F3 3層	曲 L	116	48	変形凸線文、變葉文	印橫 ×	卷	印橫	18C	26-15
52	盤形碗 不規 3層	印 L	115	39	49 銅鏡、印本万葉體文	印橫 ×	直	直	南江	印横山跡
53	盤 小深 3層	印 M	112	-	變形凸線文、魚紋、變葉文	印橫 ×	直	印橫	18C	26-17
54	小深碗 F3 3層	印 S	84	-	變形凸線文。△八角	印橫 ×	直	印橫	18C	26-18
55	憑式盃 F3 5層	印 L	58	36	62 壁:海螺形、下部:火文	印橫 ×	直	印橫	18C	26-19
56	皿 F2 5層	印 L	139	57	29 菊瓣、點狀・圓形、△八角	印橫 ×	直	印橫	18C	同文板記載に7点
57	盤形碗 F3 5層	印 M	112	48	變形凸線文、魚紋	印橫 ×	直	卷	印橫	18C後半-19C
58	圓底碗 F2 5層	印 L	110	39	51 壁:變葉文・卷し文。△八角	印橫 ×	やや粗	やや粗	平滑水	同文板記載に10点
59	盤形碗 F2 5層	印 L	108	49	56 變形凸線文、△八角	印橫 ×	やや粗	卷	印橫	同文板記載に6点
60	盤形碗 F2 5層	印 M	106	49	50 變形凸線文、△八角	印橫 ×	やや粗	直	印橫	同文板記載に7点
61	盤形碗 F2 5層	印 L	107	49	51 変形凸線文、△八角	印橫 ×	直	直	印橫	60と同様
62	盤形碗 D3 6層	印 M	110	36	57 火焰文・火輪、上部:火繩。△八角	印橫 ×	中粗	直	平滑水	同文板記載に3点
63	盤 不規堆上1	印 M	54	-	無文	印橫 ○	直	やや粗	人頭形	不規
64	盤 不規堆上1	印 S	268	-	三瓣子	印橫 ○	直	中粗	印橫	27-2
65	皿 不規堆上1	印 S	98	-	一筋子	印橫 ○	直	直	印橫	27-3
66	皿 不規堆上1	印 S	119	119	枝毛子	印橫 ○	中粗	直	印橫	27-4
67	盤 手柄網附上口	印 S	-	-	點状雲文	印橫 ○	中粗	直	印橫	18C
68	豆盆 小野菊附上口	印 M	52	-	無文	印橫 ○	直	直	大頭瓶身	4時
69	豆 盆 手柄網附上口	印 S	216	-	無文	印橫 ○	中粗	直	大頭瓶身	不規
70	豆盆 不規堆上IV	印 S	-	56	無地波折口	印橫 ○	直	中粗	大頭瓶身	4時
71	皿 C 4 縦縫LIV	印 S	-	-	無文	印橫 ○	中粗	直	印橫	17C
72	豆盆 D 4 縦縫IV	印 S	-	35	無文	印橫 ×	中粗	やや粗	不規	印橫口堅高台
73	千字文 D 4 縦縫LIV	印 P	51	-	21 千字文	印白 ○	やや粗	やや粗	大頭瓶身	18C
74	豆 盆 D 4 縦縫IV	印 S	-	46	無文、底:火輪形、波紋	印橫 ×	直	直	印橫	17C後半-18C
75	豆盆 D 4 縦縫IV	印 L	58	37	17 無文	印橫 ○	直	中粗	人頭形	18C
76	豆 盆 D 4 縦縫IV	印 L	70	78	124 無文	印橫 ○	直	中粗	人頭形	18C
77	皿 D 4 縦縫IV	印 S	120	-	無文	古輪 ○	直	中粗	印橫	17C後半-18C
78	豆盆 D 4 細縫IV	印 S	-	-	無文	印橫 ×	中粗	直	印橫	28-2
79	人頭盆 平頭網附上口	印 S	106	-	點狀、菊、草葉文	印橫 ○	直	印橫	光頭瓶身	28-3
80	皿 ~	印 S	-	96	無文	印橫 ○	中粗	直	不規	不規
81	小盤碗 不規 3層	印 M	64	36	無文	印橫 ○	直	中粗	大頭瓶身	18C後半-19C
82	丸入 不規 3層	印 M	-	150	瓣輪、菊花文	印橫 ×	中粗	直	中粗	印橫
83	碟 盆 不規 3層	印 S	133	-	無文	印橫 ×	直	直	印橫	28-6
84	小杯 C 2 5層	印 S	93	-	無文	印橫 ×	中粗	直	不規	28-8
85	皿 不規 6層	印 S	-	51	火輪波折口	印橫 ○	中粗	中粗	大頭瓶身	18C後半-19C
86	皿 C 2 7層	印 S	-	-	無文	印橫 ○	直	直	印橫	18C
87	青 B 3 7層	印 S	-	53	無文	印橫 ○	直	直	印橫	28-10
88	向付 C 3 7層	印 S	-	40	無地波折口	印橫 ○	直	直	印橫	28-12

## B. 瓦 (図58・59)

大部分は3・4層、および埋土III層～V層の陸軍第二師団時代のものである（表16）。江戸時代初期の可能性がある5～7層および埋土IX層出土のものもわずかにあるが、全体に量が少なく、小さな破片が多い。以下に採り上げたものの中では軒丸瓦と道具瓦各1点がそれにあたる。分析の手続きは第7地点と同じ。

### 軒丸瓦類

巴+連珠文の破片1点のみ。

### 軒平瓦類

唐草文+梅（図58-3、第7地点のIV類）1点以外は瓦当部に文様がないタイプである（図58-1・2）。

### 丸瓦類

抽出可能な資料無し。

### 平瓦類

抽出可能な資料無し。ただし反りからみてほとんどは平丸であろう。釘穴のあるものが5点ある。滑り止めの櫛目のついた平瓦もしくは棟瓦も見られる（図58-4～7）。

### 棟瓦類

通常の棟瓦（図59-11・12）の他に、棟に載せる角棟伏間瓦と思われるもの3点（図58-9・10）、擗棟瓦と思われるもの4点、瓦当に模様のない軒棟瓦1点がある。

### その他

水切り溝の有る瓦が4点あり（図28-8）、第6地点の例から、擗棟瓦の可能性がある。また、

表16 第8地点出土瓦集計表  
Tab. 16 Distribution of roof tiles at NM 8

[破片数・重量（単位kg）の順に表示]

層	遺構	平瓦類	丸瓦類	軒丸瓦類	軒平瓦類	棟瓦類	その他の	不明
3	層	15 2.8				4 0.5	2 0.2	36 1.7
4	層	6 1.7	1 0.3					3 0.1
5	層	5 0.9	1 0.1		1 0.1	2 0.5		5 0.3
埋	I	2 0.3						1 0.05
〃	II	1 0.12				1 0.5		
〃	III	9 1.5	1 0.2			1 0.07	5 1.7	7 0.5
〃	IV	39 6.6	1 0.2		4 0.9	10 3.7	6 0.5	47 2.5
〃	V	71 9.5	2 0.5		8 1.7	13 3.3	8 1.2	46 1.6
〃	VI	3 0.5						
〃	VII	2 0.3					1 0.15	
〃	IX	10 1.5	5 0.6	1 0.3			1 0.5	1 0.06
6	層	8 1.6					1 0.08	1 0.05
7	層	7 1.1				3 0.5		4 0.3
不	明	8 1.7	1 0.5			4 0.9	1 0.13	3 0.14

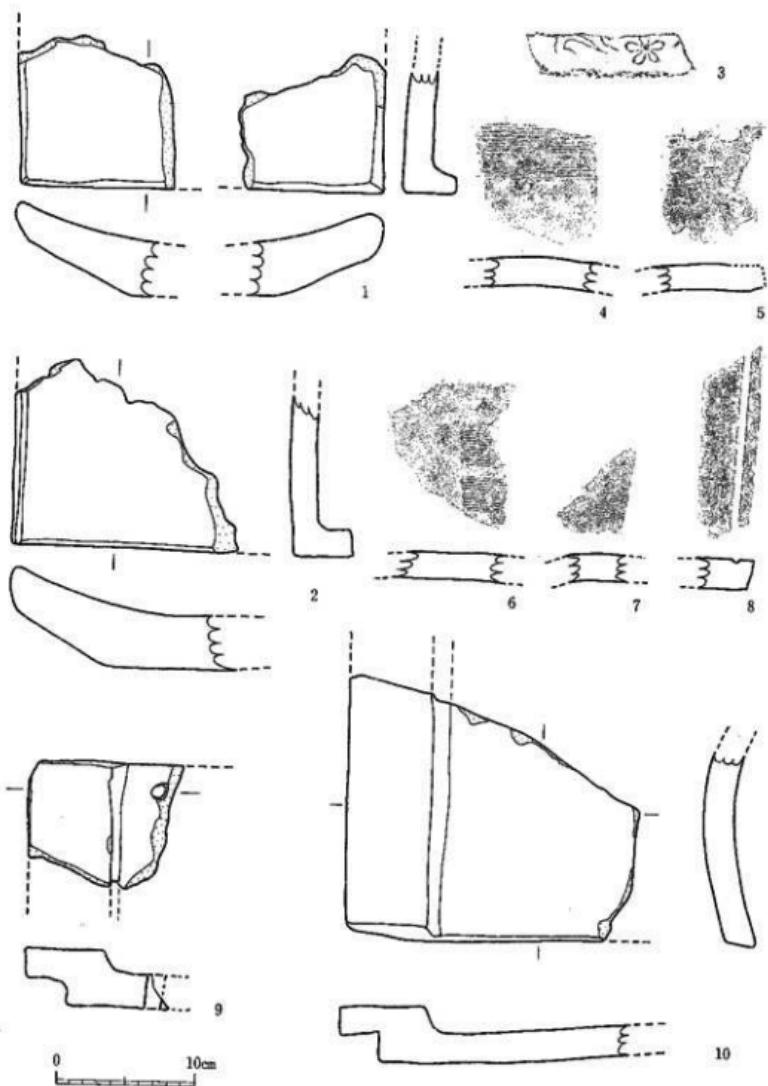


图58 第8地点出土瓦(1)  
Fig. 58 Roof tiles from NM 8 (1)

*Meiji period*

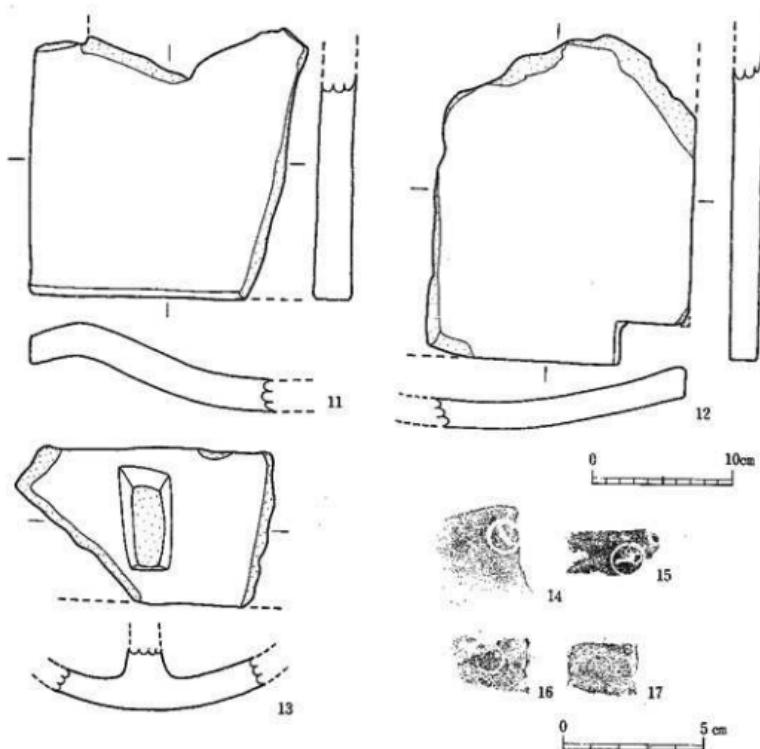


図	種類	地区	層・造構	図	種類	地区	層・造構
1	軒平瓦	B 4・5	埋・埋 V	10	檍瓦?	C 5	埋 IV
2	"	B 4	" IV	11	棟瓦	B 5	" V
3	"	C 3	5 層	12	"	B 4	" IV
4	櫛目付瓦	B 4	埋 IV	13	道具瓦	"	" IX
5	"	D 4	" V	14	丸瓦・胸瓦	"	" VII
6	"	C 4	" "	15	不 明	C 4	" V
7	"	"	IV	16	棟・尻切込	D 5	" タ
8	水切溝付瓦	B 4	" V	17	"	B 3	3 層
9	棟瓦?	"	" "				

図59 第8地点出土瓦(2)

Fig. 59 Roof tiles from NM 8 (2)

Meiji period  
(13 Edo period)

用途不明の道具瓦？1点（図59-13）、刻印（丸および丸に一）のあるもの4点がある（図59-14～17）。

### C. 煙瓦

堀の埋土IV・V層より破片が19点出ている。日本においては江戸時代末より特別な洋風建築物のために煙瓦が製造されたが、より普及するのは明治になってからである（朝倉他1970 pp. 403～404）。

### D. ガラス製品（図60・61）

主に堀の埋土IV・V層よりまとめて出土している。板ガラス、容器、ボタンがある。

板ガラスの国産化は明治42年旭硝子尼崎工場で始まったもので、それ以前のものとすれば輸入品であろう（東北大学埋蔵文化財調査委員会 1985 p. 180）。ボタンは白い不透明のガラス製で型押しのボタン（図61-23・24）。刻み目の装飾の付いたものも1点有る。二の丸第1地点出土のものと同じで肌着のボタンと推定される（東北大学埋蔵文化財調査委員会 1985 p. 101）。

（山田 しゅう）

図60の1.2.4～7は褐色のガラス瓶で、色調と形態からビール瓶と考えられ、底部はいずれも上げ底を示す。法量や細部の形態にはバラエティが見られる。このうち4には、型による彫刻がみられ、□ WERY としている。これは醸造所を示す BREWERY であろう。しかし、2には何も書かれていない。日本におけるビールの製造は、明治5年以前に横浜在住のアメリカ人 William Copeland が創設した SPRING VALLEY BREWERY で製造・販売されたのが最初とされる。また明治初年以降、主に居留外国人向けに、ビールの輸入も盛んに行われた。さらに明治5年渋谷ビール、明治7年三ツ鱗ビール、明治10年開拓使ビール（札幌ビ

表17 第8地点出土その他の遺物集計表  
Tab. 17 Distribution of various implements at NM 8

層	天	種	物	生	在	ガラス	各	品	企			異			石	製	品	P	黑	遺	物	
									製	品	木	陶	金	器								
3層		板	7	3	7	41	2	金	1						8				タルミ2. ×1			
4層		内付1	内付1.1	7		7									1					片2		
5層							3								1							
C-2.3.2ビ									セモル1													
海面I		板	1																			
II							2															
III						2	7								1							
IV	4	地盤	1	1	9	67	4								1	研2. 滑び1		3			1	
V	15	板	1	6	145	42	21	研2. 丸打1. 麦小酒玉1	金	2	内付2. ハセモル1. 肝虫1				8	研2. 丸蓋6	芦2	2	タルミ2. 丸蓋子1	3		
VI							1															
7層					3	2	1															
8層							1															
9層		板	1		4	25	1								1							



図60 第8地点出土ガラス製品  
Fig. 60 Glass implements from NM 8

*Meiji* period

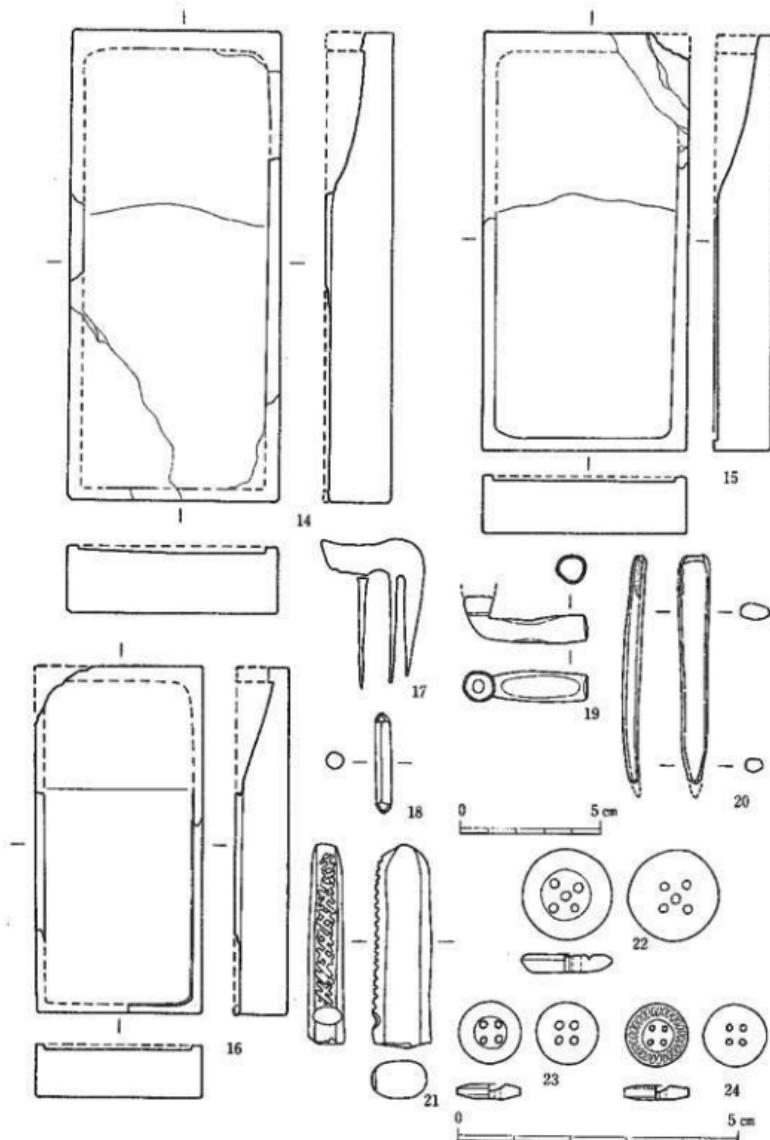


図61 第8地点出土その他の遺物  
Fig. 61 Various implements from NM 8

*Meiji* period

ール)と、各地で次々とビール醸造所が設立されていく。ただ、各地に乱立した小規模製造所のことについては、良く判っていないことも多く、特に瓶の製造や、各社が用いた瓶にどの様な違いがあったのかについては、ほとんど判っていない。ただ、今回出土した資料の中では、1の口縁部の形態から、今日見られるような王冠栓以前に使われていた、コルク栓であることが判明する。王冠栓は明治27年(1894年)に、ロンドン・クラウン・コーク会社によって発明されている。日本のビール製造公社における王冠栓の使用は、大日本麦酒株式会社(明治39年に日本麦酒・札幌麦酒・大阪麦酒の3社が合併して設立)が最初で、明治40年から使用している(大日本麦酒株式会社1936)。麒麟麦酒株式会社では、それよりやや遅れ、明治45年から王冠栓へ転換している(麒麟麦酒株式会社1957)。

3は無色の瓶の口縁部で、8は無色の容器の底部付近の破片で、底部の平面形は六角形を呈する。9は青色の瓶で、口縁部内面が1.4cmの範囲で擦れており、ガラス製の摺合せの栓(共栓)が伴うものと考えられ、この点から薬品用の瓶であろうと思われる。10は褐色の小型の瓶である。11は無色の小型の瓶で、両側面に型吹きの型の合わせ目が残る。口縁部は加熱して整えられているが、底面にポンテ痕は確認できない。12は無色の小型のグラス(ウィスキーラス)で、下半に縦長の面取りが10面なされているが、これはカット・グラスではなく、型によるものである。13は浅い円筒形の容器で、縁は摺って仕上げている。底面に型で、「武井龍三」と彫刻されている。明治・大正期のガラス製造業について、もっとも詳しく述べたものと考えられる『日本近世薬業史第四編硝子工業』で、ガラス製造業者・職人を検索したが、該当する人名は見つけられなかった。

(藤沢 敏)

表18 第8地点出土その他の遺物観察表  
Tab. 18 Notes on various implements at NM 8

番号	種類	出土地	層	特徴等(直径mm)	番号	種類	出土地	層	特徴等(直径mm)
1	ビール瓶	C 4	加理上IV層	口径28	13	ガラス容器	C 4	加理上IV層	透明・口径44・底径42・厚さ20
2	ビール瓶	不明	4層	底径28	14	瓶	B 5	加理上V層	
3	ガラス瓶	C 4	加理上V層	透明白・口径26	15	瓶	B 4	加理上IV層	
4	ビール瓶	A 2	4層	□WERYとの隔離	16	瓶	D 4	加理上IV層	
5	ビール瓶	C 4	加理上IV層	底径32	17	瓶	D 4	加理上IV層	電平張・薄く斜面
6	ビール瓶	B 4	加理上IV層	底径76	18	石瓶	B 4	加理上V層	
7	ビール瓶	不明	不明	底径58	19	キセル	B 4	加理上V層	
8	ガラス容器	B 4	加理上IV層	透明白・底径62	20	?	B 4	加理上V層	
9	ガラス瓶	不明	加理上II層	青色・口径31	21	?	B 4	加理上V層	側面に斜み
10	ガラス小瓶	不明	加理上IV層	褐色・口径25	22	ボタン	B 4	加理上V層	
11	ガラス小瓶	B 4	3層	透明白・口径16・底径22・高さ54	23	ボタン	B 4	加理上V層	壓押しガラス
12	グラス	C 4	加理上V層	透明・口径44・底径46・高さ42	24	ボタン	B 4	加理上V層	壓押しガラス

E. 金屬製品

ほとんどは堀の埋土IV～V層より出土した陸軍時代の一括遺物に属する。この中で種類が判別するものは、寛永通宝1点、薬丸3点、キセル1点(図61-19)、洋釘3点、和釘1点で、他は不明である。機械類の部品の断片も含まれる。

F 石製品

堀の一括遺物に硯4点(図61-14~16)、石筆6点、砥石1点、スレート片3点がある。

石筆は一般に、ろう石で作られた筆記具で、石盤の上に書き取りや計算を繰り返し行った（図61-18）。野沢（1988）によれば、欧米では18世紀末から教育用として使われたが、日本では明治時代初期に宮城県で良質な粘板岩が発見されてから普及し、小学校の学習用として明治・大正に広く使われたという。出土した細片1点のエックス線粉末回折を蟹沢聰史先生にお願いした（図62）。その結果、材質はバイロフィライト（葉ろう石）、カオリン、ペーマイト（アルミニウムの水酸化物）の混合物と思われ、一般に「ろう石」と言われるものである。東北地方のろう石の産地としては、秋田県大槻ろう石鉱床、山形県大岬、福島県月形などがあるとのことである。

G. 木製品

おもに堀の埋土から板材、木端、木棟などの断片が少數出ている。

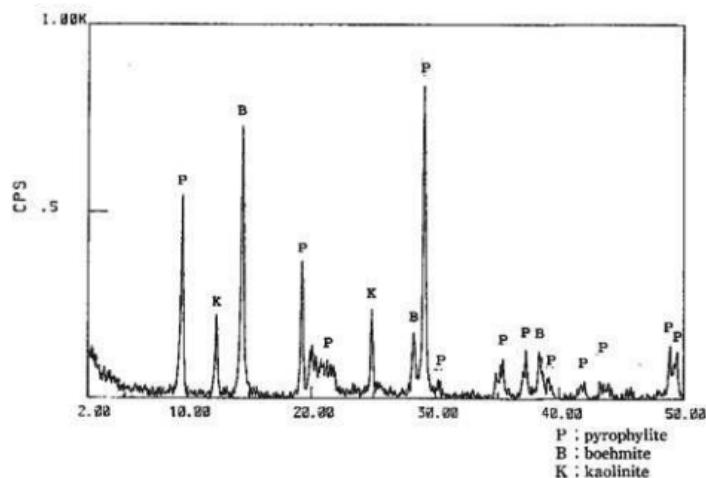


図62 石筆のX線回析分析

## H. 骨製品・骨

いずれも陸軍時代のものである。こうがいに似た製品が2点ある(図61-20・21)。1点は鹿角製で、もう1点は材質不明で側面に刻みがついている。こうがいは日本髪を崩さずに頭皮をかく道具である。陸軍にまげを結った男性がいるとは考えにくいから、男性の物ではないだろう。女性の物とすれば、装飾性に乏しい大変質素な物となる。第4地点にも類例がある(p. 132)。他にボタン1点(図61-22)、籠甲製の櫛1点(図61-17、厚さ1mm以下の破片)、スズキの椎骨2点がある。

## I. 皮製品

堀の埋土から陸軍時代の皮製品の断片5点が出ている。内訳は靴の表皮2点(軍靴にしては薄い)、軍靴の半貼り?1点、カバンのものかと思われるベルト1点、不明断片1点である。靴の表皮1点が豚皮の他はすべて牛皮である。吉田行雄氏(仙台市一番町、ロダン・シューズ)に鑑定して戴いた。

(山田 しょう)

# 第三章 考察

## 1. 二の丸第7次調査地点の調査

前にも触れたように、当地点は、大手門をはいった北側に位置する。この区域は、二の丸には含まれていないが、二の丸の東側全面をしめた蔵屋敷、のちの勘定方のおかれた区域にあたる。調査地点は、その中でも西端部にあたると推定される。ここには、一貫して七十軒にもおよぶ南北方向の「七十軒御兵具蔵」がおかれていた。これは、元禄期および享和2年の絵図で知ることができる。これらの古絵図と検出遺構を対比してみた場合、位置関係からは、6~8区で検出された南北方向の掘立柱建物跡が、絵図に描かれている御兵具蔵に対比できる可能性がある。

この掘立柱建物跡の南北方向の棟筋は、N-20°-Wの方向をとっている。この角度は、現在の留学生宿舎の東側の、記念講堂前の公園との間の段差付近に残る、石垣の方向と一致する。従来、東北大学埋蔵文化財調査室で復元してきた、現況での二の丸建物群の位置推定は、この石垣を二の丸正門である「詰の門」につらなる東側の外郭線が遺存しているものとの考え方をもとに、やはり同じく20°ほど基準が振れるものとして考えてきた。しかし、改めて詳述するが(年報5、第3章)、この間の東北大学埋蔵文化財調査委員会の調査では、二の丸内の建物群は、N-24°-W前後の方位をとることがほとんどで、この石垣が二の丸外郭線に対応するかどうかは、再検討の必要がでてきている。

絵図を見ると、元禄期の「肯山公造御木写略図」では、御兵具蔵は二の丸正面の外郭線の方向よりは、西にさらに振れて描かれている（図版42-3）。一方、「享和二年之御家作御絵図」では、方眼の上に建物位置が記されており、御兵具蔵は、二の丸建物や正面の外郭線の方向と同じになっている（図版41-1・2）。前者の場合、二の丸建物よりさらに大きく西偏していることとなり、今回検出された建物跡とは大きく方向が異なることとなる。後者の場合、石垣が二の丸東端の外郭線の跡であったとすれば、掘立柱建物跡と平行することから、絵図の記載と対応する。しかし、前述のように、この石垣の方向が、二の丸内の建物群の方向とずれる点で、絵図の記載と異なり問題が残る。

大手門と二の丸の位置関係から見ると、おおまかには、この掘立柱建物跡が御兵具蔵の付近にあたることは間違いないであろうが、方向の点で問題を残す結果となった。今回の調査では、ピットの埋土などの類似性と、それらが、ほぼ1.9mの等間隔で並ぶことから、図7に示したような建物跡を想定したが、調査範囲が狭いこともあり、これらのピットが異なる形で組み合う可能性も残る。そのような可能性も含めて、今後検討していく必要があるだろう。

4区で検出された1号溝は、絵図でみた限り、該当するものが見あたらず、はっきりしない。8区検出の2号溝は、この掘立柱建物に附属するものであろうか。

3層及びIV層中から出土した多量の瓦は、こうした建物群の施設を意味するのである。8区のV層から、明治初頭の磁器が出土しているので、二の丸の焼失（明治15年）頃には取り壇されたものと考えられる。

ところで、1区と5区で検出された暗褐色土層（5層）は対応し、旧地表土と考えられる。1区は現地表から約50cm、6・7区では同じく現地表から20~30cmから地山になる。この間の2~4区は、40~50cm下げる依然として盛土である。5区で確認された暗褐色土（5層・旧地表土層）は、現地表から約100cmの深さで、南側へ傾斜している。こうした点をあわせて考えれば、1~5区付近は、もともと谷地形で、江戸時代の造成工事の際、埋め立てられ、平坦な面を造りだしたものと推定することが出来る。

## 2. 二の丸第8次調査地点の調査

### (1) 江戸時代

前にも述べたように、調査地点は、二の丸の北辺にあたる。現在でも小さな沢が流れているが、古絵図で見ると、元々沢地形だった場所を利用して、二の丸時代には外郭の堀・池として整備したようである。二の丸造成以前の江戸初期には「西屋敷」の北辺に当たるが、この時期にもやはり北側を曲する池として手を加えていたようである。「西屋敷」「二の丸」の北辺のこれらの堀や池の北側には、一貫して侍屋敷が立ち並んでいる。

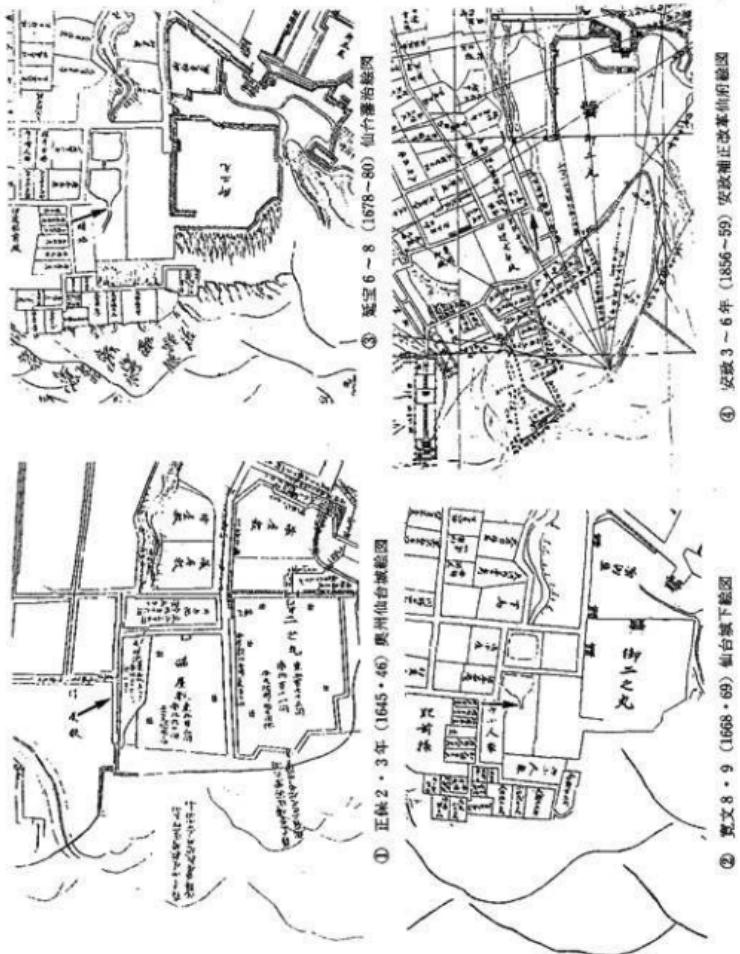


図63 繰図による第8地点付近の変遷  
Fig. 63 Transition of the area around Loc. 8 shown on historical maps

絵図からもう少し詳しくこの北辺区域の変遷を見ると(図63)、二の丸地区の最も古い様相を伝える正保2・3年の「奥州仙台城絵図」では、西屋敷の北側には東西に長い「ため池」があり、さらにその北側には池にそった通路、そして侍屋敷がある。寛文8・9年の「仙台城下絵図」では、この池は基本的には変化していないもののやや形を変え、また、その北側には「御小人衆」の屋敷が見える。延宝6~8年図では、池は変わらないが、その北の御小人衆の屋敷地は「明地」となっている。元禄年間の「青山公造制木写之略図」では、池は整備され、堀としての体裁を整え、堀の北側にはやはり通路が平行して通る。享保6年図では、また様相が変わり、堀は縮小し小さな沢になり、この沢の北側は雑草の生える明け地のようになる。幕末の安政3年~6年の「安政補正改革仙府絵図」では、記載がないためはっきりしないが、前図とほぼ同様かあるいは再び池になっているようである。

すなわち、江戸初期には自然の沢地形を利用して北辺のため池となし、元禄時代には堀として整備し、その後は、沢の状態に戻った時期もあったことが伺い知れる。今回の調査で確認された8層の堀は、この北辺の堀(池・沢)の北岸区域に当たると考えられる。この8層面の堀は、岸の傾斜が75°~80°程あり、石垣や護岸の施設は認められなかったものの、人工的に整えられたものであると考えられる。堀(池)の堆積層からは、絵図でみられたような変遷を知ることは困難であるが、少なくともこの付近が二の丸地区の北辺の堀の北岸に当たることはまちがいないだろう。

したがって今回の調査で、堀とさらに北側の侍屋敷の境界が、おおむね捉えられたことになる。堀の北側で検出された溝や井戸、ピットは、侍屋敷に関連する遺構群の一部を示すものであろう。この第8地点の様相からは、調査区のさらに北側に広がる侍屋敷も、良好に遺存している可能性が強いものと考えられよう。

## (2) 明治(第二師団)以降

明治時代にはいり、二の丸地区に第二師団が設置されるに伴い、北側の侍屋敷地内(現在の教養部構内の西側)には軍需品を調達する輜重隊が置かれる。堀(池)の形態はほとんど変化がないが、池と言うよりは沢状の地形になった可能性もある。この池と北側の輜重隊敷地の間には池に沿って道路がある。5層および3層の遺構群は、遺物からこの時期のものと推定され、この第二師団時代の状況を示すものであろう。堀埋土V層は、3層面と統く堆積層であるが、この埋土からは、大量の陶磁器類、食料残渣が括投棄された状況で検出されている。おそらく、輜重隊の廃棄物が南側にあった堀(池)の斜面に投げ捨てられたことを示すものと思われる。

ところで、5層と3層の間には、大規模に砂礫の盛土がなされ(4層=堀埋土IV層)、堀も斜面側が埋め立てられている。多くの遺物を含む堀埋土V層は、この盛土後に形成された有機物

層である。この3層と、それに対応する堀埋土V層から出土した陶磁器は、盛土の下の5層から出土した遺物と基本的に共通する内容を有している。3層～堀埋土V層出土の陶磁器を特徴付けるものとしては、コバルトによって、かなり崩れて簡略化された文様を染付ける煎茶碗があげられ、平清水産と考えられるものが多いが、同様のものは5層出土資料の中でも主体を占めている。また、図48の21や図53の56のような、刻文に濃いコバルトで染付を施す皿も、3層・5層に共通する。したがって3層面と5層面との間には、さほど大きな時間差を認めることは困難であろう。ただし、3層面出土陶磁器の中には、描絵や銅版印刷のものが含まれるようになる点で、若干新しい様相を示している。3層面よりさらに上層の堀埋土IV層になると、描絵や銅版印刷が増えている。

5層から出土した遺物の中で、最も新しく下るものとしては、大掘粗馬産と考えられる図53の55の湯呑茶碗、および図53の56の型打の皿があげられる。これらはいずれも明治中期以降の製品と考えられることから、4層の大規模な盛土はこの時期に行われたものであろう。3層および堀埋土V層から大量に出土した陶磁器は、明治時代のもので占められ、確実に明治よりも新しいと考えうるものは確認できないことから、明治時代の中におさまる可能性が強い。また、堀埋土IV層から出土したビール瓶が、王冠栓以前に使われていたコルク栓であり、干冠栓への転換がおおむね明治末から大正初期にかけてであることも矛盾しない。以上の点から、明治に第二師団の輜重隊が置かれ、中期頃に4層の大規模な盛土がなされ、その後ほどなく、堀埋土V層の大量の廃棄物が捨てられたものと考えられる。

一方、この5層面の遺構には、堀の埋土IX層の一部が対応すると考えられる。堀埋土IX層から出土した遺物は少ないが、いずれも江戸時代のもので明治時代のものを含んでいない。したがって、5層面の遺構が構築された時期が、江戸時代までさかのぼる可能性もある。その場合、江戸時代に造られた遺構が、引き続き明治時代になっても使用され、明治中頃に大規模な盛土がなされたと考えられる。

また、今回の調査で大量に出土した明治時代の陶磁器は、これまであまり関心が向けられず、不明なところの多かった当該期の陶磁器のあり方を考える上で、貴重な資料を提供することとなった。

(佐久間光平・藤沢 敦)

# 東北大学埋蔵文化財調査年報 5



## 第Ⅰ章 1987年度調査の概要

### 1. はじめに

1983年度に学内に埋蔵文化財調査委員会が設置されて以降、東北大学では大学構内の遺跡の調査・保護を組織的に行ってきました。1987年度も、仙台城二の丸跡の調査を中心に調査が行われ、新たな知見が加えられた。本報告は、これらの調査成果をまとめたものである。

### 2. 発掘調査の概要

1987年度は、本調査1件、試掘調査3件、立会調査1件、計5件の調査を実施した。これらの調査の内訳は、川内地区（仙台城二の丸跡）においては、本調査1件、試掘調査1件、立会調査1件、青葉山地区では、試掘調査1件、川渡地区では試掘調査1件である（表19）。

#### (1) 川内地区的調査

第4地点の調査は、1984年度に実施した、川内地区排水管整備事業にともなう調査（1次調査）の延長でなされたものであり、今年度の分は2次調査と言うことになる。この地点は二の丸の北東部、東側外郭線付近にあたり、堀、あるいは借長屋などがおかれていた区域である。

1次調査では掘立柱列・溝跡・石敷整地層、2次調査では、北側で掘立柱列、南側で上層に石組溝・下層に溝などが確認されている。本報告では、1984年度の1次調査分も併せて報告する。

第5地点の試掘調査は、1985年度の1次調査に引き続き、図書館本館増築計画に伴い実施されたものである。この区城は、江戸初期には、五郎八郎の居館「西屋敷」、後に二の丸に取り込まれてからは「中奥」がおかれた区域に当たる。調査の結果、上層では、石組溝・堀溝、下層では、礎石建物跡・石敷遺構などが検出された。この調査については、1988年度の本調査の報告にまとめて行う予定である。

文系四学部駐車場整備工事に伴い行われた立会調査では、工事予定区域の中で特に工事による削平が大きい西側部分の設計変更を求め、表土下0.5~1.0mの二の丸面まで工事掘削がなされないようにした。

表19 1987年度調査概要表  
Tab. 19 Excavations on the campus in the fiscal year 1987

調査の種類	調査地点	原因	調査期間	面積	時期
本調査	仙台城二の丸跡第4地点 (NM 4)	川内地区配水管整備事業	7/15~9/4	126m <sup>2</sup>	近世
試掘調査	仙台城二の丸跡第5地点 (NM 5) 川渡地区セミナーセンター・拠点 青葉山地区工学部中央道路地点	図書館本館増築 セミナーセンター講師宿泊棟新設 工学部共同溝整備	9/18~11/24 10/28~29 12/2~12/23	272m <sup>2</sup> 30m <sup>2</sup> 96m <sup>2</sup>	近世 — —
立会調査	仙台城二の丸跡文系駐車場地点	文系四学部駐車場整備	2/17	20m <sup>2</sup>	—

#### (2) 青葉山地区の調査

青葉山地区の試掘調査1件は、工学部中央幹線道路沿いの共同溝工事計画にともない、遺跡の有無を確認するために行われたものである。工学部が移転される前の旧地形と現地形を照らしあわせ、現地形の改変度合を考慮して、工事面積2243m<sup>2</sup>のうち試掘調査面積は96m<sup>2</sup>にとどめた。調査の結果、遺構・遺物の出土はなかったので、その後の調査は行わなかった。

#### (3) 川渡地区の調査

セミナーセンター管理棟南側の空き地に講師宿泊棟を新設するにあたり、やはり遺跡の有無を確認するために試掘調査を実施した。調査の結果、遺構・遺物は確認されなかったので、その後の調査は行っていない。

#### (4) その他の調査室の活動

これまで調査室では、学内の埋蔵文化財の重要性を広く学内の方々に知っていただくために、各調査が行われるごとに、学報にその調査成果の速報を掲載してきた。今年度は、学内の埋蔵文化財について体系的な紹介をするために、「広報」に「学内の埋蔵文化財」の投稿を新たに始め、その1および2を『広報』No.126とNo.127に投稿した。

また、11月には、河北新報社主催の「アルタイと東北の考古展」に、青葉山遺跡の旧石器時代の調査状況のスライドと、青葉山遺跡の地層断面のはぎ取りを貸出した。

## 第II章 川内地区（仙台城二の丸跡）の調査

### 1. 1986年度までの調査

1983年度から調査室が実施した調査は、これまでに8地点を数える。1983年度調査の第2地点の調査では、小広間付近の礎石建物跡、第3地点では二の丸南端を画す石垣と溝、掘立柱建物跡、池を確認している（東北大大学埋蔵文化財調査委員会 1985）。第2地点の礎石建物跡は、その後保存されることになった。1984年度には第4地点の1次調査を行い、二の丸北東部の外郭線に関わる遺構を検出した（本報告収録）。1985年度には、第6地点において西端外郭の礎基盤および石組遺構・溝を発見している（東北大大学埋蔵文化財調査委員会 1990）。1986年度の第7地点では、勘定方西端の蔵に関わるとみられる掘立柱跡、第8地点では、北端外郭の溝（堀）を検出している（本書年報4）。

### 2. 二の丸跡第4次調査地点（NM4）の調査

#### (1) 調査地点の位置

調査地点は、川内構内を南北にはしる通称「中善通り」と呼ばれる道路沿いにある。この道

路は、軸線がやや異なるが二の丸北東部の東側外郭線にはほぼ一致する。江戸初期、当地区に西屋敷がおかれた時期にもやはりその東側外郭線にあたる。

絵図を参考にもう少し詳しくみると、西屋敷時代の配置がわかる正保2・3年図(1645・46年)では、調査区は、正門のある東側外郭線、西側の屋敷と東側のため池の境界付近を通っているものと推定される。南北に長い調査区は、この境界付近を通ってさらに南隣の二の丸の裏門付近を通り、二の丸区域にいたると考えられる。なお、この図にみられる二の丸地区には、二の丸造営(寛永15・16年、1638・39年)以前には、伊達宗泰の屋敷がおかれていたことが伝えられており、調査区の南部分は、この時期には宗泰の屋敷地内に含まれることも考えられる。

西屋敷が廃絶され、この区域が二の丸に取り込まれる時期の「肯山公造制城郭木写之略図」(元禄時代)、これ以降の享和2年(1802年)図、嘉永6年(1853年)図をみると、西屋敷時代の外郭線は、ほぼそのまま二の丸の東側外郭線となっている。つまり、調査区は、二の丸時代を通じてみても、その東側外郭線付近にあたると考えられる。なお、享和2年図、嘉永6年図では、外郭の堀に「蔵」が附属し、堀の東側には南北棟の「借長屋」が配置されている。

### (2) 調査にいたる経緯

川内団地内の排水管整備にあたり、中普通り沿い(道路西側)に排水管を通すことになった。北側と南側の一部区域については既破壊部分を利用して排水管を設置することにしたが、道路沿い延長約96mについては発掘調査を実施する必要があった。調査は1984年度中に終了することを目指して、厳寒の1月初旬から開始した。しかし、気候条件が悪く調査の続行が困難になったため、調査予定部分の南半は次年度以降に調査を延ばすことになり、結局、調査は2回に分けて行うことになった。

(佐久間光平)

### (3) 調査方法と経過

図書館本館前の道路(中普通り)沿いの排水管のルートにあわせ、幅1.5mのトレンチを設定した(図64)。1次調査(1984年度)では、北側の28m分(I区)、2次調査(1987年度)では、南側を中心に68m分(I区の北側の一部3m分を含む)の調査(II・III区)を行った。調査面積は、それぞれ42m<sup>2</sup>、107m<sup>2</sup>、計149m<sup>2</sup>であった。このうち2次調査のI区北側とIII区の19m<sup>2</sup>は、盛土をほりあげたところ既破壊区域であることが判明したので、この区の調査はその後行われなかった。結局、精査区域は、道路沿いの直線にして84m分(I・II区)ということになる。

調査は、配水管のルートにあわせて、原点A・Bを設定し、この2点をむすぶラインを基準線とした。基準線は、座標北より20°01'44"西偏している。また、道路脇に保存原点Cを設けた。原点A・Bおよび原点Cの四十座標値は、下記の通りである。座標系は、第X座標系である。

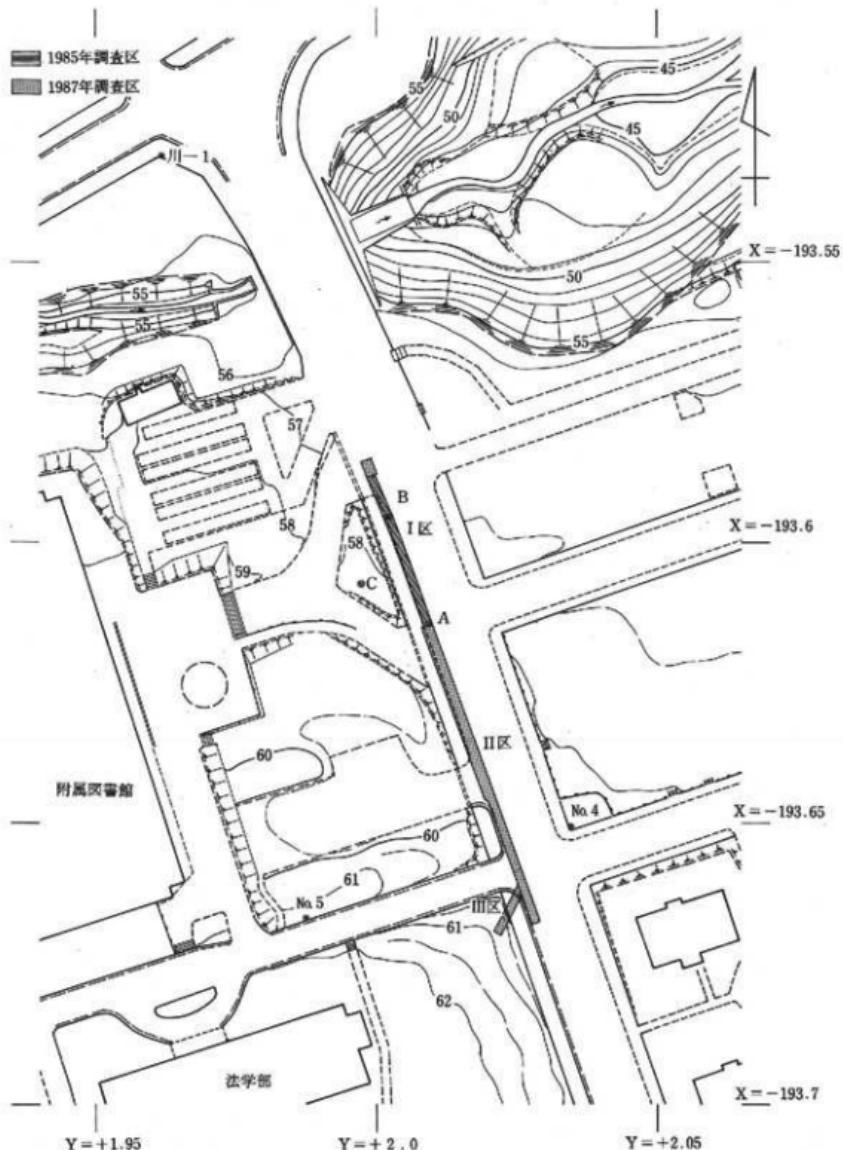


図64 二の丸第4調査地点調査区の位置

Fig. 64 Location of NM 4  
NM 4 i.e. Location 4 of *Ninomaru* (Secondary Citadel)

原点A X=-193 614.502 原点B X=-193 595.404 原点C X=-193 607.386  
Y=- 2 009.361 Y=- 2 002.399 Y= - 1 997.200

調査区は、原点Bを基準に南へ2mごとに1~10区、北はN 1~N 4区とグリッド名を付した。2次調査(II区)では、原点Bから20mの地点から77mの地点までの範囲を調査したため、原点Bからの距離で、21区~77区と1mごとのグリッドに分けて調査を行った。

前述のように、調査が2次に分かれグリッドの設定方法が異なるため、以下の遺構の報告で

表20 第4地点基本層土層注記表  
Tab. 20 Characteristics of layers at NM 4

層	色 調	土 質	内 容
1層	—	—	道路に伴う整地層
1 a 層	5 Y 5 / 2 深オーブン色	砂	道路基礎
1 b 層	—	玄武岩角礫	道路基礎
1 c 層	5 Y 4 / 1 深色	シルト	円礫含む
2 a 層	5 Y 4 / 2 深オーブン色	砂	円礫含む
2 b 層	10 Y R 3 / 1 黒褐色	シルト	砂質含む
3 a 層	2.5 Y 4 / 4 オーブン褐色	砂質シルト	小礫含む
3 b 層	10 Y R 5 / 3 にぶい黄褐色	シルト	
3 c 層	10 Y R 5 / 4 にぶい黄褐色	シルト質砂	不均質な整地層、円礫多量含む
3 d 層	10 Y R 4 / 1 黒褐色	シルト質砂	炭化物多量含む、不均質な整地層
3 e 層	2.5 Y 5 / 4 黄褐色	砂	
3 f 層	10 Y R 3 / 1 黑褐色	砂質シルト	砂礫・炭化物多量含む
3 g 層	10 Y R 3 / 1 黑褐色	砂質シルト	炭化物多量含む
3 h 層	10 Y R 5 / 4 にぶい黄褐色	砂	下部に円礫多量含む
4 a 層	10 Y R 4 / 4 黑褐色	砂質シルト	小礫多量含む
4 b 層	10 Y R 4 / 4 黑褐色	砂質シルト	
4 c 層	7.5 Y R 4 / 4 褐色	砂質シルト	機多量含む
4 d 層	5 Y 3 / 2 オーブン黑色	シルト	炭化物・地山ブロック含む
4 e 層	7.5 Y 3 / 2 オーブン黑色	シルト質粘土	機・炭化物含む
4 f 層	2.5 Y 3 / 2 黑褐色	砂質シルト	炭化物含む、角礫多量含む
4 g 層	2.5 Y 3 / 2 黑褐色	砂質シルト	炭化物含む、地山ブロック多量含む
4 h 層	2.5 Y 3 / 1 黑褐色	砂質シルト	炭化物・地山ブロック含む
4 i 層	10 Y 4 / 2 オーブン黑色	粘土	植物遺体含む
4 j 層	10 Y 3 / 1 オーブン黑色	シルト質粘土	機・瓦多量含む
4 k 層	10 Y 3 / 1 オーブン黑色	シルト質粘土	機・瓦多量含む
4 l 層	10 Y 3 / 1 オーブン黑色	シルト質粘土	炭化物・機含む
4 m 層	7.5 Y 3 / 2 オーブン黑色	シルト質粘土	炭化物・礫含む
5 a 層	10 Y R 4 / 4 黑褐色	シルト	小礫多量含む
5 b 層	10 Y R 6 / 6 黄褐色	粘土	黄褐色シルト・小礫・砂が不均質に混じる
5 c 層	5 Y 3 / 1 オーブン黑色	粘土質シルト	粘土ブロック・小礫・植物遺体を不均質に含む
5 d 層	10 Y R 2 / 2 黑褐色	シルト	炭化物・小礫・粘土が不均質に混じる
6 a 層	10 Y R 5 / 2 黑褐色	砂質シルト	植物遺体多量含む
6 b 層	2.5 G Y 4 / 1 晴オーブン灰色	砂質シルト	小礫・砂・粘土が不均質に混じる
地山	10 Y R 5 / 6 黄褐色	シルト	粘土がやや不均質に混じる、2次堆積か

は、便宜的に I 区・II 区を分けて記述することとする。遺構の名称は、掘立柱列と溝跡については、I 区・II 区を通した番号にした。しかし、ピット番号は I 区・II 区それぞれ別に付けられており、通し番号に付け直すと煩雑となるため、調査時の番号をそのまま使用することとする。但し、調査後の検討の過程で、1 次調査のピット 11・21・22・23 と、2 次調査のピット 8 は欠番となっている。

#### (4) 層序

調査が 2 回に分かれたこともあり、厳密に対比はできていない部分もあるが、おおむね表 20 の通りである。

1 層 現在の道路面となっているアスファルトとその基礎の整地層である。米軍および大学による整地層と考えられる。

2 層 1 層の下の大規模な整地層で、第二師団もしくは米軍による整地層と考えられる。

3 層 II 区の中央付近の 50 区より南側に分布するもので、地山および 5 層を覆う。50~60 区では、この 3 層がコンクリート建造物を伴う掘り込みを覆っている。また 64~73 区では、5 号溝を覆っている。5 号溝は、山上遺物から埋められたのが明治以降であると考えられることから、3 层は明治以降の第二師団の整地層と思われる。

4 層 I 区の中央付近の 4 区より北側に分布するもので、地山および地山に掘り込まれた柱列・ピット・石敷整地層を覆っている。石敷製地層からは板ガラス・洋銃・土管が出土しており、明治以降と考えられることから、この 4 層も明治以降のものである。

5 層 II 区の 59 区より南側に分布する整地層である。この 5 層の下から掘り込まれた溝跡からは、江戸時代初頭の遺物のみが出土していることと、厚いところでは 1 m にもおよぶ大規模な整地であることから、この 5 層は寛永 15 年（1638 年）の二の丸造営に伴う整地層と考えられる。

6 層 II 区南端よりの 64~74 区に分布し、5 層に覆われている。江戸時代初頭の地表面に堆積した層と考えられる。

地山層 調査範囲が南北に長いため、地山の土質は均質ではない。表 20 には最も一般的な部分を示した。地山の上面は、全体に北側が低く、南に行くにしたがって高くなっている。そのため、標高の低い北端付近では、全般にグライ化した様相が認められる。ただし、II 区の 60 区付近を境として南側は、逆に低くなって行き、この部分に 5 層の整地がなされている。

#### (5) 発見された遺構と遺物

##### ① 遺構

調査区が南北に細長いため、場所ごとの様相がかなり異なっている。特に、II 区では 59 区から南側では、基本層序が他と大きく異なる。そのためここでは、I 区・II 区北半部・II 区南半部に分けて、遺構の状況を述べることとする。

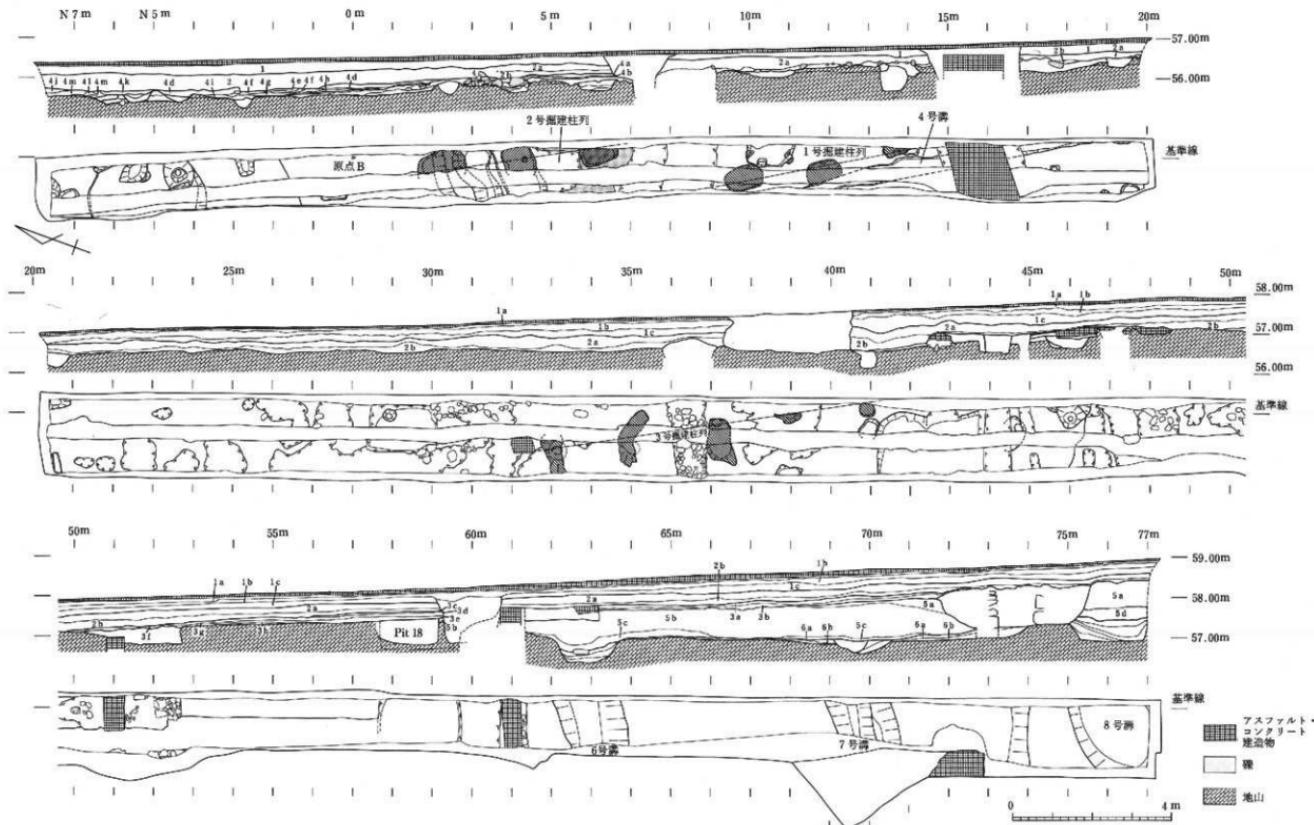


図65 第4地点全体図  
Fig. 65 Plans and cross sections of NM 4

#### A. I 区 (図66・67)

I 区の遺構は、いずれも地山層に掘り込まれている。

##### 掘立柱列

###### 1号掘立柱列

5区から7区にかけて、ピット6・7・9の3個の柱穴が確認された。ピット7で平行して伸びる溝4に切られている。またピット6はピット14・15に切られる。いずれも1.0m×0.6m前後の隅丸長方形を呈し、柱痕跡が確認される。柱列の方向は、N-31°-W、柱間間隔は2.0mである。遺物は出土していない。

###### 2号掘立柱列

1区から4区にかけて、ピット12・13・16の3個の柱穴が確認された。1～4号石敷整地層に切られしており、残存状況は総じて良くない。平面形は、一辺0.8～1.2m程の隅丸方形を呈す。柱痕跡は確認できており、残存状況が良くないこともあります。柱が抜き取られたかどうかも不明である。柱列の方向は、ほぼN-29°-Wで、柱間間隔は2.0m程である。遺物は出土していない。

##### 石敷整地層

###### 1～3号石敷整地層（1～3号溝）

1区から3区にかけて、東西方向に平行して3条、溝状の掘り込みに券大から人頭大の河原石を敷いた整地層が検出されている。溝の方向は、おおむねN-53°-Eである。この内、2・3号石敷整地層は浅い溝状の掘り込みの中に、河原石を敷くようにしているが、1号石敷整地層は南側は比較的明瞭に肩が付くが、北側ははっきりした掘り込みを持たず、整地層の範囲はN1区まで伸びている。これらの整地層の前後関係は、1号石敷整地層の河原石が含まれる埋土2層が、2号石敷整地層の礫が含まれる層序まで伸びることから、同時に構築された可能性が強い。これらの整地層は、掘立柱列2のピット12・16を覆っている。1・2号石敷整地層からは、板ガラス・洋釘・土管が出土しており、明治以降に構築されたものと考えられる。

###### 4号石敷整地層

1～3号石敷整地層の南側で検出されたもので、小深を10cm程の厚さに敷き詰めた整地層である。南側が東西に伸びる攪乱によって破壊されており、3号石敷整地層に接する付近も破壊されていたため、その範囲は明確ではないが、南北2.2mにわたっている。整地層の下面は東西方向に幅15cm程の小規模な溝状となっており、その方向はN-53°-Eである。掘立柱列2のピット13およびピット10・15を覆っている。この4号石敷整地層と3号石敷整地層の関係は、トレンチ東壁の部分でのみ残存しており、3号石敷整地層の南端を切って4号石敷整地層が構築されている。ただし、3号の端に沿っていることから、構築順序は3号から4号であったとし

ても、同時に存在した可能性も高い。その場合、1～3号石敷整地層が何らかの建造物の基礎で、4号石敷整地層がそれに沿った広場もしくは通路状の化粧敷であった可能性も考えられる。

#### 溝跡

##### 4号溝

6区から10区にかけて検出されたもので、N-31°-Wの方向でほぼ直線的に伸びる、幅50cm、深さ20cm程の溝である。1号掘立柱列とほぼ平行し、そのうちのピット7を切っている。またピット3に切られている。遺物は出土していない。

#### ピット

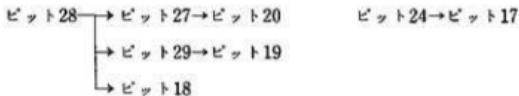
##### ピット8

6区の東壁よりで検出された不整形のもので、埋土中に多量の瓦を含み、まとめて捨てられた状況を呈していた。

##### その他のピット

南側の8～10区で、ピット1～5・14が検出されている。この内ピット5・14は1号掘立柱列のピット6と切りあっており、ピット6→ピット14→ピット5の順である。また、ピット1からは、江戸時代のものと考えられる鉄釉の鉢が出上している(図71-4)。

また、調査区北端近くのN2区からN4区では、ピットが比較的密集して検出されており、これらの切り合い関係は以下の通りである。



このうちピット28としたのは、径3.0mのほぼ円形の大きなものである。またピット24・27では柱痕跡が検出されており、ピット27では柱の下に偏平な跡が數かれていた。遺物は概して少ない。

#### B. II区北半部(図68・69)

II区北半部で検出された遺構は、いずれも地山に掘り込まれている。

#### 掘立柱列

##### 3号掘立柱列

32区から42区にかけて、ピット4・5・6・7・12の5個の柱穴が検出された。いずれも不整形な平面形態を呈し、しかも南東から北西方向に大きくオーバー・ハンギングしている。ピット底面近くで検出された柱痕跡を垂直に上に伸ばすと、このオーバー・ハンギングした部分にぶつかってしまうような方向で壁面が立ち上がっており、どのような上屋構造になるのか不明である。柱列の方向はN-29°-Wで、柱間隔は2.0mである。出土遺物は概して少ない。ピット6から

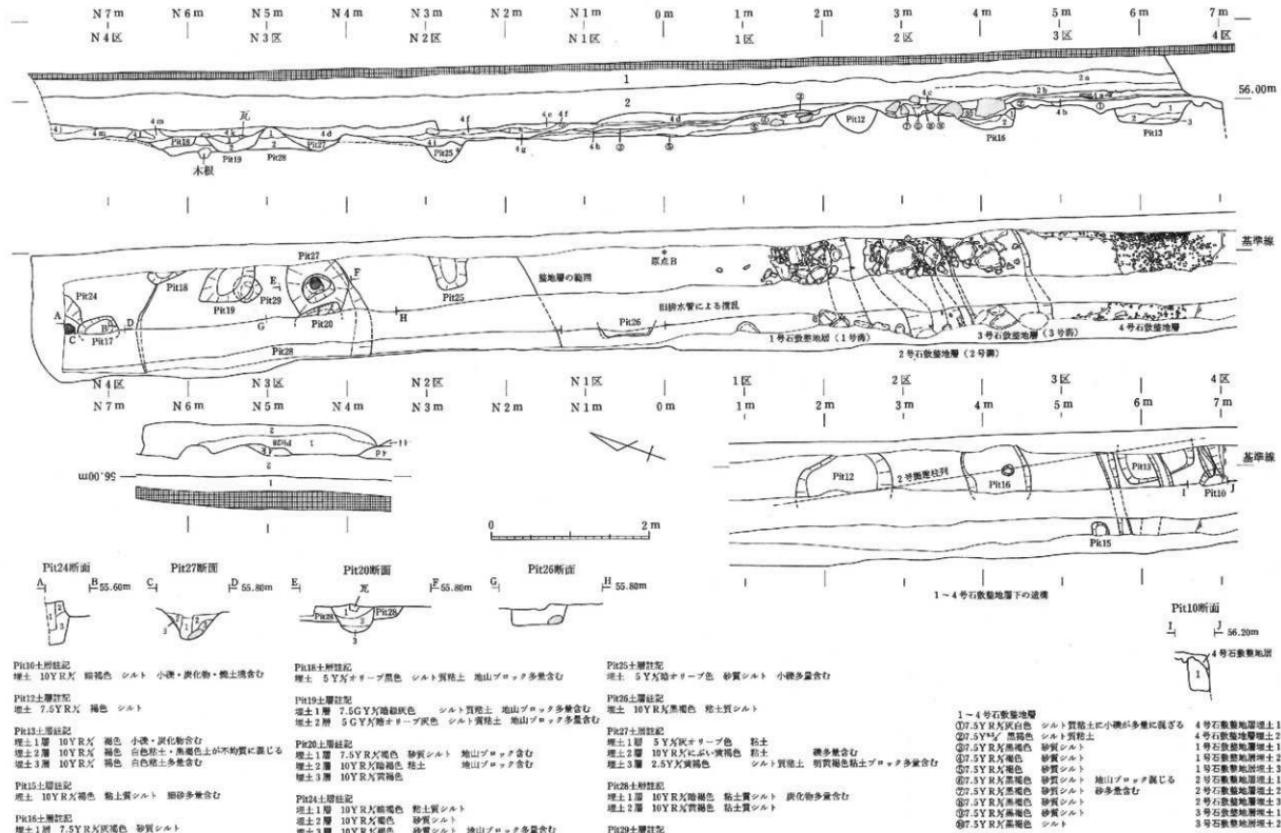
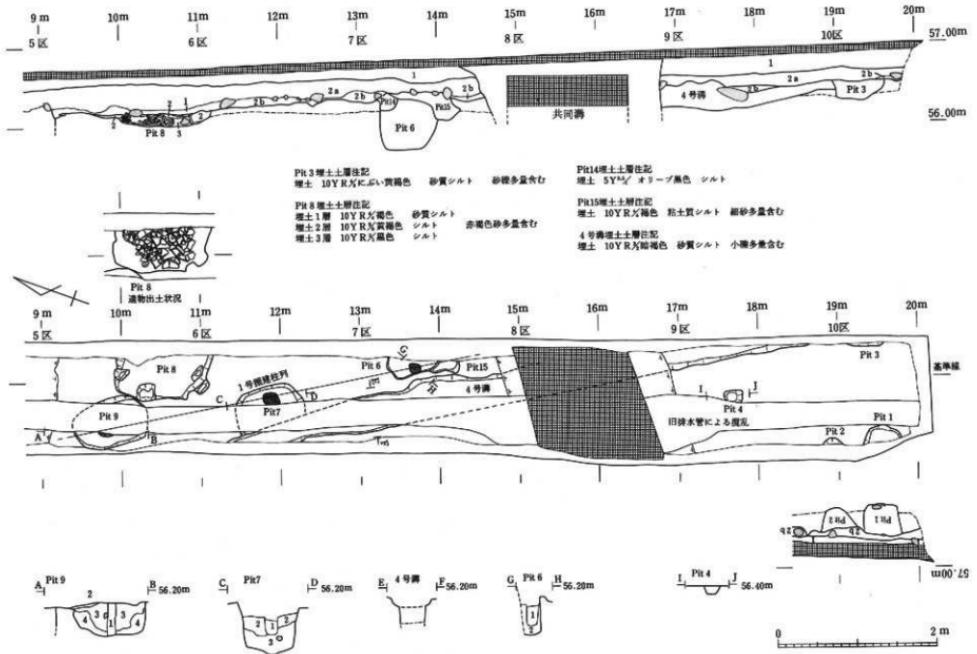


図66 第4地点 I区平面図・断面図(1)



Pit 9 塗土層付記  
基土 1 層 7.5YR 4/2 暗褐色 (Dark brown 7.5YR 4/2), シルト質粘土  
基土 2 層 7.5YR 4/2 黄褐色 (Yellowish-brown 7.5YR 4/2), シルト質粘土  
基土 3 層 10Y R 4/2 暗褐色 (Dark brown 10Y R 4/2), シルト質粘土  
基土 4 層 7.5YR 4/2 暗褐色 (Dark brown 7.5YR 4/2), シルト質粘土  
地山 ブロック多量含む

Pit 7 塗土層付記  
基土 1 層 10Y R 4/2 黄褐色 (Yellowish-brown 10Y R 4/2), シルト質粘土  
基土 2 層 10Y R 4/2 黄褐色 (Yellowish-brown 10Y R 4/2), シルト質粘土  
基土 3 層 10Y R 4/2 黄褐色 (Yellowish-brown 10Y R 4/2), シルト質粘土  
基土 4 層 10Y R 4/2 黄褐色 (Yellowish-brown 10Y R 4/2), シルト質粘土  
粘粒多量含む

Pit 6 塗土層付記  
基土 1 層 7.5YR 4/2 暗褐色 (Dark brown 7.5YR 4/2), 粘土質シルト  
基土 2 層 7.5YR 4/2 暗褐色 (Dark brown 7.5YR 4/2), 粘土質シルト

Pit 1 塗土層付記  
基土 2.5YR 4/2 黑褐色 (Blackish-brown 2.5YR 4/2), 粘白色粘土ブロック多量含む  
Pit 2 塗土層付記  
基土 2.5YR 4/2 黑褐色 (Blackish-brown 2.5YR 4/2), 粘土  
Pit 4 塗土層付記  
基土 10Y R 4/2 暗褐色 (Dark brown 10Y R 4/2), 粘土質シルト

図67 第4地点 I区平面図・断面図(2)  
Fig. 67 Plans and cross sections of Loc. I at NM 4 (2)

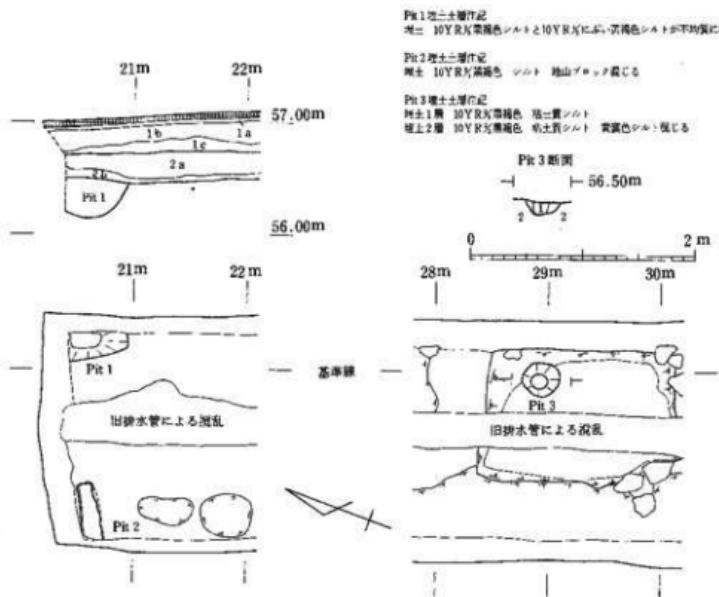


図68 第4地点II区平面図・断面図(1)

Fig. 68 Plans and cross sections of Loc. II at NM 4 (I)

板ガラスが1点出土しているが、細片であり、泥入の可能性も捨てきれない。また、少數ではあるが、江戸時代に輸入板ガラスを建築に利用した例もある。陶磁器では、ピット7から幕末前後と思われる磁器の飯茶碗が出土している（図72-21）。また細片ではあるが、ピット6・7から出土した磁器碗類は、胎上が密で焼成も良好な点から、19世紀以降と思われるものである。したがって、この掘立柱列3は、さかのぼっても幕末頃の建造と考えられるであろう。

#### ピット

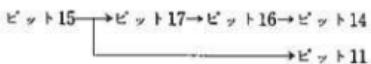
##### ピット10

ピット10としたのは、40区から44区にかけて検出された浅い落込みで、明瞭な掘り込みを持つものではない。埋土は、大量の瓦と炭化物・炭化木材を含み、明治15年（1882年）の火災時のものである可能性がある。この埋土はピット13と3号掘立柱列のピット12を覆っている。その他のピット

調査区の北端近くで、ピット1・2が検出されている。I区南端付近のピットと関連するも

のである。28・29区ではピット3が検出されており、柱痕跡も確認される。

また、ピット10の周辺には、ピット9・11・13・14・15・16・17が比較的密集して検出されている。これらの切り合い関係は次の通りである。



この内ピット15としたものは南側の落ちが東西方向に確認されたもので、かなり大きな掘り込みになると思われる。このピット15とピット10の関係は、両者の間に第二師団時代の排水溝などの搅乱が多く、確認できなかった。ピット11とピット14では柱痕跡が確認されており、ピット14では柱根も一部残存していた。いずれも、遺物はほとんど出土していない。

#### C. II区南半部（図70）

##### 溝跡

###### 5号溝（石組溝）

調査区南端近くの72区から75区にかけて検出された東西方向の石組溝で、方向はN-67°-Eである。江戸時代の整地溝と考えられる5層の上面から掘り込まれている。切り石を垂直に積み上げたもので、内のは0.9m、深さ1.0mを計る。切り石の外側には、拳大から人頭大の円礫を詰め込んだ、裏込めがなされている。裏込めの幅は、上端で4.0mを計る。この溝の埋土の最上層は、多量の板状の礫を含むもので、最終段階で一気に埋められたものと考えられる。遺物は埋土中から多く出土しているが、板ガラスや洋釘などを多く含み、大部分は明治以降の第二師団のものである。

###### 6号溝

63・64区で検出された東西方向の溝で、地山に掘り込んでいる。この6号溝と7・8号溝は、いずれも江戸時代の整地溝と考えられる、5層の下から掘り込まれている。方向はおおむねN-61°-Eで、上面での幅1.6m、深さ0.5mである。遺物は出土していない。

###### 7号溝

69・70区で検出された東西方向の溝で、6a層から掘り込まれている。この溝は新旧2時期に分かれる。新しい方の7号溝bは、古い方の7号溝aとほぼ同じ場所で、若干北側にずれて掘られている。7号溝bの方向はN-63°-Eで、6号溝とほぼ平行している。幅は90cm、深さは30cmを計る。7号溝aは、北側が7号溝bに接されているため、幅は不明であるが、深さは30cmである。遺物は出土していない。

###### 8号溝

調査区の南端の76・77区で検出されたもので、東西方向に伸びると思われるが、北側の縁が湾曲しており、細長い溝として伸びて行くものかどうかは不明である。南側の縁が調査区外に

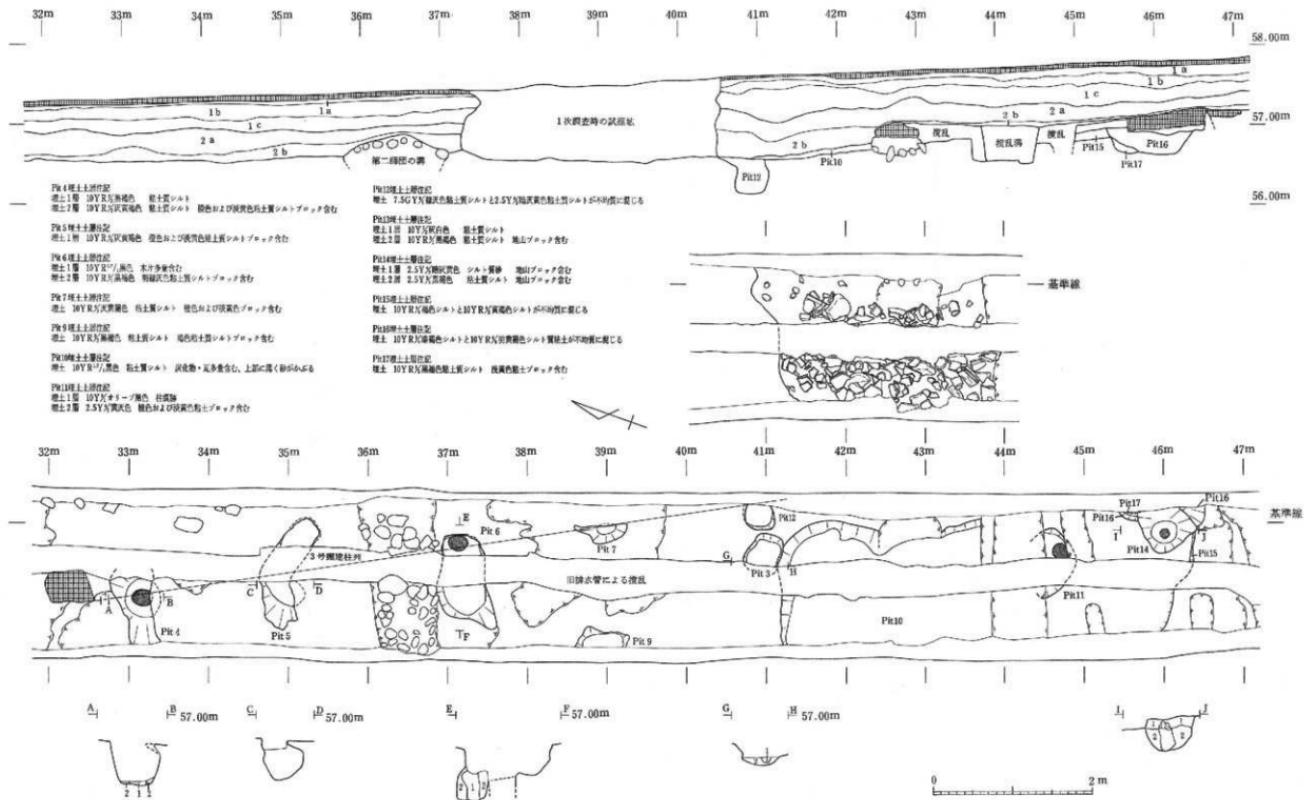


図69 第4地点II区平面図・断面図(2)

Fig. 69 Plans and cross sections of Loc. II at NM 4 (2)

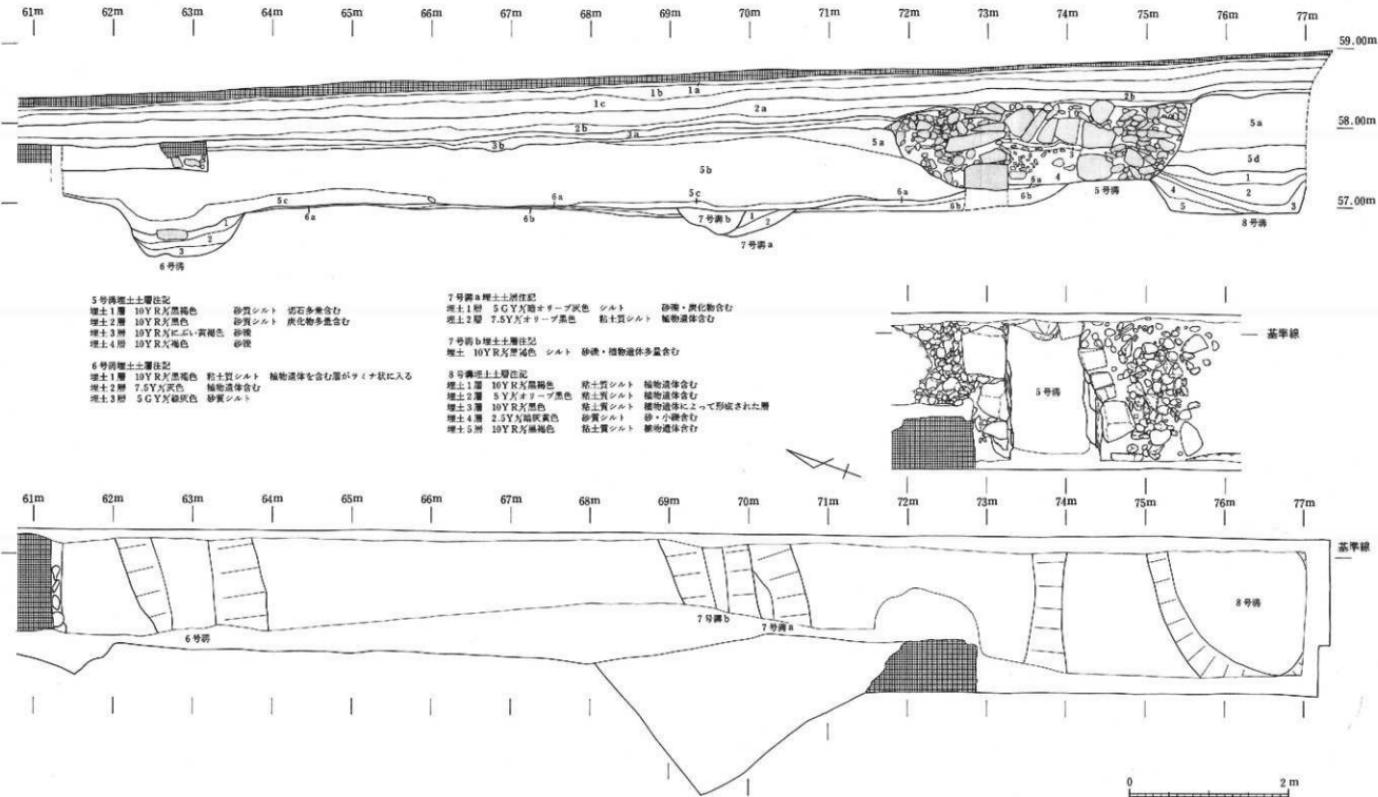


図70 第4地点II区平面図・断面図(3)  
Fig. 70 Plans and cross sections of Loc. II at NM 4 (3)

なるが、幅は2m以上になるものと考えられる。地山から掘り込んでおり、北側の縁が5号溝によって壊されているが、埋土の状況から、本来の深さは60cm程になるものと思われる。埋土1層から陶器4点が出土している。全て細片であり図示できなかったが、その内訳は、唐津産向付、志野丸皿、鼠志野皿？、美濃産擂鉢である。唐津産向付は16世紀末から17世紀初頭のもので、志野丸皿は大窯最末期のものと思われ、17世紀初頭であろう。鼠志野皿？も同様の時期の可能性がある。美濃産擂鉢は17世紀のものである。この8号溝の1m程北側には、30cmほど東西方向の落込みが確認されており、先の6・7号溝は、この落込みによって低くなつた部分に掘られている。

#### ピット

##### ピット18

57~59区にかけて、比較的大きな掘り込みが確認されている。ただしこの区域は、85年度の調査に先立つ試掘調査の際に既に掘られており、壁面での確認にとどまる。このピット18と、59・60区に東西に走る配水管による搅乱の間に、5b層がわずかに残されており、5層の整地が、おおむねこの辺りから南側になされたことが判明する。

(藤沢 敦)

## ② 遺物

当地点出土遺物の種類・点数は、表21・23・24に示した。2b層・ピット10・5号溝などから多く出土している。これらを含めて、ほとんどが明治以降の遺構・層位からの出土である。二の丸造営に伴う5層の整地層の下からは、土師質土器・箸が多く出土している以外は、遺物は少ない。特筆されるものとして、6a層から木簡が出土している。木簡は、二の丸跡では初めての例である。

### A. 陶磁器 (図71・72)

接合作業後の総破片点数は822点を数えるが、ほとんどは細片で、しかも明治以降の第二節団時代のものと考えられるものが多い。出土状況では、明治以降の整地層と考えられる2層・3層と、ピット10・5号溝で多く出土している以外では、総じて少数で、確実に江戸時代と考えられる遺構・層位からはほとんど出土していない(表21)。二の丸造営に伴う整地層と考えられる5層より下層で出土した陶磁器は、8号溝出土の4点の陶器以外は、6a層で土師質土器が出土しているのみである。これらの土師質土器は、全体の特徴が判明するものはない。皿がほとんどで、焼塩壺の底部の可能性のあるものが1点出土している。ここでは遺構出土のものと、江戸期のものをを中心に示した。

1~4が1985年調査区(I区)出土のもの、5~22が1987年調査区(II区)出土のものである。

表21 第4地点出土陶器集計表  
Tab. 21 Distribution of ceramics at NM4

地区	出土遺物	器					器					器					折器	瓦質	上部質	合計
		碗	皿	盃	盤	杯	勺	鉢	盃	盤	鉢	盤	杯	勺	鉢	盃				
		小口碗	小口盤	小口杯	小口盤	小口杯	小口勺	深腹盤	深腹盃	深腹盤	深腹盃	深腹盤	深腹盃	深腹盤	深腹盃	深腹盤				
1区	1号			1	2			不明1										不明1	深腹盤1	6
	2号				1															3
	2 b層	1	1	6	4	6		不明1	6	2	2	1						不明2	不明5	56
	4号							不明2											無底盤2	4
	4 f層	1																		1
	4 g層							1												1
	1号石敷地土	4	1	3	2			不明1	5	1	3					1	不明1	碗底盤20	42	
	2号石敷地土	1						不明3	3	1	1						不明2	不明4	碗底盤15	
	3号石敷地土																		人形1	19
	4号石敷地土																		碗底盤4	1
	ビット1																		碗底盤1	2
	ビット8																		碗底盤1	1
	ビット18																			1
	ビット27	1																	碗底盤5	6
	ビット28																		碗口原1	1
	不明																	急須6	織田頌3	13
	合計	8	1	0	7	8	11	0	8	15	2	9	2	3	0	0	1	0	0	59
2区	2号																	不明2		2
	2 b層	14	18	8	20	6		缺1	11	2	1	5						碗底盤19	不明12	219
	3 a層							不明1		1	1									9
	3 b層								不明4											4
	3 d層	4		1	2	1		不明2	4		1							不明8	不明2	25
	3 e層	1		1														不明1		4
	3 f層																		碗底盤2	3
	5層																			1
	6 a層																	無底盤52	盤1	153
	6 b・6 c・6 d・6 e・6 f層	2						4	1		不明2									9
	6 g層																	不明1		1
	5号石敷地土	19	25	6	6			缺4	2	1	1	8	2	1	8		缺1	不明1	碗底盤7	122
	5号砂質土							不明22									缺1	不明1	無底盤7	122
	5号砂質土							1												2
	8号層									2	1						向付1			4
	8 a・8 b・8 c・8 d・8 e・8 f・8 g層								1								不明1	碗底盤2		6
	8 g・9 g層							1		1							火入2			5
	8 g・9 g・10 g層							1									火入2			4
	8 g・9 g・10 g・11 g層							1		1		2	1	1	1	1	不明8	火入1	碗底盤18	96
	不明	2						2											碗底盤1	6
	合計	43	0	43	15	21	37	14	1	120	20	4	1	0	14	4	1	14	0	216
1区・2区合計	513	1	43	22	29	48	14	1	128	35	6	10	8	17	4	1	15	1	0	822

1・5・6が2b層出土のものである。1は高台裏に□明成化年製の銘をもつ、肥前産の磁器皿である。見込みには手描きの五弁花文が施される。5は口縁部の釉が剥き取られており、蓋が付くものと思われる。

7~10が3層出土のものである。9は土瓶か急須の蓋で、明治の会津本郷で同様のものが多く作られている。10は口縁部の断面がT字状を呈し、体部内外面は鉄釉を施し、口縁部にのみ灰釉?を施す描鉢である。二の丸跡第6地点で同様のものが2点出土しており(東北大学埋蔵文化財調査委員会 1990 p.23~25)、類似した製品が福島県の岸壁で出土している。

2・3が1・2号石敷整地層出土のものである。2は縁折口縁で、端部を波状にした、肥前産の皿である。口縁帯文様は、濃淡の呂須を墨弾きで区別した波文で、外面側文様は2重線の唐草文が描かれている。3は陶器の飯茶碗で、全体に細かい貫入が入る。底部に横方向に平行させる刻文を有する。

4はI区のピット1から出土したもので、鉄釉が施された鉢である。産地・時期は明確でないが、形態から江戸時代のものと考えられる。

11~14が5号溝から出土したものである。11は刷毛目を施す皿で、外面に星印の刻印が見られることから、第二師団が使用したものであろう。14は鉄釉の施された耳付きの壺と思われる。

表22 第4地点出土陶磁器観察表  
Tab. 22 Notes on ceramics at NM4

番 号	器 形	出 土 場 所	種 類	表 量	文 様	特 徴	施 釉			時 期		
							口縁	底	縁			
1 盆	2区2b層	田 S	-	77	-	発行1本文、見立糸花文、真珠	石炭	○	やや暗 やや甘	肥前	18C	35-1
2 盆	1号石塙1	田 S	217	-	染付、口縁部波文、呂須	石炭	×	普通	やや甘	肥前	18C	35-2
3 碗	2号石敷度1	田 S	-	39	-	波文	波紋	○	やや暗 やや良	大隅朝馬	18C~19C	35-13
4 盆	10区ピット1	田 S	-	78	無文	鉄釉	×	やや粗 やや甘	小柄	不明	35-18	
5 小型蓋瓶	31区2b層	田 M	52	33	染付、呂須	石炭	×	普通	肥前	18C後半~19C	35-2	
6 瓶	40区2b層	田 S	-	-	無文	石炭	○	やや粗 甘い	肥前	不明	35-14	
7 鉢形碗蓋	44~45区2b層	田 S	106	-	染付、呂須	石炭	×	やや暗 やや良	不切	19C	35-4	
8 盆	56区3b層	田 S	-	52	-	染付、呂須	石炭	×	やや粗 やや甘	肥前	17C後半~18C	35-5
9 土瓶蓋	58区3d層	田 P	72	-	染付、花春草文、ヨコリト	石炭	×	普通	やや良	会津本郷	房舟	35-6
10 描鉢	70区3b層	田 S	-	-	口縁部波文	鉄釉	○	やや粗 やや良	片?	17C後半~18C	35-15	
11 盆	5号溝跡1層	田 M	184	66	38 染付毛目に星印	石炭	×	普通	普通	不明	解剖	35-16
12 残存	5号溝跡2層	田 S	70	-	染付毛目、ヨコリト	石炭	×	やや粗 やや良	不明	不明	35-7	
13 装飾鏡	5号溝跡3層	田 S	104	-	染付三葉文、呂須	石炭	×	普通	普通	18C	35-8	
14 扇竹窓	5号溝跡4層	田 S	108	-	無文	鉄釉	×	普通	やや甘	美術館	不明	35-20
15 盆	42区ピット10	田 L	89	-	無文	鉄釉	×	やや粗 やや良	不明	不明	35-17	
16 小瓶	42区ピット10	田 M	-	86	-	無文、波文?	波紋	○	普通	やや甘	美術	35-1
17 描畫	43区ピット10	田 L	-	90	-	無文	鉄釉	×	普通	やや良	不明	35-2
18 瓶	44区ピット10	田 S	38	-	染付毛目、呂須	石炭	×	やや粗 やや良	肥前	18C後半~19C	35-9	
19 卫	41区ピット10	田 S	-	60	-	染付花文、呂須、沙羅葉模	石炭	×	やや暗 やや甘	肥前	17C	35-10
20 火入	41区ピット10	田 S	-	-	-	染付花文	波紋	×	普通	片?	不明	35-19
21 館形瓶	39区ピット7	田 S	112	-	染付花文、呂須	石炭	×	やや暗 やや良	小柄	幕末前後	35-11	
22 雪利	39区ピット7	田 S	60	-	染付、呂須、砂利模	石炭	×	普通	やや甘	肥前	17C	35-12

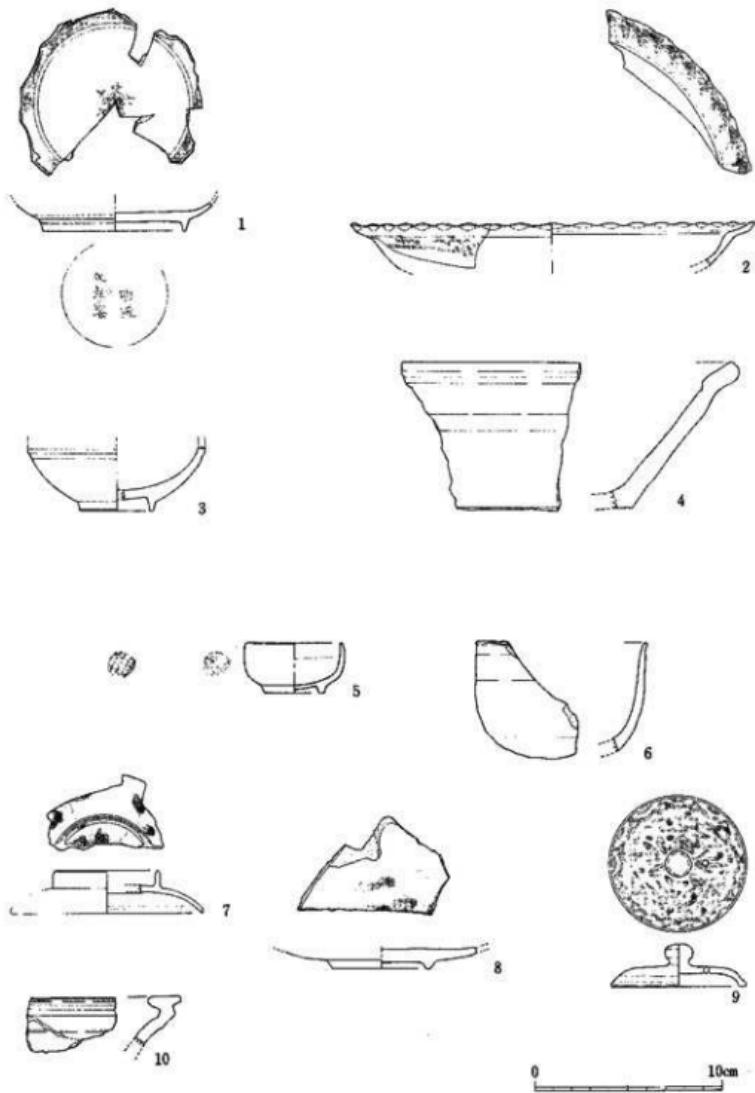


图71 第4地点出土陶磁器(1)

Fig. 71 Ceramics and porcelains from NM 4 (1) 18-19c.  
(8-10 Late of 17c.-18c.)

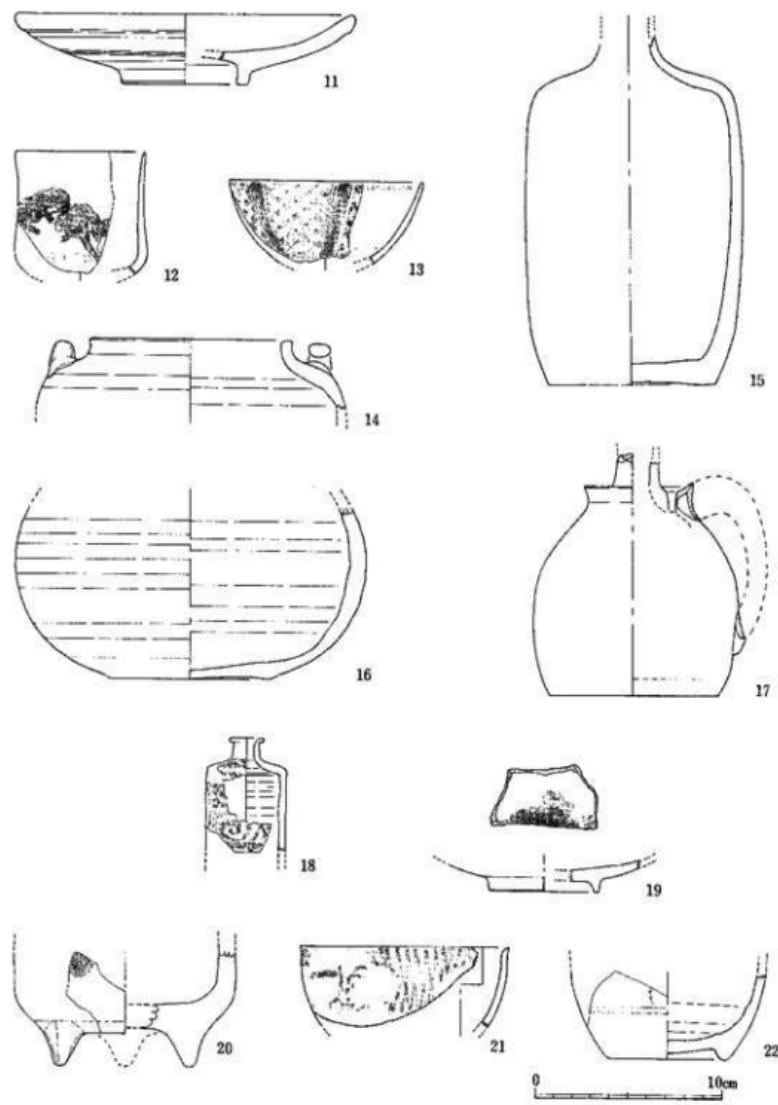


圖72 第4地點出土陶磁器(2)  
Fig. 72 Ceramics and porcelains from NM 4 (2) 18-19c. (19-22 17c.)

が、耳の数は不明である。器厚が厚く、耳も太く作られている。

15~20がピット10出土のものである。12は胴筒形の徳利で、底部は糸切である。16は、体部外面に注口の割落がわずかに残ることと、細片ではあるが口縁部の同一個体片があり、その形状から土瓶と判断した。底部には火を受けた跡が見られる。また底部には、漆黒らしい補修の跡が見られる。17は堤産の油壺で、底部は糸切りである。肩から胴部にかけて、取手が付けられ、頸部の油受けに設けられた小孔から、油が戻るよう工夫されている。18は蛸唐草文が全面に施された筒形の瓶で、油壺であろうか。19は高台に砂目積みの痕跡を残す、肥前産の皿である。20は円錐状の足を持つ瓦質の火入で、胴部に菊花の刻文があり、堤産の可能性もある。

21・22が掘立柱列3のピット7から出土したものである。21は薄い吳須で窓絵の中に笠文を描く飯茶碗である。22は砂目積みのある徳利の底部で、内面に厚く釉の垂れた跡が見られる。

(本田泰貴・藤沢 敦)

## B. 瓦

江戸時代初期の6a層、および江戸時代と考えられるピット群からは平瓦と丸瓦の破片がわずかに出ており、他は共伴する遺物から明治時代初期のものと考えられる。特にピット10と52・53区の攪乱、および5号溝に集中している(表22)。分析の手順は第7地点と同じ。

### 軒丸瓦

すべて小片で、文様が確認できるのは九曜文1点、巴+連珠文2点のみである。

### 軒平瓦類(図73)

板状の棧が貼り付いていた痕跡がある破片が、I類に1点(1)、II類に2点(2・3)あることから、丸瓦形の瓦当の付かない軒棧瓦があったことが分かる。これは後述する棧瓦のI・II類と組合わされて、軒の軒先を飾った可能性がある。

I類は2個体、II類は9個体出ており、三枚笠と唐草文で、第7地点のI・II類と同じである。III類は三引文で1個体(5)、IV類は星十唐草文で2個体出ている(4)。IV類はその文様から鎮台以降に製作されたものであろう。ピット10と3e層から各1個体出ており、ピット10ではI・II類と共伴するので、I・II類も鎮台以降に使用された可能性が出てくる。III類は三の丸巽門に類例がある(金森 1985 p.520・529)。伊達家の家紋の三引文を使っているので、二の丸時代に製作されたものとすると、5号溝においてII類と共伴する。以上からこれらの構造においては、二の丸時代の瓦と鎮台以降の瓦が混在している、もしくはI・II類が向時代に渡って使用されたことになる。

V類は1次調査区から8個体出ており、第8地点から出土したものと同じく、無文の瓦当である。表面に数字を刻印したものがあること、および第8地点での共伴遺物から陸軍時代のものと推定される。

### 平瓦(図74-7~9)

ピット10、次いで5号溝から多量に出ているが、細片が多く抽出資料は全体で13点のみである。形態的特徴は第7地点のものにはほぼ同じだが、表面の側縁に沿って面取りしているものがある(13点中8点、図74-9)。調整痕は第7地点と異なり、上下両端が横方向のナデであるほかは縱方向のナデが主である。表面が横ナデのものは抽出資料中では3点のみである。ナデはあまり明瞭なものではなく、多くの場合、縱横両方向が混在している。

表23 第4地点出土瓦集計表  
Tab. 23 Distribution of roof tiles at NM4

[個数・重量(公斤)の割に表示]

区	出土地点	二瓦頭	丸瓦頭	井字瓦	和瓦	板瓦	その他	不規則
I	1層	12 1.1		1(V頭1) 0.09		1(IV頭1) 0.3	22(頭目1) 1.7	20 0.6
	2層(2b層含む)	29 9.3	17 1.1	8(V頭5) 0.5		7(IV頭4) 0.8	51(頭目4) 2.4	152 3.9
	1号山腹地上	29 4.5	8 0.4	1(1層1) 0.09		2(IV頭2) 0.2	1 0.2	49 0.7
	2号山腹地上	14 1.4	5 0.3			2(IV頭1) 0.1	2(頭目2) 0.65	29 0.4
	3号山腹地上	10 0.7		1(V頭1) 0.05		3 0.3	8(頭目8) 0.5	5 0.03
	4号山腹地上		2 0.05					
	ピット8	125 14.2	5 1.4			6 0.6		106 1.5
	ピット19		2 0.06					
	ピット20		1 1.5					
	ピット24							1 0.05
	ピット27		1 0.1					1 0.02
	ピット28		1 0.1				1(頭目1) 0.03	
	不明	8 0.37	11 1.0	4(II+IV頭1) 2.1		4(IV頭1) 0.66	2(頭目1) 0.08	22 0.45
	合計	257 31.57	53 6.01	15 2.43	8 0	23 2.96	87 4.36	385 7.32
	2b層	144 13.8	52 4.5	4 0.24	2 0.53	7(IV頭3) 0.29	36(頭目10) 1.82	252 7.02
	3a層	12 1.2	18 1.5	1 0.07	3 0.6		1 0.04	56 1.2
	3b層	12 1.4	11 0.7					10 0.15
	3d層	40 4.9	7 0.5	2(IV頭1) 0.3		5 1.1	1 0.1	37 1.8
	3e層	15 6.5	3 0.2			6 0.6	1 0.3	47 1.7
	3f層	10 1.6	1 0.07			2 0.5		59 1.5
	5b層	10 1.3	7 1.0				3 0.2	
	6a層	3 1.0	2 0.1					3 0.05
	44~450段差					1(IV頭1) 0.5		
	50~320段差	60 5.4	6 0.8			3(II頭1+IV頭1) 2.1	19(頭目7) 2.4	14 0.4
	64段差	1 0.4						
	5号山腹土	180 18.0	83 18.0	4(II+IV頭1) 1.2	1 0.3	7 1.0	68 3.7	
	ピット4						1 0.06	
	ピット5							2 0.06
	ピット6	1 0.4	1 0.03					
	ピット7	1 0.5						
	ピット10	326 88.5	33 8.9	25(II頭1+IV頭1) 6.3		100(II頭14+IV頭6+IV頭2) 28.7	32 6.7	140 5.7
	ピット11	1 0.3	2 0.2			1 0.1		3 0.05
	ピット14	1 0.3	3 0.2			1 0.6	1 0.3	5 0.1
	右計	767 146.5	229 36.7	36 8.11	6 1.43	127 34.59	80 12.92	716 23.43
I区+II区合計	1034 128.07	282 47.71	51 10.94	6 1.43	156 37.55	179 17.89	1101 30.75	

### 丸瓦（図73-6）

5号溝、次いでピット10から多く出ているが、細片が多く、抽出資料は2点のみである。形態的特徴、製作・調整痕は第7地点にはほぼ同じである。

### 棟瓦（図74-77）

IV類以外はピット10に集中している。I・II類は棟の一端が残っている破片について、棟の突出ないし切込みがあるか否かによって識別した。細分できなかった棟瓦の多くは、I・II類の区別が付かなかったものである。

I類：幅約60mmの板状の棟を貼付けたもの。完形品は無く、Ia類は約15mmの頭の突出部分を持つ破片（10・11）。Ib類は逆に尻の切込み部を持つ破片で、切込み長が80~100mmと長いことから、ここに棟の瓦が組み合うと考えられる（12・13）。Ia・Ib類が同じ型の瓦の破片とすると、長さ約280mmで、幅は棟を欠いた破片1点（15）から約280mmと推定される。Ic（14）・Id類はそれぞれIa・Ib類の右棟瓦である。

こうした板状の貼付け棟を持つ瓦は通常の建物の屋根ではあまり知られていないので、擲瓦の可能性が考えられる。その場合、1列のみ葺いていたとすると、突出した頭の棟部分が軒の装飾的効果を出していたことになる。しかし、瓦の長さが短いことから、數列重なっており、軒先に先述の軒棟瓦を付けていた可能性も考えられる（図79下段の復元図）。棟部は熨斗瓦が見当らないので、丸瓦を載せていた可能性がある。通常の棟瓦は右棟であって、左棟は特殊な場合に使われるが、ここで出土しているI類は左棟が多い（個体数はIa類10点、Ib類4点：Ic類1点、Id類1点）。

II類：第6地点（東北大学埋蔵文化財調査委員会 1990）との比較から擲棟瓦と推定される（図79上段の復元図）。棟側の棟の一端が薄くなり、棟の構造を受けるようになっている。完形品は無いが、尻側に釘穴、差込み部に水切り溝を持つと推定される。Iia類は右棟10、Iib類は左棟10。Iic類は差込み側の破片である（18・19）。個体数はIia類3点、Iib類1点、Iic類1点である。釘穴だけ、水切り溝だけの破片は抽出しなかったので、実際にはII類の数はもっと多いと考えられる。

III・IV類：通常の建物の屋根の棟瓦で、III類は棟の屈曲部に稜線が通るもの（20・21）、IV類は緩やかに屈曲するものである。IV類は主にI区に散在し、「その他」の項で述べる櫛目を持つ破片が1点ある。

### 輪違

ピット10より2点、74区より1点出土。

### 面戸瓦

第7地点と同型のものが、52区攪乱、5号溝より各1点出土。

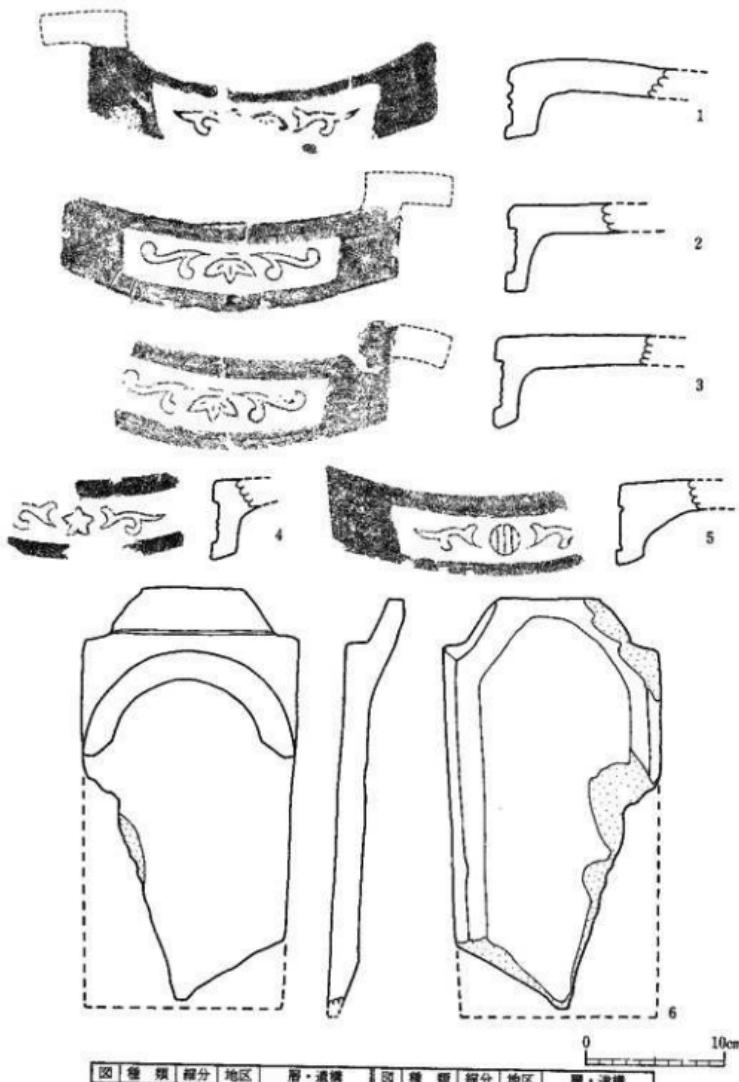


図	種類	編分	地区	層・遺構	図	種類	編分	地区	層・遺構
1	軒棟瓦	I	42区	ピット10堆土	4	軒平版	IV	42区	ピット10堆土
2	"	II	43区	"	5	"	III	74区	5号溝
3	"	"	42区	"	6	丸瓦	3区	ピット20堆1層	

図73 第4地点出土軒平瓦・丸瓦  
Fig. 73 Flat eaves tiles and round roof tiles from NM 4  
Mid. of 19c.

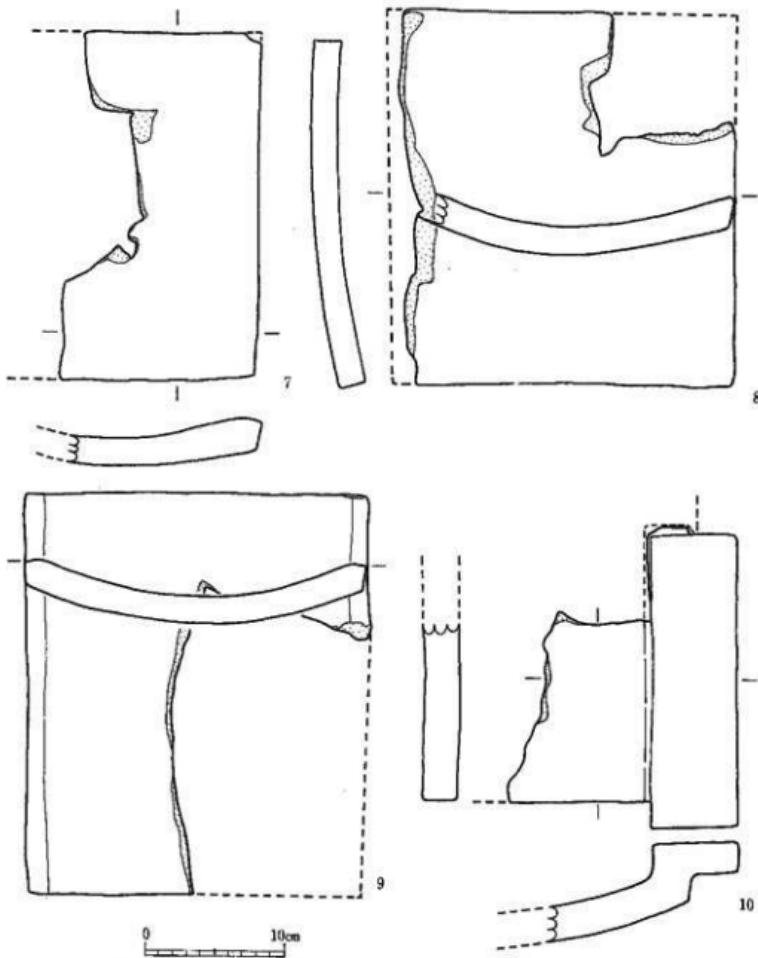


表 NM 4 平瓦調査表

図	地区	層	長	頭幅	瓦幅	谷深	厚	重
7	6区	ビット8	261				21	
8	〃	〃	289				23	
9	43区	ビット10埋土	285	244		23	23	
	n		12	3	0	3	13	0
	max		290	244		23	23	
	min		235	233		20	17	
	♂		271	236.7		21.7	21.2	
	♀		18.6	6.4		1.5	1.9	

図74 第4地点出土平瓦・棟瓦(1)  
Fig. 74 Flat roof tiles and pan tiles from NM 4

Mid. of 19c.

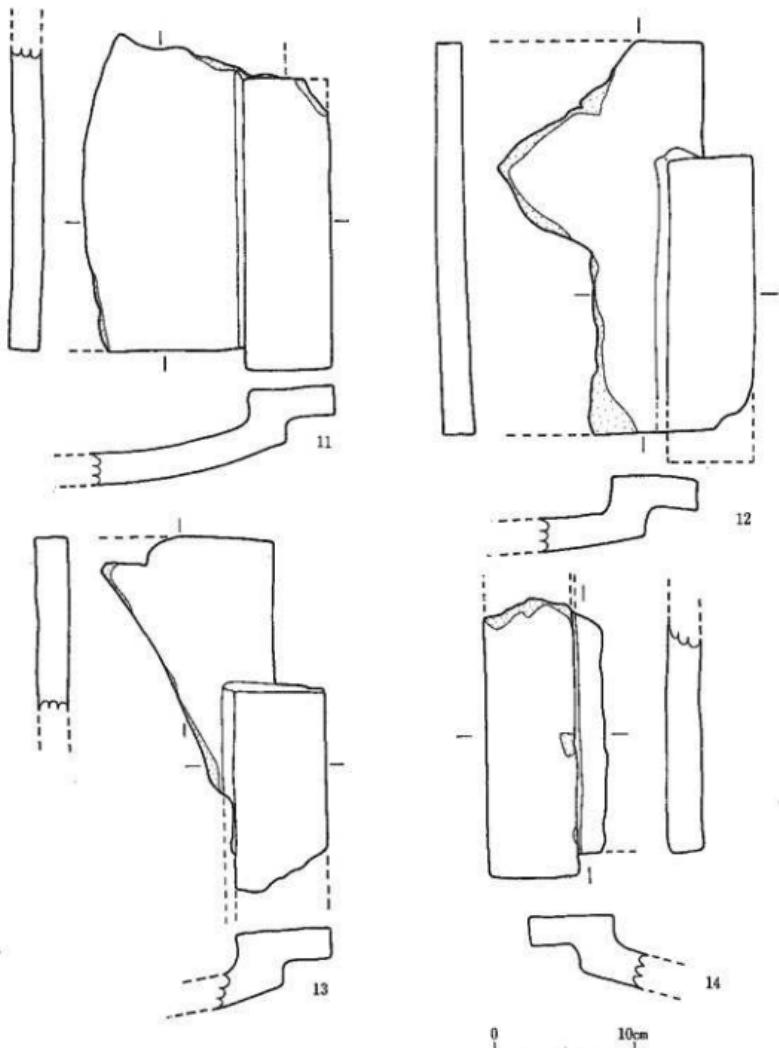


図	種類	細分	地区	層・遺構	図	種類	細分	地区	層・遺構
10	线瓦	I a	42区	ピット10埋土	13	线瓦	I b	44区	ピット10埋土
11	"	"	43区	"	14	"	I c	43区	"
12	"	I b	44区	"					

図75 第4地点出土棟瓦(2)  
Fig. 75 Pan tiles from NM 4 (2)

Mid. of 19c.

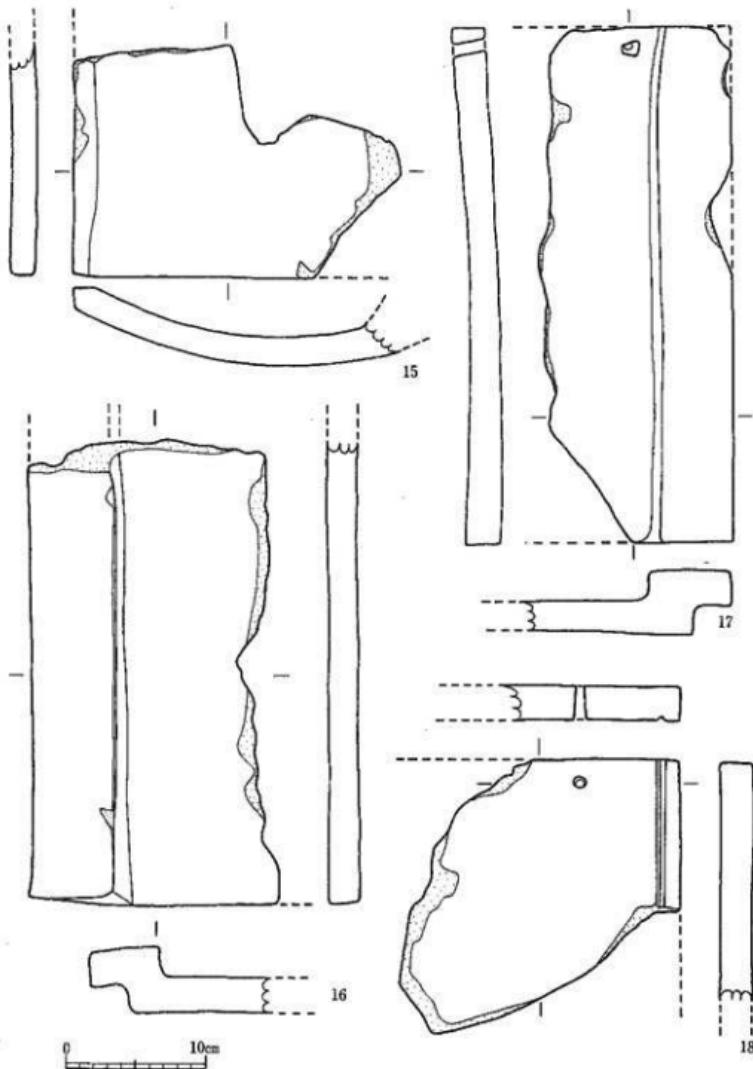


図	種類	細分	地区	層・造構	図	種類	細分	地区	層・造構
15	瓦	I	43区	ピット10埋土	17	瓦	II b	43区	ピット10埋土
16	"	II a	"	"	18	瓦	II c	"	"

図76 第4地点出土瓦(3)  
Fig. 76 Pan tiles from NM 4 (3)

Mid. of 19c.

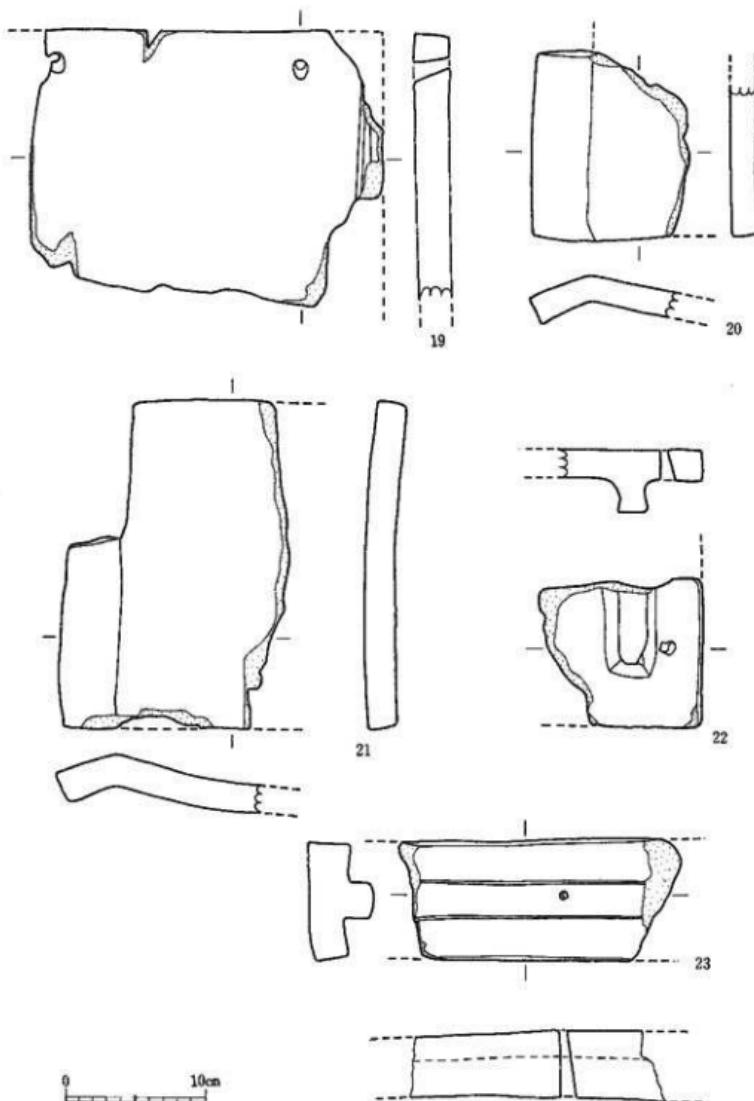
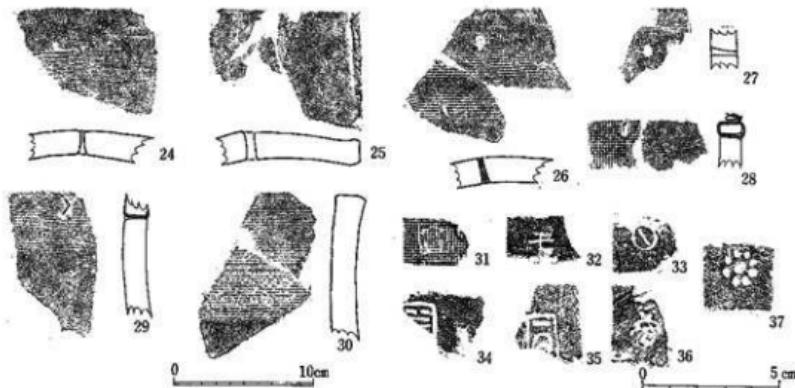


图77 第4地点出土模瓦(4)·道具瓦  
Fig. 77 Pan tiles and other roof tiles from NM 4

Mid. of 19c.



番	種類	地区	層・遺跡	番	種類	地区	層・遺跡
19	棟瓦IIc	42区	ピット10壁土	29	割裂斗瓦	2区	3号石敷整地層 境1層
20	棟瓦III	*	*	30	*	85年区	2b層
21	*	43区	*	31	刻印・平瓦頭端部	2区	*
22	道具瓦	44区	*	32	* 棟瓦残端	25区	*
23	*	42区	*	33	* 平瓦頭端部	69区	*
24	櫛目付瓦	52区	搅乱	34	*	43区	ピット10壁土
25	*	3区	2b層	35	* 丸瓦外面	72区	5b層
26	*	87年区	*	36	* 丸瓦五線・男根被部	68区	3a層
27	*	36区	*	37	* 平瓦頭部	71区	2b層
28	割裂斗瓦	2区	*				

図78 第4地点出土その他の瓦  
Fig. 78 Various roof tiles from NM 4

Mid. of 19c.

#### 道具瓦（図77-22・23）

用途不明のものが2点出土。23は第6・7地点出土のものと同型で、釘穴が斜めに通るのが特徴である。

#### その他（図78-24~28）

滑り止めの櫛目の付いた破片が見られる。第7・8地点からも出土しており、当地点ではI区に多い（2層、2・3号石敷整地層等）。II区では2b層と52区搅乱に見られる。二の丸時代に属するのか鏡台以降に属するのか不明である。平瓦もしくは棟瓦と考えられる。櫛目をつけた棟瓦IV類の破片も1点検出されているが、全体として櫛目や厚さに変化があることから複数の種類の瓦が含まれている可能性があるので、ここではその他として扱う。全体の43%が赤味を帯びている。こうした特徴は第4・7・8地点の他の瓦の種類には見られない。焼成時に生じた特徴か、火災等による二次的な変色か不明である。特に裏面が表面よりも赤くなっている破片が見られるので、火災とすれば、屋根の内側から火を受けたことを示すのだろうか。II区2b層からは、釘穴に銅釘もしくは銅線が残存するものが1点出ている。また割裂斗瓦と推定さ

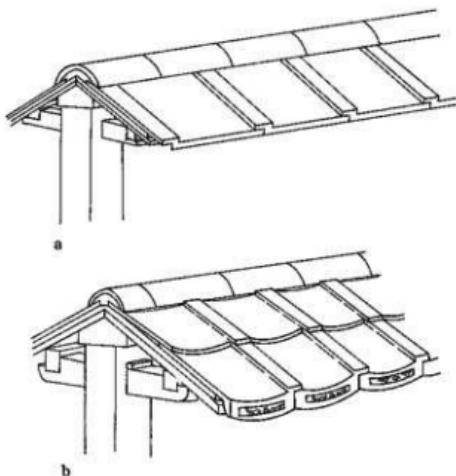


図79 瓦屋根復元模式図  
Fig. 79 Restored illustrations of roofs at NM 4

れる破片が、I 区 2 層と 3 号溝から計 3 点出ている(28~30)。これは櫛目が湾曲に直交することが、平瓦あるいは棟瓦と推定される他の櫛目瓦と異なり、裏面に櫛目の方向に溝を付け、そこで割っている。直径 1 mm の細い銅線が通され、1 点は破損部で銅線が結ばれている。熨斗瓦と考えると櫛目が瓦の傾斜と直交し、滑り止めの役目を果たし得る。湾曲を考えると、滑り止めは上面につくが、何枚か重ねることを考えれば、それでも良いのだろう。

#### 刻印 (図78-31~37)

すべて二の丸初出である。31は高、32はモ、33は丸に一、36は草冠の漢字のように見える。37は九曜文である。また数字を刻印した先述の軒平瓦 V 種がある。

以上をまとめると、第 4 地点出土の瓦は、ほとんどが平瓦、丸瓦、櫛桟瓦で、二の丸最終段階から陸軍時代の初期に使用され、廃棄された物と推定される。左棟が多い I 種の櫛桟瓦が実際にどのように葺かれていたのか興味深い問題である。また櫛目の付いた瓦に割熨斗瓦が有ることが確認された。

#### C. 木製品 (図80・81)

6a 層及び 8 号溝に集中している。地層から二の丸建築(1638年)以前、江戸時代初期の伊達宗泰の屋敷時代の遺物である。主なものに木筒 1 点、箸、桶がある。また明治初期のビット 10 から抜けた木片が集中して出土した。

#### 木筒(1)

枳文 「○ [ ] 宇右衛門」  
○ [ ]

表裏に墨跡が認められるが、上記人名以外はほとんど消えかけており、赤外線写真でも判読不能。上部に角錐で穿孔されており、形態から第5地点出土の木筒（佐久間他1989）同様、荷札と考えられる。ただし、第5地点のものと異なり、下方が尖っており、品物あるいは包んでいた俵に直接刺したもののように思われる。その場合、上の孔が問題となる。例えば孔に紐が通され、品物に結わい付けられるとともに下方で固定されたのだろうか（田中秀和氏による）。

#### 箸（3~10）

白木の箸で6a層出土のものは計554点中、完形品57点、2分の1以上の破片が169点である。長さは8のみ23.5cm（約8寸）で、他はすべて約26cm（8.5寸）であり、第2地点（東北大学埋蔵文化財調査委員会 1985）の6寸に比べ、長い。藤本（1990：pp.167~168）が指摘するように、こうした箸は饗宴に使用された後、一括して捨てられた可能性がある。

#### 桶

6a層より底板1点（2）、側板と思われる破片6点が出ている。うち2点は片隅が切り落とされているが、理由は判らない（11・12）。

#### 鉛筆

明治以降の2b層より1本出土（15）。唐澤（1968：pp.81~83）によれば、鉛筆は江戸初期にオランダ人により輸入された。明治初期から中期にかけて日本でも細々と製作されはじめ、明治末に鉛筆工場が各地に建ち、大正時代に大発展した。第8地点の遺物から伺い知れる筆と硯、石筆と石盤、そして紙石盤、第4地点の鉛筆とノートという流れは筆記具の革命であったという。

#### D. ガラス製品（図81）

5号溝より多く出ているが、復元できるものは少ない。その中に、直線的に大きく開く、乳白色のガラスの破片が多く含まれており、ランプの笠と思われる。容器には、両側面に型の合せ目が残る小型の瓶（13）と浅い瓶がある（14）。

#### E. 骨角器（図81-17・18）

第8地点出土例に類似した、鹿角製の笄かと推定される破片が2点出土している。

#### F. その他の遺物（図81）

明治以降のものとして、真鍮製の釣り針1点（16）、碁石1点（19）、靴と推定される皮製品2点などが出土している。また縄文時代以前の石器5点、縄文土器1点が出土している。縄文土器は細片であるが、撲糸文が施されている。

（山田 しょう）

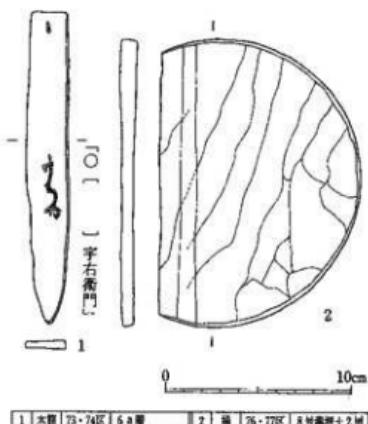


図80 第4地点出土木簡・木製品

Fig. 80 Wodden tablet and trough from NM 4

Beg. of 17c.

表24 第4地点出土その他の遺物集計表

Tab. 24 Distribution of various implements at NM4

(点数、木片等のみグラム数)

地 区	出土地點	木 製 品			ガラス		金 鉱 製 品			骨角製品	そ の 他	自 然 遺 物	
		製 品	木端等	板	容器	片釘	和釘	そ の 他	種 物			動 物	
I 区	25層					2	1	ボタン1		石器1、珪化木1		貝1	
	1号石礫堆土			1		1	1			石器1		木片1	
	3号石礫堆土											貝1	
	ピット19											木片1	
	ピット26					3							
	ピット28									石器1			
	不明				3			不明1					
II 区	25層	漆製品2	110	20	43	28	8	漆瓦1、不明6 ボタン1、ゴム1	鉛筆1、鍼?1 ボタン1、ゴム1			骨・ウココ有	
	3号層							寛永通宝1					
	3b層				1			不明鐵貨1					
	3d層						1						
	3e層			1									
	6号層	漆554、漆側板6 木端1	357										
	44-45層									石器1			
	50-52層		8	3	1	31	1	針灸1、不明2					
	5号層		7	30	70	3		不明釘2	鋸?1	鉛筆1		骨有	
	8号層	漆6、漆輪1 漆底板1	425									モモ4、その他	
	ピット4						1						
	ピット5						1			石器1、編文土器1			
	ピット6		7	1								タルミ1	
	ピット10	漆5、漆母漆板1	1905	1			2			漆瓦1、釘針1			
	ピット11		15										

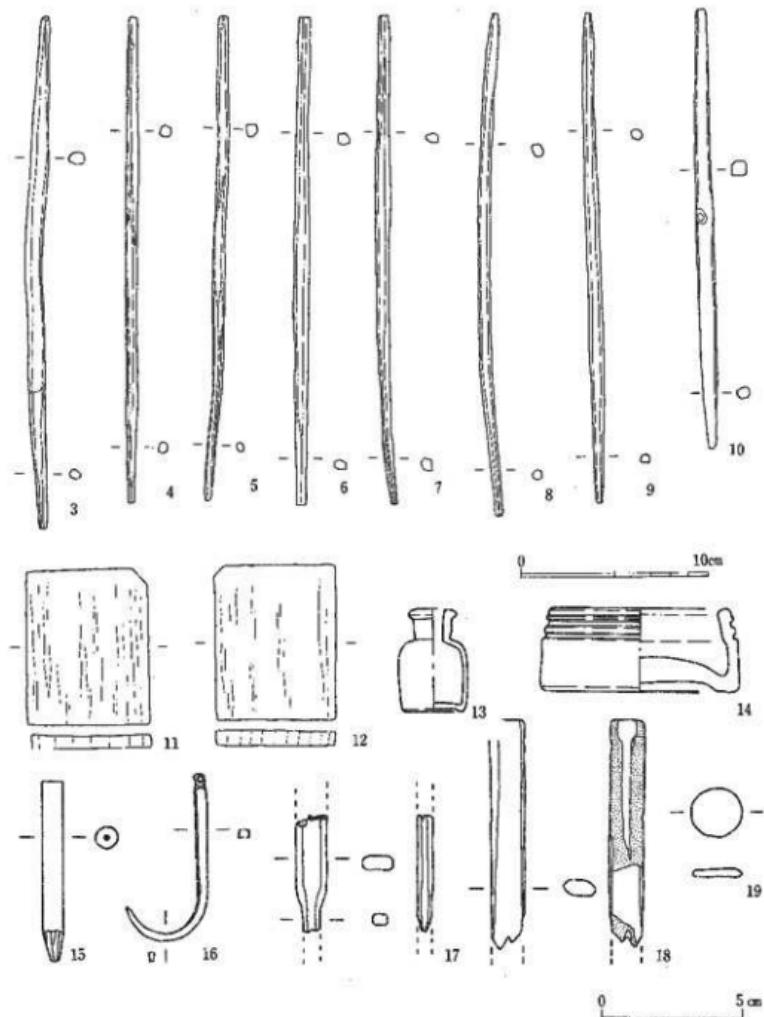


図	種類	地区	層・遺構	図	種類	地区	層・遺構
3-10	箸	71・72区	6a層	15	鉛筆	68区	2b層
11・12	鋪便板?	73・74区	"	16	釣針	44区	ビット10埋土
13	ガラス瓶	74区	5号溝埋1層	17	笄?	36区	2b層
14	"	"	" 3層	18	"	74・75区	5号溝埋2層
				19	菴石	44区	ビット10埋土

図81 第4地点出土その他の遺物  
Fig. 81 Various implements from NM 4

3-12 Beg. of 17c.  
13-19 Meiji period

### 第III章 考察

今回の調査で確認された3列の掘立柱列と4号溝跡は、いずれも真北方向を基準として、N-29°~31°-Wの方向を取る。また、二の丸造営以前と考えられる下層の6・7号溝跡の方向は、N-61°~63°-Eで、これとほぼ直交している。1~4号石敷整地層の下面の溝状の落込みの方向はN-53°-Eで、5号溝の方向はN-67°-Eと、これらとは若干ずれる。しかし、これらは明治時代に入ってからの建造である可能性が強いことから、ここではとりあえず除外して考えるとすると、第4次調査地点で検出された遺構は、おおむね南北方向で、30°ほど西偏した基準に沿って造営されていることとなる。

これまで東北大埋蔵文化財調査委員会で調査した成果から、絵図に残る二の丸建物との対比を行ったものとしては、1983年度に調査した、第2次調査地点の成果があげられる。この第2地点では、礎石建物跡が検出された。この礎石建物跡は、同じ年度に調査した第3次調査地点で検出された二の丸南端を区画する石垣との位置関係から、小広間裏の廊下に対応するものと推定した。このような成果をもとに、「東北大埋蔵文化財調査年報1」の「付図1現況建造物・道路と二の丸建造物との関係」において、現況での二の丸建物群の推定位置を示した。この二の丸建造物の現況での位置推定の根拠の一つは、この第2地点の礎石建物跡を小広間裏の廊下に対比することであり、さらに留学生宿舎と記念講堂前の公園との境の段差の2.5mほど西側に2~3段ほど現存する石垣を、「詰の門」の南側の外郭線の石垣が遺存しているものとする考えであった。現在の大学の道路や建物は、17°~19°ほど西偏した地割で造られている。この石垣は、現在の段差とほぼ平行し、わずかに西に振れており、ほぼN-20°-Wの方向を取る。また、第2地点検出の礎石建物跡は、磁北から15°ほど西偏していた（仙台付近では磁北は真北から7°ほど西偏する）ことから、「年報1」の「付図1」での復元では、二の丸建物群は、現在の大学の地割より、わずかに西に振れるN-21.5°-Wの方向で復元されている。そのため今回の第4次調査地点の遺構の方向とは、10°近くのずれが生じることとなっている。

これまでに、二の丸内で建物が検出されている地点としては、第2・第5・第9地点の調査があげられる。第2地点で検出された礎石建物跡の方向は、前述のように磁北から15°ほど西偏するが、調査範囲が狭いこと、磁石の精度で問題を残している。また、調査時の基準点がすでに失われており、国土座標上で検証できない。1988年度に本調査を行った第5地点では、上層から二の丸が元禄期に拡張された後の中奥の建物群、下層からは伊達政宗の長女五郎八姫の屋敷である西屋敷の建物群が検出されている（東北大埋蔵文化財調査委員会 1988）。これらの建物群は、上層・下層ともにN-24°-W前後の方向をとっている。1990年度に本調査を行った第9地点では、上層から二の丸建物群、下層から伊達宗泰の屋敷の建物群が検出されている

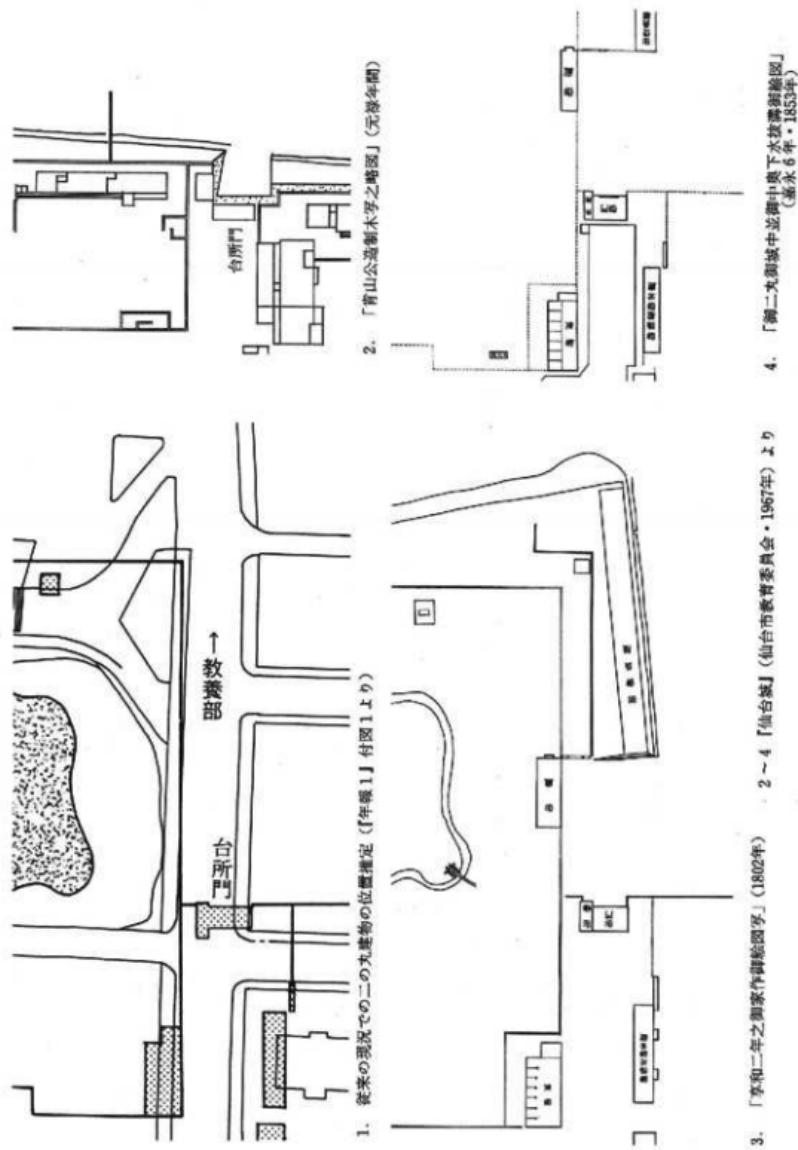


図82 第4地点付近の変遷

Fig. 82 Transition of the area around Loc.4 shown on historical maps

3. 「享和二年之御家作御宗園序」(1802年)

2～4 「仙台城」(仙台市教育委員会・1967年) より

4. 「隅二十九脚柱中立御下水抜管輪輪」

(涌水6年・1853年)

(東北大学埋蔵文化財調査委員会 1991)。ここでは、上層の二の丸建物群はN-24°-W前後、下層では、N-27°-29°-W前後の方向である。第5・第9地点の調査成果については、いずれも詳細な検討を加えていない段階なので、まだ不確定な部分を残すが、主要な建造物の方位については、上記のように考えて間違いないものと思われる。したがって、これまでの調査成果からは、二の丸建物群は24°ほど西偏する基準に沿って造営されている可能性が高いと考えられる。そうすると、20°西偏する留学生宿舎裏の石垣を、二の丸正面の外郭線の跡と見なして良いのか否かも、再検討する必要が出てきたこととなる。

今回の調査で検出された遺構の内、下層の6~8号溝跡は、後述するように、伊達宗泰の屋敷跡の建物群の方位と対応するため問題は無い。問題は掘立柱列と4号溝跡である。

従来の位置推定では、二の丸の裏門である「台所門」から北に伸びる外郭線が、当調査地点の付近にくると推定されてきた。この外郭線は、元禄年間に旧西屋敷の範囲に二の丸が拡大されて以後のものであるが、いずれの絵図においても、二の丸正面(東側)外郭線や二の丸内の建物群と同じ方向で描かれている。絵図の記載を信用するとなると、1~3号掘立柱列は、二の丸内の建物の方位とも、上記の石垣の方位とも合わないことから、掘立柱列のいずれかが外郭線の堀跡とする推定は困難になる。あるいは、二の丸内の主要建物群の方位は一定していても、外郭線など周辺部分では、微妙に方向がずれてくる可能性も考えられないわけではないが、絵図の中には方眼に沿ってこれらの建造物が並んでいるものもあり、やはり問題が残る。

もう一つの可能性としては、従来の推定より、二の丸の建物群が全体に西に振れていたと考える場合である。二の丸内の建物群の方位がN-24°-W前後であることから、第2地点の礎石建物を中心に、従来の位置推定からさらに西に2~3°振った場合、二の丸外郭線は、今回の調査範囲からははずれ、外郭線北東隅の外側にある、「御借長屋」が相当してくる可能性がでてくる。「御借長屋」は、二の丸建物よりさらに5°前後西に振れて絵図に描かれており、今回検出された掘立柱列などの方向と良く対応てくる。よって、1~3号掘立柱列と4号溝は「御借長屋」かそれに対応する何らかの施設であると考えることもできる。ただし、この場合、「台所門」が調査区にかかるはズであるが、うまく対応するような位置に遺構が認められない。また、現存する最も古い仙台城が描かれた絵図である、正保2・3年(1645・46)の「夷州仙台城絵図」では、西屋敷が二の丸に取り込まれる以前の状況が描かれているが、二の丸裏門の前から北側の侍屋敷地までの間の西屋敷の東側は、南北に長い「ため池」となっている(図63)。「御借長屋」は裏門の正面やや東よりの位置にくるため、下層にこの「ため池」がかかってきても良さそうである。しかし、今回の第4次調査地点の調査では、I区の北側では、比較的低湿な状況を呈していたものの、ため池と考えられるような遺構は検出されなかった。

以上、いくつか考えられる可能性を検討してみたが、調査範囲が狭いこともあり、いずれに

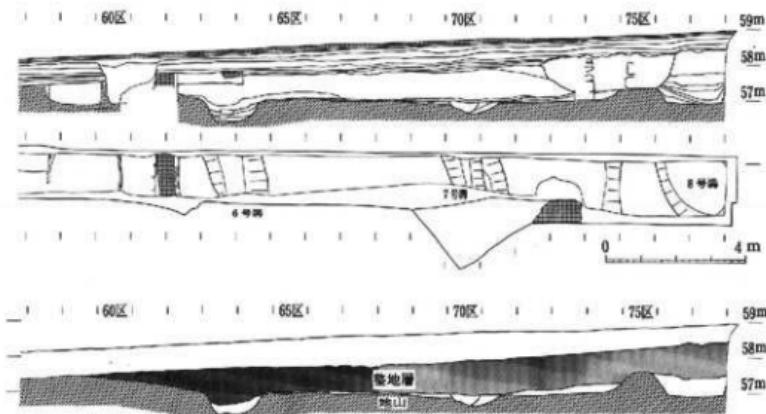


図83 旧地表面と整地層の関係  
Fig. 83 Relation between *Edo* habitation surface and fill layer

しても、今回の調査成果だけで判断することは困難であると言わざるをえない。今後、多くの建物跡が検出されている、第5・第9地点の整理・検討の過程で明らかにしていくことが必要であろう。

第4地点の調査では、II区の南端付近で大規模な整地層（5層）と、その下層から東西に伸びる3条の溝跡が検出された（6～8号溝）。この下層遺構から出土した遺物は、時期の判明するものは少数であるが、17世紀初頭頃のものと考えられる。また、5層の整地が大規模である点もあわせて、5層は二の丸造営時の整地層と考えられる。下層検出の溝跡は、正保2・3年の絵図によれば、二の丸とともに西屋敷の境界付近に位置する。寛永15年（1638年）に二の丸が造営される前には、伊達宗泰の屋敷がここにあったことが知られており、これらの溝跡は宗泰の屋敷と西屋敷を区分する何らかの施設であったと考えられる。これらの溝跡の方向は、30°近くずれており、第9地点の伊達宗泰の屋敷跡と考えられる下層建物群の方位とはほぼ対応する。

今回検出された下層遺構のうち、8号溝とその北側の74・75区で確認された落込みの間は、土手状に掘り残された高まりとなっている。この高まりは、その上部が5号溝によって破壊されているが、8号溝の埋土の状況から、江戸時代初頭の地表面と整地層の関係を復元してみたのが図83の下段に示した模式図である。このように考えると、5層の整地が始まる59区の地山のもっとも高い部分と、75区の土手状の高まりの高さは、ほぼ同じ高さとなり、その間は幅の広い浅い掘状を呈していたものと考えられる。6・7号溝は、この幅の広い落込みの中に掘られている。この範囲に堆積した6層の状況と、6a層上面から多量の木製品が出土していること

から、ここは低湿な状況であったことがうかがえる。6・7号溝は、それらが平行していることから、道路の側溝の可能性も考えたが、以上の点からその可能性は薄いだろう。むしろ伊達宗泰の屋敷と西屋敷との間を区画する堀状の浅い掘り込みの中で、その排水を目的とした溝であった可能性を考えておきたい。8号溝は、これらの南側にあって、さらに宗泰の屋敷を区画するものであろうか。

この第4地点の調査までは、二の丸跡の調査では、江戸時代初頭の遺物の出土や、二の丸造営以前にさかのぼる可能性のある遺構も、いくつかの地点で検出されてきた。しかし、確実に二の丸造営以前に遡る遺構の検出は無く、今回の調査が初めての例となり、これによって宗泰の屋敷と西屋敷との境が、ほぼつかめることとなった。伊達宗泰の屋敷と西屋敷については、絵図などの資料がほとんどなく、江戸時代初頭の当地域の様相を解明していく上で、貴重な資料となつた。

(藤沢 敦)

## 〈引用・参考文献〉

- 朝倉治彦・安藤菊二・橋口秀雄・丸山信編 1970 「事物起源事典(衣食住編)」東京堂出版
- 阿刀田令造 1996 「仙台城下町の研究」斎藤報恩会博物館図書部研究報告第四
- 伊東信雄 1967 「仙台城の歴史」『仙台城』pp. 1~22 仙台市教育委員会
- 伊藤正義他 1990 「東北の陶磁史」福島県立博物館
- 大橋康二 1989 「肥前陶磁」ニューサイエンス社
- 人竹憲二 1989 「大堀・長井屋窯跡」浪江町教育委員会
- 人樋相馬既協同組合・創業三百年祭実行委員会 1988 「創業三百年記念誌」
- 岡泰正他 1987 「明治のガラス展—びいどろからガラスへ—」神戸市立博物館
- 奥津春生 1967 「仙台城の地形・地質」『仙台城』pp. 123~165 仙台市教育委員会
- 金森安彦 1985 「三の丸御門跡(VII区)の調査」『仙台城三の丸跡発掘調査報告書』
- 仙台市文化財調査報告書第76集 pp. 509~546
- 唐澤富太郎 1968 「図説 明治百年の児童史 下」講談社
- 元興寺文化財研究所 1982 「中・近世瓦の研究—元興寺篇」
- 九州陶磁文化館 1984 「国内出土の肥前陶磁」佐賀県立九州陶磁文化館
- 瓢箪麦酒株式会社編 1957 「瓢箪麦酒株式会社五十年史」
- 小林清治編 1982 「仙台城と仙台領の城・要害」日本城郭史研究叢書2
- 佐久間光平・山田しょう・田中秀和 1989 「宮城・仙台城二の丸跡(第五地点)」  
『木簡研究』11 pp. 83~85 木簡学会
- 佐藤広史他 1990 「切込窯跡」宮崎町文化財調査報告書第3集
- 佐藤 巧 1967 「仙台城の建築」『仙台城』pp. 23~87 仙台市教育委員会
- 芹沢長介編 1978 「切込」東北大学文学部考古学研究会
- 芹沢長介他 1981 「日本やきもの集成」1 平凡社
- 芹沢長介 1983 「東北地方の近世陶磁」『世界陶磁全集』9 pp. 227~259 小学館
- 芹沢長介 1987 「東北の近世陶磁」東北陶磁文化館
- 仙台市教育委員会 1967 「仙台城」
- 仙台市教育委員会 1985 「仙台城三の丸跡」仙台市文化財調査報告書第76集
- 大日本窯業協会編 1915 「日本近世窯業史第四編硝子瓦業」大日本窯業協会雑誌号外
- 高橋良一郎 1977 「ふくしま文庫40 相馬のやきもの」福島中央テレビ
- 田口昭二 1983 「美濃焼」ニューサイエンス社
- 柳橋淳二 1990 「江戸時代のガラス器の識別基準」「THEびいどろ展」pp. 6~13  
神戸市立博物館
- 坪井利弘 1976 「日本の瓦屋根」理工学社
- 坪井利弘 1977 「岡能瓦屋根」理工学社
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1985 「東北大学埋蔵文化財調査年報」1
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1988 「仙台城二の丸跡第5地点の調査—現地説明会資料」

- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1990 「東北大学埋蔵文化財調査年報」 3
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1991 「仙台城二の丸跡第9地点の調査—現地説明会資料」
- 横崎彰一他 1980 「日本のやきもの集成」 3 平凡社
- 平凡社編集部編 1984 「やきもの事典」
- 濱田徳太郎編 1936 「大日本麦酒株式会社三十年史」 大日本麦酒株式会社
- 結城慎一 1985 「丸」「仙台城二の丸跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第76集  
pp. 158~182

REPORT  
OF THE ARCHAEOLOGICAL RESEARCH ON THE CAMPUS OF  
TOHOKU UNIVERSITY

vol. 4, 5 March 1992

The Commission of Buried Cultural  
Properties on Campus, Tohoku University

Katahiracho, Sendai 980 JAPAN

---

CONTENTS

Vol. 4

- I General review of excavation in fiscal year 1986
- 1. Introduction *Kohei SAKUMA*
- 2. Excavations *Kohei SAKUMA*
- 3. Other activities of the Commission *Kohei SAKUMA*
- II Excavations on the Kawauchi Campus
  - 1. Geological location and history of Kawauchi Campus *Kohei SAKUMA*
  - 2. Excavation at NM7 *Kohei SAKUMA, Shoh YAMADA, Yasutaka HONDA*
  - 3. Excavation at NM8 *Kohei SAKUMA, Shoh YAMADA, Atsushi FUJISAWA, Yasutaka HONDA*
- III Discussion and conclusion
  - 1. Excavation at NM7 *Kohei SAKUMA, Atsushi FUJISAWA*
  - 2. Excavation at NM8 *Kohei SAKUMA, Atsushi FUJISAWA*

Vol. 5

- I General review of excavation in fiscal year 1987
- 1. Introduction *Kohei SAKUMA*
- 2. Excavations *Kohei SAKUMA*
- II Excavations on the Kawauchi Campus
  - 1. Review on past excavations *Kohei SAKUMA*
  - 2. Excavation at NM4 *Kohei SAKUMA, Shoh YAMADA, Atsushi FUJISAWA, Yasutaka HONDA*
- III Discussion and conclusion *Atsushi FUJISAWA*

## THE EXCAVATION OF THE SECONDARY CITADEL OF THE SENDAI CASTLE

This is a report for three locations in the *Ninomaru* (the secondary citadel of Sendai Castle) excavated by the Commission of Buried Cultural Properties on Campus from 1985 to 1987.

### The History of *Ninomaru*

The primary citadel of Sendai Castle was built in A.D. 1600 by *DATE Masamune*, the first *daimyo* of *Sendai-han* (feudal clan) appointed by the *TOKUGAWA* shogunate. It was a strategic location on a hill 120m above sea level, whose eastern and southern boundaries were guarded by cliffs of 70m.

However, when the age of war in Japan was over, the primary citadel on the high hill became inconvenient and in 1638, *DATE Tadamune*, the second *daimyo*, built a secondary citadel on a lower terrace where the faculties of liberal arts of Tohoku University is now located. Before *Ninomaru*, the area was occupied by the residence of *DATE Muneyasu*, the fourth son of *Masamune*, and on the north side of *Muneyasu*'s residence, the *Nishiyashiki* (The West Residence) of *Iroha-hime*, the first daughter of *Masamune* was built in 1620. *Ninomaru* was built at the site of *Muneyasu*'s residence, while *Nishiyashiki* survived the 17 century until *Ninomaru* was extended to the north side. *Ninomaru* had practically been the center of the government of *Sendai-han* as well as the residence of the *daimyo* for some 250 years until the *Meiji* Restoration. Although it was destroyed by earthquakes and fires a couple of times, it was quickly reconstructed each time.

In 1868, the Tokugawa shogunate was replaced by the new government of the Emperor (the *Edo* period was over and the *Meiji* period had begun). Japan put an end to 200 years of national isolation, and Western culture was imported rapidly.

Prefectures were established instead of feudal clans, and the *DATE* family rule was over. In 1871, the *Ninomaru* was occupied by the Japanese imperial army which had been newly organized in Western style. In 1882, almost all of the structures of *Ninomaru* were lost in a fire, and its brilliant history was over.

The site continued to be occupied by the imperial army, until the American army occupied it after World War II. The site area became the Tohoku University campus in

1957 and an organized excavation began in 1983.

VOL. 4

NM7

This location corresponds to the area of the Sendai Castle storehouses found on the historical illustrations of Sendai Castle. Since this was the rescue excavation for planting trees, only 12 of small area were excavated. No eminent structures were found except two ditches, pit holes of a building, and a pit in which roof tiles were disposed. The building may corresponds to a part of an arms magazine found on the historical illustrations. Most of the artifacts excavated were ceramic roof tiles. Several units of roof tile disposal were detected. Inferred from associated ceramics and western nails, these were disposed at about the *Meiji* restoration. Round roof tiles and flat roof tiles are the most abundant. There are also ridge decoration tiles, filler tiles, round eaves tiles, flat eaves tiles and ridge tiles, which makes the restoration of a roof possible.

NM8

NM8 is located on the northern bank of a small swamp. At this location, depending on which historical illustrations of Sendai Castle, a moat, a pond, or a swamp which constituted the northern boundary between *Nishiyashiki/Ninomaru* and *Samurai* residences can be found.

At the excavation, northern edge of the moat/pond, a well, pits and a ditch-all belonging to the *Edo* period-were discovered. In the *Meiji* period (1868-), the moat/pond became shallow, being buried by natural sediments and earth fill, and at the final stage, trash of the imperial army are dumped there : including a number of ceramics and glass containers. The ceramics are important specimens of the *Meiji* period which has not been well investigated. Most glass container shards are those of beer bottles which represented the diffusion of western liquors in those days. The shape of the bottle rim indicate that they had corks. Association of the bottles and the ceramics at the site is not contradictory to the known fact that the change from a cork to a metal stopper in beer bottles in Japan began in 1940.

VOL. 5

NM4

Three phases of features were detected.

The Oldest phase includes ditches, and ceramics belonging to the beginning of the 17 century, non-lacquered chopsticks, a wooden tablet and so on. The habitation surface was covered with earth fill from *Ninomaru* construction. The ditches are inferred to be the boundary of *DATE Muneyasu*'s residence and *Nishiyashiki*, based on their location and the dates of ceramics. This is the first archaeological discovery of constructions related to the *Muneyasu*'s residence which had few written records. The direction of ditches (N-60°-W) coincides with that of post hole rows found on the same habitation surface at Loc. 9 in 1990. A number of earthenware dishes and chopsticks are inferred to have been dumped after only one time of use at a ceremony/banquet, according to the custom of those days.

The second phase includes a ditch and three rows of pit holes. The precise date cannot be determined because of the few artifacts yielded, but they are inferred to be parts of the *Ninomaru* construction. However, the direction of pit hole rows are N-30°-W which is different from N-24°-W of the *Ninomaru* constructions found at other locations. It is difficult to identify the type of constructions but they are definitely located near the North Gate of *Ninomaru*.

The final phase of Loc. 4 includes a ditch and pebble fills. They are dated to the *Meiji* period from the associated artifacts.



# 図 版





1. 第7地点全景  
(南から)



2. 第7地点全景  
(北から)

図版1 第7地点全景  
Pl. 1 Views of NM7



1. 1区最終状況  
(西から)

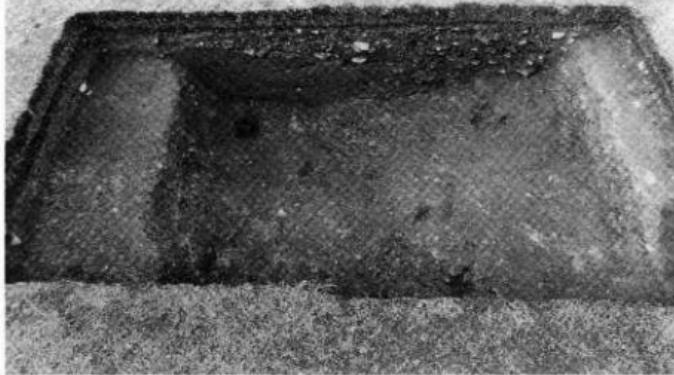


2. 2区3層遺物  
出土状況  
(南から)

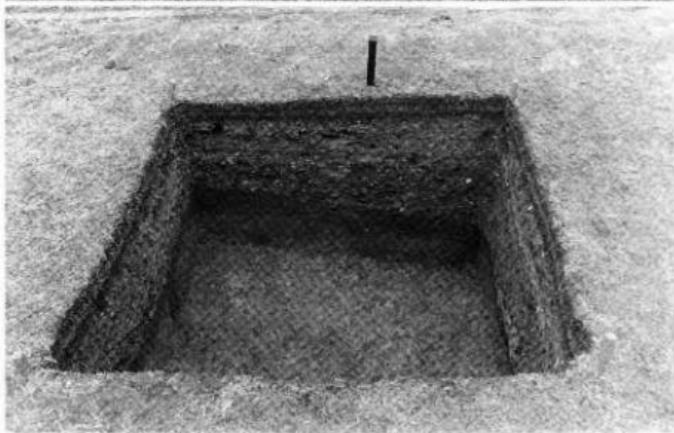


3. 3区3層遺物  
出土状況  
(南から)

図版2 第7地点発掘区（1区・2区・3区）  
Pl. 2 Views of Grid 1, 2 and 3



1. 4区最終状況  
(南から)



2. 5区最終状況  
(西から)



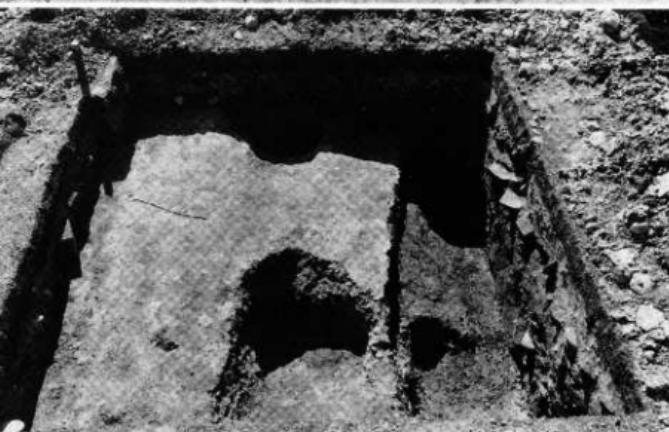
3. 6区最終状況  
(南から)

図版3 第7地点発掘区（4区・5区・6区）

Pl. 3 Views of Grid 4, 5 and 6



1. 7区最終状況  
(東から)



2. 8区最終状況  
(東から)



3. 8区ピットI  
遺物出土状況  
(北から)

図版4 第7地点発掘区（7区・8区）  
Pl. 4 Views of Grid 7 and 8, and a feature at Grid 8



1. 8区東壁セク  
ション  
(西から)

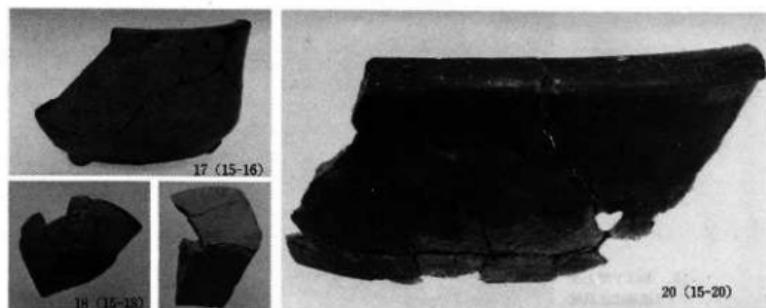
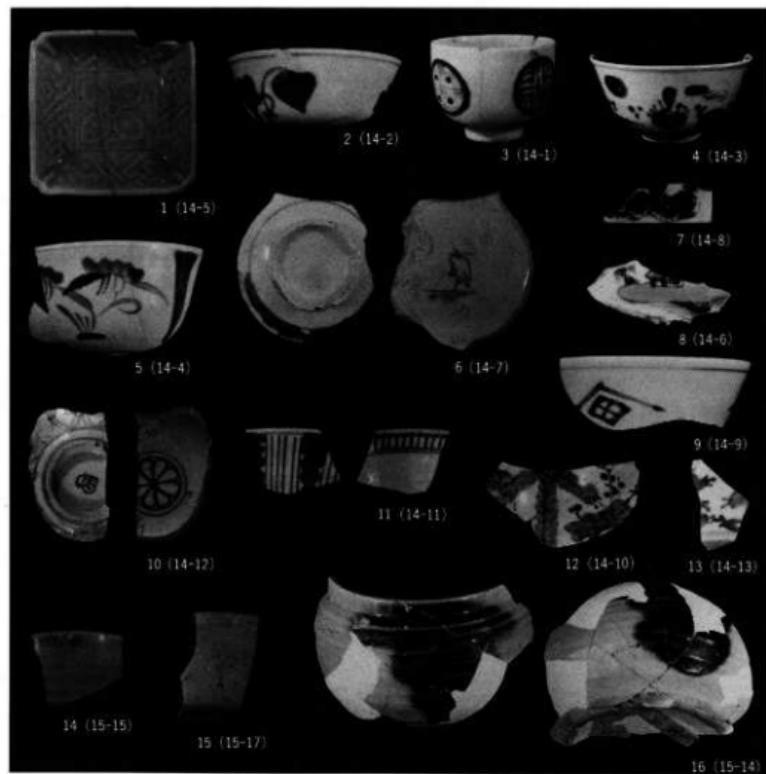


2. 9区IV層遺物  
出土状況  
(南から)



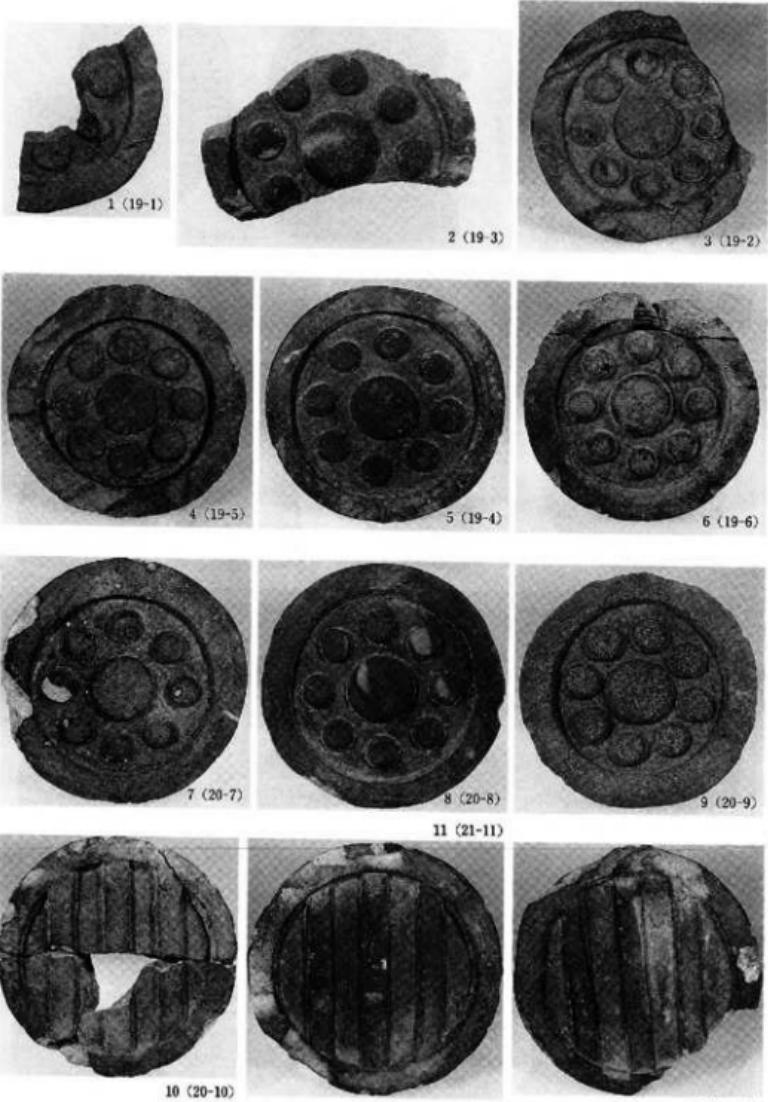
3. 10区V層上面  
遺物出土状況  
(南から)

図版5 第7地点発掘区（8区・9区・10区）  
Pl. 5 Features at Grid 8 and views of Grid 9 and 10



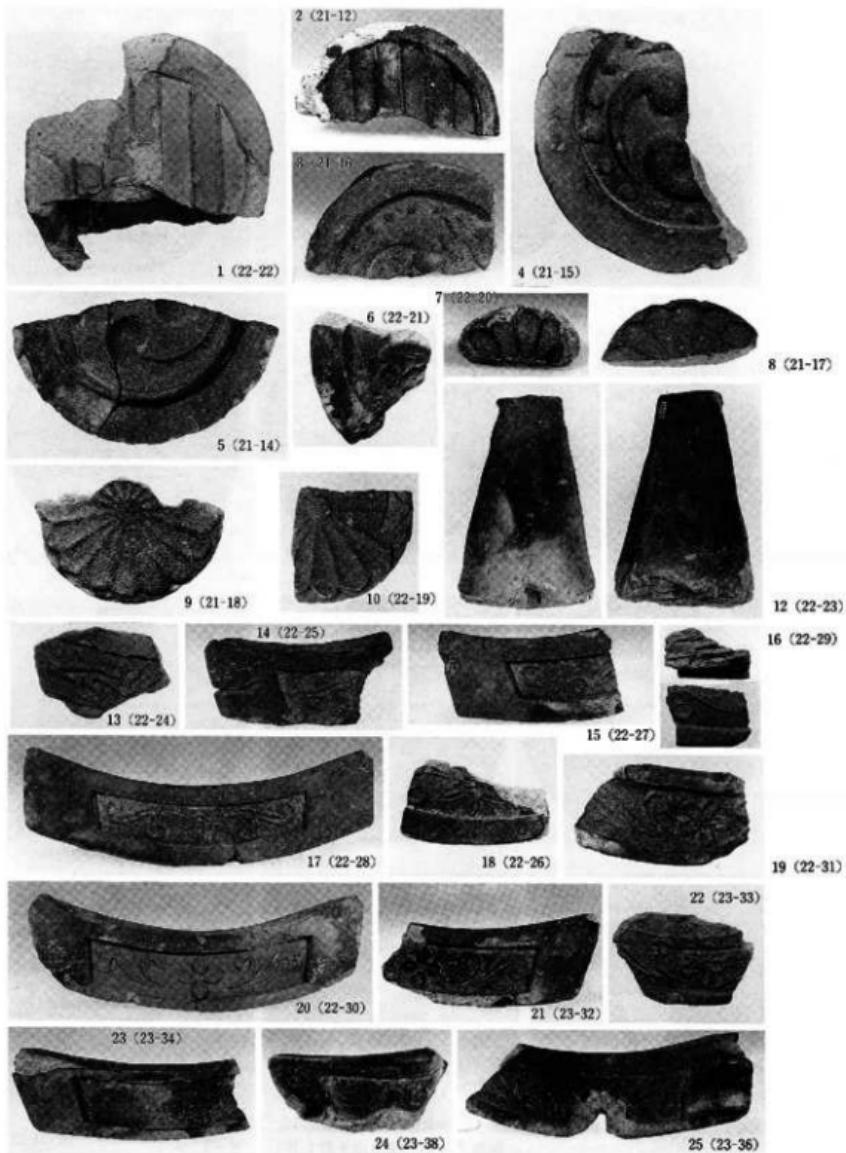
S = 1 : 3

图版6 第7地点出土陶磁器  
Pl. 6 Ceramics and porcelains from NM7



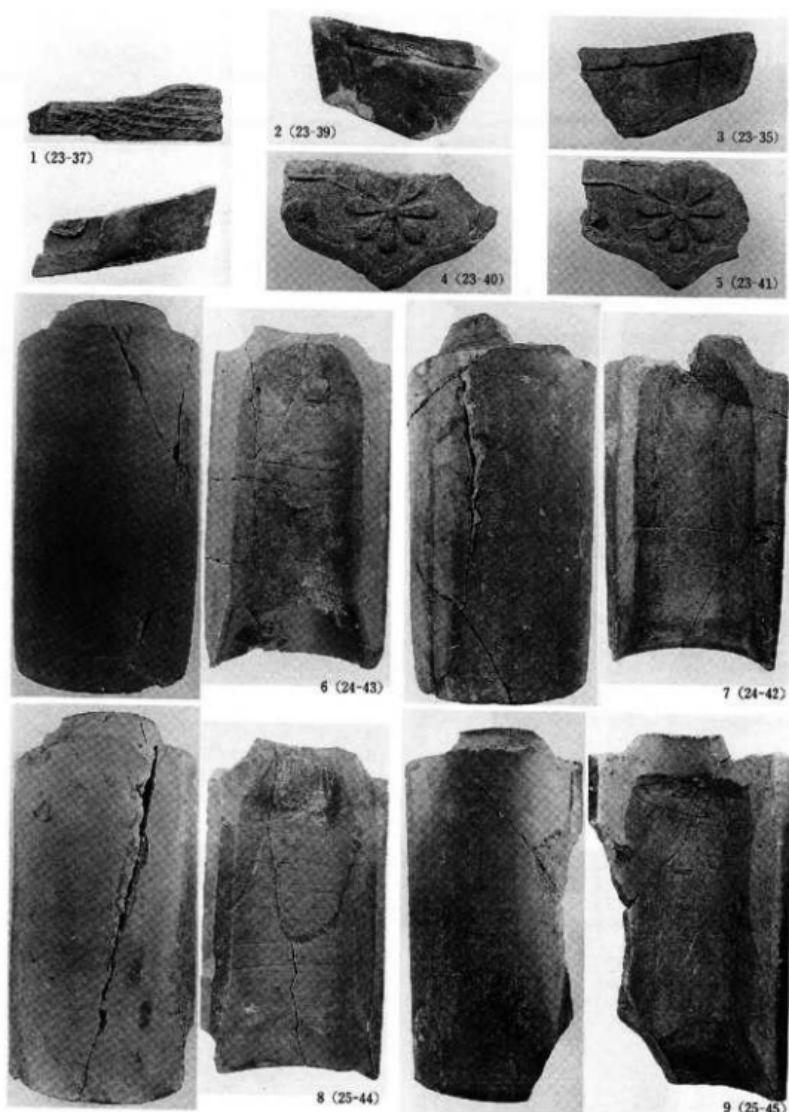
圖版 7 第 7 地點出土軒丸瓦(1) S = 1 : 4

Pl. 7 Round eaves tiles from NM 7(1)



图版 8 第 7 地点出土軒丸瓦(2)・軒平瓦(1)  
Pl. 8 Round eaves tiles and flat eaves tiles from NM 7

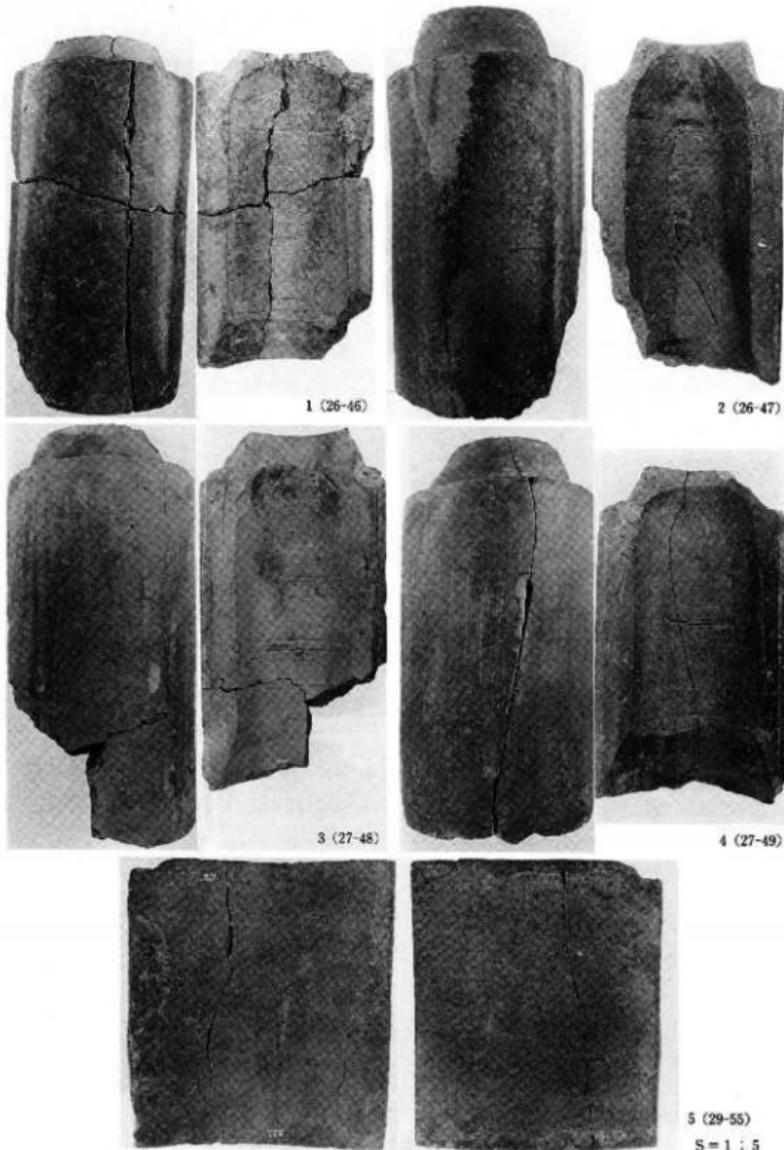
S = 1 : 4



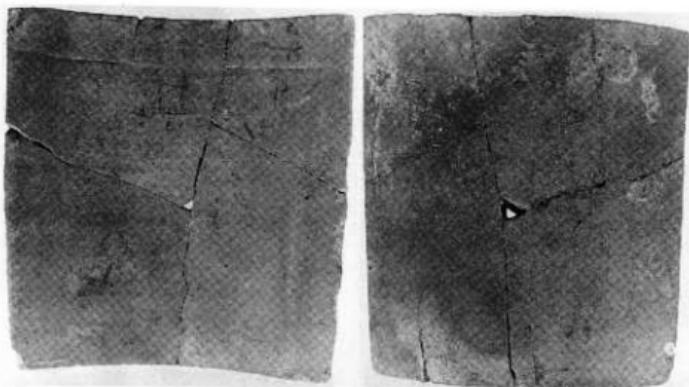
圖版 9 第 7 地點出土軒平瓦(2)・丸瓦(1)  
Pl. 9 Flat eaves tiles and round roof tiles from NM 7

1 ~ 5 S = 1 : 4

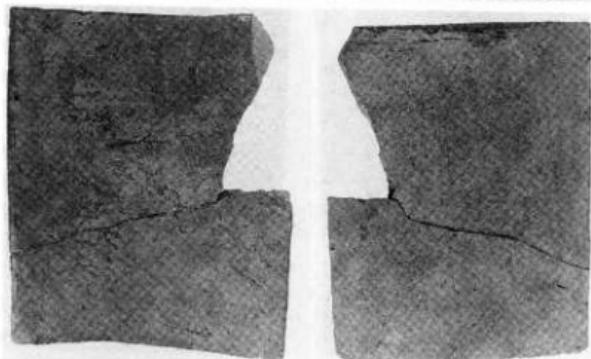
6 ~ 9 S = 1 : 5



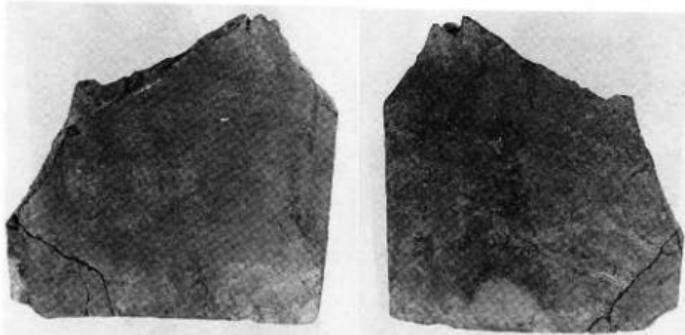
图版10 第7地点出土丸瓦(2)·平瓦(1)  
Pl. 10 Round roof tiles and flat roof tiles from NM 7



1 (28-50)



3 (28-51)

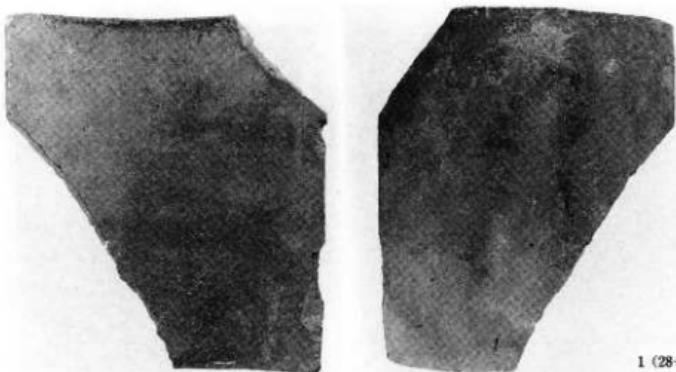


3 (28-52)

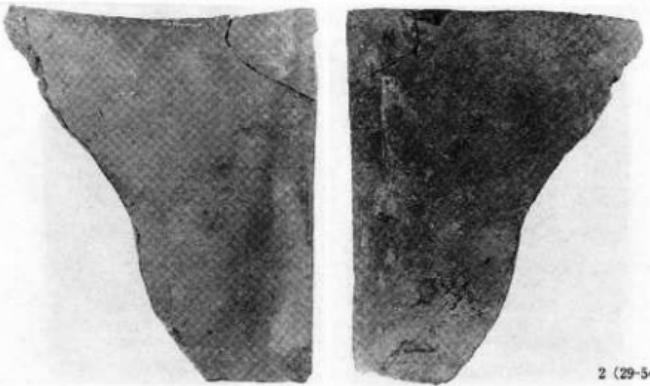
圖版11 第7地點出土平瓦(2)

Pl.11 Flat roof tiles from NM 7(2)

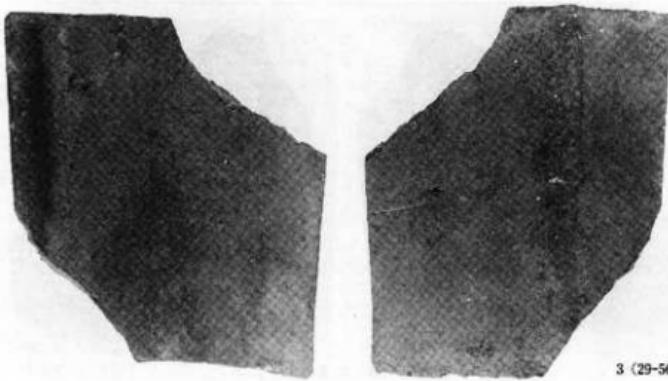
S = 1 : 5



1 (28-53)



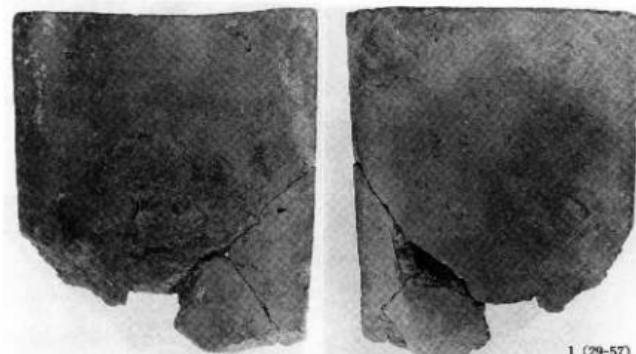
2 (29-54)



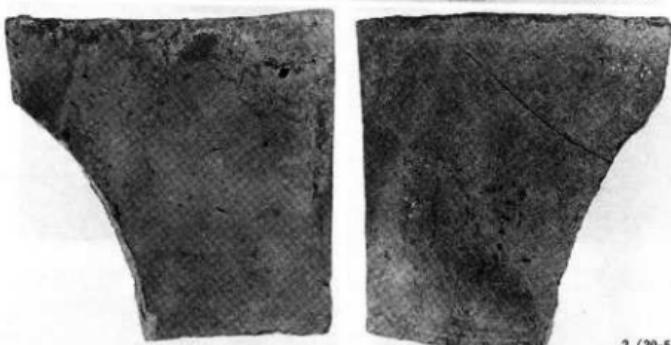
3 (29-55)

圖版12 第7地點出土平瓦(3)  
Pl. 12 Flat roof tiles from NM7(3)

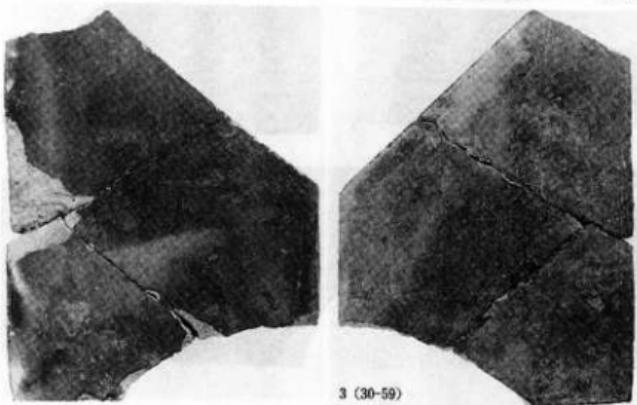
S = 1 : 5



1 (29-57)



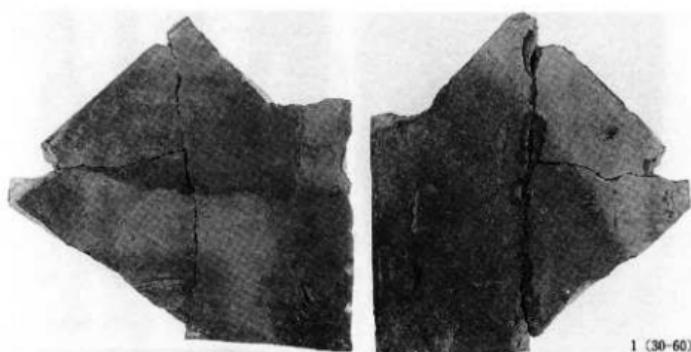
2 (30-58)



3 (30-59)

圖版13 第7地點出土平瓦(4)  
Pl. 13 Flat roof tiles from NM7(4)

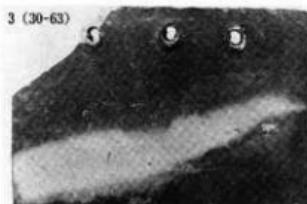
S = 1 : 5



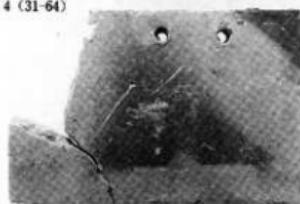
1 (30-60)



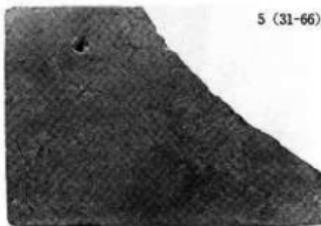
2 (30-62)



3 (30-63)



4 (31-64)



5 (31-66)



6 (30-61)



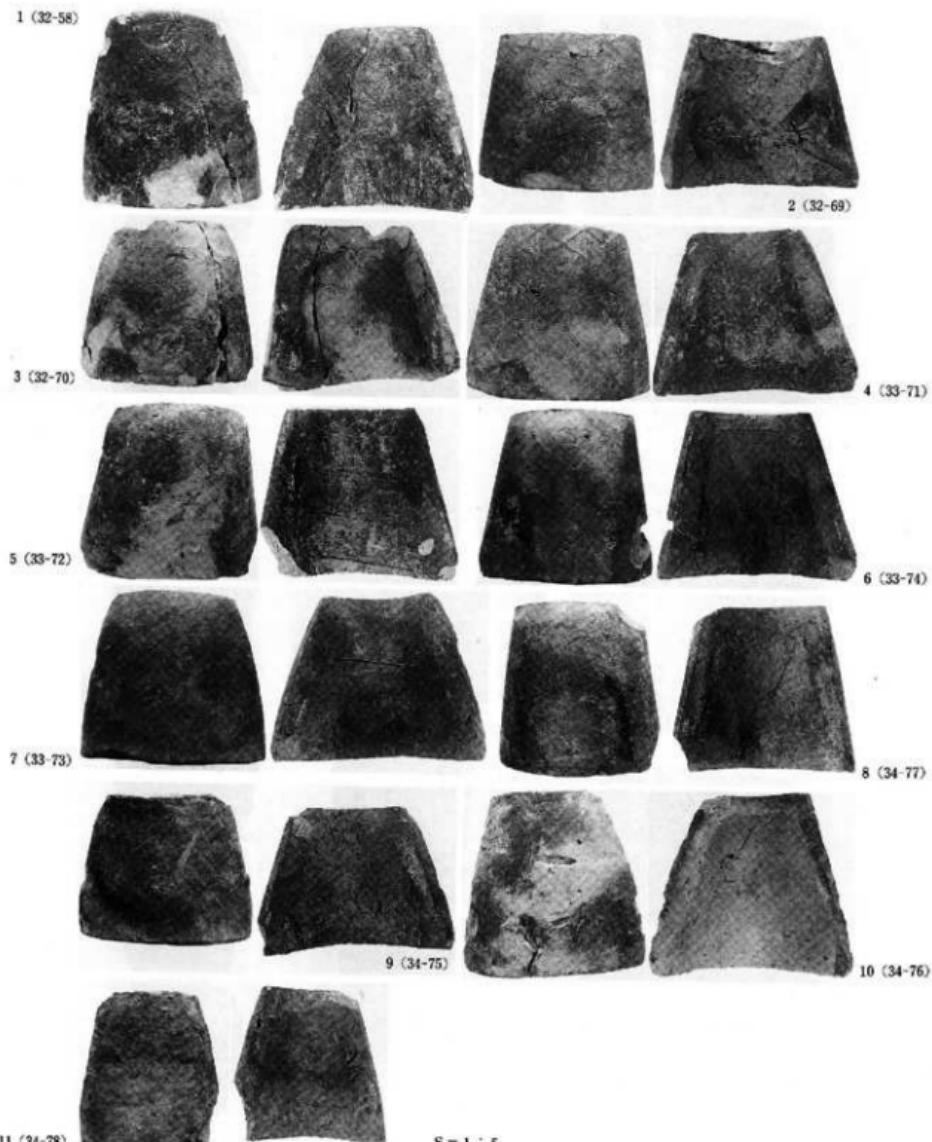
7 (31-65)



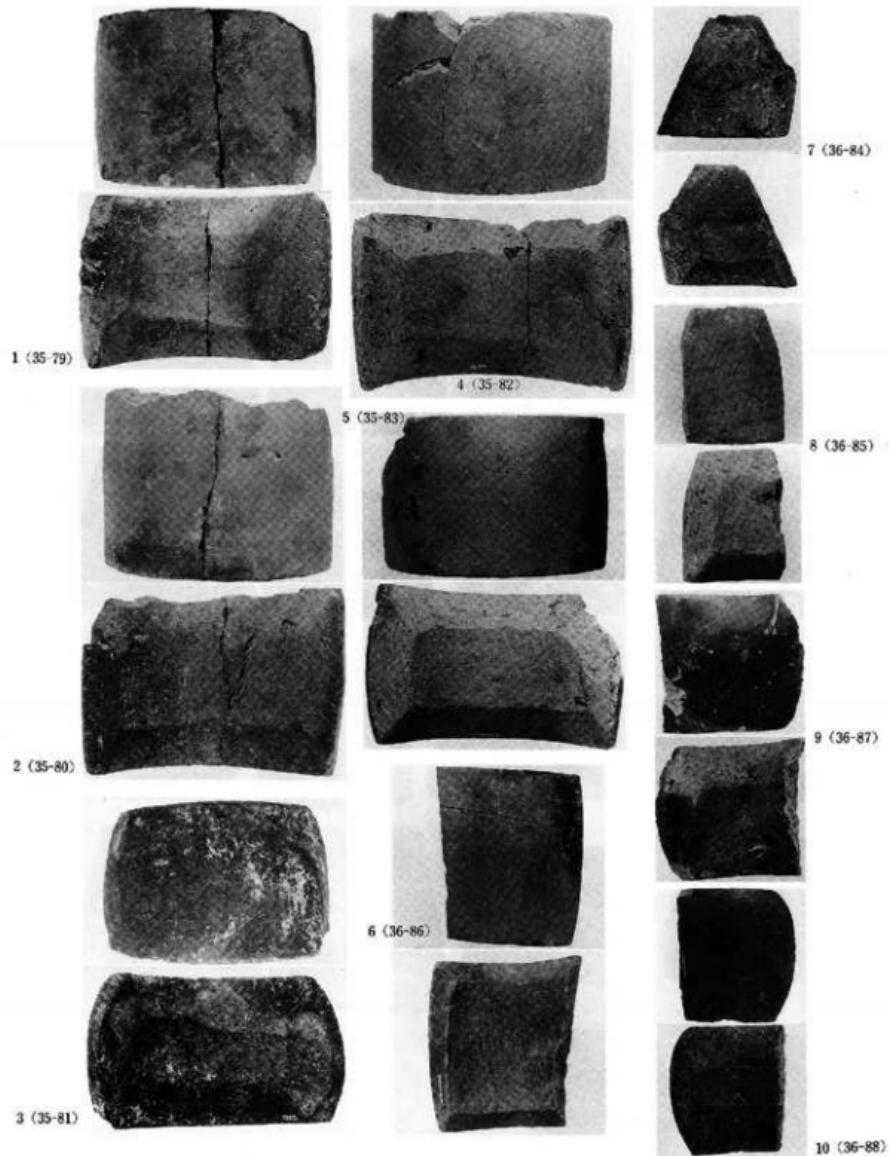
8 (31-67)

S = 1 : 5

图版14 第7地点出土平瓦(5)· 贤斗瓦  
Pl. 14 Flat roof tiles and ridge tiles from NM7



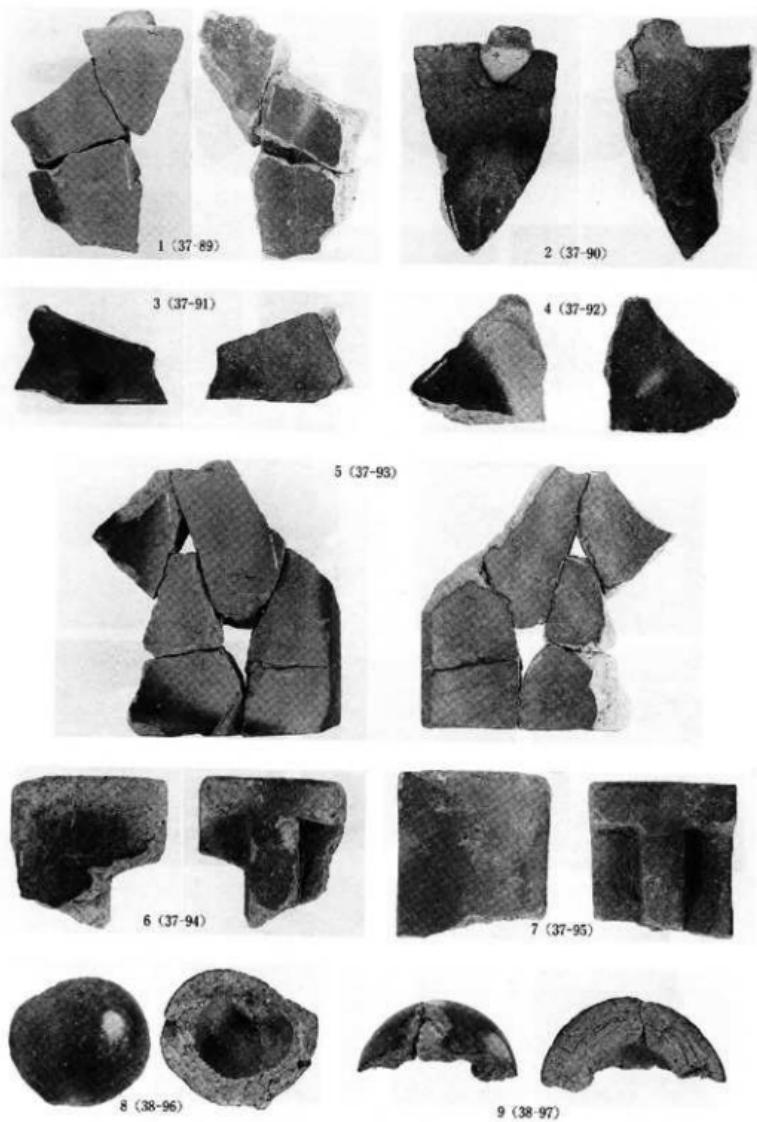
図版15 第7地点出土輪違い  
Pl. 15 Ridge decoration tiles from NM7



图版16 第7地点出土面户瓦

Pl. 16 Filler tiles from NM7

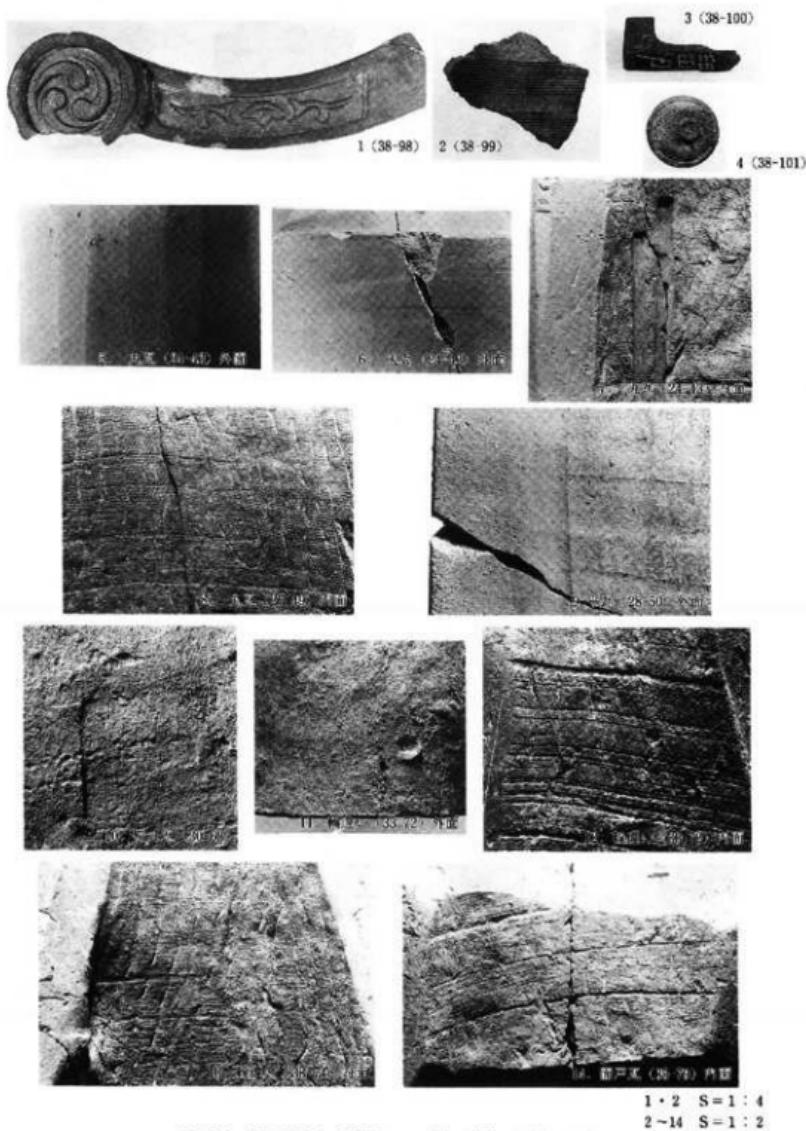
S = 1 : 4



图版17 第7地点出土雁振瓦·道具瓦·棟瓦

Pl. 17 Various roof tiles from NM7

S = 1 : 4



図版18 第7地点出土棟瓦・その他の遺物・瓦器面調整  
Pl. 18 Various implements and surface finishing of roof tiles from NM7



1. 第8地点全景  
(北から)



2. A~D区全景  
(3層上面, 東から)



3. 埋土V層  
遺物出土状況  
(東から)

図版19 第8地点全景・3層上面検出遺構  
Pl. 19 View and features on stratum 3 of NM8



1. A～D区全景  
(5層上面、西から)



2. 5層上面検出木縁  
(東から)



3. 埋土セクション  
(東から)

図版20 第8地点5層上面検出遺構  
Pl. 20 Features on stratum 5 and cross section of NM8

1. A～D区全景  
(8層上面, 南から)



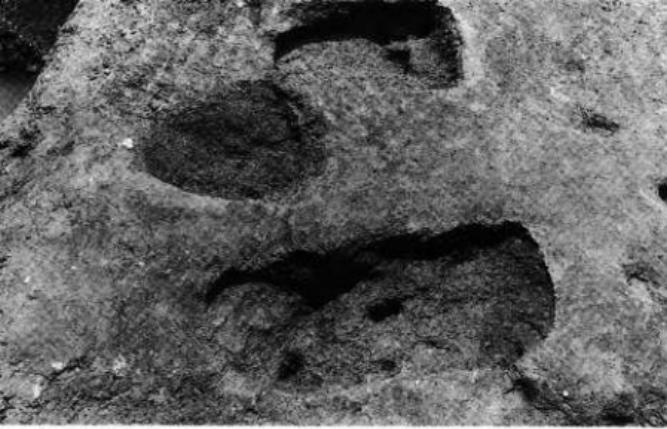
2. A～D区全景  
(8層上面, 西から)



3. 8層上面検出構  
(北から)



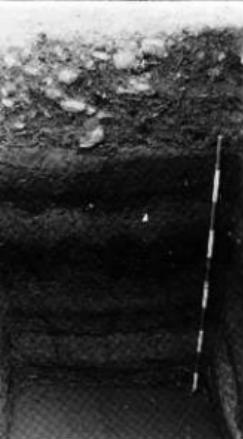
図版21 第8地点 8層上面検出構  
Pl. 21 Features on stratum 8 of NM8



1. 8層上面検出ビット1～3  
(東から)

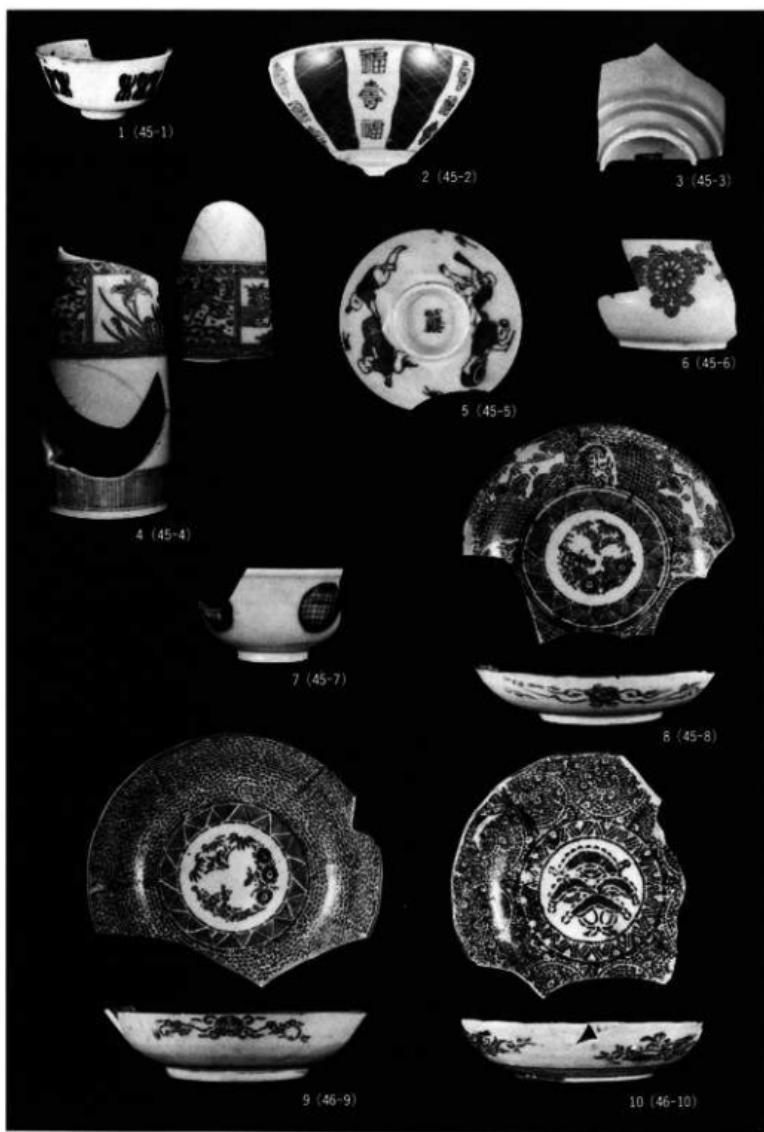


2. 8層上面検出井戸  
(南から)



3. B2区深掘調査区南壁セクション  
(北から)

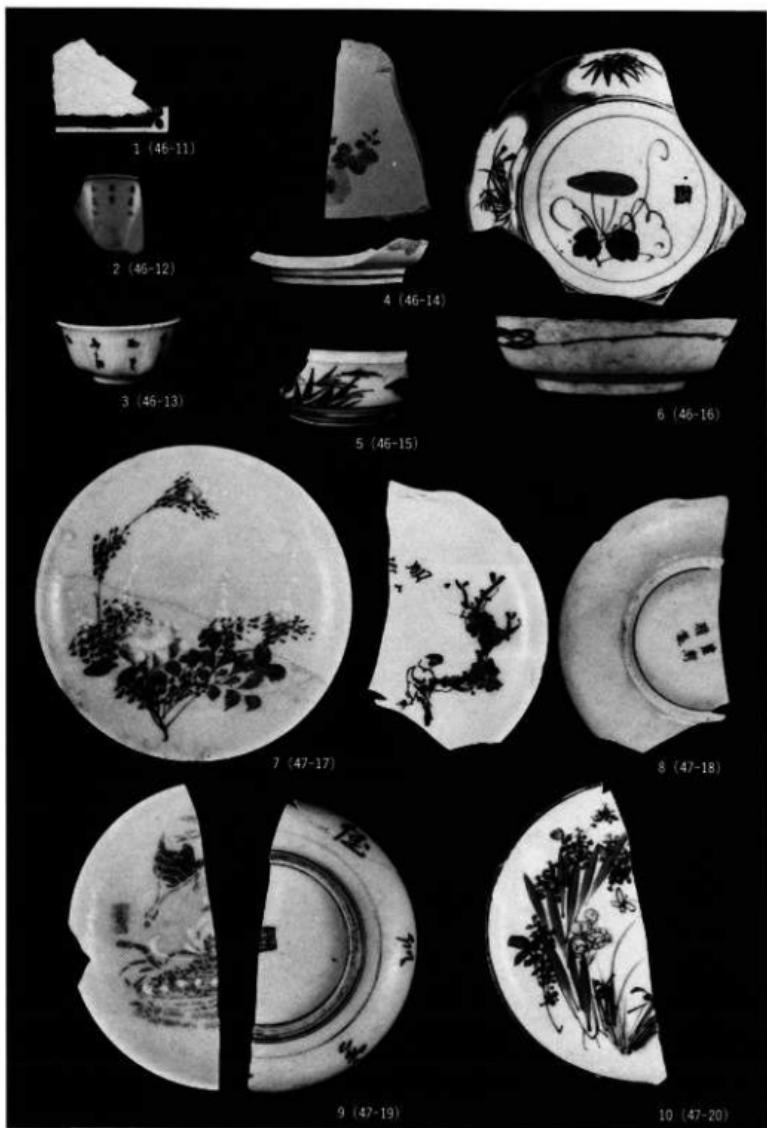
図版22 第8地点 8層上面検出遺構・深掘区断面  
Pl. 22 Features on stratum 8 and cross section of NM8



S=1:3

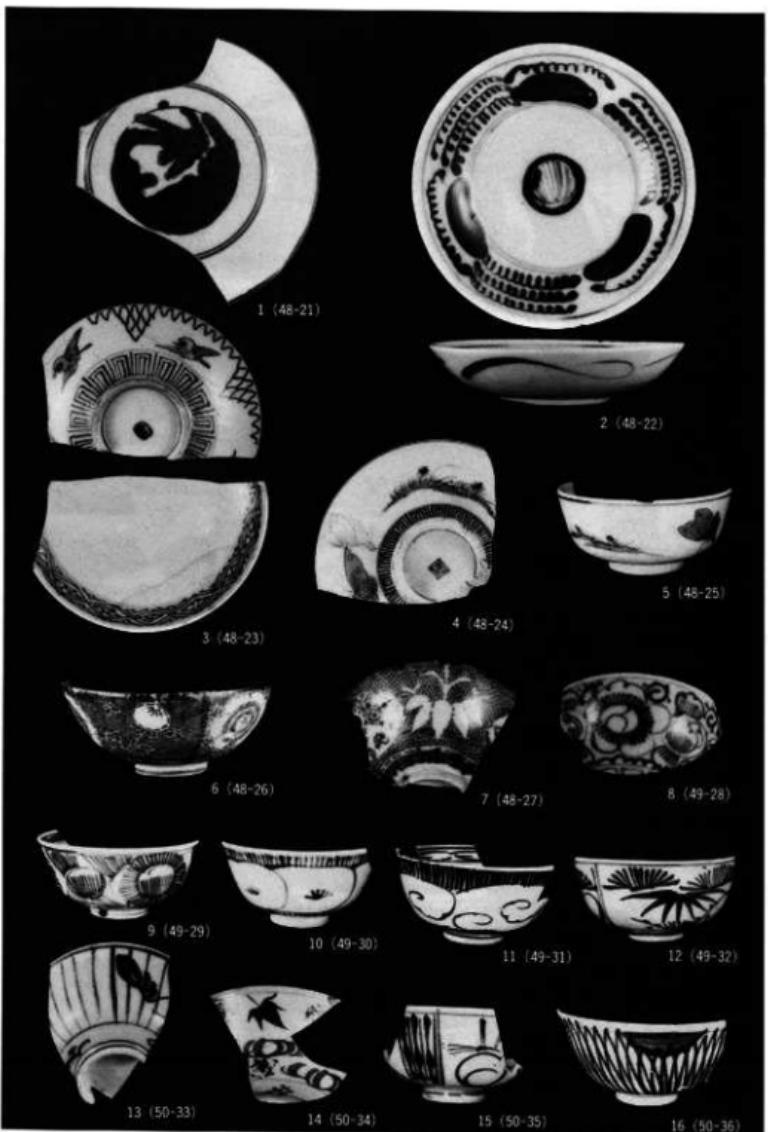
图版23 第8地点出土磁器(1)

P1. 23 Porcelains from NM8 (1)



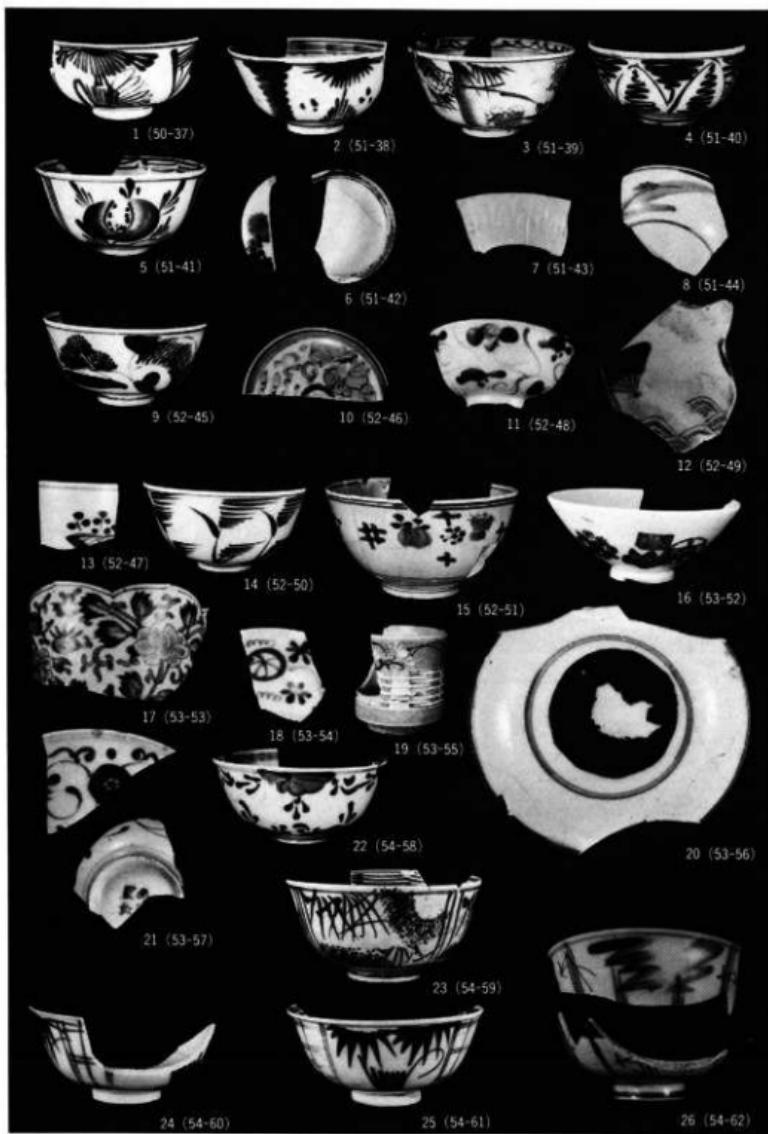
S = 1 : 3

图版24 第8地点出土磁器(2)  
Pl. 24 Porcelains from NM8 (2)

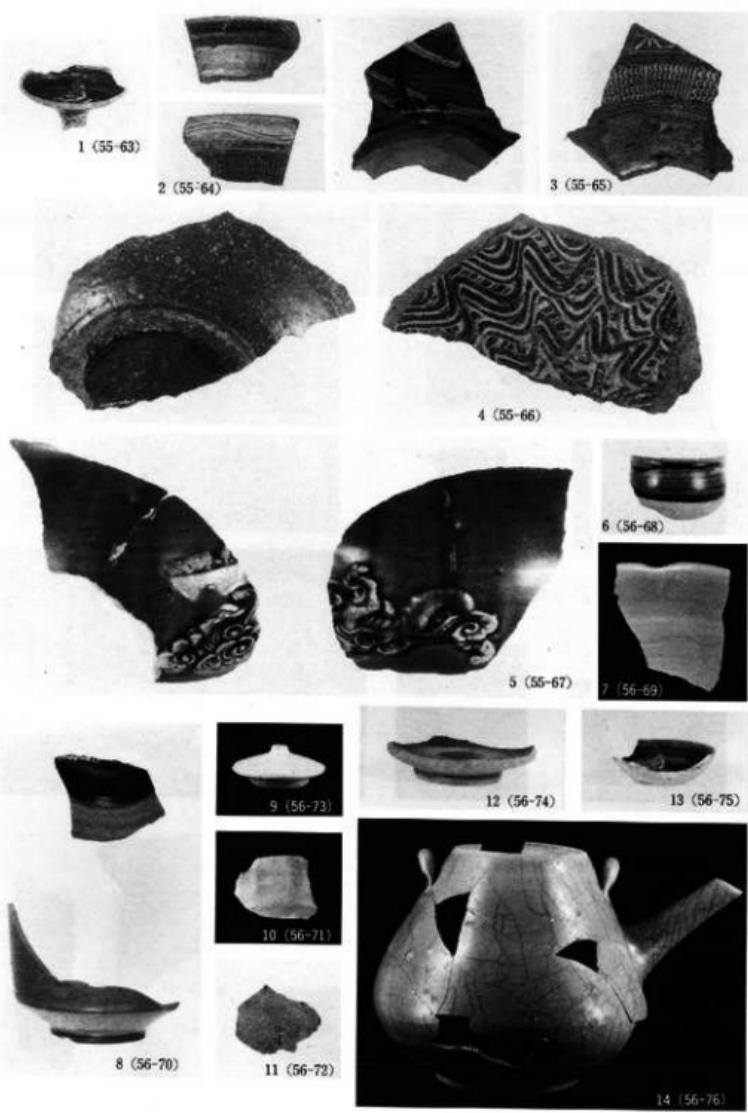


S = 1 : 3

图版25 第8地点出土磁器(3)  
Pl. 25 Porcelains from NM8 (3)



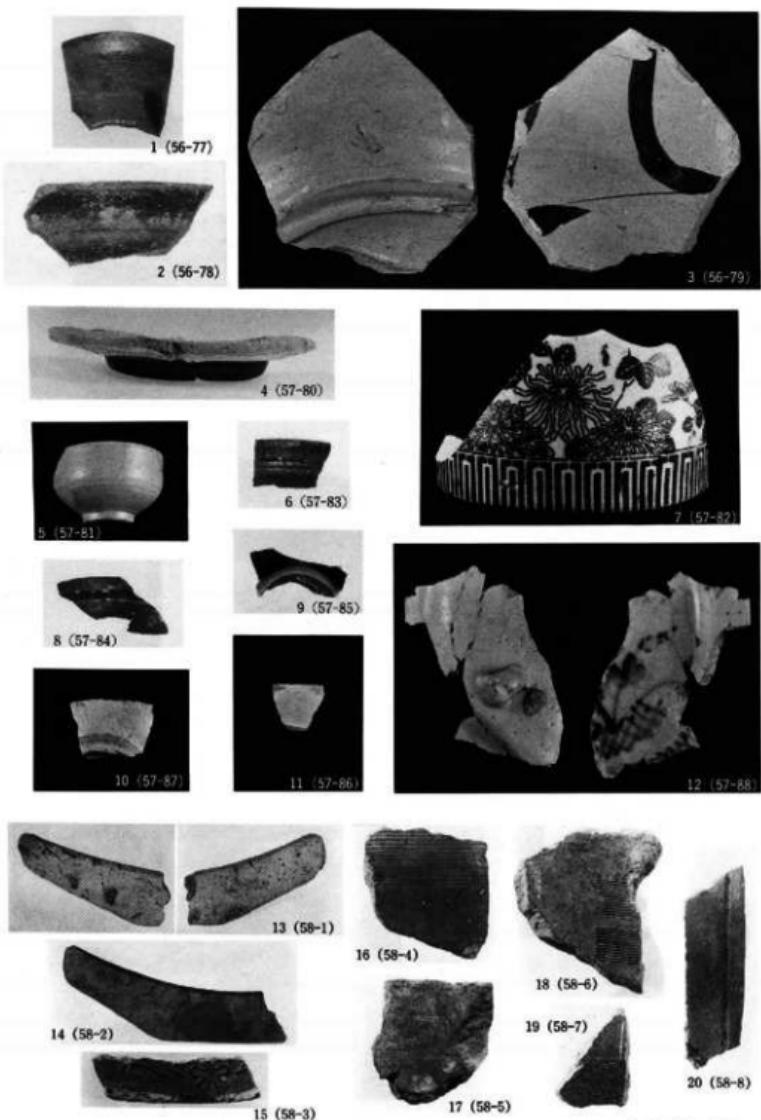
图版26 第8地点出土磁器(4)  
Pl. 26 Porcelains from NM8 (4)



S = 1 : 3

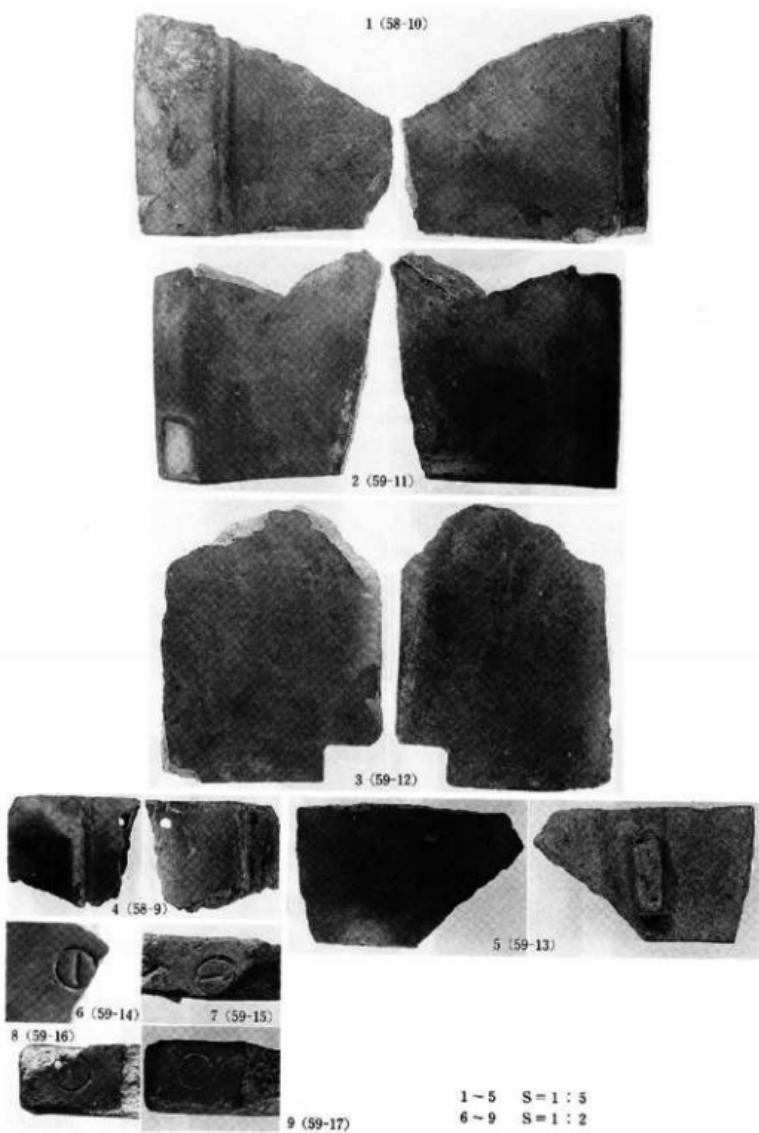
图版27 第8地点出土陶器(1)

P1. 27 Ceramics from NM8 (1)



图版28 第8地点出土陶器(2)·瓦(1)  
P1. 28 Ceramics and roof tiles from NM8

1~12 S=1:3  
13~20 S=1:4



国版29 第8地点出土瓦(2)  
 Pl. 29 Roof tiles from NM 8 (2)



図版30 第8地点出土その他の遺物

P1. 30 Various implements from NM8

1~16 S=1:3  
16~24 S=2:3



1. 調査前全景  
(南東から)



2. I区・1号掘立柱列  
(西から)



3. I区・1~4号石敷  
整地層  
(南から)

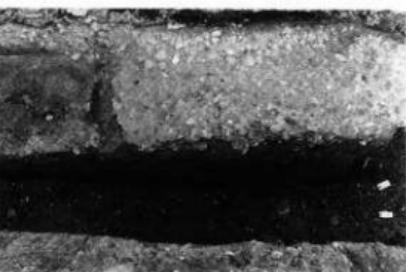


4. I区・2号  
掘立柱列  
(南から)

図版31 第4地点全景・I区遺構(1)  
Pl. 31 View and features of Loc. I at NM 4 (1)



1. I区ピット8遺物出土状況（西から）



2. I区・4号石敷整地層（西から）



3. I区・1号石敷整地層（西から）



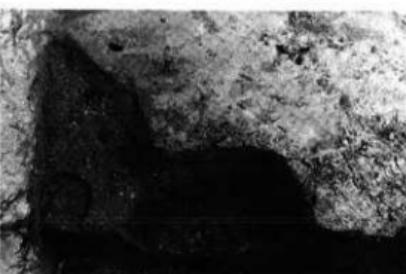
4. I区・2・3号石敷整地層（西から）



5. I区北半部（南から）



6. I区・ピット20・27・28（南から）



7. I区・ピット17・24（西から）

図版32 第4地点I区遺構(2)

Pl. 32 Features of Loc. I at NM 4 (2)



1. II区・ピット1・2(南から)



2. II区・ピット3(西から)



3. II区・3号据立柱(北から)



4. II区・ピット4(東から)



5. II区・ピット5セクション(東から)



6. II区・ピット6(西から)



7. II区・ピット7セクション(北から)

図版33 第4地点II区遺構(1)

Pl. 33 Features of Loc. II at NM 4(1)



1. II区・ピット10遺物出土状況（西から）



2. II区・ピット12・13（西から）



3. II区・ピット14-17（西から）



4. II区・5号溝（西から）



5. II区・6a層上面遺物出土状況



6. II区・6号溝（南から）

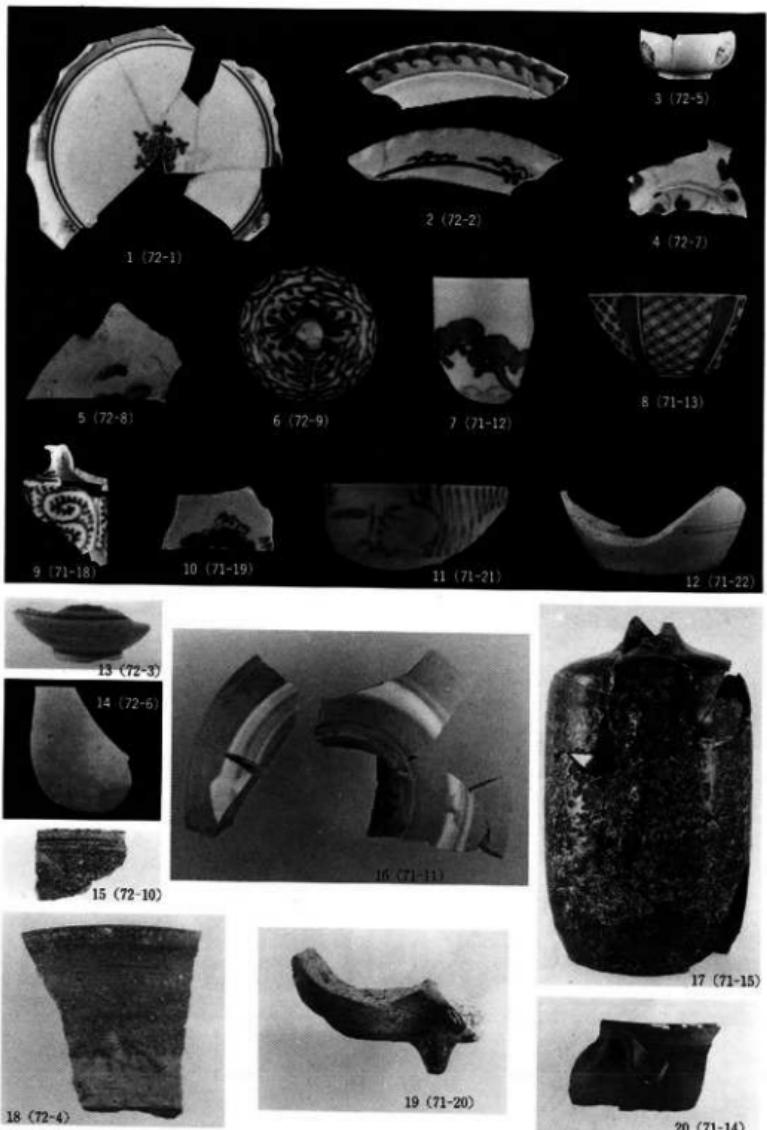


7. II区・7号溝（西から）



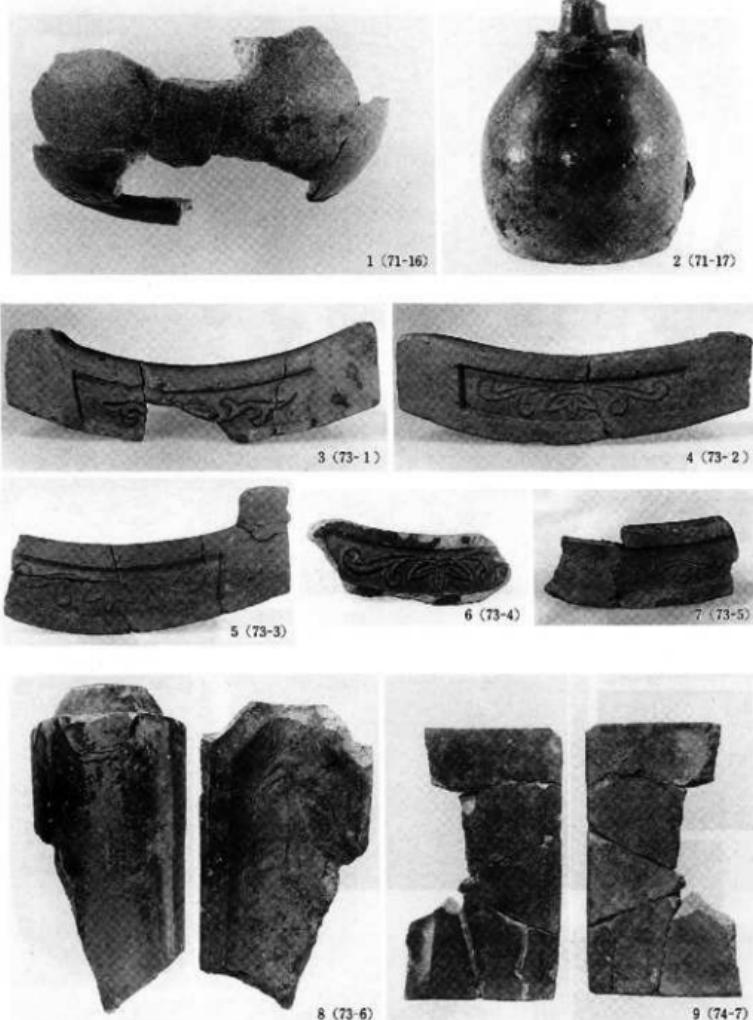
8. II区・8号溝（西から）

図版34 第4地点II区遺構(2)  
Pl. 34 Features of Loc. II at NM 4 (2)



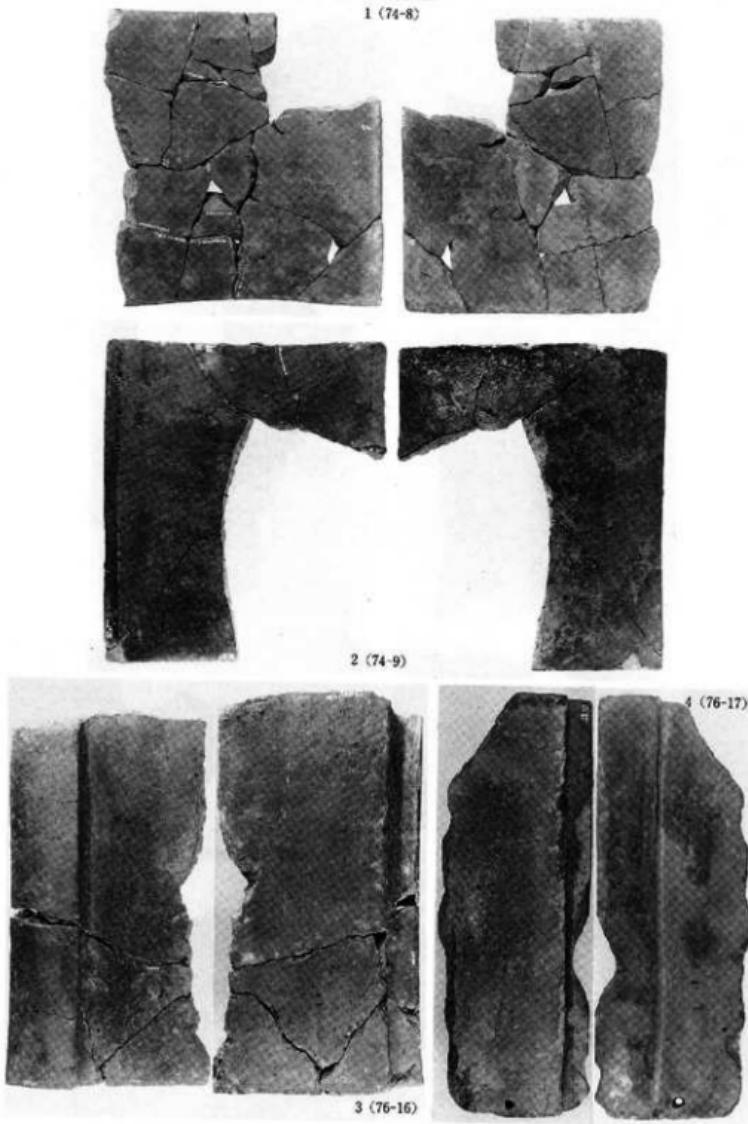
图版35 第4地点出土陶磁器(1)  
Pl. 35 Ceramics and porcelains from NM4

S=1:3



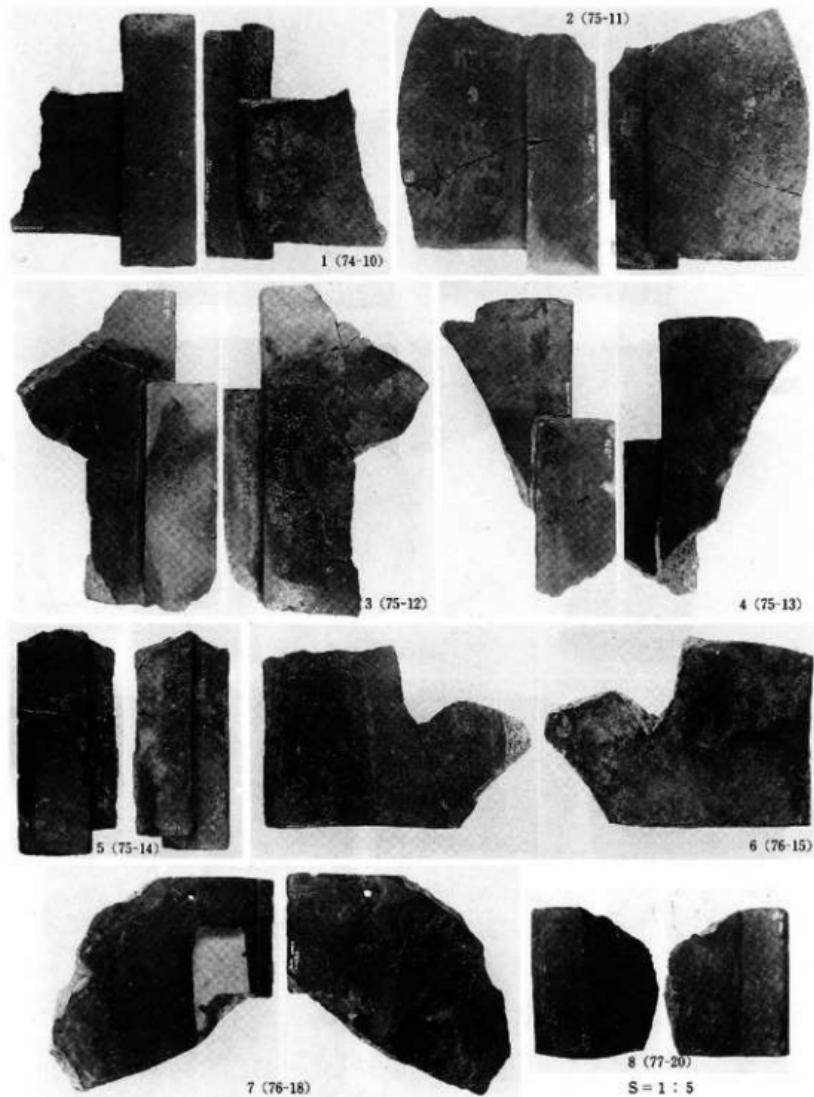
1 + 2 S = 1 : 2  
3 - 7 S = 1 : 4  
8 + 9 S = 1 : 5

图版36 第4地点出土陶磁器(2)·軒平瓦·丸瓦·平瓦(1)  
Pl.36 Ceramics and roof tiles from NM4

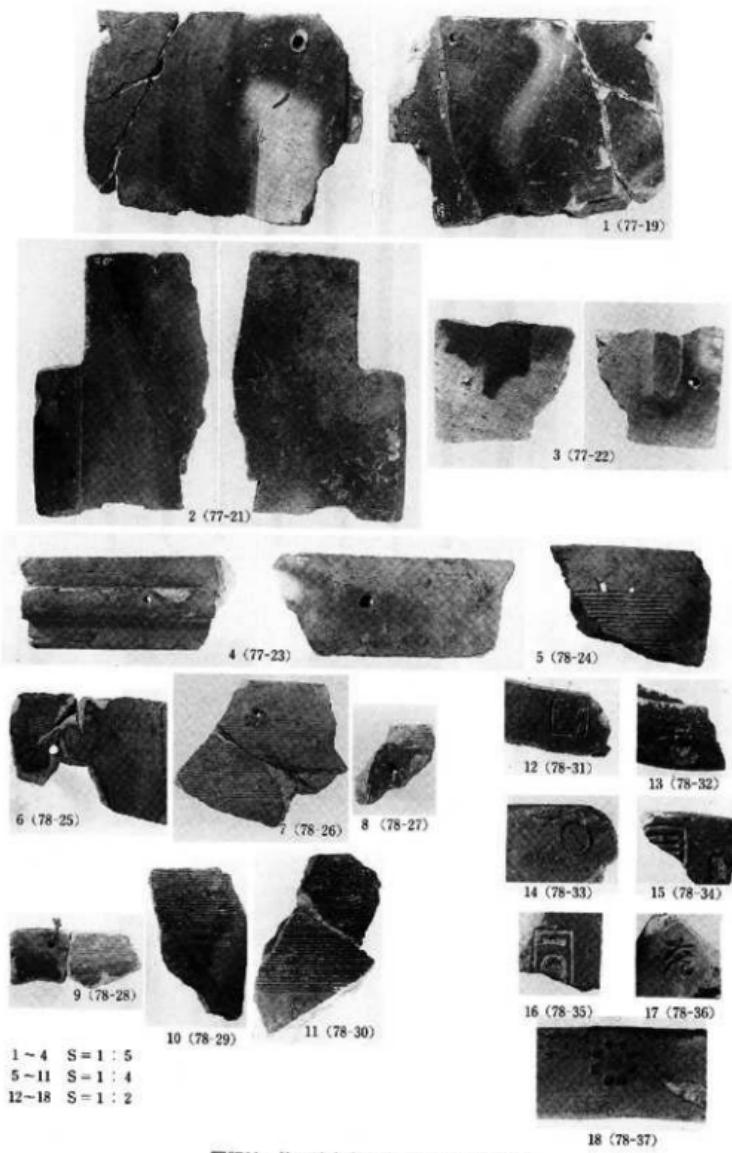


图版37 第4地点出土平瓦(2)・棱瓦(1)

Pl.37 Pan tiles from NM4(2)



图版38 第4地点出土棟瓦(2)  
Pl.38 Pan tiles from NM4(2)

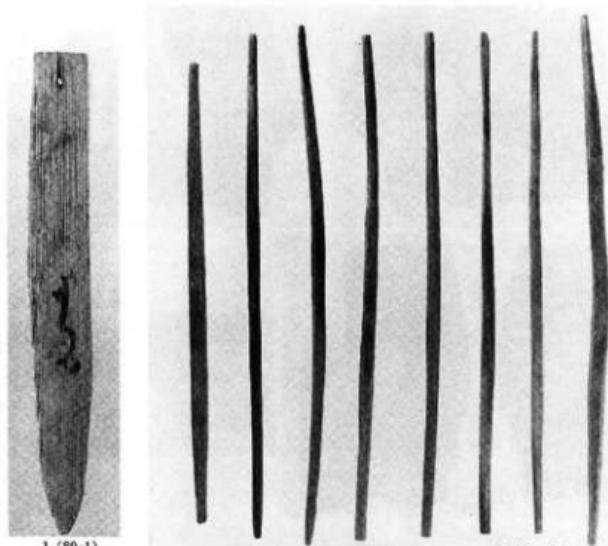


図版39 第4地点出土棟瓦(3)・その他の瓦  
Pl39. Pan tiles and other roof tiles from NM4

1~4 S = 1 : 5

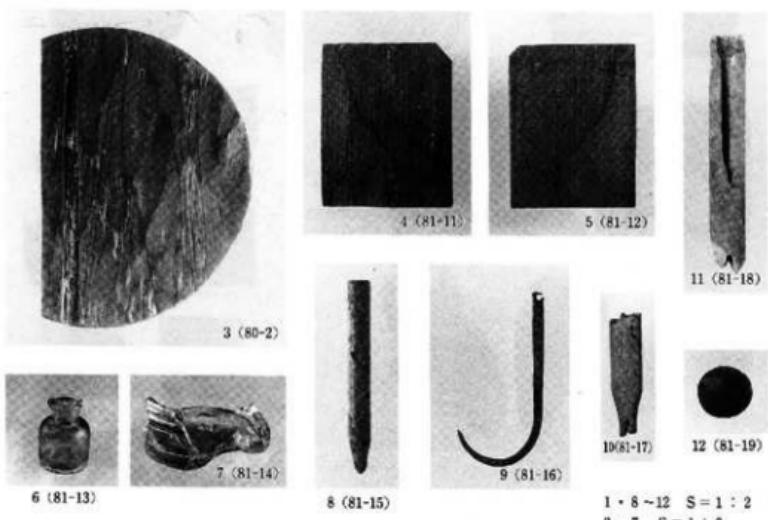
5~11 S = 1 : 4

12~18 S = 1 : 2



1 (80-1)

2 (左から81-3~81-10)



3 (80-2)

4 (81-11)

5 (81-12)

11 (81-18)

6 (81-13)

7 (81-14)

8 (81-15)

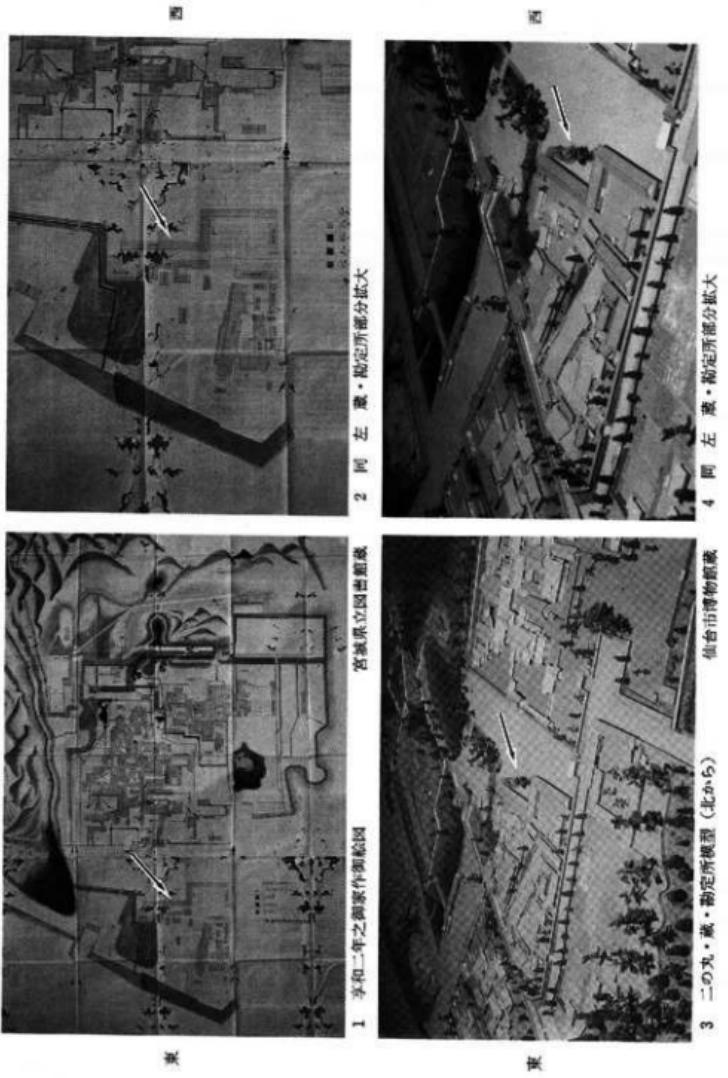
9 (81-16)

10 (81-17)

12 (81-19)

1・6～12 S = 1 : 2  
2～7 S = 1 : 3

図版40 第4地点出土その他の遺物  
Pl.40 Various implements from NM4



図版41 仙台城絵図・模型  
Pl. 41 Illustrations and restored models of the Sendai Castle

高麗紙思会稿

4 享保六年 仙台城修理圖、

宮城県立図書館蔵

3 青山公道制大字之略図

北

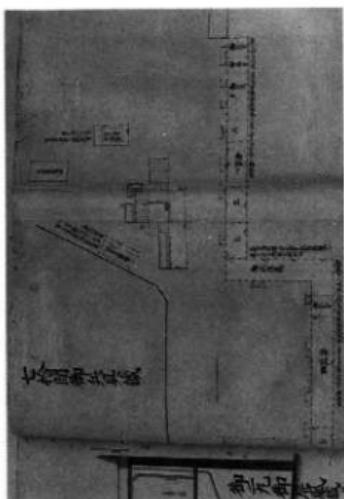


宮城県立図書館蔵

2 「七拾間御兵馬塹」 御修復帳



1 「七十間御兵」享和二年之御家作御治圖 宮城県立図書館蔵



宮城県立図書館蔵

4 享保六年 仙台城修理圖、

北

圖版42 仙台城繪図

P1. 42 Illustrations of the Sendai Castle

---

## 東北大学埋蔵文化財調査年報4・5

平成4年3月25日

発行 東北大学埋蔵文化財調査委員会

委員長 西澤潤一

〒980 仙台市青葉区片平2丁目1-1

東北大学遺伝生態研究センター内

TEL 022(227)6200(内)3311

印刷 今野印刷株式会社

TEL 022(288)6123

---